

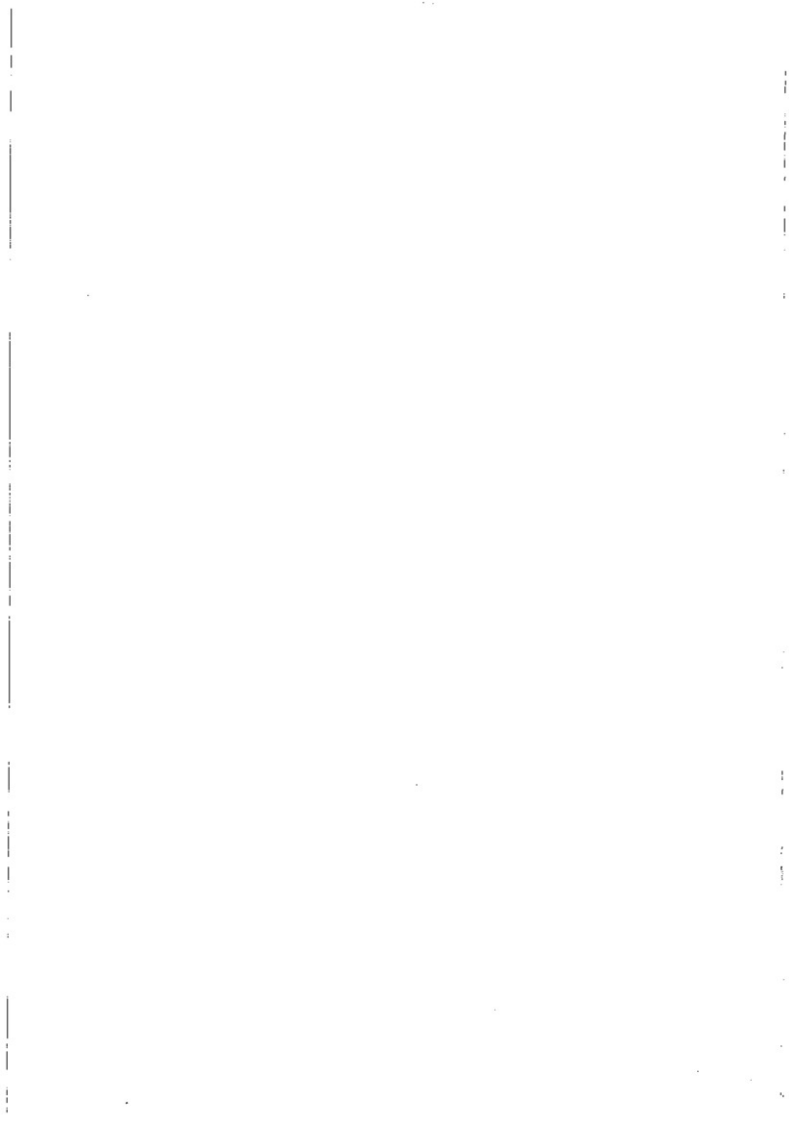
## 鶴川町

# 米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡

—日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成12年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



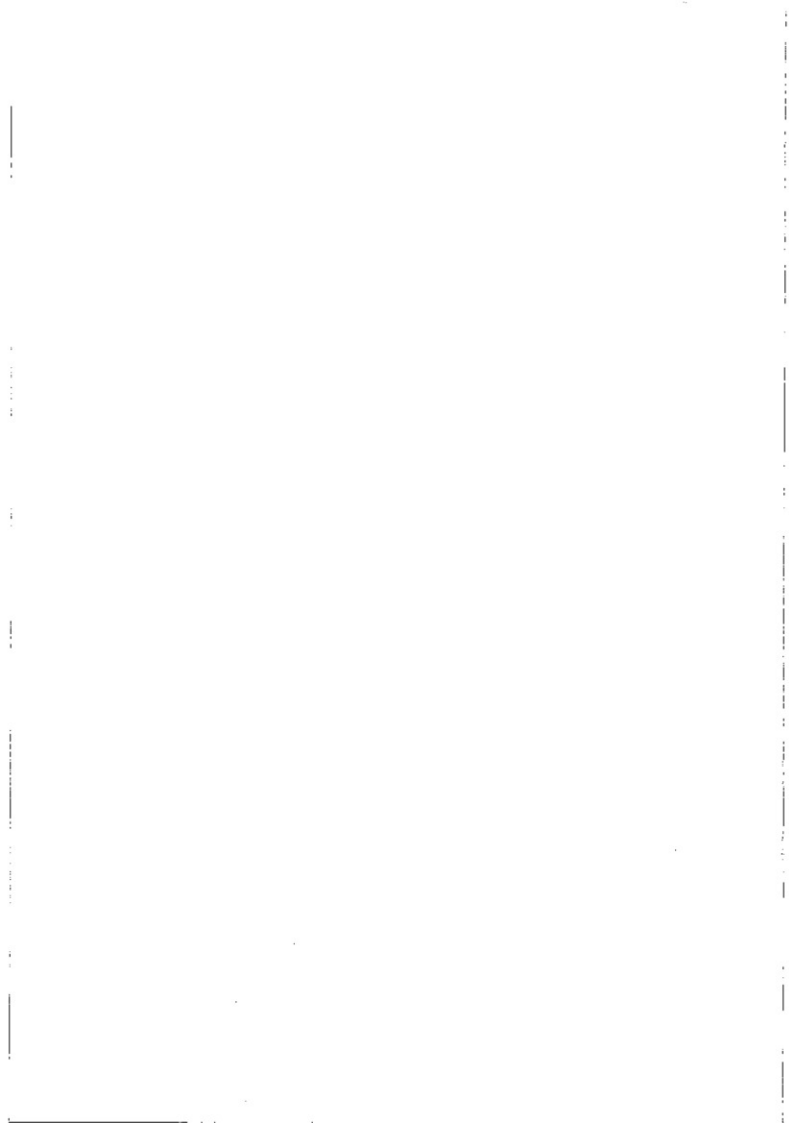
**鶴川町**

**米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡**

—日高自動車道厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成12年度

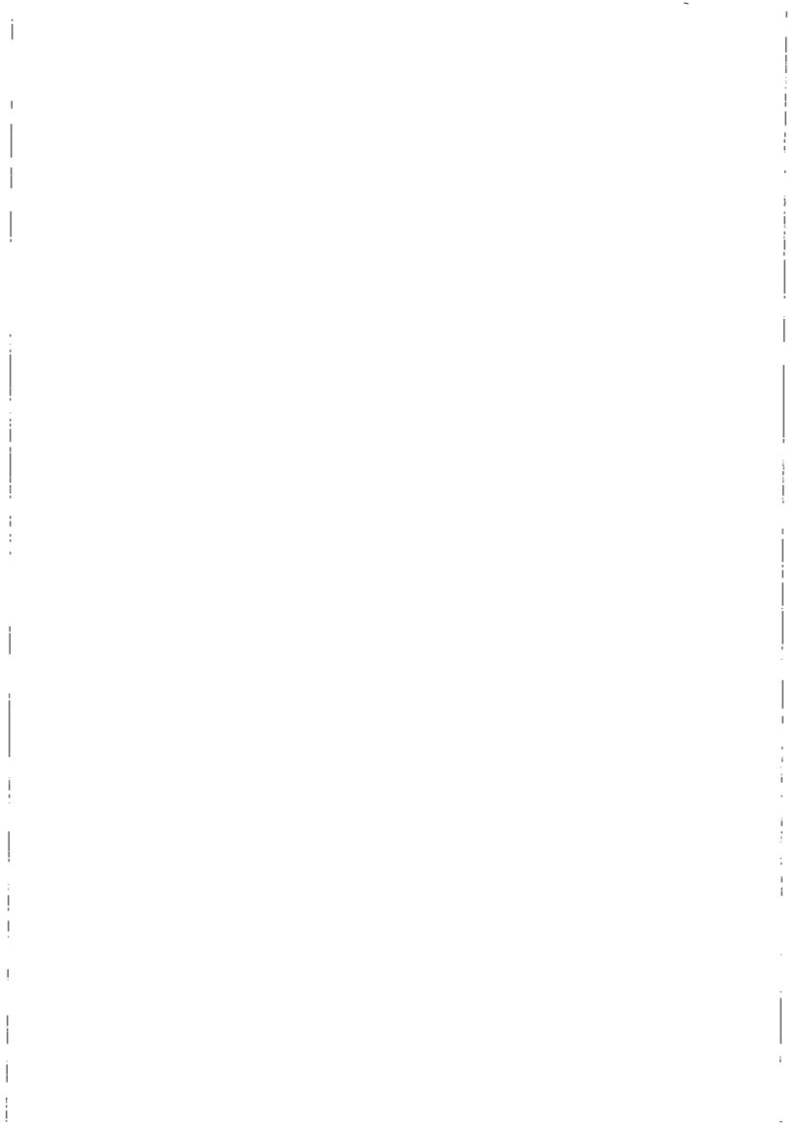
財団法人北海道埋蔵文化財センター







遺跡と遺跡周辺の空中写真



## 例 言

- 1 本書は、平成12年度に当センターが実施した日高自動車道厚真門別建設工事に伴う鷓川町米原3遺跡・米原4遺跡・宮戸3遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書の執筆は、I章：佐藤和雄・鎌田 望・芝田直人・大泰司 統、II章：佐藤・鎌田・花岡正光、III章：鎌田・袖岡淳子、IV章：鎌田・袖岡・芝田、V章：鎌田・袖岡・芝田・大泰司、VI章：鎌田・袖岡・芝田・大泰司が担当した。
- 3 VII章の執筆を含め、各種測定、同定は以下の通り  
黒曜石産地同定および黒曜石水和層年代測定を葦科哲男氏(京都大学原子炉実験所)に依頼した。  
遺跡のテフラ分析は、第1調査部第1調査課花岡正光が行った。  
石器等の石材鑑定は花岡の指導を受けて、袖岡・芝田が行った。
- 4 写真撮影は、現場においては、担当調査員が各自の責任において撮影し、袖岡が一括して写真整理を行った。整理作業時の遺物撮影は、大泰司と第2調査部第2調査課中山昭大が行った。
- 5 調査報告終了後の出土遺物および記録類については鷓川町教育委員会が保管する。
- 6 調査にあたっては下記の諸機関、各氏からご指導ご協力をいただいた(順不同、敬称略)。

北海道教育委員会、鷓川町教育委員会、北海道開発局(現、国土交通省北海道局)室蘭開発建設部、盛興建設株式会社、北海道文化財保護協会 扇谷昌康、社団法人北海道ウタリ協会鷓川支部 近森聖美、門別町図書館郷土資料館 川内谷 修、平取町教育委員会 森岡健治・長田佳宏、静内町郷土館 藪中剛司・斎藤大朋、浦河町教育委員会 川内 基、苫小牧市埋蔵文化財調査センター 佐藤一夫・宮夫靖夫・赤石慎三・兵藤千秋、苫小牧市役所 渡辺俊一・二階堂啓也・大泉博嗣・鈴木耕榮、伊達市教育委員会 大島直行・青野友哉・小島朋夏、虻田町教育委員会 角田隆志、千歳市教育委員会 大谷敏三・田村俊之・豊田宏良・遠藤昭浩・乾 哲也、千歳サケのふるさと館 高橋 理、恵庭市教育委員会 上屋真一・松谷純一・森 秀之・佐藤鏡子・長町章弘、北広島市教育委員会 遠藤龍敏、深川市教育委員会 葛西智義、富良野市郷土館 杉浦重信・澤田 健、帯広市教育委員会 北澤 実・山原敏郎、余市町教育委員会 乾 芳宏、北松山町教育委員会 谷岡康孝、七飯町教育委員会 石本省三、函館市立博物館 長谷部一弘、青森県埋蔵文化財センター 平山明寿・成田誠二・小田川哲彦・坂本真弓、八戸市教育委員会 村木 淳・大野 亨・小笠原善範、シン技術コンサル株式会社 大島秀俊・長谷川 徹

## 凡 例

- 1 遺構の表記は以下に示す記号を使用し、原則として確認順に番号を付した。

H：住居跡 P：土塼 TP：Tピット F：焼土 S：集石

HP：住居跡内柱穴 HF：住居跡内焼土

- 2 遺構図の方位は真北を示す。遺構平面図の+はグリッドライン交点で、傍らの名称記号は右下のグリッドを示している。遺構平面図の・小数字とセクションレベルは、標高（単位m）である。

- 3 遺構図の出土遺物は、下記の記号を使用した。

床面 覆土		床面 覆土		床面 覆土	
土器：● ○	剥片石器：▲ △	礫石器：▼ ▽			
剥片：■ □	礫・礫片：◆ ◇	その他：★ ☆			

- 4 遺構の規模は、「確認面での長軸長×短軸長/床（底）面での長軸長×短軸長/確認面からの最大深・最大厚（単位はm）」の順で記した。一部破壊されているものは現在長を（ ）で示し、不明のものは-で示した。

- 5 実測図の縮尺は、原則として下記のとおりである。下記以外の図および、例外については図内にスケールを付して示した。

遺 構 1：40	復元土器 1：4
土器拓本 1：3	剥片石器 1：2
礫 石 器 1：3	石 斧 1：2
台 石 1：4	土 製 品 1：2

- 6 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の層位についてはアラビア数字で示した。

- 7 土層の色調は「新版標準土色帖19版」（小山・竹原1997）に従った。

- 8 火山灰の略号は、「北海道の火山灰」（北海道火山灰命名委員会 1982）による。

- 9 土器、石器、土製品の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」で記した。剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。なお、実測図中でたつき痕はV-V、すり痕は| - |で範囲を表した。

# 目 次

表紙	
中表紙	
口絵 (カラー)	
遺跡付近の航空写真	
例言	
記号等の説明	
目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	
I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	2
4 調査結果の概要	3
米原3遺跡	3
宮戸3遺跡	3
米原4遺跡	3
II 遺跡の概要	5
1 遺跡の位置と周辺の遺跡	5
2 遺跡周辺の地形・地質	6
3 土層の区分	14
III 遺物の分類	15
1 土器	15
2 石器等	16
IV 米原3遺跡	17
1 調査の概要	17
2 調査区の設定	18
3 調査の方法	18
4 土層	19
5 遺構と遺構出土の遺物	23
(1) 概要	23
(2) 住居跡	25

(3) 土壌	33
P-1	
(4) 焼土	33
1) 縄文時代早期後半の焼土	33
2) 縄文時代中期未葉の焼土	36
6 包含層の遺物	37
(1) 土器	37
(2) 石器等	56
V 宮戸3遺跡	75
1 調査の概要	75
2 調査区の設定	77
3 調査の方法	77
4 土層	78
5 遺構および遺構出土の遺物	83
(1) 概要	83
(2) Tピット	85
TP-1~32	
(3) 焼土	107
F-1・2	
6 包含層の出土遺物	109
(1) 土器	109
(2) 石器等	117
VI 米原4遺跡	127
1 調査の概要	127
2 調査区の設定	128
3 調査の方法	128
4 土層	129
5 米原4遺跡A地区の遺構と出土遺物	130
(1) 概要	130
(2) Tピット	130
TP-1~3	
(3) 焼土	135
F-1・2	
(4) 集石	135
S-1	
6 A地区の包含層の遺物	137
(1) 土器	137
(2) 石器等	142

7	米原4遺跡B地区の遺構と遺構出土の遺物 .....	147
	(1) 概要 .....	147
	(2) 住居跡 .....	151
	H-1~6	
	(3) 土壌 .....	180
	P-1~4	
	(4) Tピット .....	184
	TP-4~7	
	(5) 焼土 .....	187
	F-3~13	
8	B地区の包含層の遺物 .....	197
	(1) 土器 .....	197
	(2) 石器 .....	213
Ⅵ	自然科学的手法による分析結果 .....	241
1	鷓川町米原3・宮戸3・米原4遺跡 出土の黒曜石製石器の原産地分析 および非破壊分析による水和層の測定 .....	241
2	米原3・宮戸3・米原4遺跡 のテフラについて .....	253
Ⅶ	写真図版	

# 挿 図 目 次

図 I-1-1	鶴川町の位置と遺跡位置図	1
図 I-3-1	日高自動車道と遺跡位置図	2
図 I-4-1	遺跡と周辺の地形	4
図 II-1-1	遺跡の位置と周辺の遺跡 (1)	8
図 II-1-2	遺跡の位置と周辺の遺跡 (2)	9
図 II-2-1	遺跡周辺の地形分類図	11
図 II-2-2	遺跡周辺の旧地形図 (1)	12
図 II-2-3	遺跡周辺の旧地形図 (2)	13
図 II-3-1	土層柱状模式図	14

## (米原 3 遺跡)

図 IV-2-1	調査区周辺の現況図	18
図 IV-2-2	調査区設定図	18
図 IV-3-1	調査範囲およびⅢ層上面地形図	19
図 IV-4-1	メインセクション (1) 台地部分	19
図 IV-4-2	メインセクション (2) 台地→東側斜面	21
図 IV-4-3	メインセクション (3) 西側斜面	22
図 IV-5-1	遺構位置図	24
図 IV-5-2	H-1	26
図 IV-5-3	H-1 と遺物 (1)	27
図 IV-5-4	H-1 の遺物 (2)	28
図 IV-5-5	H-2	31
図 IV-5-6	H-2 出土の遺物	32
図 IV-5-7	P-1	33
図 IV-5-8	F-1 ~ 6, 11, 12	34
図 IV-5-9	F-1 ~ 5 周辺の遺物	35
図 IV-5-10	F-7 ~ 10	36
図 IV-6-1	包含層出土土器分布図 (1)	38
図 IV-6-2	包含層出土土器分布図 (2)	39
図 IV-6-3	包含層出土土器分布図 (3)	40
図 IV-6-4	包含層出土土器分布図 (4)	41
図 IV-6-5	包含層出土土器分布図 (5)	42
図 IV-6-6	包含層出土土器分布図 (6)	43
図 IV-6-7	包含層出土の土器 (1)	45
図 IV-6-8	包含層出土の土器 (2)	46
図 IV-6-9	包含層出土の土器 (3)	47
図 IV-6-10	包含層出土の土器 (4)	49
図 IV-6-11	包含層出土の土器 (5)	50

図 IV-6-12	包含層出土の土器 (6)	51
図 IV-6-13	包含層出土土器等分布図 (1)	57
図 IV-6-14	包含層出土土器等分布図 (2)	58
図 IV-6-15	包含層出土土器等分布図 (3)	59
図 IV-6-16	包含層出土土器等分布図 (4)	60
図 IV-6-17	包含層出土土器等分布図 (5)	61
図 IV-6-18	包含層出土の土器 (1)	64
図 IV-6-19	包含層出土の土器 (2)	65
図 IV-6-20	包含層出土の土器 (3)	66
図 IV-6-21	包含層出土の土器 (4)	67
図 IV-6-22	包含層出土の土器 (5)	69
図 IV-6-23	包含層出土の土器 (6)	70
図 IV-6-24	包含層出土の土器 (7)	71
図 IV-6-25	包含層出土の土器 (8)	72

## (宮戸 3 遺跡)

図 V-2-1	調査区周辺の現況図	76
図 V-2-2	調査区設定図	76
図 V-3-1	Ⅲ層上面地形図	77
図 V-4-1	メインセクション (1)	79
図 V-4-2	メインセクション (2)	80
図 V-4-3	メインセクション (3)	81
図 V-4-4	メインセクション (4)	82
図 V-5-1	遺構位置図	84
図 V-5-2	TP-1 ~ 3	86
図 V-5-3	TP-4 · 5	88
図 V-5-4	TP-6 · 7	89
図 V-5-5	TP-8 ~ 10	91
図 V-5-6	TP-11 ~ 13	93
図 V-5-7	TP-14 ~ 16	95
図 V-5-8	TP-17 · 18	97
図 V-5-9	TP-19 ~ 21	99
図 V-5-10	TP-22 ~ 24	100
図 V-5-11	TP-25 ~ 27	102
図 V-5-12	TP-28 ~ 30	104
図 V-5-13	TP-31 · 32	105
図 V-5-14	ローム質土に伴う凝灰岩の V 層 中位、V 下位における分布図	106
図 V-5-15	F-1, F-2	108



図V-6-1	包含層出土土器分布図(1)	110	図VI-7-11	H-2の遺物(1)	163
図V-6-2	包含層出土土器分布図(2)	111	図VI-7-12	H-2の遺物(2)	164
図V-6-3	包含層出土土器分布図(3)	112	図VI-7-13	H-3	167
図V-6-4	包含層出土の土器(1)	114	図VI-7-14	H-3の遺物	168
図V-6-5	包含層出土の土器(2)	115	図VI-7-15	H-4と遺物	171
図V-6-6	包含層出土土器等分布図(1)	118	図VI-7-16	H-5と遺物	173
図V-6-7	包含層出土土器等分布図(2)	119	図VI-7-17	H-6(1)	175
図V-6-8	包含層出土土器等分布図(3)	120	図VI-7-18	H-6(2)	176
図V-6-9	包含層出土土器等分布図(4)	121	図VI-7-19	H-6の遺物(1)	177
図V-6-10	包含層出土の石器(1)	122	図VI-7-20	H-6の遺物(2)	178
図V-6-11	包含層出土の石器(2)	123	図VI-7-21	P-1~4・遺物	181
図V-6-12	包含層出土の石器(3)	125	図VI-7-22	P-4の遺物	182
			図VI-7-23	TP-4~6	185
			図VI-7-24	TP-7	186
			図VI-7-25	F-3~6・遺物	188
			図VI-7-26	F-7~13・遺物	189
			図VI-8-1	包含層出土土器分布図(1)	198
			図VI-8-2	包含層出土土器分布図(2)	199
			図VI-8-3	包含層出土土器分布図(3)	200
			図VI-8-4	包含層出土の土器(1)	201
			図VI-8-5	包含層出土の土器(2)	202
			図VI-8-6	包含層出土の土器(3)	205
			図VI-8-7	包含層出土の土器(4)	206
			図VI-8-8	包含層出土の土器(5)	207
			図VI-8-9	包含層出土土器等分布図(1)	215
			図VI-8-10	包含層出土土器等分布図(2)	216
			図VI-8-11	包含層出土土器等分布図(3)	217
			図VI-8-12	包含層出土土器等分布図(4)	218
			図VI-8-13	包含層出土土器等分布図(5)	219
			図VI-8-14	包含層出土土器等分布図(6)	220
			図VI-8-15	包含層出土の石器(1)	221
			図VI-8-16	包含層出土の石器(2)	222
			図VI-8-17	包含層出土の石器(3)	223
			図VI-8-18	包含層出土の石器(4)	224
			図VI-8-19	包含層出土の石器(5)	225
			図VI-8-20	包含層出土の石器(6)	226
			図VI-8-21	包含層出土の石器(7)	227
			図VI-8-22	包含層出土の石器(8)	228
			図VI-8-23	包含層出土の石器(9)	229
			図VI-8-24	包含層出土の石器(10)	230
			図VI-8-25	包含層出土の土製品	231
(米原4遺跡全体)					
図VI-3-1	調査区周辺の現況図	128			
図VI-3-2	調査区設定図	129			
(米原4遺跡・A地区)					
図VI-5-1	A地区メインセクション	131			
図VI-5-2	遺構位置図	132			
図VI-5-3	TP-1・2	133			
図VI-5-4	TP-3	134			
図VI-5-5	F-1・2	135			
図VI-5-6	S-1	136			
図VI-6-1	包含層出土土器分布図	138			
図VI-6-2	包含層出土の土器	140			
図VI-6-3	包含層出土土器等分布図	143			
図VI-6-4	包含層出土の石器(1)	144			
図VI-6-5	包含層出土の石器(2)	145			
(米原4遺跡・B地区)					
図VI-7-1	B地区メインセクション図	149			
図VI-7-2	B地区遺構位置図	150			
図VI-7-3	検出遺構とその掘り上げ土	152			
図VI-7-4	H-1(1)	154			
図VI-7-5	H-1(2)	155			
図VI-7-6	H-1と遺物(1)	156			
図VI-7-7	H-1と遺物(2)	157			
図VI-7-8	H-1の遺物(3)	158			
図VI-7-9	H-1の遺物(4)	159			
図VI-7-10	H-2	162			

# 表 目 次

表I-4-1	検出遺構一覽	4
表I-4-2	出土遺物一覽(1)土器	4
表I-4-3	出土遺物一覽(2)石器等	4
表II-1-1	鷗川町の遺跡	7
表II-1-2	門別町の遺跡	10
表II-1-3	平取町の遺跡	10

## (米原3遺跡)

表IV-1-1	検出遺構数一覽	17
表IV-1-2	出土遺物一覽	17
表IV-5-1	検出遺構一覽	23
表IV-5-2	H-1出土遺物一覽	25
表IV-5-3	H-1掲載遺物一覽	29
表IV-5-4	H-2出土遺物一覽	30
表IV-5-5	H-2掲載遺物一覽	32
表IV-5-6	焼土掲載遺物一覽	36
表IV-6-1	層位別出土土器一覽	37
表IV-6-2	包含層掲載土器一覽(1)	52
表IV-6-3	包含層掲載土器一覽(2)	53
表IV-6-4	包含層掲載土器一覽(3)	54
表IV-6-5	包含層掲載土器一覽(4)	55
表IV-6-6	層位別出土石器等一覽	56
表IV-6-7	包含層掲載石器一覽(1)	73
表IV-6-8	包含層掲載石器一覽(2)	74

## (宮戸3遺跡)

表V-1-1	検出遺構数一覽	75
表V-1-2	出土遺物一覽	75
表V-5-1	検出遺構一覽	83
表V-5-2	TP-18掲載遺物一覽	108
表V-5-3	TP-18出土遺物一覽	108
表V-5-4	F-1出土遺物一覽	108
表V-6-1	層位別出土土器一覽	109
表V-6-2	宮戸3遺跡掲載土器一覽	116
表V-6-3	層位別出土石器一覽	117
表V-6-4	包含層掲載石器一覽	126

## (米原4遺跡全体)

表VI-1-1	検出遺構数一覽	127
---------	---------	-----

表VI-1-2	出土遺物一覽	127
---------	--------	-----

## (米原4遺跡A地区)

表VI-5-1	検出遺構数一覽	130
表VI-5-2	出土遺物一覽	130
表VI-5-3	検出遺構一覽	130
表VI-5-4	S-1探属性一覽表	136
表VI-5-5	TP-3出土遺物一覽	136
表VI-6-1	層位別出土土器一覽	137
表VI-6-2	米原4遺跡A地区 掲載土器一覽表	141
表VI-6-3	層位別出土石器一覽	142
表VI-6-4	包含層掲載石器一覽	146

## (米原4遺跡B地区)

表VI-7-1	検出遺構数一覽	147
表VI-7-2	出土遺物一覽	148
表VI-7-3	H-1出土遺物一覽	151
表VI-7-4	H-1掲載土器一覽	160
表VI-7-5	H-1掲載石器一覽	160
表VI-7-6	H-2出土遺物一覽	165
表VI-7-7	H-2掲載土器一覽	165
表VI-7-8	H-2掲載石器一覽	165
表VI-7-9	H-3出土遺物一覽	166
表VI-7-10	H-3掲載土器一覽	169
表VI-7-11	H-3掲載石器一覽	169
表VI-7-12	H-4出土遺物一覽	170
表VI-7-13	H-4掲載土器一覽	172
表VI-7-14	H-4掲載石器一覽	172
表VI-7-15	H-5出土遺物一覽	172
表VI-7-16	H-5掲載土器一覽	173
表VI-7-17	H-6出土遺物一覽	174
表VI-7-18	H-6掲載土器一覽	179
表VI-7-19	H-6掲載石器一覽	179
表VI-7-20	P-1出土遺物一覽	183
表VI-7-21	P-3出土遺物一覽	183
表VI-7-22	P-4出土遺物一覽	183
表VI-7-23	土壌掲載土器一覽	183
表VI-7-24	P-1掲載石器一覽	183
表VI-7-25	TP-4出土遺物一覽	184

表VI-7-26	F-4出土遺物一覽	191
表VI-7-27	F-5出土遺物一覽	191
表VI-7-28	F-7出土遺物一覽	191
表VI-7-29	F-9出土遺物一覽	191
表VI-7-30	F-13出土遺物一覽	191
表VI-7-31	焼土掲載石器一覽	192
表VI-7-32	F-4掲載石器一覽	192
表VI-7-33	F-5掲載石器一覽	192
表VI-8-1	層位別出土石器一覽	197
表VI-8-2	包含層掲載石器一覽(1)	209

表VI-8-3	包含層掲載石器一覽(2)	210
表VI-8-4	包含層掲載石器一覽(3)	211
表VI-8-5	包含層掲載石器一覽(4)	212
表VI-8-6	層位別出土石器等一覽	213
表VI-8-7	包含層掲載石器一覽(1)	234
表VI-8-8	包含層掲載石器一覽(2)	235
表VI-8-9	包含層掲載石器一覽(3)	236
表VI-8-10	包含層掲載石器一覽(4)	237
表VI-8-11	M42グリッド出土 被熱燻・礫片属性表	238

## 図 版 目 次

図版1	1 遺跡遠景(国道235号線より 南西から)
	2 III層上面検出状況(南から)
図版2	1 機械による遺構確認調査状況(東から)
	2 人力による遺構確認調査状況(北から)
図版3	1 西側遺構確認調査範囲完掘(北西から)
	2 東側遺構確認調査範囲完掘(南から)
図版4	1 O30グリッド土層堆積状況(南東から)
	2 G28~30グリッド土層堆積状況 (南西から)
	3 G3~6グリッド土層堆積状況 (南西から)
図版5	1 H-1掘り上げ土検出状況(南東から)
	2 H-1土層断面(南西から)
	3 H-1土層断面(北西から)
図版6	1 H-1全景(南から)
	2 H-1・HF-1検出状況(南西から)
	3 H-1遺物出土状況(北東から)
	4 H-1遺物出土状況(北東から)
図版7	1 H-2全景(北から)
	2 H-2土層断面(南西から)
	3 H-2土層断面(北西から)
図版8	1 H-2・HF-1検出状況(北西から)
	2 H-2・HF-1土層断面(南西から)
	3 H-2遺物出土状況(西から)
	4 P-1土層断面(北から)
	5 P-1全景(北東から)
図版9	1 F-4検出状況(西から)
	2 F-4断面(南から)

	3 F-6検出状況(北西から)
	4 F-6断面(西から)
	5 F-7~10検出状況(南東から)
	6 F-10断面(北から)
図版10	1 V層調査風景(北東から)
	2 土器片出土状況(南西から)
	3 土器底部出土状況(南から)
	4 石楡出土状況(南から)
図版11	1 VI層調査風景(南東から)
	2 調査終了後調査区域(東側 南東から)
図版12	1 調査終了後調査区域(中央 北東から)
	2 調査終了後調査区域(西側 東から)
図版13	H-1出土の遺物
図版14	1 H-2層出土の遺物
	2 焼土周辺出土の遺物
図版15	包含層出土土器(1)
図版16	包含層出土土器(2)
図版17	包含層出土土器(3)
図版18	包含層出土土器(4)
図版19	包含層出土土器(5)
図版20	包含層出土石器(1)
図版21	包含層出土石器(2)
図版22	包含層出土石器(3)
図版23	包含層出土石器(4)・土製品

### (宮戸3遺跡)

図版24	1 調査終了状況(東から)
	2 調査終了状況(西から)

- 図版 25 1 火山灰除去作業(東から)  
2 包含層V層上面測量作業(南から)
- 図版 26 1 近、現代の土壌検出状況(西から)  
2 近、現代の土壌(西から)
- 図版 27 1 包含層調査状況1(南東から)  
2 包含層調査状況2(南から)
- 図版 28 1 包含層遺物出土状況1  
J4グリッド(北から)  
2 包含層遺物出土状況2  
F9グリッド(東から)
- 図版 29 1 包含層遺物出土状況3  
H3、I3グリッド(北から)  
2 包含層遺物出土状況4  
F6グリッド(南から)
- 図版 30 1 低湿部(E23、F23)  
土層堆積状況(南から)  
2 低湿部(E23、F23)  
調査終了状況(西から)
- 図版 31 1 低湿部(E23、F23)  
土層堆積状況(南から)  
2 包含層土層堆積状況  
(E10、E11グリッド確認)(南から)
- 図版 32 1 Tピット検出状況  
ピンホールで示した所(南西から)  
2 V層下面包含層調査状況(南西から)
- 図版 33 1 TP-1土層断面(東から)  
2 TP-1完掘状況(東から)  
3 TP-2完掘状況(北東から)  
4 Tピット周辺での包含層調査  
G6グリッド(東から)
- 図版 34 1 TP-3土層断面(東から)  
2 TP-3完掘状況(東から)  
3 TP-4土層断面(西から)  
4 TP-4完掘状況(西から)
- 図版 35 1 TP-5土層断面(西から)  
2 TP-5完掘状況(西から)  
3 TP-6土層断面(北から)  
4 TP-6完掘状況(北から)
- 図版 36 1 TP-7土層断面(西から)  
2 TP-7完掘状況(北西から)  
3 TP-8土層断面(北西から)
- 4 TP-8完掘状況(東から)
- 図版 37 1 TP-9土層断面(北西から)  
2 TP-9完掘状況(北西から)  
3 TP-10土層断面(北西から)  
4 TP-10完掘状況(東から)
- 図版 38 1 TP-11土層断面(東から)  
2 TP-11完掘状況(南から)  
3 TP-12土層断面(西から)  
4 TP-12完掘状況(東から)
- 図版 39 1 TP-13土層断面(南から)  
2 TP-13完掘状況(東から)  
3 TP-14土層断面(西から)  
4 TP-14完掘状況(南から)
- 図版 40 1 TP-15土層断面(南から)  
2 TP-15完掘状況(北から)  
3 TP-16土層断面(西から)  
4 TP-16完掘状況(東から)
- 図版 41 1 TP-17土層断面(東から)  
2 TP-17完掘状況(東から)  
3 TP-18土層断面(西から)  
4 TP-18完掘状況(東から)
- 図版 42 1 TP-19土層断面(東から)  
2 TP-19完掘状況(東から)  
3 TP-20土層断面(東から)  
4 TP-20完掘状況(東から)
- 図版 43 1 TP-21土層断面(西から)  
2 TP-21完掘状況(東から)  
3 TP-22土層断面(南から)  
4 TP-22完掘状況(西から)
- 図版 44 1 TP-23土層断面(東から)  
2 TP-23完掘状況(東から)  
3 TP-24土層断面(西から)  
4 TP-24完掘状況(南から)
- 図版 45 1 TP-25土層断面(東から)  
2 TP-25完掘状況(東から)  
3 TP-26土層断面(東から)  
4 TP-26完掘状況(北から)
- 図版 46 1 TP-27土層断面(東から)  
2 TP-27完掘状況(西から)  
3 TP-28土層断面(東から)  
4 TP-28完掘状況(東から)

- 図版 47 1 TP-29 土層断面(東から)  
 2 TP-29 完掘状況(東から)  
 3 TP-30 土層断面(北から)  
 4 TP-30 完掘状況(北東から)
- 図版 48 1 TP-31 土層断面(東から)  
 2 TP-31 完掘状況(東から)  
 3 TP-32 土層断面(東から)  
 4 TP-32 完掘状況(東から)
- 図版 49 1 F-1 土層断面(南から)  
 2 F-1 完掘状況(南から)  
 3 F-2 土層断面(南西から)  
 4 F-2 完掘状況(南から)

図版 50 包含層出土石器(1)

図版 51 包含層出土石器(2)

図版 52 1 TP-32 出土の遺物  
 2 包含層出土石器(1)

図版 53 包含層出土石器(2)

(米原 4 遺跡 A 地区)

図版 54 1 A 地区斜面部分表土除去後状況 1  
 (北から)  
 2 A 地区斜面部分表土除去後状況 1  
 (南から)

図版 55 1 A 地区斜面部分包含層調査状況  
 (北東から)  
 2 A 地区斜面部分土層堆積状況(東から)

図版 56 1 A 地区斜面部分調査終了状況(南から)  
 2 A 地区斜面部分低湿地調査終了状況  
 (南から)

図版 57 1 A 地区台地部分土層堆積状況(北から)  
 2 A 地区台地部分調査終了状況(北から)

図版 58 1 A 地区台地部分包含層調査状況  
 (東から)  
 2 A 地区台地部分調査終了状況 2  
 (南西から)

図版 59 1 S-1 検出状況 1 (東から)  
 2 S-1 検出状況 2 (南から)  
 3 S-1 断ち割り状況(北から)

図版 60 1 F-1 検出状況(北から)  
 2 F-1 土層断面(北から)  
 3 F-2 検出状況(北から)

4 F-2 土層断面(北から)

図版 61 1 TP-1 土層断面(東から)  
 2 TP-1 完掘状況(西から)  
 3 TP-2 土層断面(東から)  
 4 TP-2 完掘状況(西から)

図版 62 1 TP-3 土層断面 1 (東から)  
 2 TP-3 完掘状況(東から)  
 3 TP-3 土層断面 2 (北から)

図版 63 包含層出土石器

図版 64 包含層出土石器・土製品

(米原 4 遺跡 B 地区)

図版 65 1 米原 4 遺跡地区 B 地区遺跡遺景  
 (南西から)

2 調査区近景(北から)

図版 66 1 調査状況(北から)  
 2 調査状況(南から)

図版 67 1 H-1 検出状況(東から)  
 2 H-1 検出状況(南西から)

図版 68 1 H-1 覆土遺物出土状況(北から)  
 2 土層断面(南西から)  
 3 H-1 完掘(南西から)

図版 69 1 H-1 床面遺物出土状況(南から)  
 2 H-1 床面遺物出土状況(北から)  
 3 H-1 完掘(西から)

図版 70 H-1  
 1 HP-7 完掘(東から)  
 2 HP-4、5 土層断面(西から)  
 3 HP-4、5 完掘(西から)

4 HP-6 土層断面(北東から)

5 HP-6 完掘(北東から)

6 HP-18 完掘(南から)

7 HP-9 土層断面(西から)

8 HP-9 完掘(西から)

9 HP-10 完掘(西から)

図版 71 1 H-2、3 検出状況(東から)  
 2 H-2 調査状況(北から)  
 3 H-2 土層断面(東から)  
 4 H-2 土層断面(南西から)

図版 72 1 H-2 遺物出土状況(東から)  
 2 H-2 土層断面(南西から)

- 3 H-2 遺物出土状況(東から)
- 4 H-2 完掘(南西から)
- 図版 73 1 H-3 土層断面(南西から)
- 2 H-3 土層断面(南東から)
- 3 H-3 全景(南西から)
- 4 H-3 HP-1 完掘(南から)
- 5 H-3 HP-1 検出(北から)
- 図版 74 1 H-3 HP-2 遺物検出状況  
(北東から)
- 2 H-3 HP-2 土層断面(南から)
- 3 H-3 完掘(南西から)
- 図版 75 1 H-4 床面遺物出土状況(北から)
- 2 H-4 土層断面(南から)
- 3 H-4 完掘(北東から)
- 図版 76 1 H-5 土層断面(東から)
- 2 H-5 完掘(北から)
- 図版 77 1 H-6 遺物出土状況(北から)
- 2 H-6 土層断面(南から)
- 図版 78 1 H-6 土層断面(東から)
- 2 H-6 完掘(南西から)
- 3 H-6 遺物出土状況(北から)
- 4 H-6 HF-1 検出状況(南から)
- 図版 79 H-6
- 1 H-6 完掘(南から)
- 2 HP-1 土層断面(北から)
- 3 HP-3 土層断面(東から)
- 4 HP-5 土層断面(東から)
- 5 HP-6 土層断面(南から)
- 6 HP-10 土層断面(西から)
- 7 HP-10 完掘(西から)
- 図版 80 1 P-1・P-3 完掘(南西から)
- 2 P-1 土層断面(南から)
- 3 P-3 土層断面(南西から)
- 4 P-2 土層断面(南から)
- 5 P-2 完掘(南から)
- 図版 81 1 P-4 遺物出土状況(東から)
- 2 P-4 完掘(南から)
- 3 P-4 土層断面(南から)
- 4 TP-4 完掘(南から)
- 5 TP-4 土層断面(南から)
- 図版 82 1 TP-5 土層断面(東から)
- 2 TP-5 完掘(西から)
- 3 TP-6 土層断面(東から)
- 4 TP-6 完掘(南東から)
- 5 TP-7 土層断面(南東から)
- 6 TP-7 完掘(西から)
- 図版 83 1 F-7 検出状況(南から)
- 2 F-7 土層断面(南から)
- 3 F-3 検出状況(南西から)
- 4 F-3 検出状況(南から)
- 5 F-9 検出状況(南から)
- 6 F-9 土層断面(南から)
- 図版 84 1 B地区 土層断面(南から)
- 2 B地区 土層断面(南西から)
- 図版 85 1 米原4 遺跡B地区完掘(東から)
- 図版 86 H-1 出土遺物(1)
- 図版 87 H-1 出土遺物(2)
- 図版 88 H-2 出土遺物
- 図版 89 H-3 出土遺物
- 図版 90 H-4・H-5 出土遺物、  
H-6 出土遺物(1)
- 図版 91 H-6 出土遺物(2)
- 図版 92 土填(P)、焼土(F) 出土遺物
- 図版 93 包含層出土土器(1)
- 図版 94 包含層出土土器(2)
- 図版 95 包含層出土土器(3)
- 図版 96 包含層出土土器(4)
- 図版 97 包含層出土土器(5)
- 図版 98 包含層出土石器(1)
- 図版 99 包含層出土石器(2)
- 図版 100 包含層出土石器(3)
- 図版 101 包含層出土石器(4)
- 図版 102 包含層出土石器(5)
- 図版 103 1 包含層出土石器(6)
- 2 包含層出土土製品
- 図版 104 包含層 被熱礫・礫片 接合状況

## I 調査の概要

## 1 調査要項

事業名 日高自動車道厚真門別道路埋蔵文化財発掘調査  
 委託者 国土交通省北海道局室蘭開発建設部  
 受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
 受託期間 平成12年4月3日～平成13年3月30日  
 調査期間 平成12年5月8日～平成13年3月27日

調査遺跡 (北海道教育 委員会登録番号)	米原3遺跡 (J-14-38)	宮戸3遺跡 (J-14-39)	米原4遺跡 (J-14-42)
所在地	勇払郡鷓川町 字米原448-1ほか	勇払郡鷓川町 字宮戸183	勇払郡鷓川町 字米原394ほか
発掘期間	5月8日～7月5日	7月7日～8月25日	8月28日～10月31日
調査面積	7,400㎡	3,600㎡	2,675㎡

## 2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
 理事長 大澤 満  
 専務理事 宮崎 勝  
 常務理事 木村 尚俊  
 業務部長 柳瀬 茂樹  
 第1調査部長 木村 尚俊(兼務)

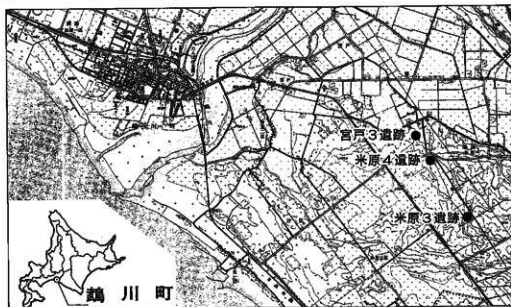


図1-1-1 鷓川町の位置と遺跡位置図

この図は国土地理院発行の地形図、1:25,000「鷓川」(NK-54-15-1-2、平成6年3月1日発行)を使用したものである。

第2調査課長	佐藤 和雄 (米原3遺跡・宮戸3遺跡発掘担当者)
主 任	鎌田 望 (米原4遺跡発掘担当者)
主 任	袖岡 淳子 (米原4遺跡発掘担当者)
文化財保護主事	芝田 直人 (米原3遺跡発掘担当者)
文化財保護主事	大泰司 統 (宮戸3遺跡発掘担当者)

### 3 調査にいたる経緯

日高自動車道は、北海道縦貫自動車道と連結する高速ネットワークのひとつで、苫小牧と浦河間120kmが計画されている。現在、苫小牧東インターチェンジ～厚真インターチェンジの間で供用がなされている。これより東は厚真・門別間で工事が進められている。このうち鷗川・門別間に所在する埋蔵文化財包蔵地については北海道開発局（現、国土交通省北海道局）室蘭開発建設部と北海道教育委員会（以下道教委と記す）との間でその取り扱いについて事前協議が行われた。道教委は平成5年8月に所在確認調査を平成11年8月・10月・11月に範囲確認調査を行ってきている。

その結果、鷗川町で4ヵ所、門別町で1ヵ所の遺跡が確認された。5ヵ所の遺跡はいずれも発掘調査が必要と判断され、今年度は鷗川町内の米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡、門別町内のコムカラ遺跡について発掘調査が計画された。

この内コムカラ遺跡については、調査着手条件の不備が生じたため除外した。その他、白老町の虎杖浜2遺跡で有珠山噴火による被災者の緊急雇用が実施され、調査員1名が応援にまわった。

この2遺跡の調整の結果、今年度は鷗川町内の米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡・宮戸4遺跡の一部について発掘調査を実施した。米原4遺跡・宮戸4遺跡は来年度も調査を行う予定である。

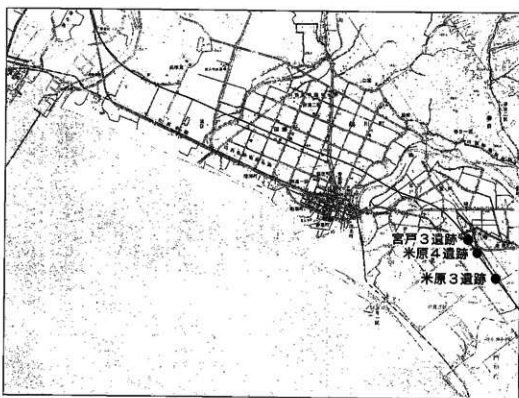


図1-3-1 日高自動車道と遺跡位置図

この図は国土地理院発行の地形図、1:50,000「鷗川」(NK-54-15-1、平成6年3月1日発行)を使用したものである。



## 4 調査結果の概要

## 米原3遺跡

海岸線から約3.5km内陸のイモッペ川右岸に位置する。2つの沢に挟まれた標高約45mの段丘上に立地している。川との比高は約25mある。丘腹斜面や沢の低地部分では湧水が見られた。

調査の結果、堅穴住居跡2軒、土壌1基、焼土12カ所が検出された。住居跡は縄文時代中期末のもので、H-1の床面から北筒式土器が、H-2の床面から煉瓦台式土器が出土した。

遺物は11,446点出土した。このうち土器が5,983点、石器が5,463点である。

土器は縄文時代早期の東銅路Ⅲ式、コッタロ式、東銅路Ⅳ式、中茶路式、前期の網文式、静内中野式、植苗式、中期の円筒土器上層式、柏木川式、煉瓦台式、北筒式、後期の余市式、続縄文時代の後北B式などがある。なかでも北筒式が最も多く、全体の40%を占める。次いで東銅路Ⅲ式、コッタロ式が多い。

石器は石鏃、石槍・ナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、北海道式石冠、すり石、たたき石、砥石、台石などがある。剥片石器では石鏃が最も多い。また、北海道式石冠、すり石、たたき石、台石などの礫石器の多さが目に付く。他には石斧素材を荒加工した破片や未製品が多い。

## 宮戸3遺跡

海岸線から約4km内陸のイモッペ川左岸、標高15~20mの段丘から続く緩斜面上に位置する。調査区は浅い沢状の地形になっており、北西側に傾斜している。南東側の低地では湧水が見られた。

調査の結果、Tピット32基、焼土2カ所が検出された。

遺物は19,236点出土した。このうち土器が2,150点、石器等が17,086点である。

土器は縄文時代早期の条痕文土器、東銅路Ⅲ式、コッタロ式、東銅路Ⅳ式、前期の網文式、静内中野式がある。

石器は石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、北海道式石冠、たたき石、砥石、台石などがある。

## 米原4遺跡

海岸線から約3.5km内陸のイモッペ川右岸、標高20~30mの段丘から続く緩斜面上に位置する。

調査区は町道によって2カ所に分断されている。北西側の地区は土取りや耕作による攪乱をうけており、包含層が残るのは沢跡のみである。南東側の地区は川に沿った細長い調査区である。包含層は一部の攪乱を除いては残りが良好で、台地の縁辺部では層厚が約80cmにもなる。

調査の結果、堅穴住居跡6軒、土壌4基、Tピット7基、焼土13カ所、集石1カ所が検出された。

住居跡は調査区中央から西よりで4軒、西端で1軒、東側で1軒検出された。すべて台地の縁辺部に位置している。これらの構築時期はH-4・5・6が柏木川式期、H-1が柏木川式期から北筒式期の間、H-2・3・5が断定はできないが北筒式期の可能性がある。このうちH-1・3・6は遺物の出土状態などからみて石器製作にかかわるものとみられる。

遺物は36,405点出土した。このうち土器が12,908点、石器が23,497点である。

土器は縄文時代早期の東銅路Ⅱ式、東銅路Ⅲ式、コッタロ式、東銅路Ⅳ式、前期の網文式、中期の柏木川式、北筒式などがある。

石器は石槍・ナイフ・石鏃・スクレイパー・石錐・石斧・たたき石・すり石・北海道式石冠・砥石・台石などがある。

(佐藤和雄)

表 I-4-1 検出遺構一覧

	米原3遺跡	宮戸3遺跡	米原4遺跡
竪穴住居跡	2		6
土 塼	1		4
Tピット		32	7
焼 土	12	2	13
築 石			1

表 I-4-2 出土遺物一覧 (1) 土器

時期	分類	米原3	宮戸3	米原4
早期	Ia		32	
	Ib	1460	1798	2700
前期	IIa	20	320	1990
	IIb	721		545
中期	IIIa	545		88
	IIIb	2579		7504
後期	IVa	510		76
	IVb			4
晩期	Vc	119		
	VI	21		
不明		8		1
合計		5983	2150	12908

表 I-4-3 出土遺物一覧 (2) 石器等

名 称	米原3	宮戸3	米原4
石 鏃	106	37	315
石槍・ナイフ	46	2	448
石 鏃	11	3	38
つまみ付きナイフ	21	11	44
スクレイパー	25	22	130
ピエス・エスキューユ	6	11	14
U・Rフレイク	168	72	782
両面調整	3		
石 核	4		71
フレイク	2912	175	7962
石 斧	260	15	2348
たたき石	83	16	182
くぼみ石	5	2	
すり石	99	3	167
北海道式石冠	121	4	152
扁平打製石器			2
石 鏃	5		
礫 石	35	18	123
台 石	85	7	71
磯・礫片	1468	16687	10641
土製品	1		5
焼成粘土塊			2
合 計	5463	17086	23498

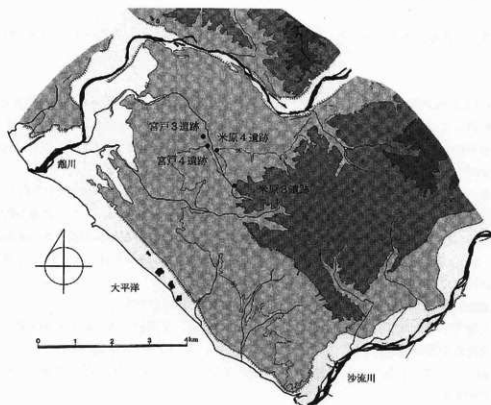


図 I-4-1 遺跡と周辺の地形

## II 遺跡の概要

### 1 遺跡の位置と周辺の遺跡

#### (1) 遺跡の位置

遺跡の所在する鷗川町は苫小牧市から東へ約30km、北海道の南部に位置している。胆振地方の東部には勇払原野が広がっており、鷗川町はその東端にあたる。北西は厚真町、北東は穂別町、東は平取町、南東は門別町に接している。南西側は、太平洋に面し、北東側は山地斜面、段丘が発達している。これらの間には沖積低地が広がり、砂丘や緩斜面がみられる(図Ⅱ-2-1)。

鷗川は夕張山地に源を発し、山間部を開折して太平洋へ注いでいる。全長153kmの長流である。中流域は河岸段丘が発達しており、農畜や軽種馬の牧場地帯になっている。下流域は沖積低地が形成されており、水田や畑が広がっている。

米原3・宮戸3・米原4遺跡は鷗川の支流、イモッペ川の河岸に立地している。遺跡の位置は鷗川河口から西へ約5~5.5km、標高約15~45mの段丘上である。

イモッペは鷗川町宮戸の古名で、餌、ミミズの意味である。永田地名解(永田 1891)によると「陥の餌を置く処」とある。

#### (2) 周辺の遺跡

鷗川町の遺跡は道教委作成の埋蔵文化財分布調査によると42カ所登録されている。このうち縄文時代の遺跡が35カ所ある。多くは、町内を貫流する鷗川の本流、支流の河岸段丘に分布している。

縄文時代早期の遺跡には花岡1遺跡、二宮遺跡、春日遺跡、花岡2遺跡、パンケニウキナイ2遺跡、ニクトンナイ1遺跡、ニクトンナイ2遺跡、ピタルシナイ2遺跡、豊城4遺跡、米原3遺跡、宮戸3遺跡、宮戸4遺跡、米原4遺跡がある。早期前半の遺跡は2カ所ある。二宮遺跡は甕式が多数の石斧と伴って出土している(扇谷 1977)。宮戸3遺跡は条痕文土器が僅かに出土している。早期後半の遺跡には春日遺跡、豊城4遺跡、米原3遺跡、宮戸3遺跡、宮戸4遺跡、米原4遺跡がある。東銅路Ⅲ・Ⅳ式、コックロ式、中茶路式土器が出土している。縄文時代前期の遺跡は20カ所あり、最も多い。遺跡には花岡1遺跡、春日遺跡、柏山遺跡、花岡3遺跡、チン川左岸2遺跡、豊城2遺跡、パンケヤラ遺跡、モイベツ遺跡、トンニカ遺跡、宮戸遺跡、パンケニウキナイ1遺跡、パンケニウキナイ遺跡、オブスケ遺跡、チン川左岸3遺跡、豊城4遺跡、二宮2遺跡、米原3遺跡、宮戸3遺跡、宮戸4遺跡、米原4遺跡がある。網文式、静内中野式、植苗式が出土している。

縄文時代中期の遺跡には春日遺跡、チン川左岸1遺跡、豊城2遺跡、トンニカ遺跡、サッベサ遺跡、オイシカチャシ跡、パンケニウキナイ1遺跡、パンケニウキナイ遺跡、ピタルシナイ遺跡、オブスケ遺跡、米原第1遺跡、米原3遺跡、宮戸3遺跡、米原4遺跡がある。円筒土器上層式、柏木川式、煉瓦台式、北筒式が出土している。

縄文時代晩期の遺跡には花岡1遺跡、二宮遺跡、春日遺跡、トンニイ遺跡、豊城2遺跡、豊城3遺跡、藤高沼遺跡、トンニカ遺跡、パンケニウキナイ2遺跡がある。タンネトウⅠ式が出土している。花岡1遺跡は20基の墓塚が検出され、土器や石鏃などの副葬品が出土している(大場・扇谷 1964)。

統縄文時代の遺跡には鷗川盛土墳墓群遺跡、豊城2遺跡、藤高沼遺跡、パンケニウキナイ2遺跡、米原3遺跡がある。後北式、恵山式が出土している。鷗川盛土墳墓群遺跡は昭和38年に調査がおこなわれ、2基の盛土墳墓が確認された。このうち1号墳墓が完全に調査された。規模は径7m、高さ約65cmで平面は円形である。周囲に幅85cm、深さ60~80cmの周溝がめぐらされている。墳墓内部には

墓塚が6基、掘りこまれている。墓塚からは土器・石器・管玉・平玉などの副葬品が出土している(大場・扇谷 1964)。

縄文時代の遺跡には花岡1遺跡、春日遺跡、トンニトイ遺跡、汐見2遺跡、ケナシノシケオマナイ遺跡がある。汐見2遺跡は相当数の竪穴住居跡の存在が予想されている。土器は後期のものが多い。

アイヌ文化期の遺跡には春日遺跡、汐見2遺跡、トンニカ遺跡、サッベサ遺跡、オイシカチャシ跡がある。トンニカ遺跡、サッベサ遺跡はコタンの跡地である。汐見2遺跡はムカワブコタンの跡地の可能性が大きいと考えられている。オイシカチャシ跡は鷗川左岸標高約60m、台地の舌状先端部に位置する。弧状の溝が東西に残存している。

#### 引用・参考文献

- 永田方正 1891 『北海道蝦夷語地名解』  
大場利夫・扇谷昌康 1964 『勇払郡鷗川遺跡』『北方文化研究報告』第19輯  
鷗川町史編集委員会 1968 『鷗川町史』  
扇谷昌康 1977 『鷗川町遺跡分布調査報告書』鷗川町教育委員会  
扇谷昌康 1979 『日高門別の先史遺跡』門別町教育委員会  
北海道教育庁社会教育部文化課編 1983 『北海道のチャシ』北海道文化財保護協会  
瀬川秀良 1974 『日本地形誌 北海道地方』朝倉書店  
山田秀三 1984 『北海道の地名』北海道新聞社  
日本の地質『北海道地方』編集委員会 1990 『日本の地質1 北海道地方』共立出版株式会社  
(佐藤)

## 2 遺跡周辺の地形・地質

図Ⅱ-2-1に遺跡周辺の地形分類図を示す。周辺には段丘、段丘縁辺の緩斜面・丘陵、谷底平野、沖積低地、砂丘、海蝕崖が認められる。

段丘は新旧の二段があり、旧期のものを段丘1、新期のものを段丘2とした。段丘1は標高50m前後に、段丘2は標高20~40mに位置している。段丘1の構成物は、米原3遺跡の工事法面で粒径1~6cmの円礫が認められ、層厚は少なくとも1m以上ある。

新旧の段丘間、及び段丘と沖積低地の間は開析され、緩傾斜・小起伏で丘陵状を呈している。これを段丘縁辺の緩斜面・丘陵とした。丘陵地の基盤構成物は未詳であるが、米原4遺跡と宮戸3遺跡では層厚1m以上の更新世の降下テフラが認められる。

丘陵地と段丘を開析して谷底平野が北西~南東方向と東西方向に発達している。海岸寄りの丘陵地を開析する谷底平野は浅くて幅広いのに対し、米原3遺跡から米原4遺跡へかけての谷底平野は狭長である。

標高15m以下には沖積低地が発達し、海岸部には砂丘と海蝕崖が認められる。

米原3遺跡は段丘1とその縁辺の緩斜面へかけて、米原4遺跡と宮戸3遺跡は段丘2の縁辺の緩斜面上に立地している。各遺跡の表層部には樽前山、有珠山起源の完新世の降下テフラが認められる。

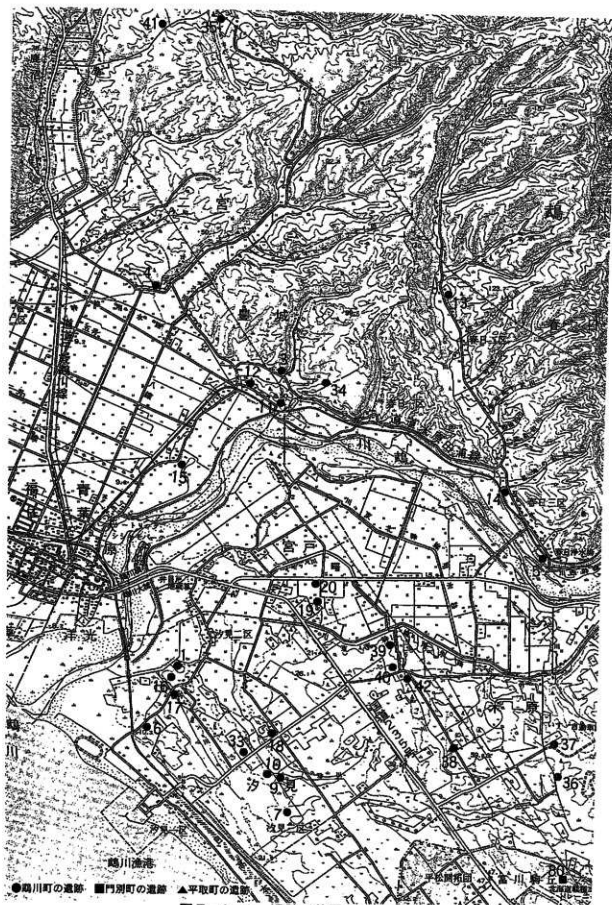
#### 参考文献

- 北海道火山灰命名委員会 1979 『北海道の火山灰分布図』  
山口昇一 1960 『5万分の1地質図幅「鷗川」』地質調査所

(花岡正光)

表Ⅱ-1-1-1 礪川町の遺跡

番号	名称	所在地	立地	面積(m <sup>2</sup> )	面積(m <sup>2</sup> )	時期	現状・遺跡	文書
1	礪川町土庫遺跡	伊豆1189-1-6	チノ川・タイパシ川河口上	20	6,000	縄文(前期)	埋没(山ノ原)	1-2,3
2	花岡1(旧皇塚)遺跡	伊豆1190	礪川右岸河上	25	41,400	縄文(中・後)	埋没(山ノ原)	1-3
3	花岡1(旧皇塚)遺跡	伊豆170-1	谷地	50	17,000	不明	埋没(山ノ原)	
4	二宮遺跡	伊豆1117-1-2ほか	礪川右岸河上	20~30	22,000	縄文(中・後)	中央部は土盛りにより崩壊	3
5	寺田遺跡	伊豆245-1-3ほか	礪川右岸河上	10	42,000	縄文(前期)	明瞭な土盛りにより崩壊	3
6	トシエト(伊豆丸山)遺跡	伊豆54-1-2	礪川右岸河上	10	22,000	縄文(前期)	ほとんどの部分が埋没されているが、一部は土盛り	3
7	礪川(伊豆丸山)遺跡	伊豆243-1-3・10	チノ川・タイパシ川河口上	10~20	15,000	縄文(前期)	土盛りあり、遺跡が土盛りにより崩壊	3
8	花岡2遺跡	伊豆236-1-7	礪川右岸河上	30	35,000	縄文(前期)	火山灰が埋没している	3
9	花岡3遺跡	伊豆302-1	チノ川河口上	20	1,800~2,000	不明	不明	
10	チノ川河口上2遺跡	伊豆230-1	チノ川河口上	15	4,000~6,000	縄文(前期)	縄文(中・後)	3
11	花岡4遺跡	伊豆347	礪川右岸河上	50	19,000	縄文(前期)	縄文(中・後)	3
12	花岡5遺跡	伊豆347	礪川右岸河上	50	14,000	縄文(前期)	縄文(中・後)	3
13	パンナカヤ遺跡	伊豆308-1-28	チノ川河口上	50	不明	不明	中央部を埋没	3
14	モイロ遺跡	伊豆176	チノ川河口上	20	不明	不明	中央部を埋没	3
15	花岡6遺跡	伊豆70-71ほか	礪川右岸河上	10	16,000	縄文(前期)	遺跡の大部分は埋没	3
16	伊豆2遺跡	伊豆187, 198	チノ川河口上	20	50,000	縄文(前期)	遺跡の大部分は埋没	3
17	伊豆3遺跡	伊豆204-2	チノ川河口上	20	不明	不明	不明	3
18	トシエト2遺跡	伊豆310ほか	チノ川河口上	20	不明	不明	不明	3
19	サツバヤ遺跡	伊豆157-2-5	チノ川河口上	10	不明	不明	不明	3
20	菅野遺跡	伊豆263	礪川右岸河上	10	7,200	縄文(前期)	遺跡の大部分は埋没	3
21	チノ川河口上1遺跡	伊豆490-1-2	チノ川河口上	20	不明	不明	不明	3
22	チノ川河口上2遺跡	伊豆285-8	チノ川河口上	60	不明	不明	不明	3
23	チノ川河口上3遺跡	伊豆308	チノ川河口上	120	不明	不明	不明	3
24	花岡7遺跡	伊豆288-1ほか	礪川右岸河上	40	不明	不明	不明	3
25	パンナカヤ1遺跡	伊豆240-2-2	チノ川河口上	40	38,000	縄文(中)	遺跡の大部分は埋没	3
26	パンナカヤ2遺跡	伊豆241-1-2, 3	チノ川河口上	40	36,000	縄文(中)	遺跡の大部分は埋没	3
27	ニトコノヤ1遺跡	伊豆244-1-2	チノ川河口上	20	不明	不明	不明	3
28	ニトコノヤ2遺跡	伊豆244-1-3	チノ川河口上	40	不明	不明	不明	3
29	パンナカヤ3遺跡	伊豆167	チノ川河口上	60	60,000	縄文(前期)	遺跡の大部分は埋没	3
30	ピタコノヤ1遺跡	伊豆87	チノ川河口上	50	12,500	縄文(前期)	遺跡の大部分は埋没	3
31	ピタコノヤ2遺跡	伊豆47-1	チノ川河口上	40	20,000	縄文(前期)	遺跡の大部分は埋没	3
32	チノ川河口上4遺跡	伊豆255-4	チノ川河口上	17~18	不明	不明	不明	3
33	花岡8遺跡	伊豆170-1-3	礪川右岸河上	60	10,800	縄文(前期)	遺跡の大部分は埋没	3
34	二宮2遺跡	伊豆435-3	礪川右岸河上	80	不明	不明	遺跡の大部分は埋没	3



## II 遺跡の概要







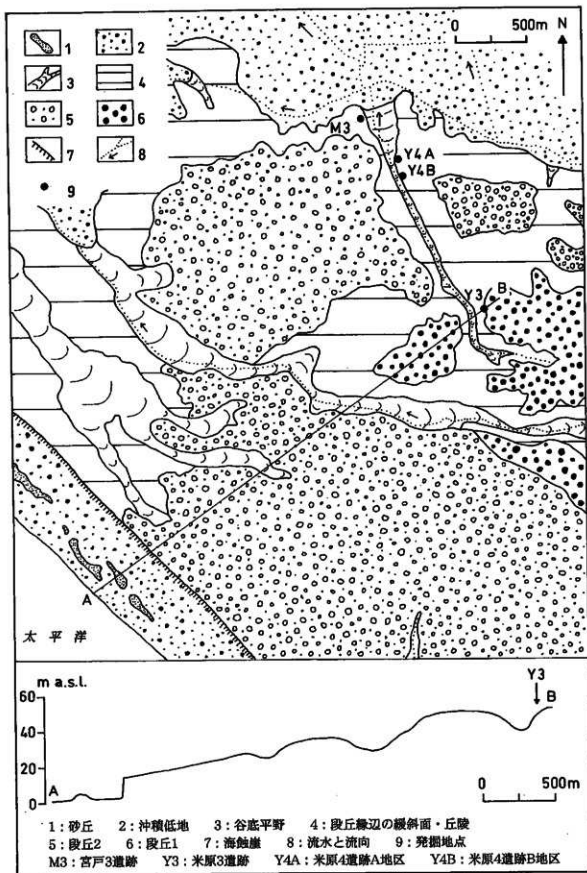
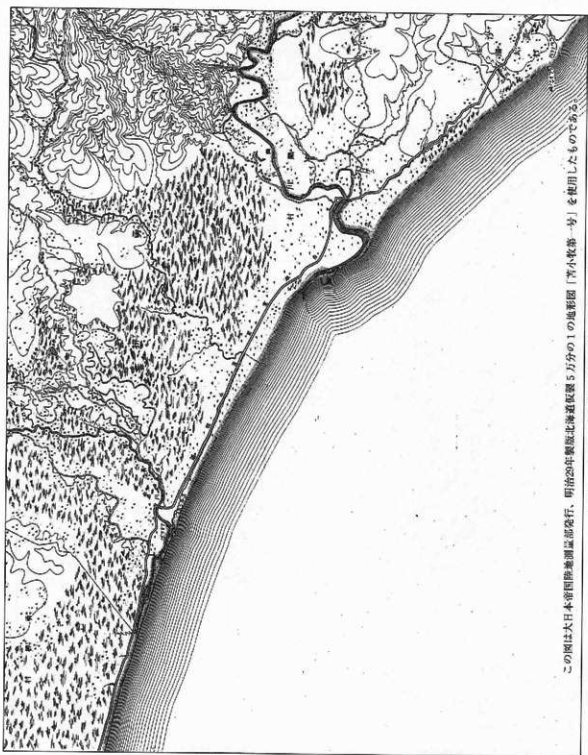


図 II-2-1 遺跡周辺の地形分類図



図II-2-2 遺跡周辺の旧地形図(1)



図II-2-3 遺跡周辺の旧地形図(2)

### 3 土層の区分

基本土層は米原3、4遺跡、宮戸3遺跡において共通しており、以下に示した土層の区分を用いて調査を行った。

I層 耕作土とTa-a層が土壌化したものを指す。2つに区分した。

I a層 耕作土 盛土層厚約40~60cm。

I b層 表土 黒色腐植土 (7.5YR1.7/1) Ta-a層が土壌化したもの。

II層 統縄文時代、縄文時代の遺物包含層の上部に堆積する火山灰を一括してII層とした。火山灰の降下年代とその種類により区分する。

樽前a降下軽石層 A.D1739年降下(10YR8/3)浅黄橙色 層厚約10cm前後。粒径0.5mm以下の火山灰。耕作が及ばない地形の低いところにみられる。

樽前b降下軽石層 A.D1667年降下(2.5Y6/1)黄灰色 層厚約15cm前後。粒径1.0~1.5mmの火山灰層。

有珠b降下火山灰層 A.D1663年降下。この2cm程度の薄い層(10YR4/1)褐色には有珠b-1~6のいずれかに属するもの。粒子の細かい火山灰層。

有珠b降下軽石層 A.D1663年降下。(10YR8/1)灰白色 層厚約15cm前後。粒径1~3mm程度の火山灰層。この軽石層の直下にフォールユニットを異にする粒子の細かい火山灰層(10YR5/1)褐色がみられる。

III層 腐植土(10YR2/1)黒色 層厚約5cm程度。水分を含むとやや粘性を帯びる。統縄文時代の遺物を包含すると考えられる。

IV層 腐植土(7.5YR4/4)褐色 3遺跡に共通してみられる。遺跡や地形により若干の差異がある。B-TmからTa-c(樽前C降下軽石層B,C300年前降下)までの火山灰と、腐植土からなる、風成と腐植化が成因の層。

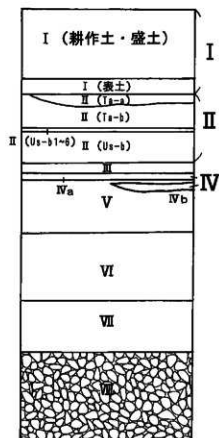
V層 腐植土(10YR1.7/1)黒色 層厚約20~40cm。水分を含むとやや粘性を帯びる。縄文時代後期初頭~縄文時代早期の遺物を包含する。

VI層 漸移層 褐色(10YR4/4)~にぶい黄褐色土(10YR5/3) 層厚約40~50cm。上面には縄文時代早期の遺物を包含する。

VII層 ローム質土層(10YR6/8)明黄褐色層厚約30cm程度。水分を含むと粘性に富む。

VIII層 火山灰層(10YR6/8)明黄褐色もしくは歪円の小円礫層。層厚2m以上。

(袖岡淳子)



図II-3-1 土層柱状模式図

## III 遺物の分類

### 1 土器

分類にあたっては、石狩低地帯、噴火湾～太平洋沿岸での調査結果を基にした分類を踏襲した。出土した土器には縄文時代早期から晩期のもの、統縄文時代のものがある。縄文時代早期の資料をI群とし、以下順次前期、中期、後期、晩期をII群、III群、IV群、V群とした。統縄文時代のものはVI群、濠文期のものはVII群とした。

**I群** 縄文時代早期に属するもの。

- a類：貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。
- b類：縄文、撚糸文、絡糸体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などのある土器群。
  - b-1類：東銅路Ⅱ式、東銅路Ⅲ式に相当するもの。
  - b-2類：コックロ式に相当するもの。
  - b-3類：中茶路式に相当するもの。
  - b-4類：東銅路Ⅳ式に相当するもの。

**II群** 縄文時代前期に属するもの。

- a類：縄文の施された丸底・尖底の土器群。
  - a-1類：網文式に相当するもの。
  - a-2類：春日町式、静内中野式に相当するもの。
- b類：円筒土器下層式、権苗式、大麻Ⅴ式に相当するもの。

**III群** 縄文時代中期に属するもの。

- a類：円筒土器上層式、萩ヶ岡Ⅰ式に相当するもの。
- b類：円筒土器に後続する土器群。
  - b-1類：天神山式、萩ヶ岡Ⅱ式、萩ヶ岡Ⅲ式に相当するもの。
  - b-2類：柏木川式、萩ヶ岡Ⅳ式に相当するもの。
  - b-3類：北筒式、トコロⅥ類、煉瓦台式あるいは静狩式に相当するもの。

**IV群** 縄文時代後期に属するもの。

- a類：余市式、タブコブ式、手稲砂山式、入江式、大津式に相当するもの。
- b類：ウサクマイⅠ式、船泊上層式、手稲式、ホクマ式に相当するもの。
- c類：堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。

**V群** 縄文時代晩期に属するもの。

- a類：大洞Ⅱ式、上ノ国式に相当するもの。
- b類：大洞Ⅰ式、大洞Ⅲ式に相当するもの。
- c類：大洞Ⅳ式、大洞Ⅴ式、タンネトウⅠ式に相当するもの。

**VI群** 統縄文時代に属するもの。

- a類：大狩部式、トニカ式、東歌別式に相当するもの。
- b類：恵山式に相当するもの。
- c類：後北式に相当するもの。

**VII群** 濠文期に属するもの。

(鎌田 望)

## 2 石器等

今年度調査した3遺跡より出土した石器等については、各遺跡の主体となる時期および胆振東部～日高地方の地域性を考慮した分類を行った。石器そのものの特性や機能に直接言及するため、特に記号などは用いていない。未製品や破損品、破片などは定型的な石器に帰属するため各々の分類に含めた。定型的な石器は以下の名称を用いた。

### 1) 剥片石器類

石鏃	両面調整石器
石槍もしくはナイフ	ビエス・エスキーユ
石錐	石核
つまみ付ナイフ	Rフレイク・Uフレイク
スクレイパー	フレイク

### 2) 磨製石器

磨製石斧

### 3) 礫石器

たたき石	石鋸
くぼみ石	砥石
すり石	扁平打製石器
北海道式石冠	台石

### 4) 土製品

再生土製品	ミニチュアの土器
焼成粘土塊	その他

### 5) 定型的な石器に含まれないもの

礫・礫片

礫（凝灰岩）

遺跡からは凝灰岩の礫が出土する。Ⅵ、Ⅶ層中に含まれるものである。Ⅴ層包含層中に含まれる凝灰岩は遺構の掘り上げ土の分布を把握するため人為的な遺物に準ずる扱いをした。

被熱した礫・礫片

米原3遺跡、4遺跡に多く出土する。

(袖岡淳子)

## IV 米原3遺跡

## 1 調査の概要

米原3遺跡は、イモッペ川上流右岸の、川へ流れ込む2つの沢に挟まれた舌状台地上に立地する。北海道教育庁生涯学習部文化課による試掘の結果に基づき、調査区を発掘調査部分(2,200㎡)と遺構確認部分(5,200㎡)に分けて調査を行った。全体の調査面積は7,400㎡である。

発掘調査部分では、縄文時代早～後期、続縄文時代の遺構・遺物がⅢ～Ⅵ層より発見された。遺構は堅穴住居跡2軒、土壇1基、焼土12カ所が検出されている。遺物の総点数は11,446点で、大半がⅤ層より出土した。土器は縄文時代中期末葉の煉瓦台式、北筒式が最も多く、同早期後半の東銅路Ⅲ式、コックロ式、中茶路式がこれに次ぐ。遺構もこれらに相当する時期のものと考えられる。その他、同早期の東銅路Ⅳ式、前期の網文式、静内中野式、植苗式、中期の円筒上層式、蕨ヶ岡Ⅰ式、後期のタブコブ式、続縄文時代の後北B式なども出土している。石器は主要なもので、石鏃、石槍・ナイフ、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、R・Uフレイク、石斧、たたき石、すり石、北海道式石冠、砥石、台石などが出土した。また、被熱した礫・礫片が大量に出土している。

北東側の町道に面した部分、南東側および西側の急斜面とそれに続く低位の平坦面において遺構確認調査を行ったが、遺構は検出されなかった。このうち北東側の平坦部は町道工事に伴う攪乱を受けており、削平は最も深い箇所でもⅤ層中にまで及んでいた。遺構の立地や遺物の分布などから、この部分が遺跡の主体部であったと推測され、多くの遺構・遺物が失われた可能性が高い。(芝田直人)

表IV-1-1 検出遺構数一覧

検出層位	堅穴住居跡(H)	土壇(P)	焼土(F)	遺構数
Ⅴ層中位	2	1	4	7
Ⅴ層下位			5	5
Ⅵ層上面			3	3
合計	2	1	12	15

表IV-1-2 出土遺物一覧

土 器				石 器 等					
分 類	遺構	包含層	点 数	分 類	遺構	包含層	点 数		
I b		81	IV a	510	石 鏃	106	斧	4	256
I b-1		749	V c	119	石 槍・ナイフ	45	た た き 石	2	81
I b-2		463	Ⅵ	21	石 鏃	11	く ぼ み 石		5
I b-3	1	93	不明土器	8	つまみ付ナイフ	1	す り 石	1	98
I b-4		73			スクレイパー	25	北海道式石冠		121
Ⅱ a		20			ピエス・エスキュー	6	石 鏃		5
Ⅱ b		721			R フレイク	58	砥 石		36
Ⅲ a		545			U フレイク	1	台 石	3	82
Ⅲ b	8	107			両面調整石器	3	礫・礫片	32	1436
Ⅲ b-2		158			石 槍	4	再生土製円盤		1
Ⅲ b-3	376	1930			フ レ イ ク	8	2904		
計			385	5598	計			52	5411
土 器 計				5983	石 器 等 計				5463
総 計								11446	

## 2 調査区の設定

基本図には北海道開発局室蘭開発建設部の「日高自動車道鶴川町田浦米原用地測量業務現況平面図1,000分の図」を使用した。工事予定中央線のSTA.31300とSTA.31500を通る線を基軸のMラインとして5m方眼を設定した。この方眼は北西端交点のアルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称し(例: STA.314はM17またはM-17)、さらに必要に応じて2.5m方眼に4分割し小発掘区とした。小発掘区は北西端から反時計回りにa、b、c、dと呼ぶ(例: M17aまたはM-17-a)。

平面直角座標系第Ⅻ系の各座標は以下の通り。

STA.31300 (調査区杭名M-1) X=-160563.2286 Y=-21287.9383

STA.31400 (調査区杭名M-17) X=-160647.7784 Y=-21234.5404

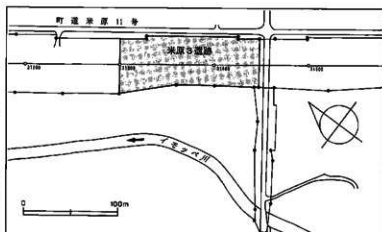
STA.31500 X=-160732.3282 Y=-21101.1425

## 3 調査の方法

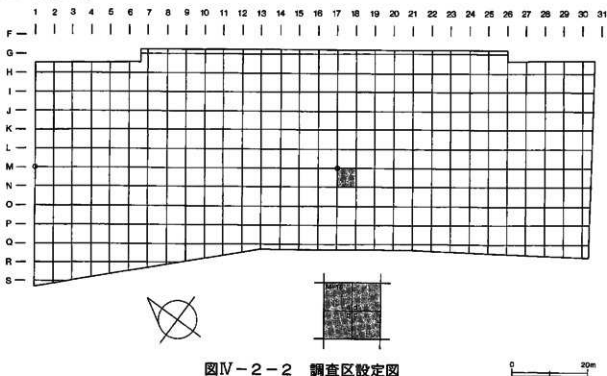
調査範囲は舌状台地とその両側の沢部分である。道路工事の工程、掘り上げた土の搬出などの諸条件を考慮して、急斜面とそれに続く沢部分(遺構確認調査部分)から調査を行った。

### 遺構確認調査

Ⅲ～Ⅴ層中の遺物の有無を確認しながらⅥ層土を薄く残して重機により除去した。最終面であるⅦ層上面までは人力により遺構の有無を確認した。



図Ⅳ-2-1 調査区周辺の現況図



図Ⅳ-2-2 調査区設定図



### 包含層調査

遺構確認調査の過程で本来的な遺物包含層であるV層および漸移層であるVI層が試掘資料よりも大幅に厚いことが判明した。そのため、発掘調査部分については、地形から最も遺構・遺物の分布が濃いと考えられ、かつ、以後の調査の際に排土場への経路が分断されない丘陵の尾根部分および南側斜面部分から調査を行った。結果的には、この部分に遺構・遺物が集中していた。Ⅲ～VI層の各層は調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、必要に応じてスコップ、ジョレン、移植ゴテ、三角ホー、竹ベラなどを用いた人力による手掘り作業により掘り下げた。本来的な遺物包含層であるV層については細かく分層して調査を行った。

### 遺構の調査

包含層調査時に落ち込みが確認された遺構については、その平面形長軸と短軸に土層観察用のベルトを残して掘り下げた。想定される床面等の検出は、土層観察用のベルトに接してサブレンチを掘るなどして慎重に行った。

### 遺物の取り上げ

包含層の遺物は、位置や層位を記録し小発掘区ごとに取り上げた。遺構の遺物は実測図により位置、層位、標高を記録して取り上げた。出土状況に応じて、写真や出土状況図など詳細な記録化に努めた。微細遺物の密集部分では、水洗いによって取り上げた。

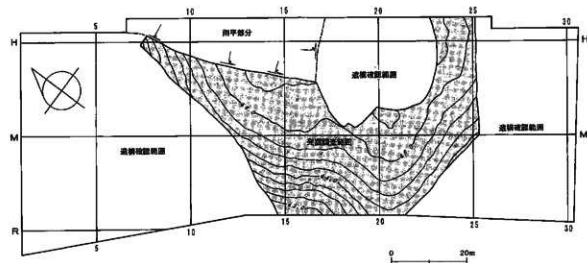
### 遺物整理の方法

野外作業と並行して現地で水洗、注記作業を行った。小片や微細なものを除く大多数の遺物には、遺跡名略号、発掘区名、層位名、遺物番号を記入した。現地では、遺物収集帳点検、補正（遺物台帳作成）、大まかな遺物の分類までを行った。冬期の室内作業で、土器の接合・復元、石器や黒曜石剥片類の接合、土器・石器の実測・製図、集計、写真撮影、記録類の整理を行った。（録田）

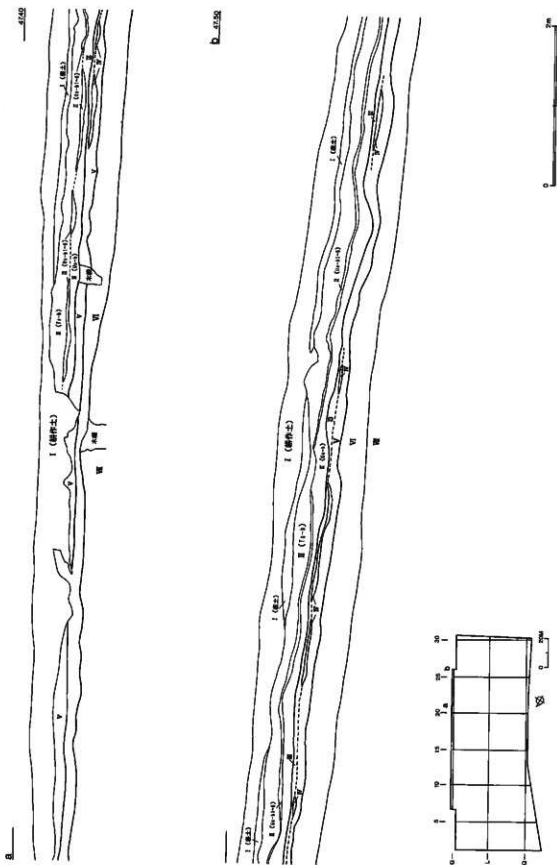
## 4 土層

米原3遺跡は台地と沢部分の比高差が約20mあり、土層の堆積状況も地形により若干の差異がある。セクション図と合わせ、以下にまとめる。

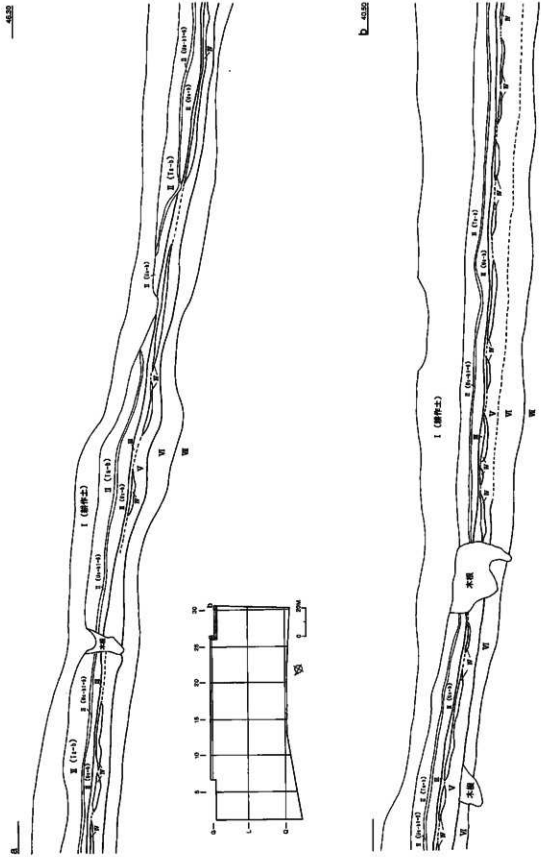
I層は、台地部分北側では町道の造成等によって削平されている。沢部分は盛土され、東西に広がる牧草地の平坦面を作り出す。また沢部分では耕作がII層の火山灰層まで及ばず、Ta-a層の上面に



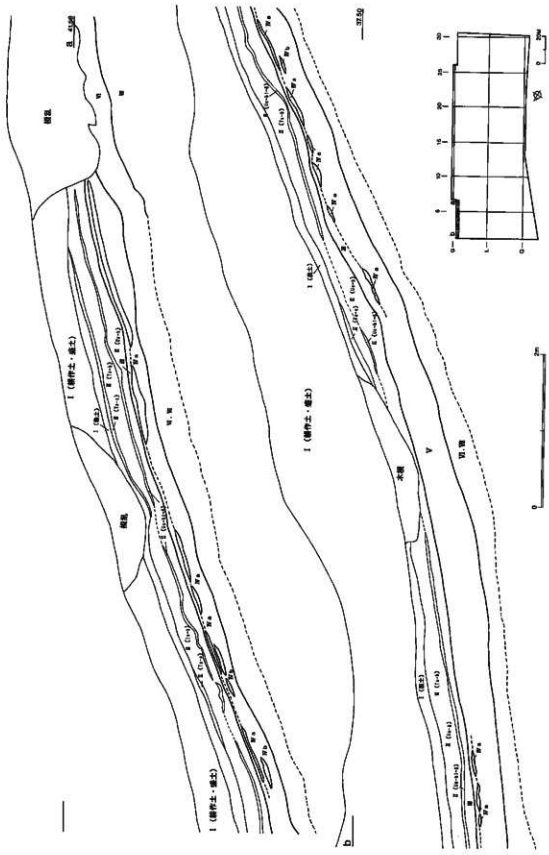
図IV-3-1 調査範囲およびⅢ層上面地形図



図IV-4-1 メインセクション (1) 台地部分



図IV-4-2 メインセクション (2) 台地～東側斜面



図IV-4-3 メインセクション (3) 西側斜面

できた黒色腐植土層がみられる。IV層は西側の斜面部分において類似した層が2枚確認され、IV a層、IV b層と区分した。IV a層は褐色の腐植土。層厚約5 cm前後。腐植と風成の二次堆積などによる層。褐色を呈している要因は不明である。この層の一部にB-Tm苦小牧火山灰（10世紀中頃降下）が検出されている。IV b層は褐色でIV a層より砂状の土。Ta-c層の可能性もあるが、調査区内では明瞭な火山灰層として見受けられない。V層は調査区東西の斜面部や南側の川に向かって低くなる所では厚くなる。VI層は調査区東西の斜面部においては以下のV層ローム質土と礫層の小円礫が二次堆積を起し、混じり合う。V層は礫層で歪円の礫を主体とする。層厚2 m以上。（補図）

## 5 遺構と遺構出土の遺物

### (1) 概要

米原3遺跡では、竪穴住居跡2軒、土壇1基、焼土12ヶ所が検出された。これらの遺構の大部分は、南西へ傾斜する舌状台地上の平坦面、標高45.5～46.0mに立地する。

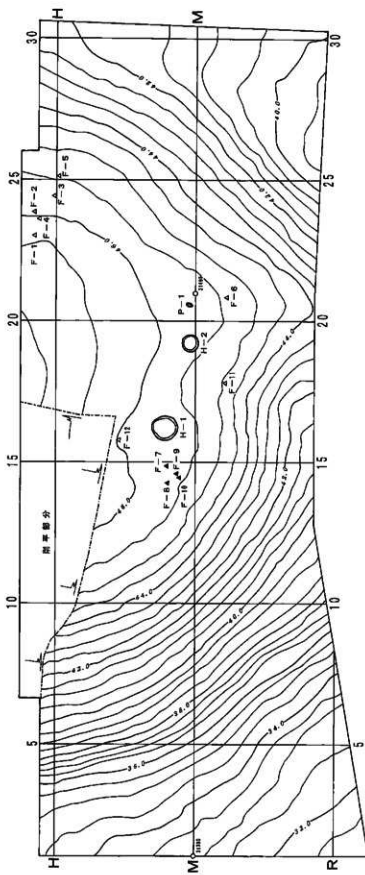
竪穴住居跡はいずれもV層中位で検出された。H-1はK-15・16～L-15・16グリッドに、H-2はL-18・19～M-19グリッドに位置する。台地先端の尾根の鞍部に小さな沢を挟み、互いに約15 m離れて存在する。どちらも平面形は円形で、床面に石囲い炉を伴う。柱穴の痕跡は確認されなかった。H-1からは北筒式、H-2からは煉瓦台式（短刻線文土器群）に相当する土器が出土しており、縄文時代中期末葉に構築されたと考えられる。H-1からは他につまみ付ナイフ、Uフレイク、石斧、たたき石、すり石、台石など合計417点の遺物が出土した。H-2からは他に石斧片、たたき石、台石など合計18点の遺物が出土した。

土壇(P-1)はV層中位より検出された。L20グリッドに位置し、H-2に近い。覆土下位が埋め戻されていることから、墓の可能性もある。遺物は出土していないが、検出面や住居跡との位置関係などから、縄文時代中期末葉の所産と考えた。

焼土は、F-1～6、11、12がV層下位～VI層上面で、F-7～10がV層中位で検出された。F-1～5は、南東側の緩斜面を望む台地上、G-22～25グリッド付近に集中する。中茶路式の土器片、石

表IV-5-1 検出遺構一覧

遺構名	遺構種類	発掘区	検出層位	規 模 (m)	長軸方位	時 期
H-1	竪穴式住居	K15c、K16a～c L15d、L16a～d	V層中位	4.63×4.23/4.22×3.68/0.58	N-56°-E	縄文時代中期末葉
H-2	竪穴式住居	L18c、L19a～b M19a	V層中位	3.02×2.81/2.57×2.18/0.54	N-5°-W	縄文時代中期末葉
P-1	土 壇	L20c	V層中位	0.83×0.65/0.85×0.70/0.57	N-89°-E	縄文時代中期末葉
F-1	焼 土	G22d、G23a	V層下位	1.53×1.09/0.12	N-30°-W	縄文時代早期後半
F-2	焼 土	G23d	V層下位	0.85×0.68/0.18	N-60°-W	縄文時代早期後半
F-3	焼 土	G24b、H24a	V層下位	1.15×0.51/0.11	N-50°-E	縄文時代早期後半
F-4	焼 土	G23d	VI層上面	0.45×0.38/0.12	N-31°-W	縄文時代早期後半
F-5	焼 土	G25b、H25a	VI層上面	0.66×0.42/0.06	N-57°-E	縄文時代早期後半
F-6	焼 土	N20d	V層下位	0.75×0.49/0.06	N-6°-E	縄文時代早期後半
F-7	焼 土	K14c、L14d	V層中位	0.48×0.40/0.09	N-15°-W	縄文時代中期末葉
F-8	焼 土	K14b、L14a	V層中位	0.83×0.54/0.16	N-9°-E	縄文時代中期末葉
F-9	焼 土	L14a～d	V層中位	0.66×0.63/0.08	N-67°-E	縄文時代中期末葉
F-10	焼 土	L14a～b～d	V層中位	1.35×0.82/0.13	N-75°-W	縄文時代中期末葉
F-11	焼 土	M17c、N17d	V層下位	0.73×0.58/0.12	N-48°-W	縄文時代早期後半
F-12	焼 土	J15d	VI層上面	0.77×0.59/0.11	N-59°-E	縄文時代早期後半



- △ 縄文時代前期後半の遺土
- ▲ 縄文時代中期前半の遺土

図IV-5-1 遺構位置図

斧などが周囲から出土した。F-7~10はH-1の西側、K・L-14グリッドにまどまる。H-1に近接し、同一平面で検出されたことから、関連する遺構の可能性はある。遺物を伴うものはF-11のみであるが（フレイク2点）、検出層位および周辺より出土した遺物などから、前者は縄文時代早期後半、後者は同中期末葉に形成されたものと考えた。

## (2) 住居跡

H-1 (図IV-5-2~4/表IV-5-1~3/図版5・6・13)

位置: K15c、K16a~c、L15d、L16a・d 規模: 4.63×4.23/4.22×3.68/0.58m

特徴: 南西へ突き出した舌状台地上の平坦面、標高45.9~46.1mに立地する。

Ⅲ層上面で地形が凹んでいるのを確認し、遺構の存在を予想した。遺構の範囲と掘り込み面を明確にするため、少しづつ上部の包含層を平面的に掘り下げていった。Ⅴ層中位で掘り上げ土と考えられる褐色土が環状に分布しているのが認められ、この段階で竪穴住居跡など大型の遺構を想定した。

掘り上げ土の分布の内側で、最も凹んでいる箇所を中心に十字ベルトを設定した。ベルトに沿ってトレンチ調査を実施したところ、固くしまった床面と掘り込まれた壁を確認した。さらに、床面に焼土を検出したことから、この遺構を竪穴住居跡と判断した。

平面はほぼ円形である。壁はやや傾斜して掘り込まれている。壁面の上部は本根などによる攪乱のため脆弱である。床面はほぼ平坦であるが、中心へ向かって若干傾斜する。床面の一部に古い時期の風倒木痕が認められた。

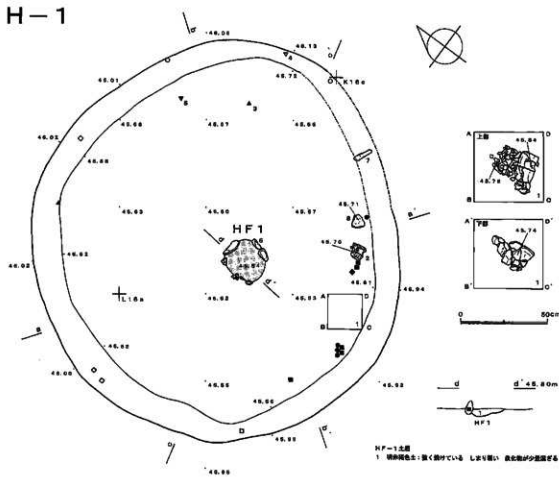
覆土の上部(1・2層)は、基本土層のⅣ・Ⅴ層に相当する落ち込みである。3層は腐植土とローム質土の混合で、上層構造を覆っていたものが住居の腐絶直後に崩落したのと考えた。4層は褐色土で、掘り上げ土が住居内部に流れ込んだ可能性がある。

床面より石囲い炉が検出された(HF-1)。中央からやや南側にずれて位置する。全部で18点の礫・礫片が炉石に用いられている。石材は泥岩、流紋岩が多い。1点だけ安山岩製のたたき石(6)が炉石として再利用されている。これらの炉石の配列は部分的に欠けており連続しないが、焼土の平面形から円形を呈していたと考えられる。炉石が途切れ、大きく空いている南側が、空気を取り込み口だったのであろう。また、遺構の内部・外部ともに柱穴は検出されなかった。

表IV-5-2 H-1出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数	
覆土3層	土器	Ⅲ群b-3類	359点	HF-1	すり石		1点	
	剥片	フレイク	1点		台石		1点	
	礫・礫片	礫	1点		剥片	フレイク	5点	
		礫片	1点		礫・礫片	礫	2点	
		計	362点		礫片	礫片	1点	
覆土4層	土器	Ⅰ群b-3類	1点	HF-1	礫石器	たたき石	1点	
		Ⅲ群b-3類	1点			礫・礫片	礫	6点
	礫石器	石斧	1点			礫片	礫片	11点
	礫・礫片	礫	1点			計	18点	
		計	4点			掘り上げ土	礫・礫片	礫片
床面	土器	Ⅲ群b-3類	10点	攪乱	土器	Ⅲ群b類	4点	
		Ⅲ群b類	4点			Ⅲ群b類	4点	
	剥片石器	つまみ付きナイフ	1点			計	4点	
		Uフレイク	1点			合	計	417点
	礫石器	石斧	1点					

H-1



HF-1土層  
1 境界線色土: 狭く掘けている。しまり強い。遺物層が浅層に広がる

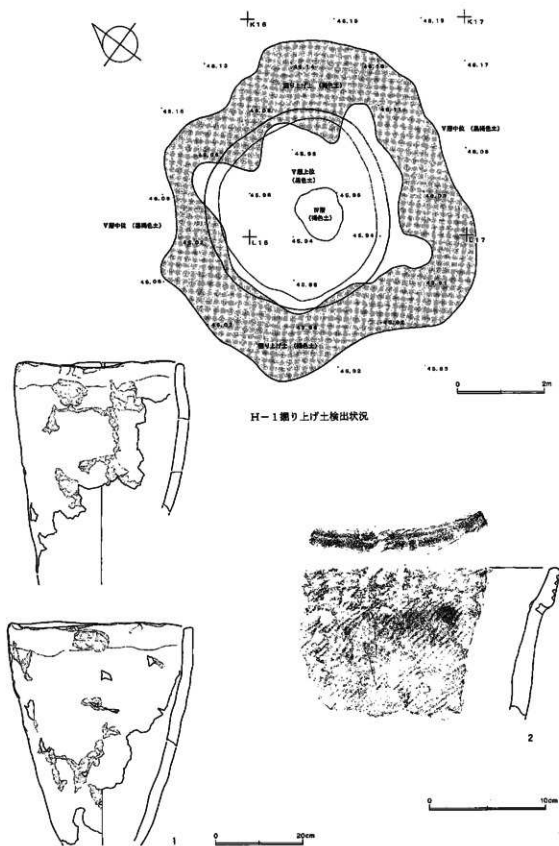


H-1土層  
1 石灰白粉層土: 遺物土層の下部に発達。別に高層土が露出する。中々地盤がある  
2 褐色土: 遺物土層のV層に発達。腐植土。中やし葉っている  
3 腐植層土: 腐植土とローム層土が厚くあり。腐植が強く、しまっている  
4 褐色土: ローム層土を上部の褐色土とし、中層の褐色土。盛り上げ土の下部に発達する。盛り上げ土: ローム層土を上部とする。地盤はゆるい。しまり強い。

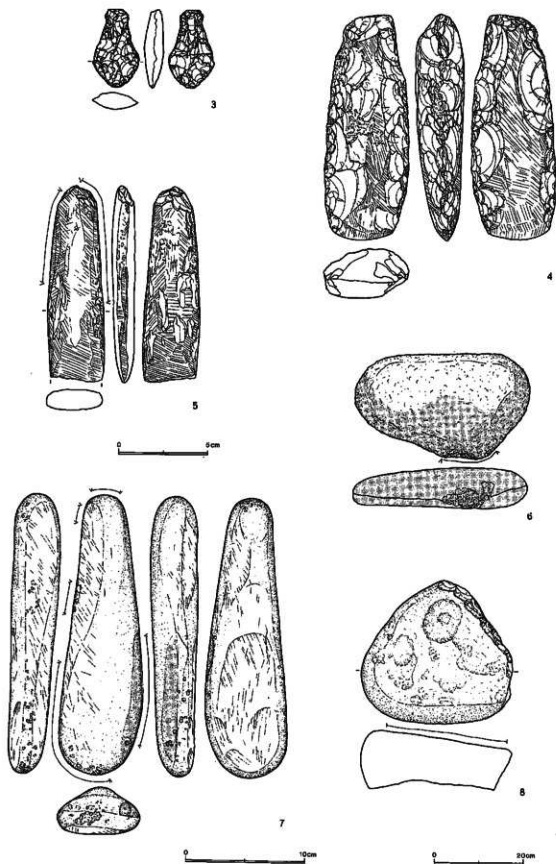


図IV-5-2 H-1





図IV-5-3 H-1と遺物(1)



図IV-5-4 H-1の遺物(2)

遺物：合計で417点の遺物が出土した。覆土1・2層から出土した遺物は後世の流れ込みによるもので、遺構に伴わないと見なし、包含層（Ⅳ・Ⅴ層）扱いとした。覆土3・4層の遺物は廃棄直後に流入したもので、住居の営まれた時期と大差がないと考えた。よって、覆土3・4層および床面で出土したものは、基本的にこの住居に伴う遺物と判断し、位置を記録した。

覆土3層からは、南側の壁際で、Ⅲ群b-3類に相当する無文の土器がほぼ一個体分、押しつぶされた状態で出土した（1）。覆土4層からは、東側の壁面で立て掛けられたような状態で石斧が出土している（4）。床面からⅢ群b-3類の北筒式の土器片（2）が出土しており、遺構の時期を縄文時代中期末葉と判断した。他に床面からは、つまみ付ナイフ（3）、Uフレイク、石斧（5）、すり石（7）、台石（8）などが出土している。Uフレイクは黒曜石製で、原材産地分析と水和層年代の同定を依頼したところ、赤井川産で、 $4,942 \pm 24B.P.$ という結果が得られた（Ⅷ章第1節参照）。この年代は床面出土の北筒式土器の編年による時期、すなわち縄文時代中期末葉よりかなり古いと思われる。このUフレイクは床面より出土したが、攪乱などによって混入した遺物である可能性が高い。すり石と台石は炉（HF-1）からやや離れて、東側の壁近くで出土している。

1は口径21.0cm、残存器高25.7cmを計るいびつな無文の土器である。口縁は波うち、口唇には指頭による調整痕が認められる。器壁には凹凸があり、器面・内面とも指頭により粗雑にまで調整される。胎土に微量の黄白色粒と砂粒を含み、焼成温度は低く粉っぽい感じである。2は口縁の肥厚帯に半載竹管による右方向からの押引文が2列施され、肥厚帯直下には竹管状工具によるやや下方向からの刺突文が廻らされる。地文はL R斜行縄文である。3はつまみ付ナイフ。つまみ部が大きく、刃部は菱形である。両面に調整が施される。付近のJ-15・K-14グリッドからは、同型のものが出土している（図Ⅳ-6-19-35~38）。石材は黒曜石である。4、5は石斧。4は研磨面を残すが、基部に打ち欠きによる再加工が見られる。刃部は弧状で、摩耗している。5は両面が研磨されているが、刃部を欠損している。石材は4が泥岩、5が片岩である。6はたたき石。三角形の偏平礫の端部に敲打痕が見られる。HF-1の炉石として再利用され、裏面が被熱により脆くなっている。石材は安山岩である。7はすり石。乳棒形の礫を素材とし、主に腹面と側面に捺痕が見られる。下端が被熱によって赤色に変化している。石材は泥岩である。8は台石。上面が平坦に敲打整形された後、軽く擦られている。石材は凝岩である。

時期：床面出土の遺物より、縄文時代中期末葉、北筒式期の遺構である。

表Ⅳ-5-3 H-1掲載遺物一覧  
(土器)

番号	分類	遺物番号	層位	点数	接合・同一個体など[出土地点・遺物番号/層位(点数)] (前項と同じ部分は省略)	備考
1	Ⅲ b-3	13	覆土3層	69	H-1-13/覆土3層(200).同14/同(58) 計359点	無文
		14	覆土3層	32		
2	Ⅲ b-3	15	床面	9		押引文

(石器)

番号	分類	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
3	つまみ付ナイフ	2	床面	4.41×2.64×1.07	9.80	黒曜石	
4	斧	9	覆土4層	12.68×4.75×2.75	231.4	泥岩	
5	斧	5	床面	(11.03)×3.15×1.27	(80.8)	片岩	欠損品
6	たたき石	24	HF1	14.55×8.90×3.42	635.6	安山岩	被熱 炉石として再利用
7	すり石	17	床面	23.40×6.80×4.00	880.0	泥岩	被熱
8	台石	16	床面	16.10×17.10×6.80	2320.0	凝岩	

H-2 (図IV-5-5・6/表IV-5-1・4・5/図版7・8・14)

位置: L18c、L19a・b、M19a 規模: 3.02×2.81/2.57×2.18/0.54m

特徴: 南西へ突き出した舌状台地の平坦面、標高45.9~46.1mに立地する。

V層中位の調査中、掘り上げ土と考えられる褐色土が、途切れながら環状に分布しているのを検出した。この段階で竪穴住居跡など大型の遺構が存在すると考えた。

掘り上げ土の分布から遺構の規模と中心を予想し、十字ベルトを設定した。ベルトに沿ってトレンチ調査を実施したところ、V層土が大きくレンズ状に落ち込んでいた。さらに、固くしまった床面と掘り込まれた壁が認められ、床面に焼土を検出したことから、この遺構を住居跡と判断した。

平面は円形である。壁は若干傾斜して掘り込まれている。床面は平坦であるが、北東側が少し低い。

覆土の1~3層は、基本土層のⅢ~V層に相当する落ち込みである。4層は褐色土で、掘り上げ土が住居内部に流れ込んだものと推測した。5層は腐植土とローム質土の混合で、H-1と同様に、上層構造を覆っていたものが住居の廃絶直後に崩落したものと考えた。

床面より石囲い炉が検出された(HF-1)。床面のほぼ中央に位置する。炉石は全部で8点である。石材は砂岩、流紋岩が多い。安山岩製のたたき石(2)、凝灰岩製の台石(3)が炉石として再利用されている。これらの炉石は方形に「コ」の字を描くように並んでいる。北側が大きく空いており、こちらが空気を取り込み口であろう。ちょうどH-1の炉跡と向かい合うように、住居の間の小さな沢の方へ向いている。焼土中より石斧片が1点出土した。HF-1の南側で小ピットが1基検出された(HP-1)。平面は長楕円形で、断面は袋状になっている。板状のものが差し込まれていたと推測されるが、柱穴としてはやや細身で弱い。よって、柱穴ではなく、HF-1に付随する何らかの施設と考える。また、遺構の内部・外部ともに明確な柱穴は検出されなかった。

遺物: 合計で18点の遺物が出土した。H-1と同様の理由で覆土1~3層から出土した遺物は包含層(Ⅲ~V層)扱いとした。覆土4・5層から遺物は出土しなかった。床面の遺物は、すべて南東側で出土している。HF-1のすぐ東側でⅢ群b-3類、煉瓦台式(短刻線文土器群)に相当する土器片が、内側を上にして出土した(1)。他に床面からは、石斧片、台石(4)、礫片などが出土している。

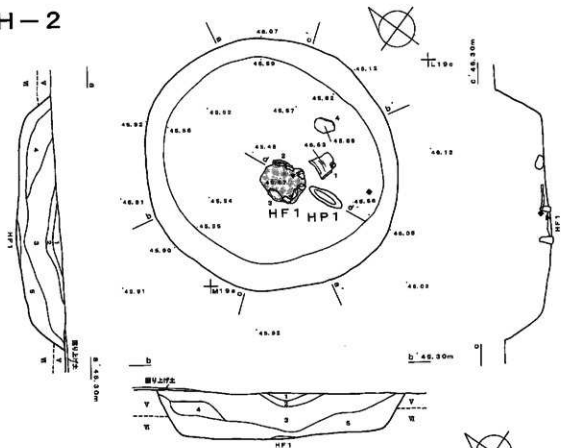
1は床面から出土した煉瓦台式に相当する土器である。LR斜行縄文を施した器面に低平な貼付帯をつけ、貼付帯にRLの縄文を施している。胎土に黒色鉱物、砂粒、微量の小礫を含む。2はたたき石。偏平礫の側縁を敲打している。炉石として再利用され、被熱している。石材は安山岩である。3、4は台石。3は方形礫を素材とし、上面に敲打痕が見られるもの。2と同様に炉石に用いられているが、出土状況から台石としての機能が複合していた可能性がある。石材は凝灰岩である。4は破損品。上面に敲打痕と擦痕が見られる。被熱している。石材は安山岩である。

時期: 床面出土の遺物より、縄文時代中期末葉、煉瓦台式期の遺構である。

表IV-5-4 H-2出土遺物一覧

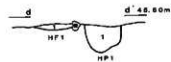
層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数
床面	土器	Ⅲ群b-3類	6点		たたき石		1点
	礫石器	石斧片	1点		台石		1点
		台石	1点		礫・礫片	礫	
	礫・礫片	礫片	1点			礫片	
		計			7点	計	
HF-1	礫石器	石斧片	1点	合計		18点	

H-2



H-2土層

- 1 赤色土：基本土層の厚層に相当 腐植土
- 2 白土(腐植土)：基本土層の厚層に相当 腐植に赤色土が混ざる 中中粒粒がある
- 3 赤色土：基本土層のV層に相当 腐植土 中中粒粒がある
- 4 腐植土：ローム層土層の穴状土 しまり強い 掘り上げ土の穴内のみか
- 5 腐植土：腐植土とローム層土が混ざり合う 粒が細く、しまっている
- 掘り上げ土：腐植土：ローム層土を穴状とする 腐植土があるが、しまり強い



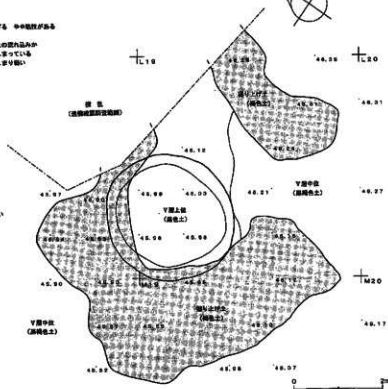
HF-1土層

- 1 腐植土：腐植土の粒子が見られる 炭化物が少量混ざる

HP-1土層

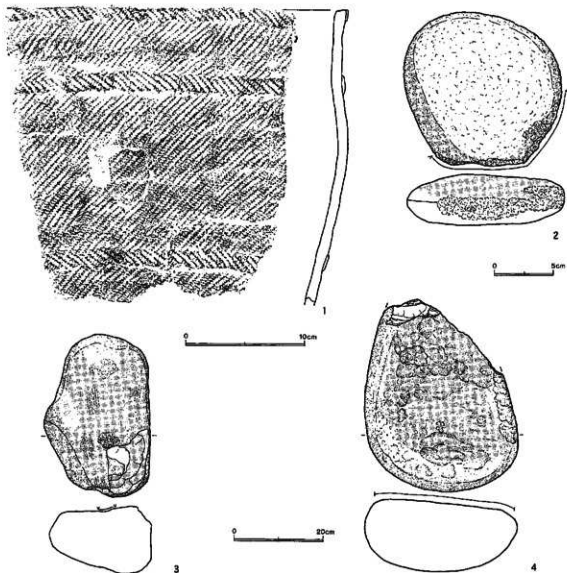
- 1 腐植土：腐植土とローム層土が少量混ざる、しまり強い

0 3m



H-2掘り上げ土検出状況

図IV-5-5 H-2



図IV-5-6 H-2出土の遺物

表IV-5-5 H-2掲載遺物一覧

(土器)					接合・同一個体など[出土地点・遺物番号/層位(点数)] (前項と同じ部分は省略)	備考	
番号	分類	遺物番号	層位	点数			
1	Ⅲb-3	2	床面	6	L14c・9/VF(1), 同d・15/V中(1), M18d・2/同(1), M19a・1/V上(4), 同a・2/V中(1), 同a・3/同(1), 同c・1/V下(1), N17・c1/V中(1), P20a・2/同(1) 計19点	貼付帯	
(石器)							
番号	分類	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
2	たたき石	13	HF1	13.40×13.20×4.30	1205.0	安山岩	被熱 炉石として再利用
3	台石	7	HF1	18.30×12.10×7.60	2275.0	凝灰岩	被熱 炉石として再利用
4	台石	3	床面	(21.70)×17.30×8.20	(4870.0)	安山岩	破損品 被熱

## (3) 土壇

P-1 (図IV-5-7/表IV-5-1/図版8)

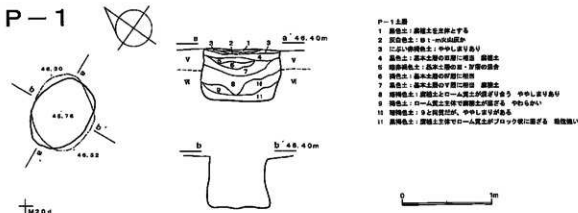
位置: L20c 規模: 0.83×0.65/0.85×0.70/0.57m

特徴: 舌状台地の尾根上に立地する。V層中位で、にぶい赤褐色土が環状に落ち込んでいるのを検出した。平面は楕円形で、断面はフラスコ状に近く、墳底部でオーバーハングする。覆土の上位は自然堆積で、基本土層のⅢ～Ⅴ層に相当する。下位は腐植土とローム質土の混合で埋め戻しによるものと考えられる。墳底面の直上は粘性の強い黒色土である。形状や覆土の様子から墓の可能性がある。

遺物: 出土していない。

時期: 検出層位と周辺の遺構などから、縄文時代中期末葉の遺構である。

(芝田)



図IV-5-7 P-1

## (4) 焼土

1) 縄文時代早期後半の焼土 (図IV-5-8・9/表IV-5-1・6/図版9・14)

F-1 位置: G22d, G23a 規模: 1.53×1.09/0.12m

F-2 位置: G23d 規模: 0.85×0.68/0.18m

F-3 位置: G24b, H24a 規模: 1.15×0.51/0.11m

F-4 位置: G23d 規模: 0.45×0.38/0.12m

F-5 位置: G25b, H25a 規模: 0.66×0.42/0.12m

F-6 位置: N20d 規模: 0.75×0.49/0.06m

F-11 位置: M17c, N17d 規模: 0.73×0.58/0.12m

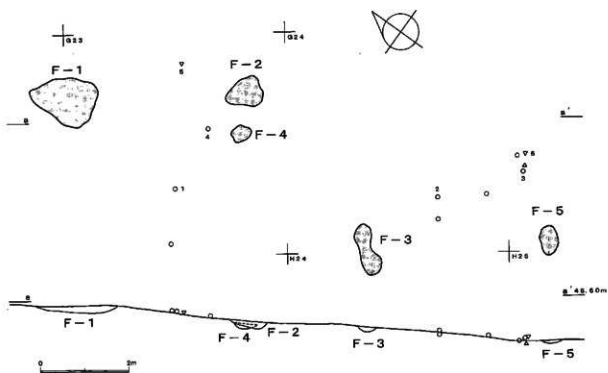
F-12 位置: J15d 規模: 0.77×0.59/0.11m

特徴: V層下位からVI層上面にかけての調査中、南東側の比較的平坦なところで、不明瞭な褐色土と微細な炭化物の広がりを確認した。これを仮にF-1とし、周辺の精査と掘り下げを行った。その結果、微細な炭化物や炭化木片を伴う褐色土を4カ所(F-2～5)検出した。また、やや離れた南西側の尾根上や北東側の台地上でも、同様の褐色土を3カ所(F-6・11・12)検出した。半截の結果、熱を受け褐色化した部分のみられたことから、焼土と判断した。これらの焼土は未だ黒色腐植土の発達が進んでいない頃のもので、縄文時代中期末葉の遺構、遺物の検出面より低い位置で確認された。

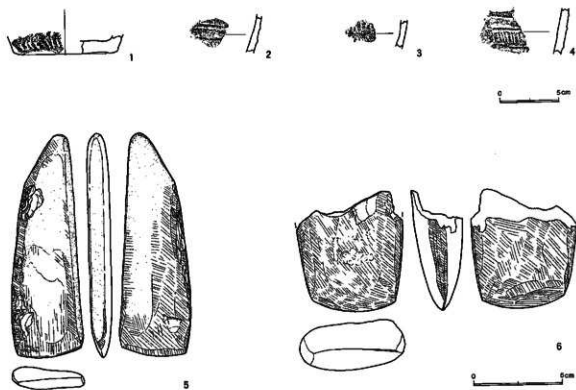
遺物: F-1～5周辺から縄文時代早期後半の土器片、石器類が出土した。1～4は中茶路式に相当する土器。1は短縄文のある底部、2・4は貼付帯と短縄文のある胴部、3は短縄文のある胴部破片である。5、6は石斧。5は素材礫の形状をあまり変えないで、刃部を設けている。研磨は弱く、礫面





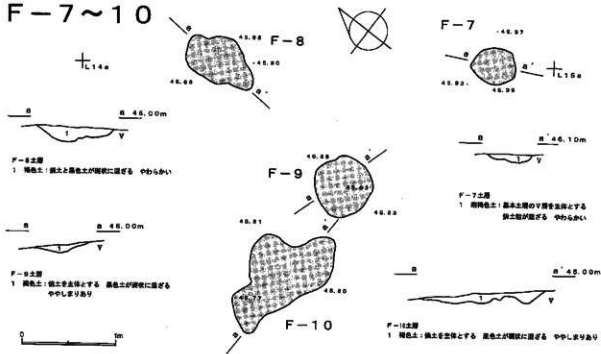


遺物出土位置図



図IV-5-9 F-1~5周辺の遺物

# F-7~10



図IV-5-10 F-7~10

が一部に残る。6は刃部の破片。全面が強く研磨されている。石材は5が珪質頁岩、6が泥岩である。他にF-11からフレイクが2点出土している。

時期: 検出面、周辺の遺物などから、縄文時代早期後半の遺構と考えられる。

## 2) 縄文時代中期末葉の焼土 (図IV-5-10/表IV-5-1/図版9)

F-7 位置: K14c、L14d 規模: 0.48×0.40/0.09m

F-8 位置: K14b、L14a 規模: 0.83×0.54/0.16m

F-9 位置: L14a・d 規模: 0.66×0.63/0.08m

F-10 位置: L14a・b・d 規模: 1.35×0.82/0.13m

特徴: H-1の北側のV層中位を掘り下げているところ、褐色土の広がりを4ヶ所確認した。焼土であることが想定されたため半載したところ、熱を受け褐色化した土層断面を確認し焼土と判断した。

遺物: 出土していない。

時期: 検出面と周辺の遺構などから、縄文時代中期末葉の遺構と考えられる。 (袖岡)

表IV-5-6 焼土掲載遺物一覧

番号	分類	趾形・測線	層位	点数	接合・同一個体など[出土地点・遺物番号/層位(点数)] (前項と同一部分は省略)	備考
1	I b-3	G23b-1	V層	1		短縄文
2	I b-3	G24c-3	V層	1		貼付帯、短縄文
3	I b-3	G25b-1	V層	1		短縄文
4	I b-3	G23d-1	V層	1		貼付帯、短縄文

(石器)

番号	分類	趾形・測線	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考	
5	石	斧	G23d-1	V層	12.64×3.96×1.20	91.7	珪質頁岩	
6	石	斧	G25b-1	V層	(6.85)×(5.98)×(2.85)	(135.1)	泥岩	刃部のみ

## 6 包含層の遺物

## (1) 土器

尾根部分と北西側斜面を中心に9,079点出土した。量的には縄文時代中期と早期を中心に、前期、後期、晩期および統縄文時代の順である。なお、図では同一個体にアルファベット小文字で枝番を付している。

## 縄文時代早期の土器 (図IV-6-7・8/表VI-6-2・3/図版15・16)

縄文時代早期の土器は1,459点(16.1%)出土した。早期の土器のうち、I群b-1類が749点(51.3%)、I群b-2類が463点(31.7%)で、両者が83%を占める。分布域も尾根部分、北西側斜面、南西側斜面とおおむね重複している。I群b-3類は北西側、南西側、南東側斜面で散発的に93点(6.4%)出土しており、南西側と南東側斜面で出土したものは焼土に関連すると考えられる。I群b-4類は尾根部分を中心に73点(5.0%)出土している。

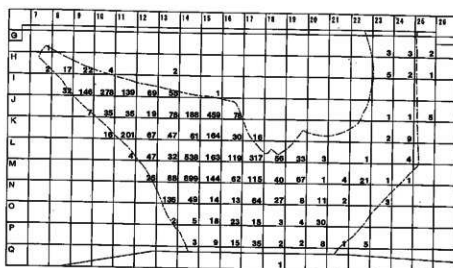
I群b-1類: 1~8は、縄の側面圧痕、絡糸体圧痕文、組紐圧痕文、断面三角形を呈する太めの貼付帯、などの複合施文を特徴とする土器で東銅路Ⅲ式に相当する。側面圧痕をもつもの(1~3)、組紐圧痕文や貼付帯をもつもの(4~8)に分けられる。内面調整は指頭による横なでである。胎土には微量の淡黄白色粒や小礫を含む。5・6・8は黒色鉱物を含む。

1~3は口唇の断面は外側に張り出し、口縁に縄の側面圧痕が施される。1は口唇が縄で刻まれ、器面に側面圧痕と短縄文、太さ15mmの縄を丸軸に巻いた幅6mmの絡糸体圧痕文、RL斜行縄文が施される。張り出した底部には短縄文が施される。2と3の口唇には縄の圧痕が認められる。

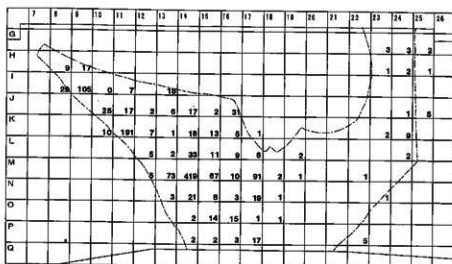
4~7は3本の縄による平組紐の圧痕が施される。組紐の幅は4~6が5~7mm、7は3mmである。4~6は組紐圧痕文と貼付帯をもつ。貼付帯は太く、断面は三角形である。4は組紐圧痕文と短縄文が施される。組紐圧痕5~6本おきに短縄文が1列施されるものとみられる。幅7~9mmの3本単位の垂下する貼付帯と、幅5~6mmの2本単位の横環する貼付帯が組み合わされる。垂下する貼付帯は表IV-6-1 層別別出土土器一覽

分類	層位								計
	III層	IV層	V層				VI層	表採・焼土	
			上位	中位	下位	V層			
I b	1	0	9	39	26	1	5	0	81
I b-1	12	9	24	196	241	1	265	1	749
I b-2	2	2	29	93	208	0	128	1	463
I b-3	1	5	19	9	38	7	14	0	93
I b-4	0	1	0	26	34	1	11	0	73
I群計	16	17	81	363	547	10	423	2	1459
II a	0	0	7	0	13	0	0	0	20
II b	8	16	77	406	200	7	7	0	721
II群計	8	16	84	406	213	7	7	0	741
III a	3	0	8	142	391	0	1	0	545
III b	5	2	11	55	28	2	4	0	107
III b-2	0	0	0	96	62	0	0	0	158
III b-3	31	49	145	924	707	2	70	2	1930
III群計	39	51	164	1217	1188	4	75	2	2740
IV a	10	2	38	146	308	1	5	0	510
V c	0	1	2	2	109	0	5	0	119
VI	4	1	6	10	0	0	0	0	21
不明	3	3	0	1	1	0	0	0	8
計	127	158	623	3768	3767	33	597	6	9079

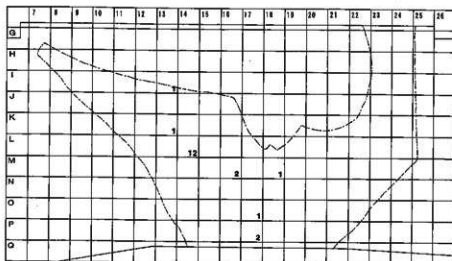
土器全体



I 群 b 類

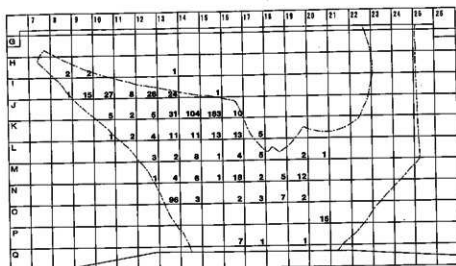


II 群 a 類

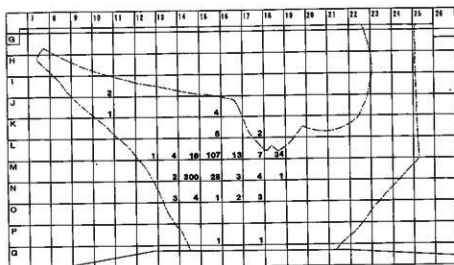


图IV-6-1 包含層出土土器分布图 (1)

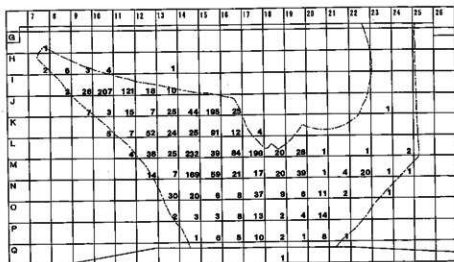
## II群b類



## III群a類

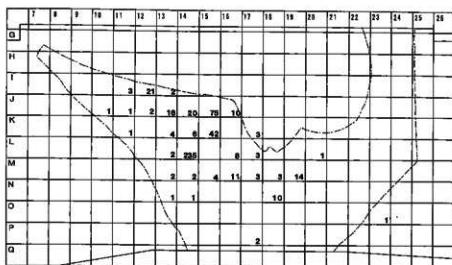


## III群b類

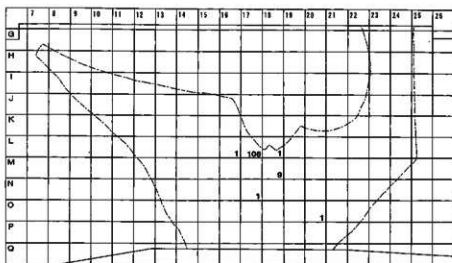


圖IV-6-2 包含層出土土器分布圖(2)

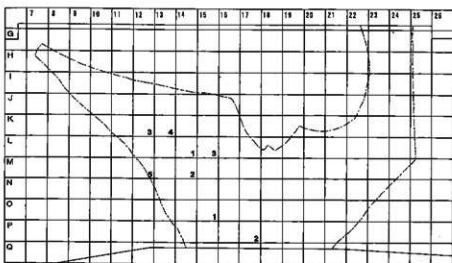
IV群 a類



V群 c類

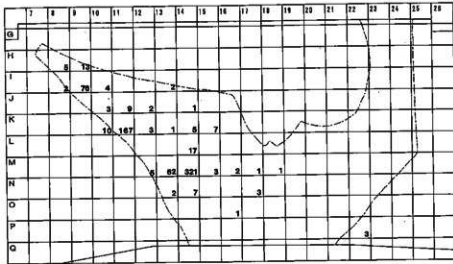


VI 群

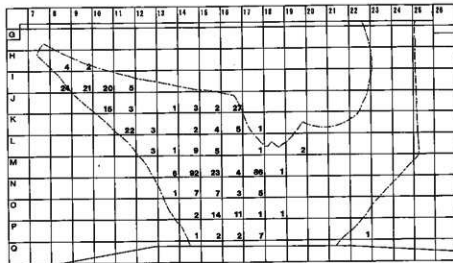


图IV-6-3 包含層出土土器分布图 (3)

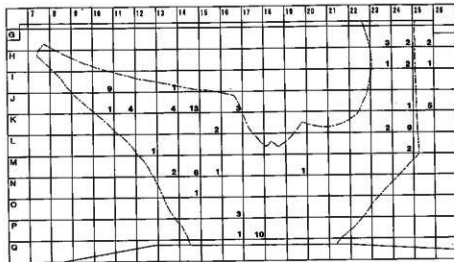
I 群 b-1 類



I 群 b-2 類

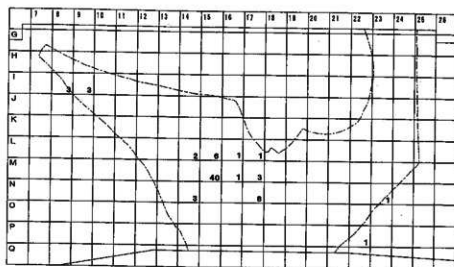


I 群 b-3 類

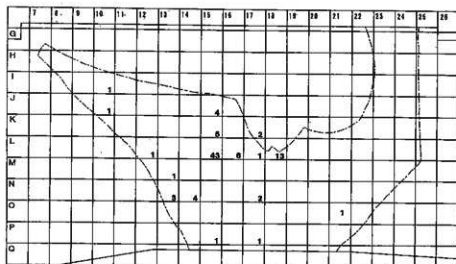


図IV-6-4 包含層出土土器分布図(4)

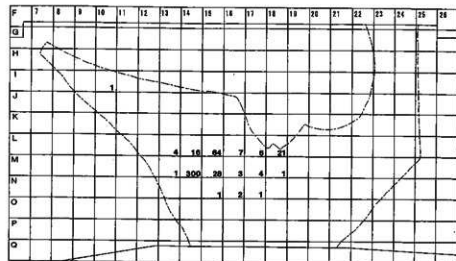
I群 b-4類



Ⅲ群 a類  
(円筒土器  
上層式)



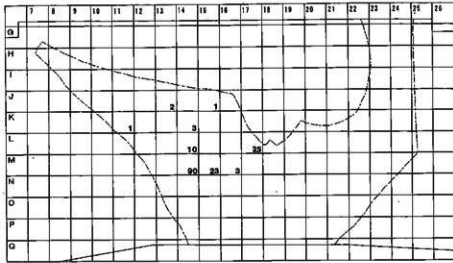
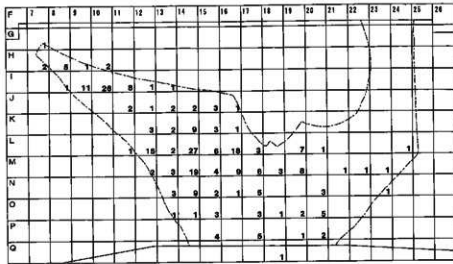
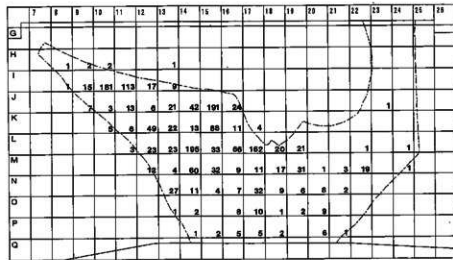
Ⅲ群 a類  
(萩ヶ岡1式)



図IV-6-5 包含層出土土器分布図 (5)



Ⅲ群b-2類

Ⅲ群b-3類  
(短刻線文  
土器群)Ⅲ群b-3類  
(北筒式)

圖IV-6-6 包含層出土土器分布圖(6)

棒状工具により刻まれ、貼付帯の間には縦位の組紐圧痕文がある。横環する貼付帯の上半分から器面にかけては短縄文が施される。5の垂下する幅7mmの貼付帯は指頭により刻まれ、器面には幅4～5mmの横・縦位の組紐圧痕文と短い組紐圧痕文が施される。横位の組紐圧痕の一部は貼付帯にかかっている。6は組紐圧痕文と短縄文を施した器面に幅1cmほどの横環する貼付帯がつけられている。貼付帯の上半分は縄により刻まれている。7は口縁がわずかに外反し、外傾する口唇にR Lの縄による圧痕、器面には3本の縄による幅3mmの平組紐の圧痕と、短縄文が施されている。8は太さ0.8mmの縄を丸軸に巻いた幅3mmの絡条体圧痕文を斜位に施した口縁に、断面三角形の幅6～7mmの貼付帯がつけられている。断面が外に張り出した口唇と貼付帯の上半分はRLの縄により斜めに刻まれている。

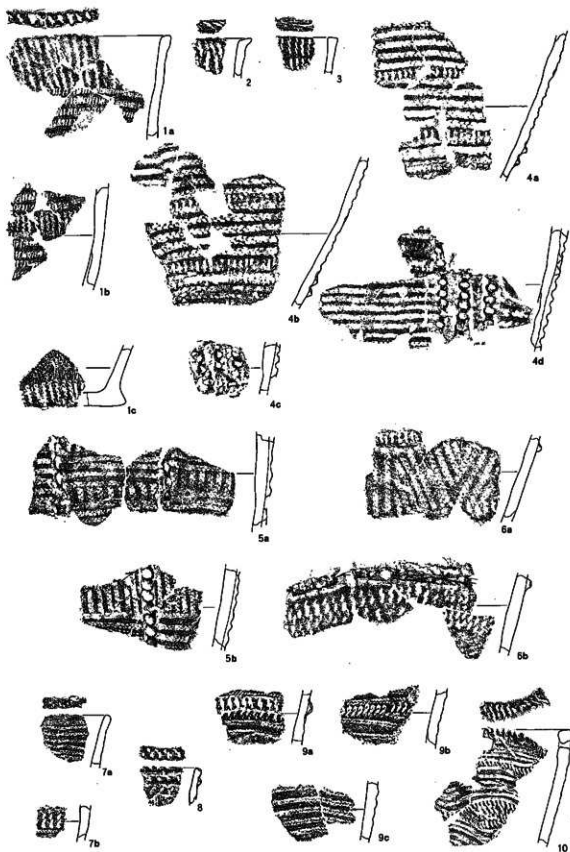
I群b-2類：9a～12は組紐圧痕文、絡条体圧痕文、縄の側面圧痕、断面半円形の貼付帯、などを特徴とする土器でコックロ式に相当する。組紐圧痕文をもつもの(9・10)と絡条体圧痕文をもつもの(11・12)がある。I群b-1類に比べ、組紐圧痕文や絡条体圧痕文の原体、貼付帯は細めである。曲線的な文様を構成するもの、横位・斜位の直線的な施文を組み合わせる文様を構成するものがある。内面は指頭による横になでにより調整されている。胎土には微量の淡白色粒を含む。9・11には小礫、10には黒色鉱物、12には砂粒も含む。

9は組紐圧痕文、短縄文、貼付帯をもつもので、3本の縄による幅4mmの平組紐の圧痕と、幅2～3mmの短縄文を施した器面に、断面半円形の幅9mmの貼付帯がつけられている。貼付帯は短縄文と同じ縄で刻まれている。10は波状口縁をもつ土器である。器面には3本の縄による幅3mmの平組紐による波状の圧痕が、その間隙と胴部よりやや厚い口唇には、幅2mmのR Lの縄による圧痕が施される。

11は絡条体圧痕文、貼付帯、ボタン状貼付、縄端刺突文をもつ。11aは幅6mmの断面半円形の貼付帯を斜位につけた器面に、太さ0.7mmの縄を角軸に巻いた幅3mmの絡条体圧痕文が横・斜位に施される。貼付帯は太さ3mmのL Rの縄により刻まれている。横位の絡条体圧痕文の上には斜位の絡条体圧痕文に重ねて、貼付帯を刻んでいる原体による縄端刺突文が施されている。11bには径1.4mmほどのボタン状貼付があり、器面には斜位の絡条体圧痕文が施される。ボタン状貼付の上の器面との目には縄端刺突がある。12a～12cは絡条体圧痕文、短縄文により横・斜位の文様を構成する。12aには太さ0.7mmの縄を角軸に巻いた幅4mmの絡条体圧痕文を、数列単位で横位に施し、それを4本単位の斜位の絡条体圧痕文により繋いでいる。これによりできた三角形あるいは菱形の空間には、幅2～3mmのR Lの縄による短縄文が充填されている。12bは数本単位の絡条体圧痕文の間に、同じ原体による長さ1.5mmの短縄文が施されている。12cは底部が張り出し、縦位に絡条体圧痕文が施される。

I群b-3類：13～16は貼付帯と短縄文を特徴とする土器で中茶路式に相当する。13は器面に横環する幅2mmの貼付帯と、幅1.5mmの短縄文が施されている。内面は平滑で横になで調整されている。胎土は粒が細かく均質で、微量の黒色鉱物を含む。14は器面には幅2～3mmの貼付帯と、幅1.5mmの微隆起線が横環する。貼付帯の間には幅1.5～2mmの短縄文が施される。内面は横になで調整されている。胎土には黒色鉱物を含む。15は幅1.5mmの貼付帯を横環させ、貼付帯の上の器面を指頭により横になで調整している。貼付帯の間には幅1.5mmの短縄文が浅く施されている。底部は直線的に立ち上がる。内面は指頭により横になで調整されている。胎土は粒が細かく均質で、微量の白色鉱物と小礫を含む。16の底部は直線的に立ち上がり、幅2～2.5mm、長さ1cmほどの短縄文、L Rの斜行縄文が施されている。胎土は粒が細かく均質で、黒色鉱物を含む。内面は指頭により斜・縦位になで調整されている。

I群b-4類：17a～19は羽状縄文を特徴とする土器で東鋼路Ⅳ式に相当する。17は口縁に幅1cmほどの篋状工具により右方向からの刺突が廻らされており体部にはR Lの縄文がある。内面は平滑で、



図IV-6-7 包含層出土の土器(1)

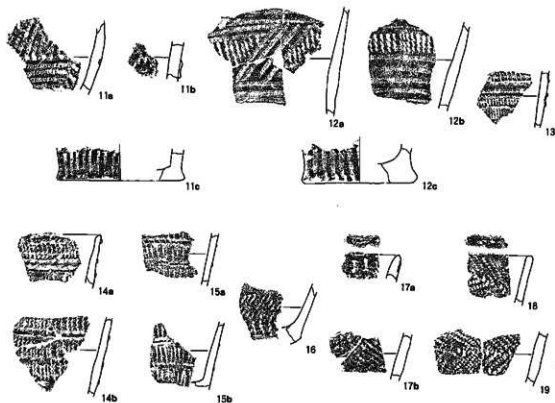
胎土には黒色鉱物と小礫を含む。18と19には第1種結束羽状縄文が認められる。いずれも内面は指頭により横になで調整されており、胎土には黒色鉱物、微量の淡黄白色粒および繊維を含む。

縄文時代前期の土器 (図Ⅳ-6-9 / 表Ⅵ-6-3 / 図版16・17)

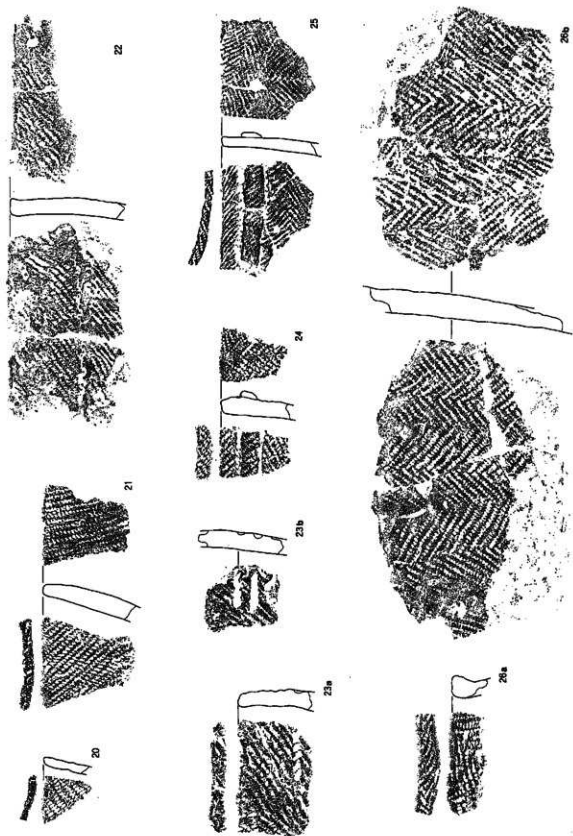
縄文時代前期の土器は尾根部分と北西および南西側斜面を中心に741点 (8.2%) 出土した。前期の土器うち721点 (97.3%) をⅡ群b類が占める。

Ⅱ群a類：糸が太めの斜行縄文を特徴とする土器で静内中野式に相当する。尾根部分と南西側斜面で20点出土した。20は幅5～6mmのLRの斜行縄文が施されている。内面には凹凸があり、指頭により横になで調整されている。胎土には小礫と繊維を含む。

Ⅱ群b類：21～26は貼付帯、縄線文、羽状縄文、繊維や小礫を含む胎土を特徴とする土器で植苗式に相当する。口縁に貼付帯のないもの (21)、縄線文をもつもの (22・23)、貼付帯をもつもの (24・25) がある。焼成は良好で堅く焼き締まる。21は器面・内面にLRの斜行縄文が施されている。口唇に同じ縄文が認められる。22は口縁がやや内傾する。口唇は平らに調整されわずかに外側に張り出す。器面にはLRの斜行縄文が施され、縄線文を1条施してそこを指頭により擦り消している。内面にもLRの斜行縄文が施されている。口縁には炭化物が付着する。いずれも胎土に多量の淡黄色粒、少量の砂粒と繊維を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。23は口縁が内傾し、口唇と器面にLRの斜行縄文が施されている。23aには縄線文、23bには縄線文と同一原体による沈線文がある。内面には凹凸があり、調整は指頭による横になである。いずれも胎土には多量の淡黄色粒、少量の砂粒と小礫および繊維を含む。24と25はRLとLRの横回転の羽状縄文を施した器面に貼付帯をつけ、そこに縄文を施している。貼付帯と器面の境目にはLRの縄の側面圧痕が認められる。内面には縦回転の羽状縄文、



図Ⅳ-6-8 包含層出土の土器 (2)



図IV-6-9 包含層出土の土器 (3)

断面が角張った口唇にも縄文が施されている。24の胎土には小礫、砂粒、繊維を、25には小礫、黒色鉱物を含む。26は口縁が内傾する。器面・内面ともLRとRLの縦回転の羽状縄文が施されている。断面が外側に張り出した口唇にも同じ縄文が施されている。胎土には小礫、砂、黒色鉱物を含む。

縄文時代中期の土器 (図Ⅳ-6-10・11/表Ⅵ-6-3~5/図版16-19)

2,740点 (30.2%) 出土した。このうち、Ⅲ群 b-3 類が1,930点 (70.4%) と中期の土器の大部分を占める。次いで、Ⅲ群 a 類が545点 (19.9%)、Ⅲ群 b-2 類が158点 (5.8%) となる。

Ⅲ群 a 類：円筒土器上層式に相当するものは尾根部分と北西側斜面、萩ヶ岡 1 式に相当するものは尾根部分に集中して出土した。Ⅲ群 a 類のうち後者が84.4%を占めている。27~31は円筒土器上層式に相当するものである。27は口縁に化粧粘土が塗られ、口唇が縄で刻まれる。地文は第 1 種結束羽状縄文である。28・29・31は貼付文をもつ。28は口縁の小突起に貼付文、口縁に沈線文が施される。29は貼付文の上から地文の R L の縄文を施す。30の口縁貼付は縄で刻まれている。31は把手状の貼付である。32~34は萩ヶ岡 1 式に相当するものである。32~34は地文に第 1 種結束羽状縄文が施されている。33は器面に垂下する貼付帯があり、貼付帯にも同じ縄文が施される。34は M14 グリッドの V 層中位~V 層下位を中心に出土した、破片点数309点を数える個体である。口縁に山形突起から垂下する貼付帯と、口縁に沿った貼付帯の交点にはボタン状の貼り付けがある。貼付帯は爪により刻まれている。35は L・M-14・15 グリッドの V 層中位~V 層下位から出土した、破片点数149点を数える個体である。口縁に山形突起、口縁に沿った貼付帯と垂下する貼付帯をもつ。垂下する貼付帯に重ねて山形に貼付帯がつけられる。貼付帯には縄による刻みや圧痕が施される。

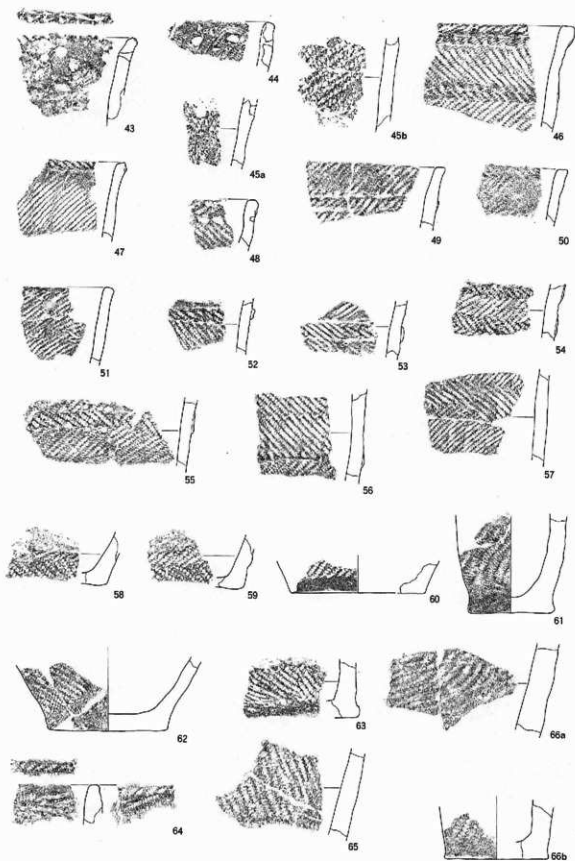
Ⅲ群 b-2 類：柏木川式に相当するものである。小片や施文が不鮮明なため掲載しえなかった。

Ⅲ群 b-3 類：北筒式に相当するもの、煉瓦台式、静弁式などいわゆる短刻線文土器群に相当するがある。分布域はほぼ重複している。後者は従来道南の土器群とされていたが、道南という地域区分よりも、冬季にあまり積雪のない渡島半島から胆振・日高の太平洋岸といった、北海道のなかでも比較的温暖な自然環境に適応した文化の土器群としてとらえることができよう。これに対して北筒式は冬季に厚い積雪で覆われる、地表面が凍結するなど寒冷な自然環境に適応した文化の土器群といえる。

36~45 b は北筒式に相当する。いずれも口縁に円形刺突文をもち、口縁に半載竹管による押引文のあるもの (36~42) と、押引文をもたないもの (43・44) がある。36~38は肥厚した口縁には半載竹管状の工具による右方向からの押引文が 2 列施され、口縁肥厚下には竹管状工具による円形刺突文が施らされている。内面には凹凸があり、指頭によりなで調整されている。36は L16 グリッドの V 層上位を中心に10点出土した個体である。断面が角型の口唇は指頭で横になで調整され、指でおさえた痕跡がある。37は磨耗している。地文は36・37が L R の斜行縄文、38には L R と R L の縄文が認められる。39~41は口縁が肥厚せず、口唇外縁に半載竹管状工具による右からの押引文が 1 列施され、その直下には39・41は竹管状工具、40は棒状工具により円形刺突文が施される。39は口唇内縁にも同様の押引文が施される。地文は39が結束第 2 種、40・41は L R の斜行縄文である。42は肥厚した口縁に右からの半載竹管による連続刺突文が 1 列、肥厚帯直下には竹管状工具による刺突文が施される。器面には R L の縄文が認められる。43の器面は無文である。口唇に棒状工具による斜位の刻み、口縁に円形刺突文が施される。44は器面に L R の縄文が認められ、口縁に棒状工具による円形刺突文が施される。内面は剥落している。45は M・N-18 グリッドの V 層中位~V 層下位を中心に出土した、破片点数30点を数える同一個体である。器内には L R 斜行縄文と棒状工具による円形刺突文が施される。底部は直立気味のもの (61)、張り出したもの (62・63) がある。いずれも内面調整は指頭による横なでである。胎土は粒が不揃いで小礫や砂粒を含む。焼成はあまり良くなく器面が粉っぽい感じのもの

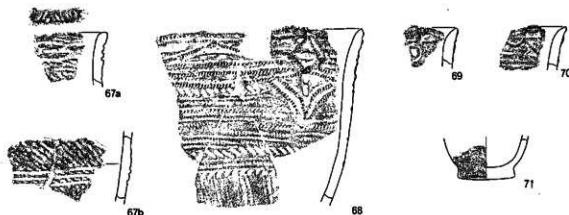


図IV-6-10 包含層出土の土器(4)



図Ⅳ-6-11 包含層出土の土器 (5)





図IV-6-12 包含層出土の土器(6)

のが多い。36や42のように黒色鉱物や砂粒を含み、短刻線文土器群に似た胎土・焼成のものもある。

46~60は短刻線文土器群である。46~51は口縁部破片で、口唇は角張り、丁寧にまで調整される。口縁に縄文の施された貼付帯のあるもの(46~48)、頸部に縄文の施された貼付帯のあるもの(49)、縄文のみのもの(50・51)がある。46は口縁と頸部に貼付帯をもつ。地文にLR斜行縄文を施し、口縁と頸部に低く平たい貼付帯をつけ、口縁貼付帯の下半分から頸部の貼付帯にかけてRLの斜行縄文、口縁貼付帯の上半分にLRの縄文を施している。47は口縁貼付帯の下半分より下にはLR斜行縄文、上半分にはRLの縄文が施される。48は口縁にRL斜行縄文を施し、口縁に平たい貼付帯をつけその上にLRの縄文を施文している。貼付帯直下には棒状工具による左からの刺突文が施されている。49は頸部に貼付帯をつけ、器面にLRの斜行縄文が施される。50・51の地文はLRの斜行縄文である。52~57は頸部・胴部破片である。52~56は貼付帯をもち、貼付帯の上下もしくは貼付帯の途中で条の向きが変わるように縄文が施される。52はRL斜行縄文を施した器面に細めの貼付帯をつけ、貼付帯にRLの縄文を施す。53はRL斜行縄文を施した器面に貼付帯をつけ、そこに重ねてRLの斜行縄文を施している。貼付帯から上の器面にはLRの縄文が認められる。54はまず上の貼付帯をつけて器面にLR斜行縄文を施し、しかる後に下の貼付帯をつけて各々の貼付帯にRLの縄文を施文している。55はLR斜行縄文を施した器面に貼付帯をつけ、貼付帯にRLの縄文を施文している。56は貼付帯の半分から下にLR、半分から上にRL斜行縄文が施されている。57にはLRとRLの斜行縄文が交互に施されている。底部は、張り出さず(58)、底部直上に貼付帯状の膨らみのあるもの(59)、底部が磨かれているもの(60)がある。短刻線土器群は、いずれも地文には横回転による単節の斜行縄文が整然と施される。縄文の条がよく通り、節が深く明瞭に刻まれる。貼付帯の半ばもしくはその上下で条の向きが変わるように縄文が施される。内面は丁寧にまで調整され平滑である。胎土は粒が均一で、黒色鉱物、砂粒を含み、焼成が良好で堅く焼き締まる。

縄文時代後・晩期、縄文時代の土器(図IV-6-11・12/表VI-6-5/図版19)

IV群a類はL14グリッド(235点)を中心に尾根とその周辺の斜面で510点(5.6%)、V群c類はL17グリッド(106点)を中心に119点(1.3%)、VI群は尾根と西側斜面で21点(0.2%)出土した。

IV群a類: 64~66bはタブコブ式に相当するものである。64はJ・K-15グリッドのV層上位~V層下位を中心に出土した、破片点数92点を数える同一個体である。口唇および器面・内面にLRの斜

表IV-6-2 包含層掲載土器一覽(1)

図番	分類	調査区	溝跡番号	層位	点数	調査区・同一層位より調査区名と器物番号、層位と点数、合計総点数を (出頭と同じ部分には省略、掲載土器番号を省略)		備考
						調査区名と器物番号、層位と点数	合計総点数	
1a	1b-1	K-10-a	1	V層中位	2	H8c1, V中(1), 同5, V上(1), 同d2, 同(1), H9b4, V中(5),	掘削底版	
			3	V層中位	3	同7, VF(2), I13c2, V上(1), J11b1, 同(5), 同c2, V中(1),	器身伴圧痕文	
			4	V層中位	1	同c4, VF(2), K10a1, 同(2), 同3, 同(4), K11a1, V上(1),	掘削底版	
1b	K-11-a	3	V層上位	1	同3, V中(11), 同4, V中(46), 同5, VF(60), 同b1, V上(4),	R.L.		
			V層下位	1	同c2, V中(1), 同3, 同(19), 同4, VF(10), 同d1, V中(1),			
			V層下位	3	K12c2, 羽風脚(1), K15b5, VF(1), M14d5, 同(1),			
1c	K-11-a	5	V層下位	2	同10, V中(18), 220点			
2	1b-1	M-13-a	3	V層中位	1			
3	1b-1	M-14-d	10	V層中位	1	M14a11, V上(1), 同c10, VF(1), 同14, 同(1), 同15, V上(1),	掘削底版, 掘削文	
4a	1b-1	1-9-a	3	V層下位	1	H9b3, V中(1), 同c4, 同(1), 同a3, VF(1), 同5, V中(1),	器付帯	
			5	V層中位	5	同b5, V上(5), 同d2, V上(2), 同4, VF(2), 同a, V中(2),	器付帯	
			1	V層上位	1	I10a7, V中(1), J12d6, VF(1), 59点	掘削底版	
4b	1-9-d	2	V層上位	2		掘削底版		
			V層下位	1		掘削底版		
			V層中位	7		掘削底版		
4c	1-9-d	8	V層中位	1				
4d	1-9-d	8	V層中位	6				
5a	1b-1	1-9-b	5	V層上位	2	H8c1, V上(1), I8c3, V中(1), 同4, V上(1), I9b5, V上(6),	器付帯, 器身跡	
			6	V層上位	3	I9b5, V上(3), 23点	掘削底版	
			6	V層上位	6		掘削底版	
5a	1b-1	M-13-d	7	V層中位	2	M13a5, VF(1), 同c1, 同(1), 同2, 同(2), 同3, V中(2),	器付帯	
			11	V層上位	3	同7, VF(1), 同8, V中(1), 同d1, 同(1), 同3, VF(6),	掘削底版	
5b	M-14-a	11	V層上位	4	同4, 同(4), 同5, V中(9), 同7, 同(7), 同9, F(1),	掘削底版		
			V層上位	1	M14a8, VF(1), 同11, V上(15), 同11, 同(25),	掘削底版		
					同d10, V中(1), 239点			
7a	1b-1	M-15-b	5	V層下位	1	K14c7, VF(1), 同8, 同(1), K16d6, V中(1), 同7, 同(1), 6点	掘削底版	
7b	K-17-a	1	V層中位	1		掘削底版		
8	1b-1	I-10-d	5	V層中位	1	I10d5, V中(1), 2点	器付帯	
9a	1b-2	I-8-c	4	V層上位	1	H9b6, V中(1), I8c4, V上(15), I9b2, VF(1), 同5, V上(4),	器付帯	
			1	V層上位	1	同6, V上(4), 29点	掘削底版	
			1	V層上位	1		掘削底版	
10	1b-2	K-10-a	4	V層下位	1	I9b4, V中(1), K15a11, VF(1), 同c5, 同(1), K16c4, 同(1),	掘削底版	
			7	V層中位	1	L14c5, V中(1), L15a4, 同(1), 同c5, VF(1), M13b2, 同(1),	掘削底版	
			2	V層中位	1	M15a3, V中(1), 同b3, 同(1), 同c5, 同(3), 同c6, VF(1),		
			3	V層下位	1	M15d4, V中(1), 同d6, VF(1), 同d7, 同(2), 同12, 同(2),		
					M16c7, 同(1), 同d10, V上(1), M18d4, VF(1), N14a6, VF(1),			
					同d6, 同(2), O15d4, VF(1), P16a2, V上(1), 32点			
11a	1b-2	I-10-d	5	V層中位	1	H9c5, V中(1), I8c2, 同(1), 同4, V上(4), I9b2, VF(1),	器付帯	
			3	V層中位	1	同5, V上(1), 同c2, VF(1), I10b5, VF(2), 同7, VF(7),	器付帯	
11b	I-10-c	6	V層中位	1	同c2, V中(1), 同6, 同(2), 同d5, 同(4), I11a8, 同(1),	器身伴圧痕文		
11c	1-9-b	5	V層上位	1	J10c2, 同(1), 同c5, V中(11), 同d3, 同(1),	掘削底版		
			V層中位	1	J11c3, V中(1), L14b6, VF(1), 49点			
12a	1b-2	O-16-d	2	V層下位	2	J15b8, VF(1), K16b1, 同(1), L14c12, V中(1), L19b5, VF(1),	器身伴圧痕文	
			4	V層下位	1	M12d4, VF(1), M15b3, V中(1), 同c5, VF(1), 同d12, 同(1),	掘削底版	
12b	M-15-c	14	V層中位	1	O14d1, 同(1), O15c2, VF(1), 同c3, 同(2), 同d1, V中(1),			
12c	M-15-c	4	V層下位	1	同d2, VF(1), 同d3, 同(7), O18a2, 同(2), 同a4, V上(1),			
			V層中位	3	同a5, 羽風脚(1), 同c2, VF(1), 同d2, 同(2), 同d3, V上(1),			
					O17b1, VF(1), N14a8, 同(1), 同b1, V中(1), N15a2, 同(1),			
					N15a3, VF(1), 同b2, V中(1), 同b3, VF(1), 同c1, 同(1),			
					N15d1, V中(1), 同d5, VF(1), N16b1, V中(2), 同b3, V上(1),			
					P14a1, V中(1), P15b4, 同(1), 同d3, 同(1), P16c3, VF(1),			
					P17a7, 同(2), 同b4, 同(1), 同d2, V上(1), 流石(2), 跡土(1), 58点			

表IV-6-3 包含層掲載土器一覽(2)

調査	分層	調査区	遺物 番号	層位	点数	調査・同一個体など 調査区名と遺物番号、層位と点数、合計個体点数 (前項と同じ層位は同じを、掲載土器取付を含む)		備考
						調査区名と遺物番号、層位と点数	合計個体点数	
13	Ib-3	H-22-c	1	V層下位	1			貼付書、短縄文
14	Ib-3	J-13-c	9	V層下位	2	J13c7, V上(1), 同c9, VF(1), J14b5, 同(3), 同b6, 同(4), 14c		貼付書、短縄文
		J-14-b	5	V層下位	3			短縄文
15	Ib-3	O-16-c	1	V層上位	2	O16c1, V上(2), P16d1, V中(1), P17a5, 同(1), 同b1, 同(2),		貼付書、短縄文
		P-17-a	1	V層中位	1	同b4, VF(4), 12c		
16	Ib-3	H-24-c	1	V層下位	1	H24d1, V上(1), H25b1, VF(1), 3点		貼付書、短縄文
17a	Ib-4	L-15-c	4	V層下位	1	L15b4, V上(1), 同c2, V中(1), 同c4, VF(3), 同d2, V中(1), 9点		別開文
		M-15-d	7	V層下位	2			RL
18	Ib-4	M-15-c	2	V層中位	1	M15c6, VF(1), 同c10, 同(1), 同c11, 同(1), 同c15, 同(1), 4点		第1層結束剥状
		I-9-b	6	V層上位	2	I8c4, V上(3), I9b5, V上(1), 6点		第1層結束剥状
20	IIa	I-10-c	3	V層上位	1	I10b5, VF(2), 同c2, V中(1), 同c3, V上(1), 同d1, V中(2),		LR
21	IIb	I-12-d	3	V層下位	1	同10d8, 同(1), 8点		
						I12b2, V上(1), 同b8, VF(1), 同c1, 同(1), 同c2, V中(2),		背面RL
						同c5, VF(2), 同c6, 同(1), 同d1, 同(1), J13a3, V上(1),		内面RL
						同a4, V上(1), 同a6, VF(1), 同a7, 同(1), 同b3, V上(1), 15点		
22	IIb	J-15-a	1	V層中位	1	J15a7, V中(1), K15a2, V上(1), 同a7, V中(1), 同d6, 同(1),		LR
		J-15-a	2	V層中位	1	6点		口縁内面RL
23a	IIb	N-13-a	4	V層中位	1	M13b1, V中(1), N13a1, 同(3), 同a2, N(12), 同a3, V中(8),		短縄文
		N-13-a	5	V層上位	1	同a4, 同(22), 同a5, V上(4), 同a7, V中(13), 同a8, VF(15),		LR
24	IIb	M-16-a	4	V層下位	1	同a10, V中(13), 同b1, N(1), 同b2, V中(1), 同b3, V上(1),		
						同b4, V中(1), 同b5, 同(1), 同d2, 同(1), 97点		
25	IIb	J-14-a	2	V層中位	1	J14a2, V中(18), 同a3, 同(8), 同a4, V上(3), 同a5, VF(1),		貼付書
		J-14-a	9	V層下位	1	同a7, 同(3), 同a9, 同(16), 同c4, V上(6), 同d4, VF(2),		RL, LR
						同d5, 同(8), 同d8, 同(1), 69点		内面短縄文
26a	IIb	H-13-b	1	V層下位	1	H9b5, V中(1), I9b1, VF(1), 同d8, V中(1), 同d9, 同(1),		短縄文剥状縄文
26b		I-9-d	7	V層中位	1	10点		内面短縄文
						I-9-d	9	V層中位
27	IIa	N-17-a	3	V層中位	2	N17a3, V中(2), 2点		口縁短縄文
28	IIa	M-18-a	4	V層下位	1			貼付文、短縄文
29	IIa	J-15-b	2	V層中位	1			貼付文, RL
30	IIa	L-17-c	7	V層下位	1			把手状貼付書
31	IIa	L-15-a	4	V層中位	1	L15a7, VF(2), 3点		第1層結束剥状
32	IIa	L-14-b	9	V層下位	1			裏下ろし貼付書
33	IIa	L-14-c	9	V層下位	1			第1層結束剥状
34	IIa	L-14-d	11	V層下位	1			
						I10d7, VF(1), L14c8, 同(1), 同c11, 同(1), 同d5, V中(3),		小片足
						L16c10, VF(1), M13d6, V中(1), M14b12, 同(1), 同c2, 同(1),		裏下ろし貼付書
						同c8, VF(1), 同d1, V中(1), 同d3, VF(1), 同d4, 同(6),		裏下ろし貼付書
						同d5, 同(20), 同d6, 同(10), 同d7, 同(135), 同d9, 同(1),		第1層結束剥状
						同d10, V中(94), M15c7, VF(1), 同c9, 同(1), 同c12, 同(1),		
35	IIa	L-15-a	4	V層中位	2	同c13, 同(1), M17d5, 同(1), 309点		
						L13c3, VF(2), 同d6, 同(1), 同d7, 同(1), L14a4, V中(1),		小片足
						同b1, N(1), 同b9, VF(2), 同b10, 同(3), 同d7, V中(1),		口縁貼付書
						同d10, VF(1), 同d12, 同(1), L15a4, V中(10), 同a6, VF(22),		裏下ろし貼付書
						同a7, 同(10), 同a8, 同(10), 同c3, 同(1), L16a10, 同(3),		短縄文
						同c10, 同(2), 同d9, V中(1), L17a5, 同(2), 同a7, 同(1),		
						同c7, 同(3), L18b3, VF(21), M14a3, V中(1), 同d5, VF(1),		
						同d8, V中(1), 同d9, VF(1), 同d10, V中(2), M15c8, VF(3),		
						同c9, 同(2), 同c12, 同(6), 同c13, 同(3), 同d8, 同(1),		
						M16b6, 同(1), 同c5, V中(1), 同c8, VF(1), M17a4, 同(1),		
同a5, 同(1), 同b4, 同(1), M18d3, 同(1), N15d4, 同(1),								
						N17c1, V中(1), 146点		

表Ⅳ-6-4 包含層掲載土器一覧(3)

図番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	調査区・同一層位など 調査区名と遺物番号、層位と点数、合計検片点数		備考
						(前項と同じ部分は同省略、掲載土器検片名を含む)		
36	Ⅱb-3	L-16-b	2	V層上段	6	H1a7, V上(1), K13b1, V上(1), L16b2, V層上(1), 10点	円形刺状文	
		L-16-d	1	V層上段	1			
37	Ⅱb-3	P-17-b	5	V層下段	1		押引文, LR	
38	Ⅱb-3	K-12-c	7	V層中位	1	K12c6, V中(1), 岡d2, 岡(1), L11b1, 岡(1), L12b3, 岡(1), 5点	押引文, RL, LR	
39	Ⅱb-3	L-15-c	1	層位	1	L16d8, V中(1), 3点	円形刺状文	
		L-16-c	7	V層上段	1		押引文	
40	Ⅱb-3	M-18-b	1	V層中位	1	L24d1, VF(1), M12c3, V中(1), M16d5, VF(1), 岡d8, 岡(1), N17b2, N(1), N19c2, VF(1), N20b1, 岡(1), O17a1, 岡(1), P14c1, 岡(1), P18c1, VF(1), 11点	押引文	
41	Ⅱb-3	O-17-d	2	V層上段	1		刺状文, LR	
42	Ⅱb-3	I-10-a	3	V層上段	2		連続刺状文	
		I-10-d	7	V層下段	1		円形刺状文, RL	
43	Ⅱb-3	I-10-a	3	V層中位	1	I19d5, VF(1), I10a3, V中(3), 岡a4, V上(2), 岡d7, VF(1), 8点	刻み, 円形刺状文	
44	Ⅱb-3	O-16-a	3	V層下段	1	N13c4, V中(1), 岡d5, VF(2), N16b2, 岡(1), N17b5, 岡(1), O17d4, 岡(1), O18b1, V中(1), O19b1, VF(1), P17a7, 岡(1), P21b1, 岡(1), 11点	円形刺状文, LR	
45a	Ⅱb	M-18-c	3	V層下段	1	L16a2, V上(1), 岡c3, V中(1), 岡c4, 岡(1), 岡c8, 岡(1),	円形刺状文	
45b		N-18-c	1	V層中位	1	岡c9, 岡(1), 岡d8, 岡(1), L17a1, V上(1), 岡a8, VF(1),	地盤のLR	
		N-18-d	1	V層中位	1	岡c1, V中(1), 岡c9, VF(1), L18c1, V中(1), M16d9, VF(1),		
		N-18-d	2	V層下段	1	M18b1, V中(1), 岡c1, 岡(1), N17b1, 岡(1), 岡c3, VF(1), N18a1, V中(1), 岡a2, VF(1), N19a1, 岡(1), 岡a2, V中(1), N19b1, 岡(1), 岡b2, V上(1), 岡c1, V中(1), N20d1, V中(1), N21c1, N(1), 30点		
46	Ⅱb-3	J-11-a	5	V層中位	1		刺付帯, RL, LR	
47	Ⅱb-3	N-15-a	4	V層下段	1		刺付帯, RL, LR	
48	Ⅱb-3	L-14-d	5	V層中位	1		刺付帯, 刺状文	
49	Ⅱb-3	K-12-a	1	層位	1	L12b1, V中(1), 岡b3, 岡(2), 5点	刺付帯	
		K-12-d	3	V層中位	1		LR	
50	Ⅱb-3	M-13-c	4	V層中位	1		LR	
51	Ⅱb-3	L-12-b	2	V層中位	1	L12c2, V中(1), M12d11, 岡(1), 4点	LR	
		L-17-d	4	V層下段	1			
52	Ⅱb-3	I-13-b	5	V層上段	1		刺付帯, RL	
53	Ⅱb-3	P-17-d	4	V層上段	1	L15a4, V中(1), L19c1, 岡(1), 岡c3, 岡(1), M19a2, 岡(1), M19d3, 岡(1), O19d1, 岡(1), P17a3, V上(1), 岡b3, 岡(1), 10点	刺付帯, RL, LR	
54	Ⅱb-3	L-14-d	6	V層中位	1	L14a2, N(2), 岡b3, V中(1), 岡c2, 岡(1), 岡c15, VF(1), 岡d9, 岡(1), 岡d10, 岡(1), M14b15, 岡(1), M17d1, N(1), 10点	刺付帯	
55	Ⅱb-3	M-19-a	2	V層中位	2	M19a1, V上(1), 岡a2, V中(1), 4点	RL, LR	
56	Ⅱb-3	J-11-a	3	V層下段	1	I10b8, VF(1), 岡d1, V中(1), M14c3, V上(1), 岡c7, VF(1), O15a1, 岡(1), 8点	刺付帯, RL, LR	
57	Ⅱb-3	L-15-b	3	V層下段	1	J14c1, V中(1), 岡c2, V上(1), J15d3, V中(1), K12d2, 岡(1), K14b1, 岡(1), 岡c2, 岡(1), L12c1, 岡(1), 岡c2, 岡(1), L14d10, VF(1), 岡d14, 岡(1), 岡d16, V中(1), L15b1, 岡(1), M15d1, 岡上(1), 岡d9, VF(1), 岡d15, V上(1), M16d3, 岡(1), N14b2, V中(1), 岡d2, 岡(1), O13c1, VF(2), O17a2, 岡(1), P17c2, V上(1), 24点	LR, RL	
58	Ⅱb-3	L-12-a	4	V層中位	1	I10d4, V中(1), L16d8, 岡(1), 3点	底面成上丸み	
59	Ⅱb-3	K-16-b	2	V層下段	1		底面成上丸み	
60	Ⅱb-3	P-20-d	1	V層中位	1	J12c4, V中(1), L14c9, VF(1), 岡c19, 岡(1), 岡d10, 岡(1), L15a5, 岡(1), 岡d9, 岡(1), L19a1, 岡(1), L20a1, V中(1), M13a2, 岡(1), M17d1, N(1), M21b1, 岡(1), N14c1, V上(1), O15b1, V中(1), P15b2, 岡(1), P17a3, V上(1), P20a3, 岡(1), 17点	底面成上段き	
61	Ⅱb-3	J-14-c	6	V層下段	1	L13a1, V中(1), 岡d6, VF(1), M15b7, 岡(1), 5点	底面張り出し気味	

表IV-6-5 包含層掲載土器一覧(4)

図番	分類	図番記号	器物番号	層位	点数	集合・同一個体名 調査区名と器物番号、器位と点数、合計破片点数		備考
						(前項と同じ部分は項と省略、掲載土器破片を含む)		
		N-14-d	2	V層上位	1			LR
62	Ⅱb-3	J-13-a	9	V層下位	1	I13b8, VF (1), L12b1, V中 (1), Ⅱb3, Ⅱ (1), M12d4, Ⅱ (1),		底部張り出し気味 RL
		L-12-b	3	V層中位	1	6点		
63	Ⅱb-3	M-14-d	7	V層下位	1	M14d5, VF (1), Ⅱd10, V中 (4), M16d1, VF (1), 7点		底部張り出し気味
64	Ⅱa	J-15-b	4	V層中位	1	J15c3, V中 (1), Ⅱc6, VF (4), Ⅱd2, V中 (1), I13c1, Ⅱ (1),		口縁縄文
						J15d1, Ⅱ (1), J13a7, VF (3), J15b1, V上 (1), Ⅱb4, V中 (4),		LR
						Ⅱb10, VF (2), Ⅱc1, V中 (2), K13d7, Ⅱ (1), K15a1, Ⅱ (1),		内面縄文
						Ⅱa2, V上 (1), Ⅱa6, V中 (5), Ⅱa7, Ⅱ (2), Ⅱd1, V上 (1),		
						Ⅱd6, V中 (4), Ⅱd11, VF (4), K17b2, V中 (1), 92点		
65	Ⅱa	J-15-b	4	V層中位	2	J13b3, V上 (2), Ⅱc10, VF (1), J15b4, V中 (2), Ⅱb5, Ⅱ (1),		複数のRL
						Ⅱb6, Ⅱ (2), Ⅱb7, VF (1), J15c1, V上 (1), K14b7, VF (1),		
						K15a4, VF (1), Ⅱa5, V上 (1), 15点		
66a	Ⅱa	L-17-d	3	V層下位	2	I12b12, V上風側 (2), J13d2, V中 (1), J15b4, Ⅱ (1),		底部張り出し気味
66b		L-16-b	3	V層中位	1	K14a2, V上 (1), K16d5, VF (1), K17b3, VF (1),		LR
						L16b3, V中 (2), Ⅱd10, VF (5), M15a2, V中 (1),		
						M16a2, Ⅱ (1), Ⅱb3, Ⅱ (1), M18b2, VF (2), Ⅱb4, V中 (1),		
						Ⅱc2, VF (1), Ⅱc4, Ⅱ (1), M19b4, Ⅱ (1), Ⅱd6, V中 (3),		
						Ⅱd9, Ⅱ (1), N18a3, VF (4), Ⅱb2, V中 (1), Ⅱd2, VF (3),		
						O23c1, V (1), P17a6, VF (1), 40点		
67a	Vc	L-17-c	7	V層下位	2	L16c2, V (1), L17c1, V上 (1), Ⅱc4, VF (4), Ⅱc7, Ⅱ (7),		底縄文
		L-17-c	4	V層下位	1	Ⅱc8, VF (3), L18a1, V中 (1), M18a4, VF (2), N17c1, V中 (1),		口唇縄文
67b		L-17-c	7	V層下位	1	87点		RL
68	Ⅱ	K-12-c	1	V1層	1	K13b2, V上 (1), M12c4, V中 (2), 9点		底総線
		K-12-c	4	V中風側	2			削み
		K-13-b	2	V層上位	3			帯状縄文
69	Ⅱ	L-14-c	1	Ⅱ層	1	L15a1, Ⅱ (3), 4点		底総線
70	Ⅱ	O-15-c	1	V層中位	1			底総線, 削み
71	Ⅱ	P-17-b	2	V層上位	2			底部張り出し気味

行縄文が施されている。胎土には小礫・砂粒を含み、割れ口は薄い層が複数重なったバイ状を呈している。65はJ-15・16グリッドのV層上位～V層下位を中心に出土した、破片点数15点を数える同一個体である。器面には複数のRLの縄文が施されている。内面調整はは横なである。胎土には小礫・砂粒を多く含む。66はL・M-16・17グリッド、M・N-18グリッドのV層中位～下位を中心に出土した破片点数40点を数える同一個体である。器面にはLRの斜行縄文が施され、内面調整は横なである。胎土には淡白色鉱物、小礫、砂粒を含む。底部はわずかに張り出す。

V群c類：67はタンネットウL式に相当する。L-16～18グリッド、M18グリッド、N17のIV層～VI層下位と幅広い層位から出土した、破片点数87点を数える同一個体である。晩期に分類される土器はこの個体のみである。口唇には細いRLの縄の圧痕が認められる。器面にRLの斜行縄文、口縁に3本単位の沈線文が施されている。内面は平滑で横なにより丁寧に調整されている。胎土は粒が揃っており緻密で、微量の黒色鉱物と淡黄白色粒を含んでいる。

VI群：68～71は後北B式に相当する。68～70は隆起線が刻まれている。68には帯縄文が施されている。いずれも内面は磨かれている。胎土は粒が揃い緻密である。69・70は微量の白色粒を含む。71はミニチュア土器かもしれない。底部は張り出し気味で、内面調整は指頭による横なである。胎土には小礫・砂粒と、微量の黒色鉱物を含む。(鎌田)

## (2) 石器等

### 概要

米原3遺跡では遺物包含層より5,411点の石器等が出土している。大分類ではフリイクが2,904点(53.7%)と最も多い。このうち黒曜石が2,797点(96.3%)と大部分を占める。これ以外の片岩、頁岩、チャートなどは微量である。礫・礫片が1,436点(26.5%)でフリイクに次ぐ。石材は安山岩、片麻岩、流紋岩などが多い。定型的な石器は、剥片石器387点、磨製石器256点、礫石器427点の計1,070点(19.8%)が出土した。剥片石器は、石鏃、石槍・ナイフが多い一方で、Rフリイク、Uフリイクなど加工度の低いものも目立つ。磨製石器は磨製石斧を主体とするが、大部分が微細な破片である。礫石器はすり石、北海道式石冠の破片が多く出土している。

石器等全体の出土傾向を見ると、層別では、遺構が検出されたV層中位～下位からの出土が多い。出土分布では、調査区中央から北側にかけての、標高44.0～46.0mの台地上に集中が見られる。一方で、後述のI23グリッドを除くと、南西側の緩斜面は遺物の出土数が非常に少ない。

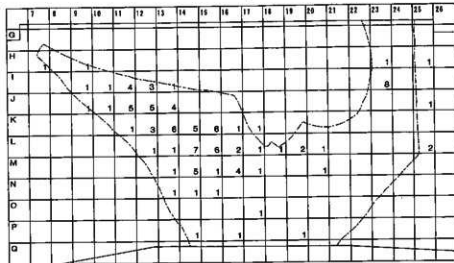
被熱した石器等が多数出土した。特に礫・礫片は63.1%(906点)が被熱している。礫石器も被熱しているものが多く、全体の45.4%(194点)を占める。中でも北海道式石冠は80.8%(97点)と突出している。一方、剥片石器は全体の9.0%(35点)に過ぎない。ちなみにフリイクは全体の9.8%(284点)が被熱しており、剥片石器とほぼ同じ割合になっている。また、磨製石器(石斧)は1点のみ被熱している。これらの被熱した石器等は、何らかの人為的な作業の結果と考えられる。

I23グリッドで黒曜石のフリイク、Uフリイクおよび石鏃、石槍・ナイフの破片などがまとめて出土した。しかし、風倒木による擾乱のため出土状況が悪く、遺物集中として範囲を確認できなかった。石鏃、石槍・ナイフには破片や未製品が多く、被熱していることから、この付近で剥片石器の加工などの作業が行われていた可能性がある。

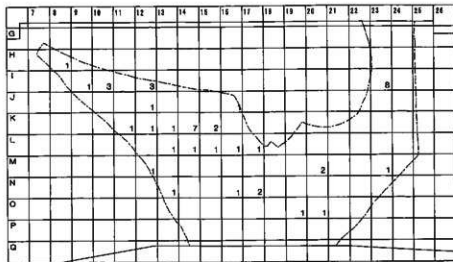
表IV-6-6 層別別出土石器等一覧

	分類	III層	IV層	V層			VI層	攪乱 風倒木	表探 掘土	計
				上位	中位	下位				
剥片石器	石 鏃	12	5	11	36	29	13			106
	石 槍・ナイフ	2		3	15	13	12			45
	石 鏃	1	1	1	4	2	2			11
	つまみ付ナイフ	4	1		11	4				20
	スクレイパー	6	3	3	7	5	1			25
	ピエス・エスキュー	3		1	2					6
	R フリイク	4	4	12	17	21				58
	U フリイク	6		14	23	16	50			109
	両面開削石器	1					2			3
	石 核	1			2		1			4
剥片フリイク	395	24	215	1290	699	278		3	2904	
磨製石器	石 斧	8	6	30	127	73	12			256
礫石器	た た き 石	9	1	12	32	25		2		81
	く ぼ み 石				4	1				5
	す り 石	1	3	20	42	30	2			98
	北海道式石冠		1	12	45	51	11		1	121
	石 網			2	2	1				5
	砥 石	1	4	14	16					35
	台 石	5	9	13	38	14		2	1	82
礫・礫片	礫・礫片	60	90	270	574	375	66		1	1436
土製品	再生土製円盤				1					1
合 計		518	149	623	2286	1376	449	2	8	5411

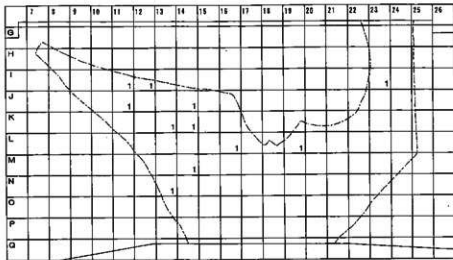
石 鏃



石 槍・ナイフ

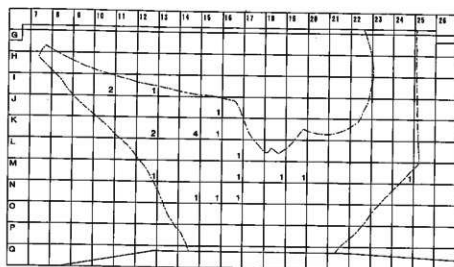


石 錐

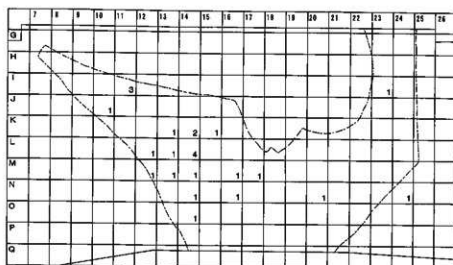


図IV-6-13 包含層出土石器等分布図(1)

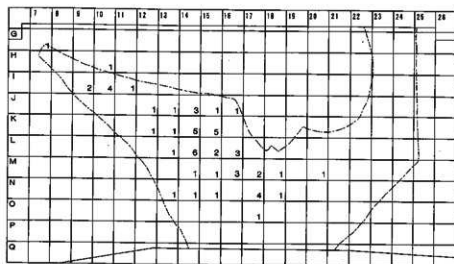
つまみ付ナイフ



スクレイパー



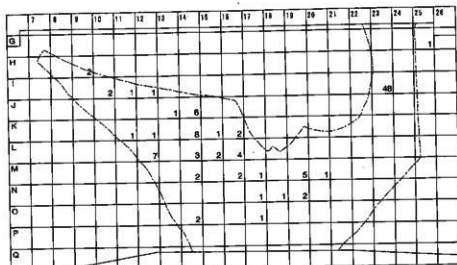
Rフレイク



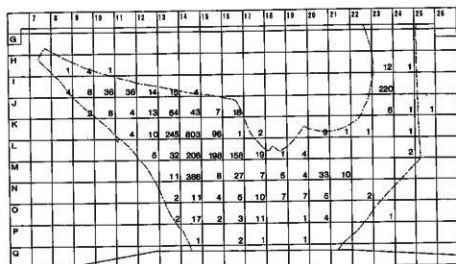
図IV-6-14 包含層出土石器等分布図(2)



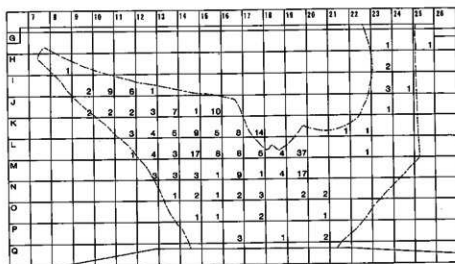
Uフレイク



フレイク

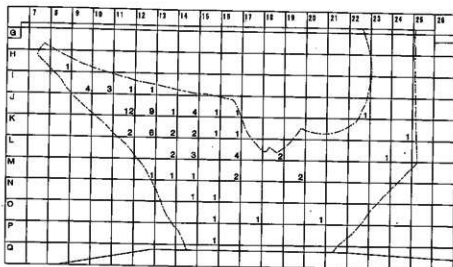


石 斧

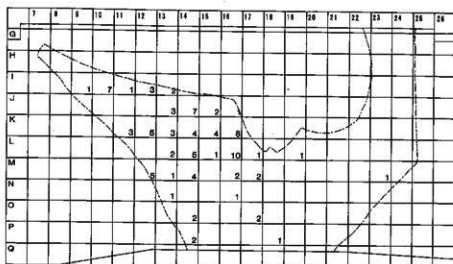


図IV-6-15 包含層出土石器等分布図(3)

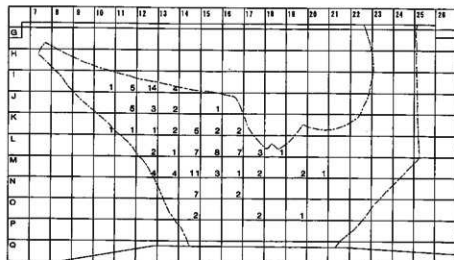
たたき石



すり石

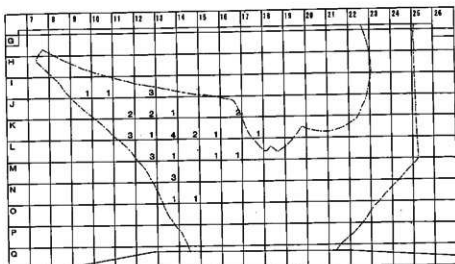


北海道式石冠

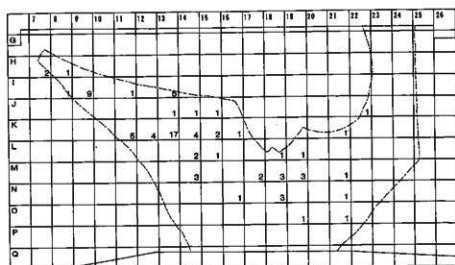


図IV-6-16 包含層出土石器等分布図(4)

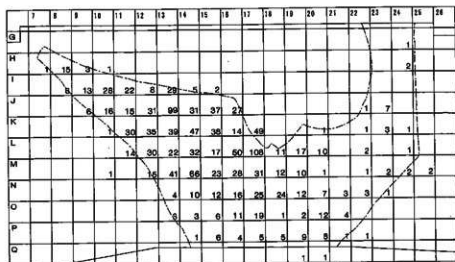
砥石



台石



礫・礫片



図IV-6-17 包含層出土石器等分布図(5)

H-1および遺物包含層より出土した黒曜石製遺物11点について、原材産地分析と水和層測定による経過年代の同定を依頼した。その結果、原材産地は8点が赤井川、2点が十勝、1点が赤石山であった。十勝産の2点は同一地点（O14グリッド）から出土しており、全体的に赤井川産黒曜石の割合が高いと言える。このことは時期が近接する米原4遺跡でも同様である。一方、経過年代は $2,896 \pm 133 \sim 7,752 \pm 235$ B.P.と幅がある。このことは、縄文時代早期から統縄文時代まで様々な時期の土器が出土することと矛盾しない。ただし、遺跡の主体である中期末葉に相当するような年代は得られなかった。むしろ、分析番号73271、73275、73277といった前期前半と考えられる結果となった遺物が多い点が注目される。分析の詳細については、冒章1節を参照していただきたい。

#### 1) 剥片石鏃

石鏃（図Ⅳ-6-18-1～19/表Ⅳ-6-7/図版20）

106点出土している。層別別の出土点数では、V層中位の36点が最も多く、V層下位の29点がこれに次ぐ。出土分布は、I23グリッドが8点で最も多い。また、調査区北側のK・L-13～16グリッド付近にやや集中が見られる。石材別では黒曜石100点、粘板岩3点、頁岩2点、チャート1点となっており、黒曜石が大部分を占める。形態別で見ると、有茎鏃が31点と最も多く、柳葉形が18点、菱形が13点、三角形が11点と続き、棒形と木葉形が各1点のみである。ほかに破片が24点、未製品が7点出土している。ここでは19点図示した。1～7は三角形のもの。1、2は粘板岩の剥片を粗く加工しており、両面に稜面を残す。3、4は平基で、正三角形に近い。5～7は凹基で、縦長の二等辺三角形である。8～10は薄身で柳葉形のもの。9は被熱している。10は裏面に主刺離面を残す。11は長手で棒状に近いもの。石鏃の可能性もある。12～19は有茎鏃。12、13は縦長でやや基部の作り出しが不明瞭なもの。12は側縁が鋸歯状で、調整が粗い。13は長めの基部を有し、断面が菱形になっている。14、15は小型の石鏃。14は平基で、側縁が内湾するもの。15～19は凸基で、側縁が外湾するもの（15、16）と、直線状のもの（17～19）がある。17は基部を欠損する。19は基部が幅広く、基部が長い。図示したものは、1、2が粘板岩、10が頁岩、17がチャート、ほかはすべて黒曜石製である。

石槍・ナイフ（図Ⅳ-6-18-20～27/表Ⅳ-6-7/図版20）

45点出土している。出土分布はK14グリッドが7点と最も多いが、ほとんどが破片である。石材は黒曜石42点、頁岩2点、チャート1点で、石鏃とほぼ同じ比率である。

8点図示した。20～23は茎を有するもの。20は先端部が基部と比較して短めであるが、調整の程度から破損品を再加工したものと考えた。21、22はやや調整が粗く、幅広い基部を有する。23は茎の一部を欠く。24～26は菱形もしくは木の葉形で、茎が明瞭ではないもの。24、25は形状が左右で非対称になっている。24は側縁の剥離調整が丁寧である。25は裏面に自然面を残す。26、27は比較的大型のもの。26は側縁部に使用による潰れが認められる。27は先端部と茎の大部分が失われているが、表面に細かな調整が施される。図示したものは、いずれも黒曜石製である。

石鏃（図Ⅳ-6-19-28～30/表Ⅳ-6-7/図版20）

11点出土した。このうち黒曜石が9点、頁岩が1点、メノウが1点である。3点図示した。いずれも両面加工されている。28は棒状のもの。全体的に磨滅している。29は棒状のものにつまみ部が作り出されたもの。30は刺突部を作り出したもの。29、30は刺突部の先端に使用による潰れが見られる。石材は28がメノウ、29、30が黒曜石である。

つまみ付ナイフ（図Ⅳ-6-19-31～39/表Ⅳ-6-7/図版20）

20点出土した。層別別では、V層中位が11点と最も多く出土している。出土分布は、K14グリッドが4点で最も多い。石材別では、黒曜石が12点、頁岩が7点、メノウが1点となっている。9点図示した。

31～33は片面全面加工のもの。31は1点のみ出土した横形のもので、表面の両側縁にも刃部が設けられている。32、33は斜位形のもので、裏面の一側縁に刃部をもつ。34は片面周縁加工のもので、表面の側縁の一部に調整が施される。35～39は両面加工のもの。35～38は幅広のつまみ部と菱形の刃部を有し、ほぼ同一地点（J15・K14グリッド）から出土した。同型のものがH-1床面より出土しており、出土地点が近いことから、縄文時代中期末葉の所産である可能性が高い。39はつまみ部の作り出しが不明瞭で、未製品の可能性がある。31、33、34が頁岩、32がメノウ、35～39が黒曜石製である。  
スクレイパー（図IV-6-19-40/表IV-6-7/図版20）

25点出土している。このうち17点が黒曜石製、8点が頁岩製である。出土分布は、L14グリッドが4点で最も多い。1点図示した。図示以外は大半が破片である。40は縦長剥片を素材とし、側縁に内湾する刃部を設けているもの。側面に礫表皮面が残る。石材は黒曜石である。

ピエス・エスキーユ（図IV-6-19-41・42/表IV-6-8/図版20）

6点出土している。すべて黒曜石製である。このうち3点が被熱している。2点図示した。41・42は剥片の上下端に階段状の細かな剥離が認められるもの。42は側面に礫表皮面を残す。

Rフレイク（図IV-6-19-43/表IV-6-8/図版20）

58点出土している。このうち56点が黒曜石製、2点が頁岩製である。出土分布はK・L-14・15グリッド付近がやや多い。1点図示した。43は加工痕の見られる剥片。側縁の一部に調整が施される。石材は黒曜石である。

Uフレイク（図IV-6-19-44/表IV-6-8/図版20）

109点出土している。このうち108点が黒曜石製、1点のみが流紋岩製である。出土分布は、I23グリッドが48点で最も多い。また、J・K-14、L-12グリッド付近に集中が見られる。1点図示した。44は使用痕の見られる剥片。縁辺が鋸歯状に剥離している。一部に礫表皮面が残る。石材は黒曜石である。

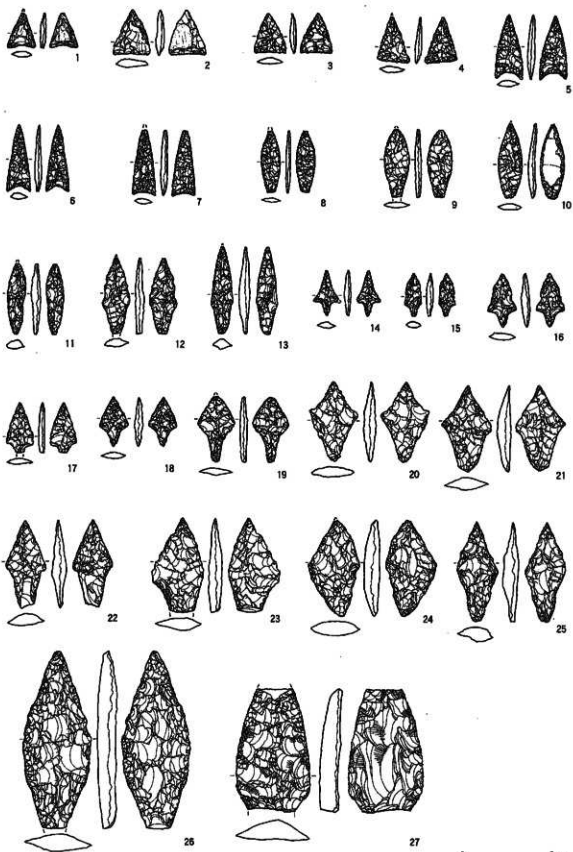
両面調整石器（図IV-6-19-45・46/表IV-6-8/図版20）

3点出土している。2点図示した。45は剥片の両面を粗く打ち欠き、側縁に刃部を設けようとしている。46も粗雑な二次加工が両面に加えられている。石材は45がチャート、46が黒曜石である。

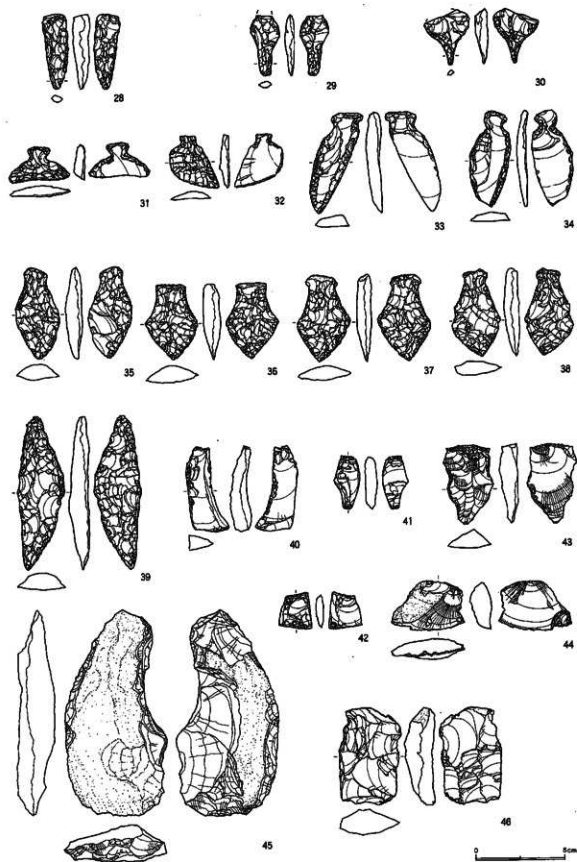
## 2) 磨製石器

石斧（図IV-6-20-47～52、21-54～56/表IV-6-8/図版21）

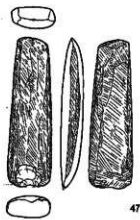
256点出土した。このうち182点（71.1%）が破片である。また、未製品および研磨石材が55点（21.5%）と多い。石材は泥岩、片岩が大部分である。層別別では、V層中位が127点と最も多い。10点図示した。47・48は石のみ。47は刃部を破損しており、頭部にも新たに刃部が設けられている。48は頭部に打撃による敲打痕が残る。49～53は全面磨製のもの。49は側縁が弧状に決られた上から研磨されており、柄への装着のためと推測される。刃部の磨滅と欠損が著しく、被熱している。50、51は側縁と頭部が研磨されており、表裏面との間に稜が作り出されている。52は使用によって研磨面が剥落し、頭部が失われている。53は比較的大型で乳棒状のもの。基部に厚みがあり、刃部はいわゆる蛤刃である。54は擦り切り手法によって製作されたもので、両側縁に不明瞭ながら痕跡が残る。右側縁の下部を欠失する。55、56は未製品。55は偏平礫の縁辺を打ち欠いて整形されているが、下部で切損する。研磨痕は見られず、礫面を残す。56は全面が敲打整形され、一部に研磨面も見られる。未調整ではあるが、下端に刃部を作出しようとしている。基部のほぼ中央で切損する。47・48が片岩製、49、53・54泥岩製、50・51が枚状岩製、52が蛇紋岩製、55が橄欖岩製、56が凝灰岩製である。



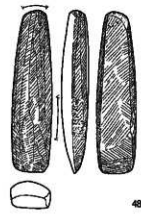
図IV-6-18 包含層出土の石器 (1)



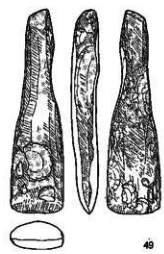
図IV-6-19 包含層出土の石器(2)



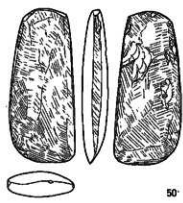
47



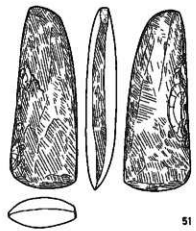
48



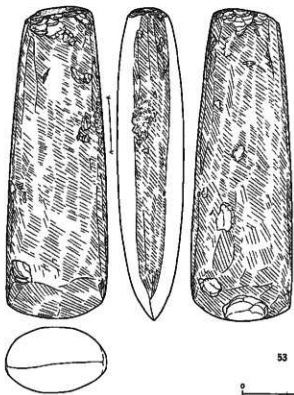
49



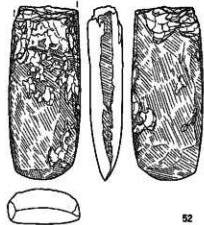
50



51



53

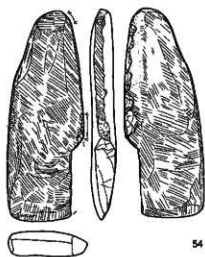


52

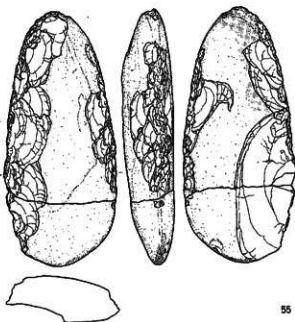


図IV-6-20 包含層出土の石器 (3)

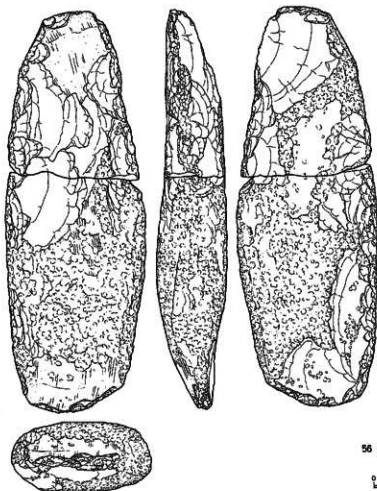




54



55



56



図IV-6-21 包含層出土の石器(4)

### 3) 礫石類

たつき石 (図Ⅳ-6-22-57~62、23-63~65/表Ⅳ-6-8/図版22)

81点出土している。このうち破片が35点(43.2%)である。また、全体の38.3%(31点)が被熱している。層別別では、V層中位が32点で最も多く、V層下位が25点で次ぐ。出土分布は、J-11-12グリッド付近に多い。9点図示した。57・58は石斧未製品を転用したもの。偏平礫の縁辺を打ち欠きによって整形している。57は下端を敲打しており、ほぼ中央で切損する。58は両端に敲打痕が見られる。ともに被熱しており、特に58は赤色化が著しい。59~61は棒状礫を素材としたもの。主に側縁を使用しており、一部に弱い擦痕が見られる。59は破片、60は切損している。62、63は偏平礫を素材としたもの。62は縦方向に破砕した礫片の割れ面を敲いて整形し、反対側の縁辺を使用している。63は比較的大型のものであるが、破砕していた。側縁および腹部に敲打痕が見られ、被熱している。64は楕円礫の両端と側縁を敲いている。65は円礫を素材としたもので、下端に敲打痕がある。石材は、58が片岩、59が砂岩と泥岩の互層、60が千枚岩、61が流紋岩、62が泥岩、63が凝灰岩、64が安山岩、65が橄欖岩?、57は不明である。

くぼみ石 (図Ⅳ-6-23-66・67/表Ⅳ-6-8/図版22)

5点出土している。2点図示した。66、67は偏平礫の腹部に敲打によるくぼみを有するもの。66は表面で1か所敲かれており、下端に敲打痕が見られることから、たつき石の機能ももつと考えられる。67は表裏面とも少しずつ位置をずらして数か所敲かれている。石材は、いずれも砂岩である。

すり石 (図Ⅳ-6-23-68~70、24-71/表Ⅳ-6-8/図版22・23)

98点出土している。擦り面みの破片が70点(71.4%)と過半数を占める。また、全体の25.5%(25点)が被熱している。層別別ではV層中位が42点で最も多く、V層下位が30点で次ぐ。K・L-16グリッド付近でややまとまって出土した。4点図示した。68は楕円礫を素材とし、3面に擦り面が見られる。熱を受け、破砕している。69・70は偏平礫を素材としたもの。69は両面を全体的に擦っている。70は腹面を擦っており、下端には敲打痕が見られる。71は断面三角形の礫の下辺を擦っている。被熱している。石材は68~70が片麻岩、71が砂岩である。

北海道式石冠 (図Ⅳ-6-24-72~74/表Ⅳ-6-8/図版23)

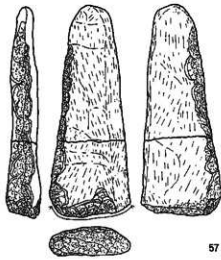
121点出土している。このうち112点(92.6%)が破片である。破片は、溝の打ち欠きが残るなど形状が推測されるものや、未製品の主な石材である花崗岩の破片を北海道式石冠に分類し、それ以外はすり石に含めた。また、全体の80.8%(97点)が被熱している。出土分布は、I-12、L・M-14・15グリッド付近に多い。層別別ではV層下位が51点で最も多く、V層中位が45点で次ぐ。3点図示した。いずれも被熱している。72は胴部に鉢巻き状の溝が廻る。擦り面の使用が著しい。73・74は偏平礫を半円形に打ち欠いて擦り面を作り出したもの。73は周縁を敲打整形しているが、溝は全周しておらず、未製品の可能性がある。74は両側縁の一部を打ち欠いただけで、ほとんど整形されていない。石材は72・74が砂岩、73が凝灰岩である。

石鏃 (図Ⅳ-6-24-75/表Ⅳ-6-8/図版23)

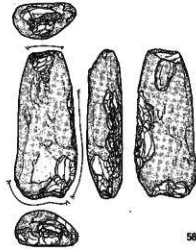
5点出土している。うち3点が接合し、図示した。75は砥石を転用したもの。板状礫の側縁を両面から研磨して、直線状の刃部を作り出している。被熱している。砂岩製。

砥石 (図Ⅳ-6-24-76~78/表Ⅳ-6-8/図版23)

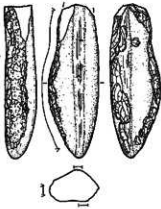
35点出土している。大部分が破片である。出土分布は、I~L-11~13グリッド付近に多い。3点図示した。76・77は破片。両面に複数の砥面を有し、強い研磨によって中央部がくぼんでいる。78は表裏に弱い砥面が見られるもの。ほぼ中央で切損する。石材はいずれも砂岩である。



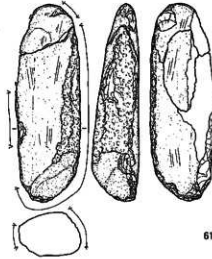
57



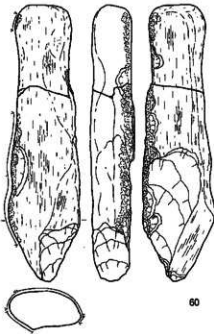
58



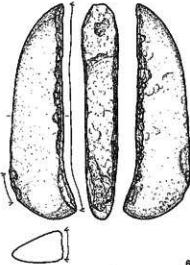
59



61



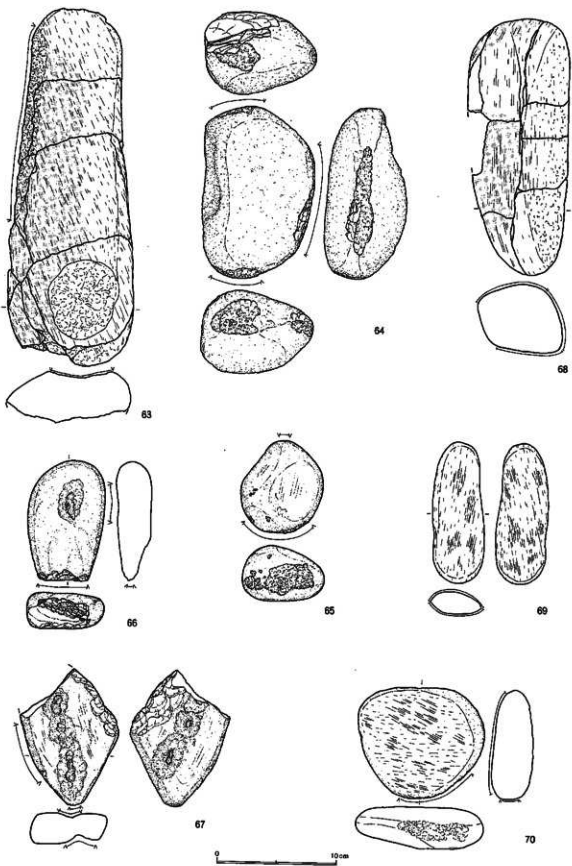
60



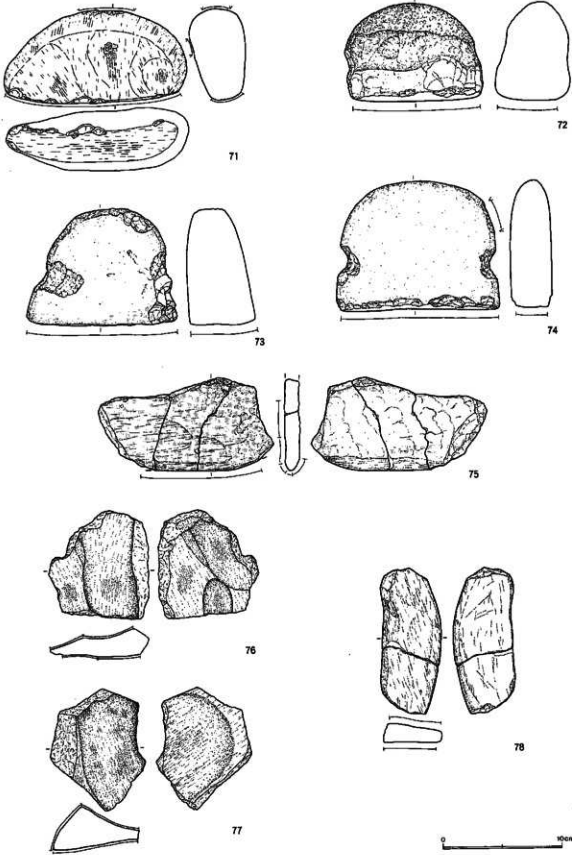
62

0 10mm

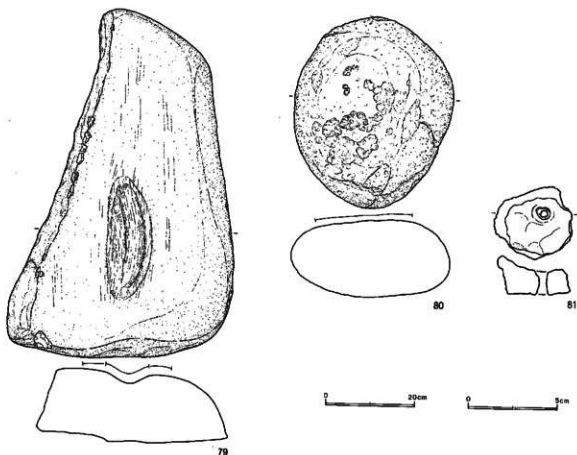
図IV-6-22 包含層出土の石器(5)



図IV-6-23 包含層出土の石器(6)



図IV-6-24 包含層出土の石器(7)



図IV-6-25 包含層出土の石器(8)・土製品

台石(図IV-6-25-79・80/表IV-6-8/図版23)

82点出土している。図示以外は破砕しているものが多く、75点(91.5%)が破片である。また、36点(43.9%)が被熱している。2点図示した。79は比較的大型の礫の上面を平坦に擦っているもの。特に中央部の擦りが強く、楕円形に深くくぼんでいる。80は上面が敲打によって整形された後、擦られている。石材は79が閃緑岩、80が安山岩である。

#### 4) 土製品

再生土製円盤(図IV-6-25-81/表IV-6-8/図版23)

1点のみ出土している。81はⅢ群b類土器の底部破片を整形して円盤状にしたもので、穿孔されている。縁辺に未加工の部分が残ることから、未製品の可能性がある。(芝田)

表IV-6-7 包含層掲載石器等一覧(1)

料	分	種	試験・測料	層	位	長さ×幅×厚さ (cm)	重量(g)	石	質	備	考
1	石	鏃	L14d・5	Ⅲ層		(1.95)×1.60×0.30	(0.7)	粘板岩		欠	損品
2	石	鏃	P16d・2	V層中		2.53×2.10×0.48	1.9	粘板岩			
3	石	鏃	K15d・13	V層下		2.22×1.78×0.34	1.0	黒曜石			
4	石	鏃	M15b・10	V層下		(2.60)×1.80×0.37	(1.0)	黒曜石		欠	損品
5	石	鏃	J25b・1	Ⅲ層		3.65×1.55×0.40	1.7	黒曜石			
6	石	鏃	L12c・1	Ⅲ層		3.70×1.35×0.40	1.3	黒曜石			
7	石	鏃	I11b・2	V層中		(3.64)×1.30×0.39	(1.4)	黒曜石		欠	損品
8	石	鏃	J11c・3	V層下		(3.64)×1.30×0.39	(1.4)	黒曜石		欠	損品
9	石	鏃	K15a・17	V層中		(3.78)×1.46×0.37	(1.7)	黒曜石		欠	損品 被熱
10	石	鏃	J12a・2	Ⅲ層		(4.20)×1.39×0.38	(2.1)	頁岩		欠	損品
11	石	鏃	J13d・5	V層中		(3.90)×1.00×0.50	(1.6)	黒曜石		欠	損品
12	石	鏃	K11d・8	V層下		(4.20)×1.55×0.51	(2.3)	黒曜石		欠	損品
13	石	鏃	J12b・6	V層下		(4.90)×1.25×0.60	(2.5)	黒曜石		欠	損品
14	石	鏃	I23c・5	Ⅵ層		2.60×(2.40)×0.38	(0.6)	黒曜石		欠	損品
15	石	鏃	J9a・2	V層中		2.38×0.94×0.39	0.7	黒曜石			
16	石	鏃	I11c・4	V層上		3.00×1.60×0.49	1.4	黒曜石			
17	石	鏃	M16b・3	Ⅳ層		(2.78)×1.52×0.33	(1.2)	チャート		欠	損品
18	石	鏃	J11c・7	V層下		2.77×2.61×0.50	1.2	黒曜石			
19	石	鏃	M16a・2	Ⅲ層		(3.66)×2.07×0.43	(2.0)	黒曜石		欠	損品
20	石	槍・ナイフ	M23b・1	Ⅵ層		4.48×2.76×0.59	4.9	黒曜石			
21	石	槍・ナイフ	N17d・4	V層中		4.80×2.79×0.82	6.4	黒曜石			
22	石	槍・ナイフ	I10a・16	V層上		4.90×2.26×0.80	5.0	黒曜石			
23	石	槍・ナイフ	I12c・2	V層中		(5.30)×2.87×0.73	(8.7)	黒曜石		欠	損品
24	石	槍・ナイフ	K12a・7	V層中		(5.40)×2.90×0.88	(12.0)	黒曜石		欠	損品
25	石	槍・ナイフ	O19a・1	V層中		5.58×2.30×0.82	(6.3)	黒曜石			
26	石	槍・ナイフ	K11d・1	Ⅲ層		(10.05)×3.90×1.03	(38.7)	黒曜石		欠	損品
27	石	槍・ナイフ	N13d・4	V層中		(7.00)×4.35×1.20	(34.5)	黒曜石		破	片
28	石	鏃	J14b・1	Ⅲ層		4.20×1.50×0.96	5.9	メノウ			
29	石	鏃	M14a・5	V層中		(3.38)×1.65×0.56	(2.1)	黒曜石		欠	損品
30	石	鏃	I12b・8	V層中		(3.10)×2.54×0.68	(3.7)	黒曜石		欠	損品
31	つまみ付ナイフ		M18c・1	Ⅲ層		2.00×3.44×0.53	2.0	頁岩			
32	つまみ付ナイフ		M19a・13	V層下		3.00×2.17×0.50	2.9	メノウ			
33	つまみ付ナイフ		N14c・3	Ⅳ層		5.63×1.81×0.82	9.5	頁岩			
34	つまみ付ナイフ		N15a・1	Ⅲ層		5.40×2.22×0.51	6.3	頁岩			
35	つまみ付ナイフ		J15d・5	V層中		5.18×2.45×0.93	10.2	黒曜石			
36	つまみ付ナイフ		K14a・13	V層中		4.25×2.93×0.96	9.2	黒曜石			
37	つまみ付ナイフ		K14c・4	V層中		4.84×2.98×0.82	9.5	黒曜石			
38	つまみ付ナイフ		K14c・5	V層中		4.90×2.70×0.82	9.0	黒曜石			
39	つまみ付ナイフ		M24b・1	Ⅲ層		8.63×2.70×1.07	19.3	黒曜石			
40	スクレイパー		L14b・3	Ⅲ層		4.80×2.10×1.10	8.3	黒曜石			

表Ⅳ-6-8 包含層掲載石器等一覧(2)

号	分類	出処・時期	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
41	ピエス・エスキュー	K14d・4	Ⅲ層	3.00×1.45×0.80	3.5	黒曜石	
42	ピエス・エスキュー	N15c・1	V層上	2.10×1.86×0.53	2	黒曜石	
43	R フレイク	L16a・7	V層下	4.48×2.90×1.05	10.2	黒曜石	
44	U フレイク	L14c・14	V層中	4.15×2.82×1.15	11.3	黒曜石	
45	両面調整石器	J11d・15 旧層(風乾)		11.55×5.82×2.15	134.8	チャート	
46	両面調整石器	N20c・4	VI層	5.54×3.45×1.62	29.9	黒曜石	
47	石 斧	K15a・5	V層上	8.40×2.45×1.20	41.2	片岩	
48	石 斧	L14a・9	V層中	9.10×2.22×1.50	53	片岩	
49	石 斧	L12c・10	V層中	11.50×2.96×1.55	73.2	泥岩	被熱
50	石 斧	L14c・15	V層下	8.65×3.70×1.45	76.2	千枚岩	
51	石 斧	M16d・11 旧層(風乾)		10.20×3.80×1.70	97.6	千枚岩	
52	石 斧	K16b・2	V層下	(9.80)×4.02×1.95	(136.4)	蛇紋岩	破損品
53	石 斧	J15a・4	V層下	17.56×5.70×3.76	640	泥岩	
54	石 斧	L14b・5	V層中	11.90×(4.30)×1.40	(118.1)	泥岩	破損品
55	石 斧	K15b・6	V層上	14.32×6.35×2.90	326.8	礫岩	未製品 M19a・10と接合
56	石 斧	J11d・16 旧層(風乾)		22.55×7.90×4.00	980	凝灰岩	未製品 L19c・2と接合
57	たたき石	J14a・1	Ⅲ層	18.80×6.60×2.20	373.6	不明	石斧未製品を転用 J14a・6と接合
58	たたき石	P15d・1	Ⅲ層	12.40×5.20×3.00	294.1	片岩	石斧未製品を転用 被熱
59	たたき石	I9a・6	V層上	(12.90)×4.20×2.70	(212.4)	砂岩	破片
60	たたき石	I12b・4	V層下	12.40×5.20×3.00	845	千枚岩	K12a・5と接合
61	たたき石	J11d・6	V層下	18.10×5.60×3.10	320.8	流紋岩	
62	たたき石	M13a・7	V層下	16.60×5.40×(4.00)	496.1	泥岩	破損品 K14b・10, M12・7と接合
63	たたき石	J11d・4	V層上	29.50×10.61×5.12	1785	凝灰岩	破損品 J11d・9他12点と接合 被熱
64	たたき石	I11c・1	V層中	14.40×9.40×(6.90)	(1320.0)	安山岩	破損品
65	たたき石	J11a・3	V層中	7.70×6.90×(4.70)	(377.8)	礫岩?	破損品
66	くぼみ石	L12b・5	V層中	10.10×6.50×(3.00)	(282.6)	砂岩	破損品
67	くぼみ石	K15d・18	V層中	(11.50)×(8.30)×2.60	(222.7)	砂岩	破損品
68	すり石	K14a・7	V層上	21.39×(7.87)×4.51	(1692.0)	片麻岩	破損品 J14c・2他7点と接合 被熱
69	すり石	L15b・8	V層下	11.80×4.22×1.87	169.1	片麻岩	
70	すり石	N16b・1	V層中	9.23×10.38×3.19	540.2	片麻岩	
71	すり石	M13d・7	V層下	7.74×15.19×4.65	812	砂岩	
72	北海道式石冠	M19c・2	V層中	8.20×11.60×6.40	820	砂岩	被熱
73	北海道式石冠	M14d・13	V層上	9.90×12.60×5.60	940	凝灰岩	被熱
74	北海道式石冠	I11d・1	V層中	10.90×13.70×3.50	900	砂岩	被熱
75	石 鏃	K13a・12	V層中	(7.85)×(14.70)×1.20	(196.5)	砂岩	破損品 K13a・13, K13d・3と接合
76	砥石	I12c・6	V層下	(8.92)×8.41×2.29	(163.2)	砂岩	破片
77	砥石	L14a・15	V層下	(10.30)×(7.71)×4.21	(223.5)	砂岩	破片
78	砥石	I12c・7	V層下	12.20×5.00×2.00	133.2	砂岩	J12d・2と接合
79	台 石	L18d・1	攪乱	39.20×25.40×10.10	12600	閃綠岩	
80	台 石	K12a・1	IV層	21.50×17.90×8.90	5300	安山岩	
81	再生土製円盤	K15c・8	V層中	4.18×4.42×2.20	29.5		土器底部片に穿孔



## V 宮戸3遺跡

### 1 調査の概要

宮戸3遺跡は鶴川市街の南東4.5km、海岸線から4km内陸に位置する。台地はイモッペ川によって開析されており、その左岸、平野に面した、標高15~20m台地上に立地する。北海道教育委員会による平成11年度の試掘調査の結果に基づき、調査区を設定した。調査面積は3,600m<sup>2</sup>である。

調査区には緩やかな沢状地形がひとつ取まる形となっている。調査区南西へり、およそ170mは上面がローム質土まで削平されている。地元での見聞によると宅地造成の為という事であった。

調査区の東端、およそ50mはイモッペ川によって開析された急斜面である。斜面の下はイモッペ川の氾濫源であり、低湿地である。木製品等、遺物について、調査、確認したが、木製遺物、および石器等の出土はなかった。表土除去をすると、近現代の打ち込み柱の痕跡と思われる、直線的な配列を持った小柱穴群と、芋穴の可能性が高い土壌を多数検出した。さらに、羊が埋められた土壌を1基検出した(E10グリッド)。いずれも除去した表土の上からの掘り込みである。それらの概略の配置については、図V-3-1に示した。包含層、基本層序・層の黒色土は50cm以上の堆積が平均的である。遺物は層下位からの出土が主で、上位のものは風倒木等の攪乱によって上がってきた可能性が高い。又、基本層序V層中位~下位にかけて、土器似た質感の、黄褐色の凝灰岩が多く含まれているところどころ、それが、V層中位まであがっていた。分布の傾向としては、大半が流れて沢地形の底にたまっているが、傾向としてTピットの位置に対応し、Tピットの掘り込み面と同じ層位から出土した事から、遺構の掘りあげ土に混じってあがった可能性がある。

検出した遺構はTピットが32基、焼土が2か所である。掘り下げ状況の観察からTピットの掘り込みは、すべてについて、V層の中位から下位にかけてであり、Tピットの掘り込み面は焼土より高い。TピットはV層中位~下位、焼土はV層下面~VI層上面である。F-1は縄文時代前期前半の遺構で、F-2は周辺の出土遺物から縄文時代早期中葉~後葉の可能性がある。Tピットの時期を決定できる

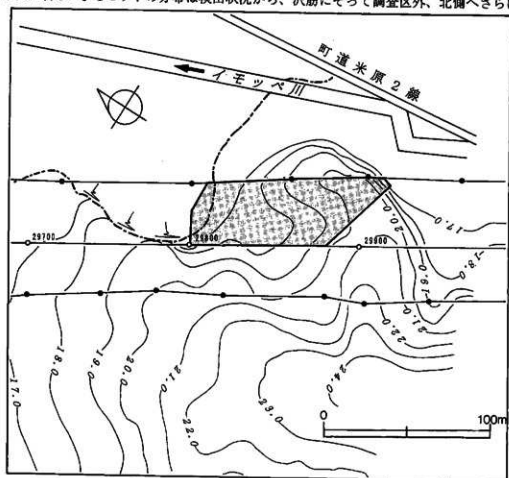
表V-1-1 検出遺構数一覧

検出層位	Tピット(TP)	焼土(F)	遺構数
V層下位	32	1	33
VI層上面		1	1
合計	32	2	34

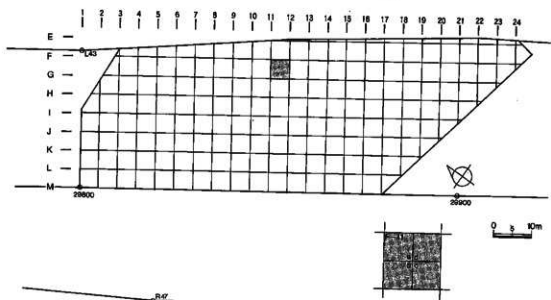
表V-1-2 出土遺物一覧

土 器			石 器 等													
分 類	点 数	点 数	分 類	点 数	点 数											
遺構	包含層	遺構	包含層	遺構	包含層											
I層a類	32	石	鏃	37	石	斧	17									
I層b類	471	石	槍・ナイフ	2	た	た	き	石	16							
I層b1類	472	石	鏃	3	く	ぼ	み	石	2							
I層b2類	426	つ	まみ	付	き	ナイフ	11	す	り	石	3					
I層b4類	428	ス	ク	レ	イ	バ	ー	1	20	北	海	道	式	石	器	4
II層a類	3	317	ビ	エ	ス	キ	ー	ユ	11	瓦	石	18				
			R	フ	レ	イ	ク	19	台	石	7					
			U	フ	レ	イ	ク	53	礫・礫片(凝灰岩)	5	15948					
			フ	レ	イ	ク	2	173	礫・礫片(その他)	1	733					
計	4	2146	計					9	17077							
土器計	2150		石器等計					17086								
			總計					19236								

遺物の出土状況はないが、苫小牧東部の遺跡群や千歳市の類例から、縄文時代中期後葉から後期初頭と考える。調査区内の状況からは、遺物の出土が主にV層下位からVI層にかけてで、縄文時代前期よりは確実に新しい。Tピットの分布は検出状況から、沢筋にそって調査区外、北側へさらに延びる



図V-2-1 調査区周辺の現況図



図V-2-2 調査区設定図

可能性がある。

出土遺物は縄文時代早期から前期前半にかけてのものである。早期前半のものは、一個体について同一個体破片のみの出土である。調査区際での出土で、調査区外、北側へ分布が広がる可能性がある。出土量としては縄文時代早期後半、コックロ式と東鋼路Ⅳ式が多い。特にコックロ式は、東鋼路Ⅲ式類似から、中茶路式に似たものまでとバラエティに富む。また前期前半、静内中野式と網文式土器が出土した。(大泰司)

## 2 調査区の設定

基本図には北海道開発局室蘭開発建設部の「日高自動車道鷗川町田浦米原間用地測量業務現況平面図1,000分の1図」を使用した。工事予定中央線のSTA.29800とSTA.30000を通る線を基軸のMラインとして5m方眼を設定した。この方眼は北東端交点のアルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称し(例:F 11またはF-11)、さらに必要に応じて2.5m方眼に4分割し小発掘区とした。小発掘区は北西端から反時計回りにa、b、c、dと呼ぶ(例:F11aまたはF-11-a)。

平面直角座標系第ⅩⅡ系の各座標は以下の通り

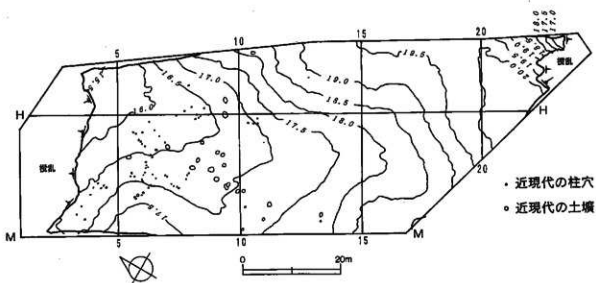
STA.29800 (調査区杭名M-1)	X = -159294.9821	Y = -22088.9070
STA.29900	X = -159379.5319	Y = -22035.5091
STA.30000	X = -159464.0816	Y = -21982.1112

## 3 調査の方法

調査範囲は鷗川により形成された沖積平野に面した台地斜面の北に開いた沢地形部分である。表土を除去すると調査範囲北西部分と東南部分は削平され、北西部分ではTピットが露出していた。

### 包含層調査

調査範囲の北東側の列であるGラインから北東と北西側の列である4ラインから北西の部分を中心に掘り下げたところ、Tピット数基を検出した。また、F-5~7グリッドのV層下位では縄文時代早期後半の土器片を中心とした遺物が出土した。これにより、本来的な遺物包含層であるV層およ



図V-3-1 III層上面地形図

び漸移層であるVI層が、試掘資料および積算よりも大幅に厚いことが判明し、沢部分にTピット群が分布していること、地形的に低い部分に遺物が出土することが想定された。残りの調査予定日数と土量を勘案して、Kラインより北東側、I2ラインより北西側の沢部分から掘り下げ、漸次掘り下げる範囲を広げていった。なお、地形的な制約から掘り出した土は調査範囲の南側と南西側に搬出せざるを得ず、Kラインより南西側は最後に調査を行った。

Ⅲ～VI層の各層は調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、必要に応じてスコップ、ジョレン、移植ゴテ、三角ホー、竹べらなどを用いた人力による手掘り作業により掘り下げた。本来的な遺物包含層であるV層については細かく区分（上面、上位、中位、下位）して調査した。調査範囲北東隅の低湿地部分の調査は湧水をポンプで排水しながらスコップで掘り下げた。

#### 遺構調査

包含層調査時に落ち込みが確認されたTピットについては、その平面形短軸で半裁し土層観察用のベルトを残して掘り下げた。想定される底面等の検出は、土層観察用のベルトに接してサブトレンチを掘るなどして慎重に行った。

#### 遺物の取り上げ

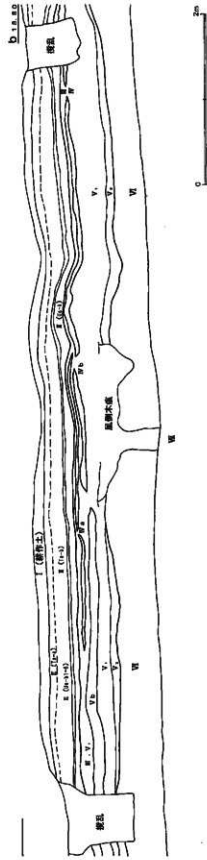
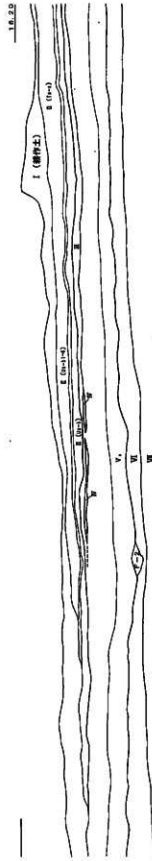
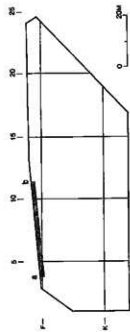
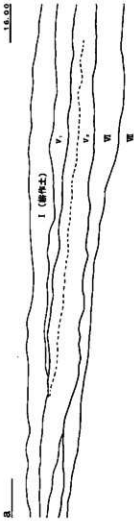
包含層の遺物は位置や層位を記録し、小発掘区ごとに取り上げた。遺構の遺物は実測図により位置、層位、標高を記録して取り上げた。出土状況に応じて写真や出土状況図など詳細な記録化に努めた。

#### 遺物整理の方法

野外作業と並行して現地でも水洗、注記作業を行った。小片や微細なものを除く大多数の遺物には、遺跡名略号、発掘区名（遺構名）、層位名、遺物番号を記入した。現地では、遺物収集帳点検、補正（遺物台帳作成）、大まかな遺物の分類まで行った。冬期の室内作業で、土器の接合・復元、石器や剥片類、礫の接合、土器・石器の実測・製図、集計、写真撮影、記録類の整理を行った。（録田）

#### 4 土層

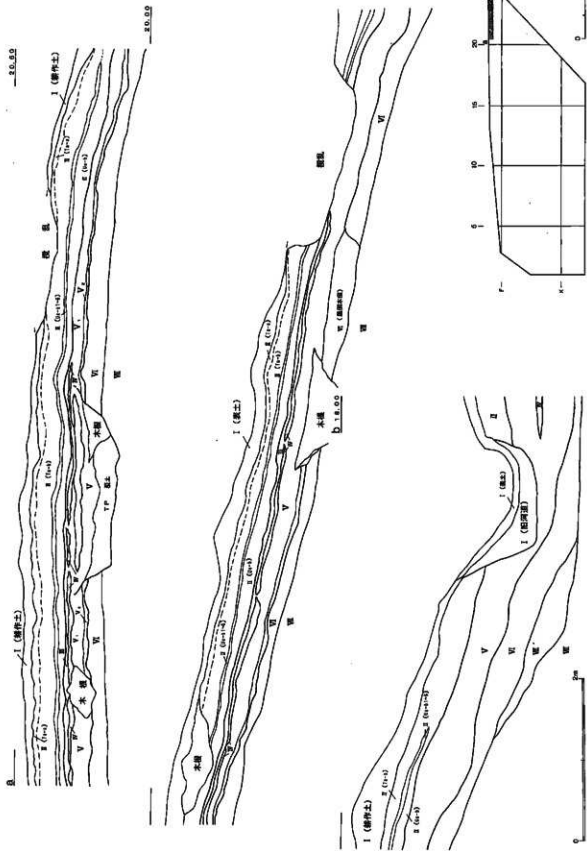
宮戸3遺跡は調査区の東西を貫く一つの沢状地形があり、その東端ではイモツバ川の氾濫源である低湿地が僅かにかかる。調査区内における比高差はおよそ10m程あり、土層の堆積状況も地形により同じ遺跡内においても若干変化がある。本遺跡のIV層としたものは米原3遺跡と同様に2枚検出した。B-Tmが混入する層は米原3遺跡のIV層と対比する層であると考えた。それより下に位置するTa-c層と現地で判断したものについては現在テフラを分析中である。V層においては、黒色味が強い上位、中位をVa層、褐色味が強い下位をVb層とした。漸移層VI層は沢状の低いところでは厚くなり、Ⅲ～V層を含め包含層は1m程になる。低湿地においては遊離鉄により土が赤褐色化する。氾濫時に流路となった旧河遺跡を1ヶ所検出した。（袖岡）



図V-4-1 メインセクション(1)







図V-4-4 メインセクション (4)



## 5. 遺構および遺構出土の遺物

## (1) 概要

検出した遺構はTピットが32基、焼土が2か所である。Tピットの掘り込み面は、すべてについて、V層の中間から下位と想定できる。基本層序でV2層とした層位の上面またはやや上と考える。Tピットの掘り込み面は層位的には、焼土よりやや高い。V層下位検出のF-1は周囲の出土遺物から前期前半であり、VI層上面検出のF-2は周辺の出土遺物から早期中葉の可能性がある。Tピットの時期を決定できる遺物の出土状況はなかったが、苫小牧市東部や千歳市の傾向から、縄文時代中期後葉

表IV-5-1 検出遺構一覧

遺構名	遺構種類	発掘区	検出層位	規模 (m)	長軸方向	時期
TP-1	Tピット	H2a,H2b,H2c,H2d	V層上面	1.56×0.59/1.71×0.28/(1.12)	N-52°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-2	Tピット	G1c	V層上面	1.09×0.22/1.32×0.21/(0.58)	N-46°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-3	Tピット	H3a,H3b,H3c,H3d	V層下位	3.42×1.23/3.42×0.24/(1.32)	N-72°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-4	Tピット	J3a,J3b,J3c,J3d	V層下位	2.39×0.99/1.79×0.26/(1.08)	N-73°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-5	Tピット	F6a	V層下位	1.80×1.17/1.54×0.44/(1.28)	N-66°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-6	Tピット	H3c,H4b,H4c,I3d,J4a,I4d	V層下位	3.12×1.38/2.74×0.21/(1.51)	N-14°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-7	Tピット	H5a,H5b,H5c,H5d	V層下位	2.88×1.37/2.56×0.32/(1.22)	N-48°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-8	Tピット	I10a,I10d	V層下位	3.05×1.23/2.95×0.26/(1.28)	N-38°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-9	Tピット	G6b,G6c,H6a	V層下位	2.53×0.73/2.14×0.18/(1.12)	N-63°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-10	Tピット	G6c	V層下位	1.82×0.86/1.44×0.18/(0.94)	N-6°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-11	Tピット	H7a,H7b,H7d	V層下位	2.88×1.09/2.28×0.21/(1.27)	N-55°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-12	Tピット	F7b,G7a,G7d	V層下位	2.78×0.95/2.54×0.26/(1.31)	N-0°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-13	Tピット	I8b,J8a	V層下位	1.65×1.08/1.10×0.22/(1.12)	N-78°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-14	Tピット	G8b	V層下位	1.87×1.04/1.61×0.28/(1.10)	N-90°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-15	Tピット	G7a	V層下位	2.48×1.30/(1.32)×0.46/(1.22)	N-79°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-16	Tピット	L9a,L9b,L9c,L9d	V層下位	2.50×1.45/2.42×0.17/(1.51)	N-38°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-17	Tピット	H9c,H10b	V層下位	3.02×1.33/3.23×0.23/(1.30)	N-43°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-18	Tピット	D19c,D20b,E19d,E20a	V層下位	(2.98)×1.09/1.62×0.17/(1.60)	N-46°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-19	Tピット	G19c,G20b	V層下位	3.14×1.05/2.90×0.42/(1.16)	N-34°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-20	Tピット	L12d,L13a	V層下位	1.79×0.97/1.53×0.36/(1.07)	N-62°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-21	Tピット	I17c,I18b	V層下位	3.24×0.68/3.30×0.20/(1.36)	N-17°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-22	Tピット	K11c,K11d,K12a,K12b	V層下位	2.48×0.67/2.46×0.19/(1.00)	N-58°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-23	Tピット	F16b,F16c	V層下位	2.63×1.01/2.95×0.22/(1.08)	N-34°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-24	Tピット	H10b,H10c,I10a	V層下位	1.73×1.02/1.60×0.26/(1.20)	N-90°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-25	Tピット	J11a,J11d	V層下位	1.41×0.84/1.44×0.30/(1.18)	N-60°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-26	Tピット	L10d,L11a,L11d	V層下位	3.24×1.07/3.00×0.30/(1.33)	N-45°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-27	Tピット	K16d,K17a	V層下位	3.36×0.98/2.98×0.13/(1.18)	N-46°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-28	Tピット	J6c,J7b	V層下位	2.80×1.24/1.79×0.36/(1.41)	N-17°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-29	Tピット	L7b,L7c,M7a	V層下位	2.60×0.99/1.88×0.25/(1.54)	N-70°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-30	Tピット	L6c	V層下位	1.75×0.74/1.46×0.20/(0.85)	N-82°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-31	Tピット	J4b,J4c	V層下位	2.96×0.65/3.00×0.21/(1.09)	N-45°-W	縄文時代中期後半-後葉期
TP-32	Tピット	K13a,K13d	V層下位	1.48×0.68/1.53×0.33/(0.94)	N-63°-W	縄文時代中期後半-後葉期
F-1	焼土	F16d	V層下位	0.80×0.51/0.10	N-23°-W	縄文時代前期前半
F-2	焼土	F3d	VI層上面	(0.40)×(0.35)/0.13	方向性なし	縄文時代前期前半

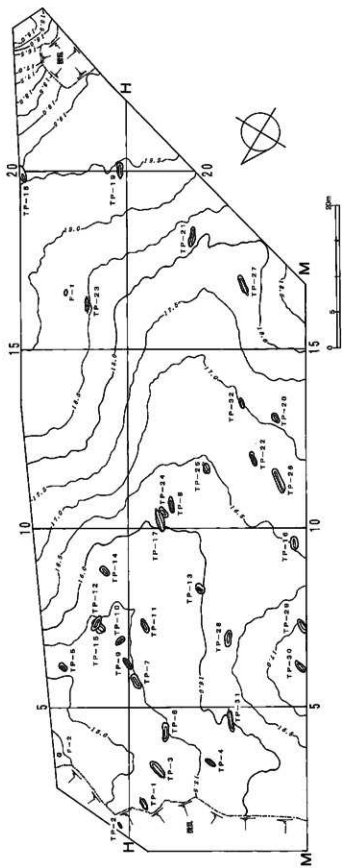


圖 V-5-1 遺構位置圖

から後期初頭と考える。遺跡の情報のみから判断するならば、Tピットの掘り込み面に対して、遺物の出土層位はより下位である。それは、V層下位であるV2層からVI層にかけての出土であり、土器については縄文時代前期以前のものみの出土である。そこで、Tピットは縄文時代前期よりは新しい事は確実なものとす。さらに、配置等を考慮して、Tピットは調査区内の沢地形と関連するものと想定した。その事を踏まえると、Tピットは沢筋にそって調査区外、北側へ延びる可能性が高い。

## (2) Tピット

宮戸3遺跡において、合計32基のTピットを検出した。

基本層序においては黄褐色のローム質土をⅦ層とした。しかし、Tピットの検出により、1m近くⅦ層を掘り込んだ結果、グライ化等の多様性が見られた。そこで大きく3種類に分けて図中に表した。Sp-f aと考えられる小粒径のパミスによって構成される層位をⅦa層。グライ化した青灰色のものをⅦb層、橙色味をおびた粘土の堆積で、硬くしまった層をⅦc層として表現している。

形状は横断面を明瞭に造りだすものと、不明瞭なものの、大きく2種類に分かれる。掘り込み面については基本層序V層中位より下、V層下位より上と考える。V2層のわかる場所ではV2層上面またはやや上である。

包含層出土遺物はV層下位からの出土が多い。その層位から出土する土器は縄文時代早期と前期のものである。したがってTピットは、縄文時代前期より確実に新しい時期の遺構と判断した。千歳市、苫小牧市検出の、類型を考慮すると縄文時代中期から後期初頭のものとして推定する。これらについては、項目の末に簡単にまとめるものとして、以上をもって各Tピットの時期とし、それぞれの事実記載のところに時期の項目は省略する。

遺物については、TP-18に流入による遺物が見られた。ほかのTピットについては遺物の出土はなく、TP-18以外について、遺物の項目を省略した。

(図中におけるⅦ層の表記についての凡例)

Ⅶ：黄褐色ローム質土

Ⅶa：橙色味をおびた黄色パミス

Ⅶb：黄褐色ローム質土がグライ化したもの

Ⅶc：褐色味の強い黄褐色粘土 しまりがよい

### TP-1 (図V-5-1・2/表V-1-1・2、-5-1/図版33)

位置：H2 a, b, c, d 規模：1.56×0.59/1.71×0.28/(1.12)m

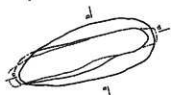
特徴：火山灰除去の段階で、調査区の3ラインより西側について、包含層の上面が削平されている事が判明した。火山灰除去終了後、H2グリッドについて、Ⅶ層の中位に、黒色土の長楕円形をした落ち込みを検出した。短軸方向に土層確認の為にベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、横底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はオーバーハングしている。短軸方向の断面形態は、横底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半分は崩落のため、外へ向かって開く形状をしている。横断面はおおよそ平坦だが、中央が微妙に窪む。

### TP-2 (図V-5-1・2/表V-1-1・2、-5-1/図版33)

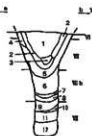
位置：G1 c 規模：1.09×0.22/1.32×0.21/(0.58)m

# TP-1

↑12a



↑12a



↑18.50m

TP-1土層

- 1 腐植土：しまりあり (腐葉のため)
- 2 腐植土：しまりあり (腐葉のため) 厚さ2~3cm  
腐植土層にL.V中心
- 3 腐植層土：しまりあり ロームブロックの層
- 4 中腐植層土：しまりあり (腐葉のため)
- 5 腐植層土：しまりあり ロームブロックの層
- 6 腐植層土：しまりなし
- 7 腐植層土：しまりなし
- 8 腐植層土：しまりなし
- 9 腐植層土：しまりなし
- 10 腐植層土：しまりなし
- 11 腐植層土：しまりなし
- 12 腐植土：しまりなし

# TP-2



↑12a



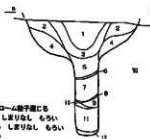
↑18.50m

TP-2土層  
腐植土はスグツまる

↑12a



# TP-3

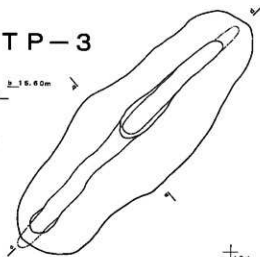


↑12a

↑18.50m

TP-3土層

- 1 腐植土：腐植層V層全体
- 2 腐植層土：腐植2cmのローム層に属する
- 3 腐植層土 (より腐植層側)：腐植2cmのローム層に属する
- 4 腐植層土：腐植2cmのローム層に属する しまりなし 6.5%  
腐植層土：腐植2cmのローム層に属する しまりなし 6.5%
- 5 腐植層土：腐植2cmのローム層に属する しまりなし 6.5%
- 6 腐植土：腐植層V層全体 しまりなし 6.5%
- 7 腐植層土：しまりなし しまりなし 6.5%
- 8 腐植土：腐植層V層全体 しまりなし 6.5%
- 9 腐植層土：腐植2cmのローム層に属する しまりなし 6.5%
- 10 腐植土：腐植層V層全体 しまりなし 6.5%
- 11 腐植層土：しまりなし 6.5%
- 12 腐植土：腐植層V層全体



↑12a



↑18.50m

図V-5-2 TP-1~3

特徴：火山灰除去の段階で、調査区の3ラインより西側について、包含層の上面が削平されている事が判明した。火山灰除去終了後、G1グリッドについてⅦa層の上面において、黄褐色土の長楕円形をした落ち込みを検出した。短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、黄褐色土を掘り下げたところ、Ⅶa層を構成する小粒径のバミスが詰まっていた。小型の落ち込みであり、土質がもろいため、即、完掘に移った。落ち込みの覆土を掘り下げたところ、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、墳底部と壁面であると判断した。土層は崩落と流入の連続によって成り立っていた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はオーバーハングしている。短軸方向の断面形態は、墳底部から垂直に立ち上がる。遺構の開口部は崩落のため、外へ向かって開く形状をしている。墳底面はおおよそ平坦だが、中央が微妙に窪む。

TP-3 (図V-5-1・2/表V-1-1・2、-5-1/図版34)

位置：H3a, b, c, d 規模：3.42×1.23/3.42×0.24/(1.32)m

特徴：包含層調査の際、H3グリッド、基本層序V層下位にて長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、墳底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はオーバーハングしている。短軸方向の断面形態は、墳底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半分は崩落が著しく、外へ向かって大きく開く形状である。墳底面は東側半分が一段低くなっており、全体にも東側が低い。

TP-4 (図V-5-1・3/表V-1-1・2、-5-1/図版34)

位置：J3a, b, c, d 規模：2.39×0.99/1.79×0.26/(1.08)m

特徴：包含層調査の際、J3グリッド、基本層序V層下位にて長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、墳底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はオーバーハングしている。短軸方向の断面形態は、墳底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半分は崩落が著しく、外へ向かって大きく開く形状である。特に南西端の崩落が著しい。墳底面はおおよそ平坦だが、中央のやや北東よりが微妙に窪む。

TP-5 (図V-5-1・3/表V-1-1・2、-5-1/図版35)

位置：F6a 規模：1.80×1.17/1.54×0.44/(1.28)m

特徴：包含層調査の際、F6グリッド、基本層序V層下位にて楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、墳底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は微妙にオーバーハングしている。短軸方向の断面形態は、墳底部から垂直に立ち上がる。遺構の上部は崩落のため、外へ向かって開く形状をしている。墳底面はおおよそ平坦である。

TP-6 (図V-5-1・4/表V-1-1・2、-5-1/図版35)

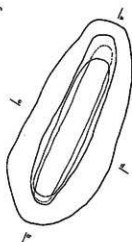
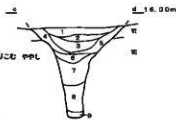
位置：H3c, H4b, c, I3d, I4a, d 規模：3.12×1.38/2.74×0.21/(1.51)m

# TP-4

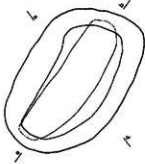
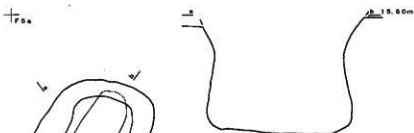


## TP-4土層説明

- 1 黒色土：包含層V層全体 縦横を包びる
- 2 黄褐色土（腐葉を包びる）：総厚2-3cmのV1土層下、および黒色土が腐葉に入り込む 中少し多量
- 3 黒褐色土：2土の境界に連続してある
- 4 黄褐色土：中少し多量 総厚2-3cmの黒色土層が厚めに包む
- 5 黄褐色土：4に包むが腐葉が薄い
- 6 黄褐色土：しまりなし 包含層V層の腐葉
- 7 黄褐色土：しまりなし 総厚2-3cmの黒色土層が厚めに包む
- 8 黄褐色土：しまりなし 中少し多量 総厚2-3cmの黒色土層が厚めに包む
- 9 黄褐色土：しまりなし 腐葉が薄い 黄褐色土が腐葉に入り込む

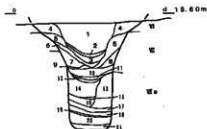


# TP-5



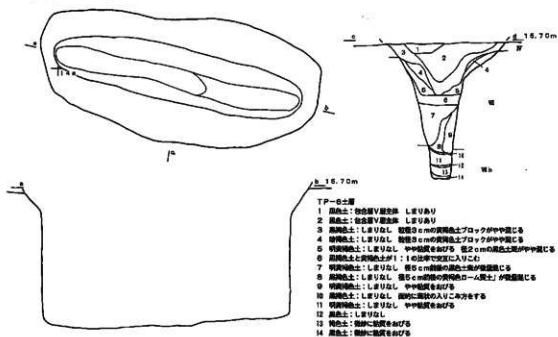
## TP-5土層

- 1 黒色土：包含層V層全体 中少し多量
- 2 黄褐色土：腐葉によく包む
- 3 黒色土：包含層V層全体 中少し多量
- 4 黄褐色土：包含層V層によく包む土質 中少し多量
- 5 黄褐色土：腐葉に包まれておる
- 6 黒色土：包含層V層全体 中少し多量 腐葉に包まれておる
- 7 黄褐色土：しまりなし 総厚2-3cmの黒色土層が厚めに包む
- 8 黄褐色土：しまりなし 中少し多量 総厚2-3cmの黒色土層が包む
- 9 黒色土：包含層V層全体 中少し多量
- 10 二層V層の黒色土：しまりなし 中少し多量 総厚2-3cmの黒色土層が包む
- 11 黄褐色土：しまりなし
- 12 黒色土：しまりなし
- 13 黄褐色土：腐葉に包まれておるが腐葉が薄い
- 14 黄褐色土：しまりなし 中少し多量
- 15 黒色土：しまりなし 中少し多量
- 16 二層V層の黒色土：しまりなし 中少し多量
- 17 黒色土：しまりなし
- 18 黄褐色土：しまりなし 腐葉に包まれておる
- 19 黒色土：しまりなし
- 20 黄褐色土：しまりなし 腐葉に包まれておる
- 21 黒色土：腐葉を包む

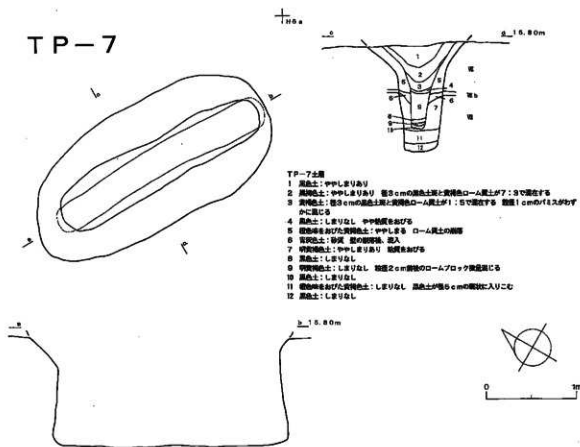


図V-5-3 TP-4・5

## TP-6



## TP-7



図V-5-4 TP-6・7

特徴：包含層調査の際、H4、I4グリッドにまたがった位置で、かつ基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は壊底からまっすぐ立ち上がる。短軸方向の断面形態は、壊底部から微妙に開きながら立ち上がる。遺構の上部は崩落が著しく、外へ向かって大きく開く形状である。壊底面は北西側半分が一段低くなっており、全体にも北西側が低い。

TP-7 (図V-5-1・4/表V-1-1・2、-5-1/図版36)

位置：H5 a, b, c, d 規模：2.88×1.37/2.56×0.32/(1.22) m

特徴：包含層調査の際、H5グリッド、基本層序V層下位にて長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、掘り下げている最中に、入れ子状にTピットが入り込んでいるようなしまった箇所(覆土10層直下)を検出した。確認したところ、覆土7層は東側からロームが崩落し、流入した土層ではあるがもうひとつの遺構は確認できなかった。さらに掘り進めたところ、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は微妙にオーバーハングしている。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半部は崩落のため、外へ向かって開く形状をしている。壊底面はおおよそ平坦である

TP-8 (図V-5-1・5/表V-1-1・2、-5-1/図版36)

位置：I10 a, d 規模：3.05×1.23/2.95×0.26/(1.28) m

特徴：包含層調査の際、I10グリッド、基本層序V層下位にて長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、黒色土を掘り下げた。当初は覆土6層と7層を覆土と想定して掘り進めたが、覆土10層と11層がずり落ちる様に崩落した後の壁面であることがわかった。最終的には10層と11層をはずした上での壁面と壊底部を確認する事となった。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。当初の壁面は、覆土10～13層の内側の層境であると判断した。人為的な土壌であり、その形状からTピットと判断した。長軸両端はオーバーハングしている。短軸方向の断面形態は、壊底部からおおよそ垂直に立ち上がっていたと想定できる。遺構の上部は崩落のため、外へ向かって開く形状している。壊底面は中央から北西よりのところが窪む。

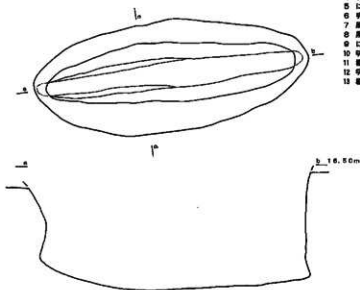
TP-9 (図V-5-1・5/表V-1-1・2、-5-1/図版37)

位置：G6 b, c, H6 a 規模：2.53×0.73/2.14×0.18/(1.12) m

特徴：包含層調査の際、G6とH6グリッドにまたがったところで、基本層序V層下位にて長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は壊底部から開きながら立ち上がる。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半部は崩落のため、外へ向かって開く形状をしている。壊底



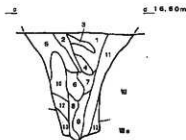
TP-8



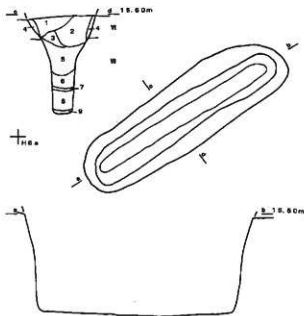
↑ 11.1a

TP-8土層

- 1 黒色土：自然層V遺跡跡 しまりあり
- 2 黒褐色土：径3cmのローム瓦土が散在しわずかに凝結
- 3 黄褐色土：断面1cmのバースが散在凝結
- 4 切取褐色ローム瓦土：ややしまり 平ラック状に凝結
- 5 細かい黄褐色土：しまりなし 径3cmのローム瓦土がわずかに凝結
- 6 切取褐色ローム瓦土：しまりなし 断面1~2cmのバースが散在凝結
- 7 黒色土：やや粗度をあげた 断面1~2cmのバースが散在凝結
- 8 黒色土：やや粗度をあげた 断面1~2cmのバースが散在凝結
- 9 細かい黄褐色土：しまりなし 径3cmの黒色土塊が散在凝結
- 10 切取褐色ローム瓦土：しまりあり 断面凝結している
- 11 粗度をあげた黄褐色土：しまりあり 断面凝結している
- 12 切取褐色土：しまりあり 凝結している
- 13 粗度をあげた黄褐色土：ややしまり



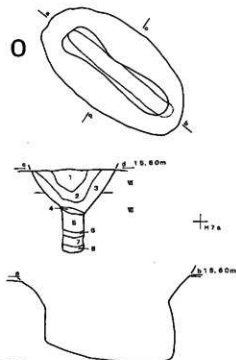
TP-9



TP-9土層

- 1 黒色土：0.2cmのバース散入りごと
- 2 黒色土：0.2cmのバース散入りごと 径3cmの切取褐色ローム瓦土に凝結
- 3 黄褐色土：断面のローム瓦土がブロック状に凝結する 径3cmの黒色土がわずかに凝結
- 4 切取褐色土：1~3層が断片的に凝結
- 5 黄褐色土：断面土塊がまばらに入りこむ
- 6 切取褐色土：しまりなし 断面凝結をあげた 径3cmのローム瓦土と、径3cmの黒色土塊がわずかに凝結
- 7 黒色土：断面をあげた 断面0.2cmのバース散在凝結
- 8 切取褐色土：断面をあげた
- 9 黒色土：断面をあげた 断面0.2cmのバース散在凝結

TP-10



TP-10土層

- 1 黒色土：自然層V遺跡跡 ややしまりあり
- 2 黒褐色土：断面にしまり 径3cmの切取褐色ローム瓦土が散在凝結
- 3 切取褐色ローム瓦土：径0.2cmのバース凝結
- 4 黄褐色土：しまりなし
- 5 切取褐色ローム瓦土：しまりなし 径3cmの黒色土塊に凝結
- 6 黒褐色土：しまりあり 7層との間に切取褐色ローム瓦土がややまばらに入りこむ
- 7 切取褐色ローム瓦土：しまりなし 径2~3cmの黒色土塊がわずかに凝結
- 8 黒色土：断面をあげた しまりなし

0 1m



図V-5-5 TP-8~10

面はおおよそ平坦である。

TP-10 (図V-5-1・5/表V-1-1・2、-5-1/図版37)

位置: G6c 規模: 1.82×0.86/1.44×0.18/(0.94)m

特徴: 包含層調査の際、G6グリッドの、基本層序V層下位において楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為にベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は微妙にオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。壊底面は南側へなだらかに低くなっている。

TP-11 (図V-5-1・6/表V-1-1・2、-5-1/図版38)

位置: H7a, b, d 規模: 2.88×1.09/2.28×0.21/(1.27)m

特徴: 包含層調査の際、H7グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為にベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は壊底部から開きながら立ち上がる。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。壊底面はおおよそ平坦だが、南西側がなだらかに低くなっている。

TP-12 (図V-5-1・6/表V-1-1・2、-5-1/図版38)

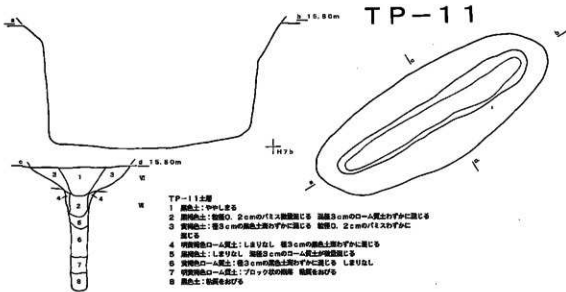
位置: F7b, G7a, d 規模: 2.78×0.95/2.54×0.26/(1.31)m

特徴: 包含層調査の際、G7グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形が交差をした形状の、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭にした。そこで、黒色味のより強い、南-北方向に長軸を持つ長楕円形プランの落ち込みについて、短軸方向に土層確認の為にベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は微妙にオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かって開く形状をしている。壊底面はおおよそ平坦だが、中央部が微妙に窪んでいる。

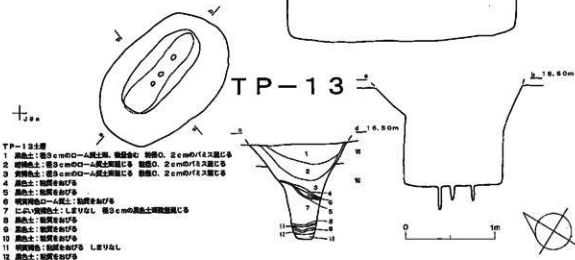
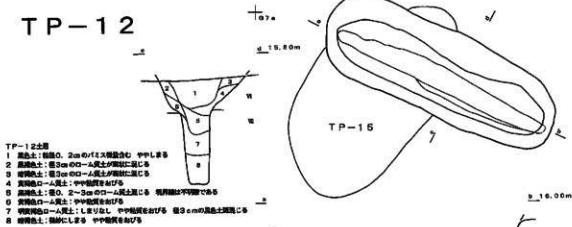
TP-13 (図V-5-1・6/表V-1-1・2、-5-1/図版39)

位置: I8b 規模: 1.66×1.08/1.10×0.22/(1.12)m

特徴: 包含層調査の際、I8、J6グリッドの、基本層序V層下位において楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為にベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は壊底部から垂直に立ち上がる。短軸方向の断面形態は、壊底部から開きながら立ち



TP-12



図V-5-6 TP-11~13

上がる。遺構の上半部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。墳底面はおおよそ平坦である。墳底部から、3箇所の黒色土落ち込みを検出した。長軸上におおよそ等間隔でならび、いずれも直径は4cm程度である。掘りぬいたところ先がとがった杭の痕であると同判断した。落とし穴と想定されているTピットの付属施設であり、逆杭の痕跡と考える。

TP-14 (図V-5-1・7/表V-1-1・2、-5-1/図版39)

位置: G8b 規模: 1.87×1.04/1.61×0.28/(1.10)m

特徴: 包含層調査の際、G8グリッドの、基本層序V層下位において楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、墳底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、墳底部から開きながら立ち上がる。遺構の上半部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。墳底面は中央部分が窪んでいる。

TP-15 (図V-5-1・7/表V-1-1・2、-5-1/図版40)

位置: G7b 規模: 2.48×1.30/(1.32)×0.46/(1.22)m

特徴: 包含層調査の際、G7グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形が交差をした形状の、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭にした。そこで、黒色味のより強い、南-北方向に長軸を持つ長楕円形プランの落ち込みについてまず調査した。その結果、TP-12であると判断した。次に東-西方向に長軸を持つ黒色土落ち込みについて、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、墳底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。切りあいからTP-12より古いものと判断した。長軸西端は微妙にオーバーハングする。東端については、TP-12に壊されている。短軸方向の断面形態は、墳底部から微妙に開きながら立ち上がる。遺構の上部は崩落によって、外へ向かって開く形状をしている。墳底面はおおよそ平坦である。

TP-16 (図V-5-1・7/表V-1-1・2、-5-1/図版40)

位置: L9a, b, c, d 規模: 2.50×1.45/2.42×0.17/(1.51)m

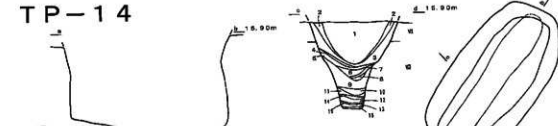
特徴: 包含層調査の際、L9から10グリッドにかけて、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、墳底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はよくオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、墳底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。墳底面はおおよそ平坦だが、中央部のやや東よりが、微妙に高くなっている。

TP-17 (図V-5-1・8/表V-1-1・2、-5-1/図版41)

位置: H9c, H10b 規模: 3.02×1.33/3.23×0.23/(1.60)m

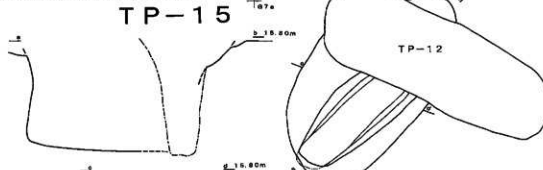
特徴: 包含層調査の際、H9グリッドの、基本層序V層下位においていびつな長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、東端

TP-14



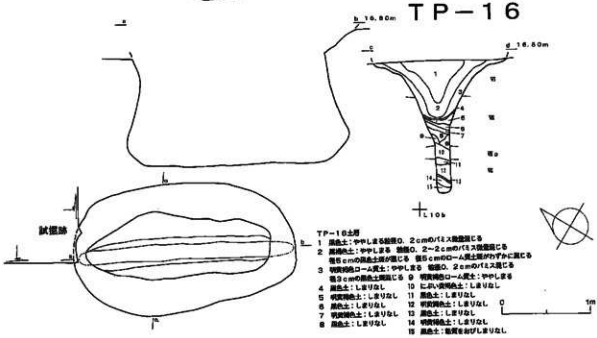
- TP-14土層
- 1 黒土：中しまりあり
  - 2 黒褐色土：中しまりあり 厚3cmのローム状土層に属する
  - 3 黄褐色土：中しまりあり 底質を粗粒におびる
  - 4 黄褐色土：しまりなし
  - 5 黄褐色土：しまりなし 厚3cmのローム状土層と同様の黄褐色土層がそれより上に分布する
  - 6 黄褐色土：しまりなし
  - 7 黄褐色土：しまりなし
  - 8 黄褐色土：しまりなし 中央に黒褐色土層に属する ローム状土層
  - 9 黄褐色土：しまりなし
  - 10 黒土：しまりなし
  - 11 黄褐色土：ローム状土層
  - 12 黄褐色土：ローム状土層
  - 13 黒土：底質をおびる
  - 14 黒土：底質をおびる
  - 15 黒土：底質をおびる
  - 16 黒土：底質をおびる

TP-15



- TP-15土層
- 1 黒土：中しまり
  - 2 黄褐色ローム状土：厚2-3cmの黄褐色土層に属する
  - 3 黄褐色土：厚2-3cmのローム状土層に属する
  - 4 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 5 黄褐色土：粗粒O、2cmのバク土層に属する
  - 6 黄褐色土：粗粒O、2cmのバク土層に属する
  - 7 黄褐色ローム状土：粗粒に粗粒をおびる
  - 8 黄褐色ローム状土：粗粒に粗粒をおびる
  - 9 黄褐色ローム状土：粗粒に粗粒をおびる
  - 10 黄褐色ローム状土：しまりなし
  - 11 黒土：しまりなし 底質をおびる
  - 12 黄褐色ローム状土：しまりなし 底質をおびる
  - 13 黒土：しまりなし 底質をおびる

TP-16



- TP-16土層
- 1 黒土：中しまり粗粒O、2cmのバク土層に属する
  - 2 黒褐色土：中しまり粗粒O、2-2cmのバク土層に属する
  - 3 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する 厚3cmの黒土層に属する
  - 4 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 5 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 6 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 7 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 8 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 9 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 10 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 11 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 12 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 13 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 14 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 15 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する
  - 16 黄褐色土：厚2-3cmの黒土層に属する

図V-5-7 TP-14~16

が別の黒色土落ち込みによって壊された、落ち込みであると判断した。色調について、より黒色味の強い、長楕円形の落ち込みをまず調査した。短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、黒色土を掘り下げた。まず覆土2層を追うように掘り下げたが、側面の壁である覆土3層、5層についてローム質土がずり落ちるような崩落をしめているものと判った。当初は入れ子状に入り込んでいる遺構の可能性について考えていたが3層と5層をはずした段階で、その可能性はないと判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は横底部から微妙にオーバーハングするが、ほぼ垂直に立ち上がる。短軸方向の断面形態は、構築直後の状態は示していないと考えるが、横底部からよく開きながらの立ち上がりである。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。横底部はおおよそ平坦だが、西へがなだらかに低く傾斜している。

**TP-18** (図V-5-1・8/表V-1-1・2、-5-1/図版41)

位置: D 19 c, D 20 b, E 19 d, E 20 a 規模: (298)×1.09/1.62×0.17/(1.60) m

特徴: 包含層調査の際、E 19 グリッド、調査区の壁際、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上りを示し、横底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸西端はオーバーハングする。東端は横底部から微妙に開きながら立ち上がる。短軸方向の断面形態は、横底部から垂直に立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。横底部はおおよそ平坦だが、中央部にかけてゆるやかに窪んでいる。西側上部は木の根が入り込んで壊されている(覆土13層に関連)。

遺物: 1はスクレイパー。縦長剥片の両側縁および上部に刃部を設けているもの。左側縁は外湾し、右側縁と上部は直線状である。左側縁と上部には使用による刃部の潰れが見られる。上下の端部は両面に細かな調整が施されている。上端は左斜方に突き出ており、つまみに近い形状になっている。下端には横向きに鉤状の突起が作出されている。右側縁の一部に礫表皮面を残す。石材は黒曜石である。

**TP-19** (図V-5-1・9/表V-1-1・2、-5-1/図版42)

位置: G 19 c, G 20 b 規模: 3.14×1.05/2.90×0.42/(1.16) m

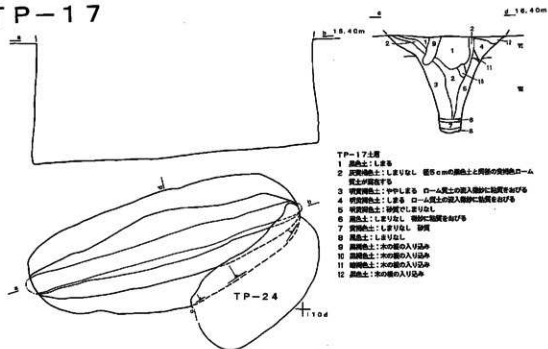
特徴: 包含層調査の際、G 19、G 20 グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上りを示し、横底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、横底部から垂直に立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。横底部はおおよそ平坦だが、北西側へむかってなだらかに低く傾斜している。

**TP-20** (図V-5-1・9/表V-1-1・2、-5-1/図版42)

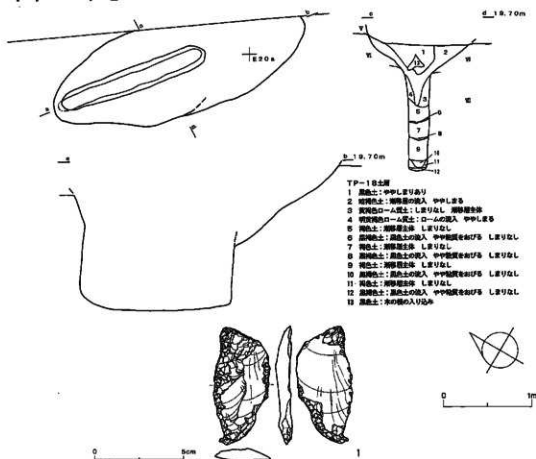
位置: L 12 d, L 13 a 規模: 1.79×0.97/1.53×0.36/(1.07) m

特徴: 包含層調査の際、L 12、L 13 グリッドの、基本層序V層下位において楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面

TP-17



TP-18



図V-5-8 TP-17・TP-18と遺物

的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は微妙にオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、壊底部から開きながら立ち上がる。遺構の上部は崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。壊底面はおおよそ平坦だが、東側へなだらかに低く傾斜している。

TP-21 (図V-5-1・9/表V-1-1・2、-5-1/図版43)

位置: I 17 c, I 18 b 規模:  $3.24 \times 0.68 / 3.30 \times 0.20 / (1.36) \text{ m}$

特徴: 包含層調査の際、I 17、I 18 グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半部は崩落によって、外へ向かって開く形状をしている。壊底面はおおよそ平坦だが、北側へなだらかに低く傾斜しており、中央部も微妙に窪む。

TP-22 (図V-5-1・10/表V-1-1・2、-5-1/図版43)

位置: K 11 c, d, K 12 a, b 規模:  $2.48 \times 0.67 / 2.46 \times 0.19 / (1.00) \text{ m}$

特徴: 包含層調査の際、K 11、K 12 グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は微妙にオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直な立ち上がりを持つが、徐々に微妙に膨らみをもって開くようにたちあがる。遺構の上部は崩落によって、外へ向かってさらに開く形である。壊底面はおおよそ平坦だが、東側半分が微妙に窪む。

TP-23 (図V-5-1・10/表V-1-1・2、-5-1/図版44)

位置: F 16 b, c 規模:  $2.63 \times 1.01 / 2.95 \times 0.22 / (1.08) \text{ m}$

特徴: 包含層調査の際、F 16 グリッドの、基本層序V層下位においていびつな長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はオーバーハングしており、壊底部から窄まりながら立ち上がる。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。壊底面はおおよそ平坦だが、中央部のやや南西よりが微妙な高まりを持つ。

TP-24 (図V-5-1・10/表V-1-1・2、-5-1/図版44)

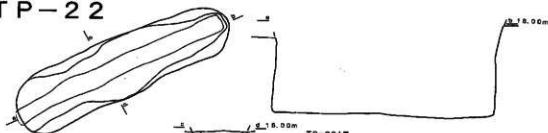
位置: H 10 b, c, I 10 a 規模:  $1.73 \times 1.02 / 1.60 \times 0.26 / (1.20) \text{ m}$

特徴: 包含層調査の際、H 9 グリッドの、基本層序V層下位においていびつな長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、東端が別の黒色土落ち込みによって壊された、落ち込みであると判断した。色調について、より黒色の味



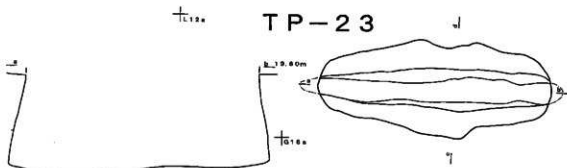


# TP-22



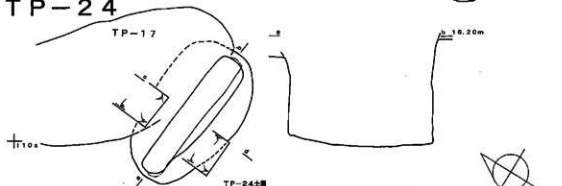
- TP-22土層
- 1 黒色土：ややLまわりあり
  - 2 暗褐色土：ローA層土中に厚3cmの黒色土よく混じる
  - 3 暗褐色土：ローA層土の混入
  - 4 暗褐色土：しまりなし、腐葉 木の腐の跡
  - 5 暗褐色土：暗褐色の腐葉土の混入が混じる ややLまわり
  - 6 濃い黄褐色土：しまりなし
  - 7 暗褐色土：しまりなし、厚2cmの黒色土混じる
  - 8 黒色土：粘質をむける、しまりなし
  - 9 暗褐色土：腐葉土をむける、しまりなし
  - 10 黒色土：粘質をむける、しまりなし

# TP-23



- TP-23土層
- 1 黒色土：しまりあり
  - 2 暗褐色土：しまりあり、木の腐の跡
  - 3 暗褐色土：しまりあり、厚3cmの黒色土混入より腐葉のローA層土混入も混じる
  - 4 暗褐色土：ローA層土：腐葉の腐の跡
  - 5 暗褐色土：厚3cmの黒色土混入より腐葉のローA層土混入も混じる
  - 6 暗褐色土：ローA層土：しまりなし、やや粘質をむける
  - 7 暗褐色土：木の腐の入り込み
  - 8 暗褐色土：しまりなし、やや粘質をむける
  - 9 黒色土：しまりなし、小物腐のローA層土混入も混じる

# TP-24



- TP-24土層
- 1 黒色土：ややLまわりあり、腐葉1cm以下の(1.2)混入混じる
  - 2 黒色土：しまりなし、上部2cmの(1.2)混入混じる ややLまわりあり
  - 3 暗褐色土：ややLまわりあり、腐葉1cmの(1.2)混入混じる
  - 4 暗褐色土：ややLまわりあり、腐葉1cmの(1.2)混入混じる
  - 5 暗褐色土：ややLまわりあり、腐葉1cmの(1.2)混入混じる
  - 6 暗褐色土：ややLまわりあり、腐葉に粘質をむける
  - 7 黒色土：しまりなし、腐葉に粘質をむける
  - 8 濃い黄褐色土：しまりなし、腐葉に粘質をむける
  - 9 暗褐色土：しまりなし、厚2cmのローA層土混入混じる
  - 10 黒色土：しまりなし、腐葉に粘質をむける
  - 11 暗褐色土：しまりなし、腐葉に粘質をむける
  - 12 黒色土：しまりなし、腐葉に粘質をむける
  - 13 暗褐色土：しまりなし、腐葉に粘質をむける
  - 14 黒色土：しまりなし、腐葉に粘質をむける

図V-5-10 TP-22~24

強い、長楕円形の落ち込みをまず調査した。それについてTP-17と判断した。その後、東側の落ち込みについて、短軸方向に沿って、サブトレンチをいれた。覆土6層まで掘り下げた段階で、南側に壁面を確認した。そこでサブトレンチに沿って土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は壊底部から垂直に立ち上がる。短軸方向の断面形態は、壊底部から微妙に開きながら立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。壊底面はおおよそ平坦だが、中央が微妙に窪む。

TP-25 (図V-5-1・11/表V-1-1・2、-5-1/図版45)

位置: J11a, d 規模: 1.41×0.84/1.44×0.30/(1.18)m

特徴: 包含層調査の際、J11グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸東端はオーバーハングする、西端は壊底部から垂直に立ち上がる。短軸方向の断面形態は、壊底部から微妙に開きながら立ち上がり、遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。壊底面は中央よりやや東側で窪む形をしている。

TP-26 (図V-5-1・11/表V-1-1・2、-5-1/図版45)

位置: L10d, L11a, d 規模: 3.24×1.07/3.00×0.30/(1.18)m

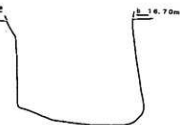
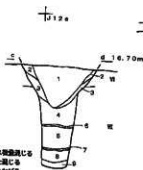
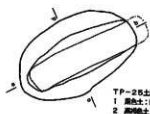
特徴: 包含層調査の際、L11グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はよくオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。壊底面はおおよそ平坦だが、中央部が微妙に高まる。

TP-27 (図V-5-1・11/表V-1-1・2、-5-1/図版46)

位置: K16d, K17a 規模: 3.36×0.98/2.98×0.13/(1.18)m

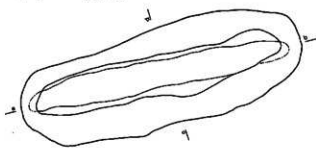
特徴: 包含層調査の際、K18グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は壊底部から開きながら立ち上がる。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。壊底部については、調査区内の他のTピットに比べると狭く、平面形もいびつで、直線的な他のものとは違っている。壊底面は、東側へ向かって傾斜している。

# TP-25

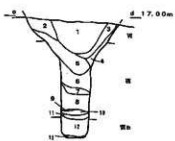


- TP-25土層
- 1 黒色土：粘質O、2cmのf/s層を越える
  - 2 黒色土：厚3cmのO-1A土層に属する
  - 3 黄褐色ローム土：やや粘質をおびる
  - 4 黄褐色土：しまりなし、やや粘質をおびる
  - 5 黒色土：しまりなし、粘質をおびる
  - 6 黄褐色土：しまりなし、厚3cmの黒色土層に属する
  - 7 黄褐色土：しまりなし、粘質をおびる
  - 8 黄褐色土：しまりなし、厚3cmの黒色土層に属する
  - 9 黒色土：しまりなし、粘質をおびる

# TP-26



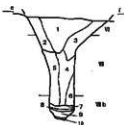
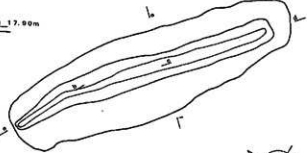
11.1d



- TP-26土層
- 1 黒色土：しまりあり、粘質O、2cmのf/s層に属する
  - 2 黄褐色土：ややしまりなし、厚2cmのO-1A土層に属する
  - 3 黒色土：ややしまり
  - 4 黄褐色土：しまりなし、粘質を有する入りのA土層に属する
  - 5 黄褐色土：厚3cmのO-1A土層に属する
  - 6 黄褐色土：しまりなし
  - 7 黒色土：しまりなし、やや粘質をおびる
  - 8 黄褐色土：しまりなし、厚3cmのO-1A土層に属する
  - 9 黒色土：しまりなし、粘質をおびる
  - 10 黄褐色土：粘質をおびる
  - 11 黄褐色土：しまりなし、粘質をおびる
  - 12 黄褐色土：しまりなし
  - 13 黒色土：しまりなし、粘質をおびる



# TP-27



- TP-27土層
- 1 黒色土：粘質、しまりあり、粘質O、2cmのf/s層を越える
  - 2 黄褐色ローム土：粘質O、2cmのf/s層を越える、厚3cmの黒色土や粘質
  - 3 黄褐色ローム土：しまりあり、厚3cmの黒色土層に属する
  - 4 比較的黄褐色ローム土：しまりなし、厚3cmの黒色土層を越える
  - 5 黄褐色土：ややしまり、粘質あり、厚3cmの黒色土層を越える
  - 6 黄褐色土：しまりなし、粘質を有する、やや粘質
  - 7 黄褐色土：粘質を有する、やや粘質
  - 8 黒色土：しまりなし、粘質をおびる
  - 9 黄褐色土：しまりなし、粘質をおびる
  - 10 黒色土：しまりなし、粘質をおびる



0 1m

図V-5-11 TP-25~27

## TP-28 (図V-5-1・12/表V-1-1・2、-5-11/図版46)

位置: J6c, J7b 規模: 2.80×1.24/1.79×3.64/(1.41)m

特徴: 包含層調査の際、J6グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為にベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は壊底部から開きながら立ち上がる。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってさらに開く形状をしている。壊底面はおおよそ平坦だが、東側へ微妙に高まる。

## TP-29 (図V-5-1・12/表V-1-1・2、-5-1/図版47)

位置: L7b, c, M7a 規模: 2.60×0.99/1.88×0.25/(1.54)m

特徴: 包含層調査の際、L7グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為にベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸西端は壊底部から開きながら立ち上がる、東端はよくオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、壊底部から、微妙に開きながら立ち上がる。遺構の上半部は著しい崩落によって、外へ向かってさらに開く形状をしている。壊底面は中央部より東側で窪む。

## TP-30 (図V-5-1・2/表V-1-1・2、-5-1/図版47)

位置: L6c 規模: 1.75×0.74/1.46×0.20/(0.85)m

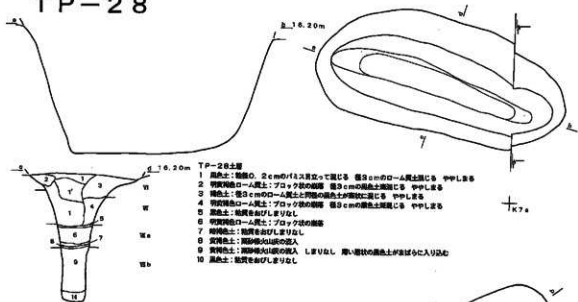
特徴: 包含層調査の際、L6グリッドの、基本層序V層下位において楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為にベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はよくオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半部は著しい崩落によって、外へ向かってさらに開く形状をしている。壊底面はほぼ平坦だが、中央部よりやや東側で微妙に窪む。

## TP-31 (図V-5-1・13/表V-1-1・2、-5-1/図版48)

位置: J4c 規模: 2.96×0.65/3.00×0.21/(1.09)m

特徴: 包含層調査の際、J4グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為にベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半部は著しい崩落によって、外へ向かって開く形状をしている。壊底面はほぼ平坦だが、中央部がやや窪む。遺構上端の東端は、一部、風倒木によって壊されている。

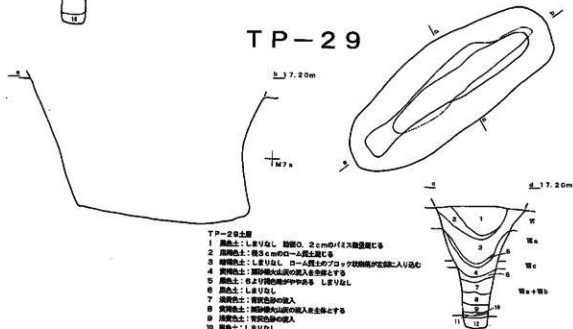
# TP-28



## TP-28土層

- 1 黒色土：厚約0.2cmのバリス状の腐葉 径3cmのローム瓦土に属す ややL多
- 2 明灰褐色ローム瓦土：ブロック状の腐葉 径3cmの黒色土夾層に属す ややL多
- 3 褐色土：径3cmのローム瓦土と同様の褐色土が腐葉に属す ややL多
- 4 明灰褐色ローム瓦土：ブロック状の腐葉 径3cmの黒色土夾層に属す ややL多
- 5 黒色土：腐葉をあげ、L多し
- 6 明灰褐色ローム瓦土：ブロック状の腐葉
- 7 褐色土：腐葉をあげ、L多し
- 8 灰褐色土：腐葉のみの混入
- 9 灰褐色土：腐葉のみの混入、L多し、薄く腐葉の褐色土が腐葉に混入
- 10 黒色土：腐葉をあげ、L多し

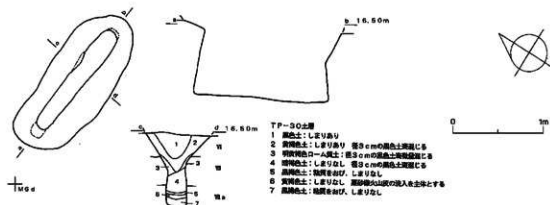
# TP-29



## TP-29土層

- 1 黒色土：L多し、厚約0.2cmのバリス状の腐葉
- 2 褐色土：径3cmのローム瓦土に属す
- 3 褐色土：L多し、ローム瓦土のブロック状の腐葉が混入し入り込む
- 4 灰褐色土：腐葉のみの混入を主とする
- 5 褐色土：色より褐色土がややある、L多し
- 6 黒色土：L多し
- 7 灰褐色土：腐葉のみの混入
- 8 灰褐色土：腐葉のみの混入を主とする
- 9 灰褐色土：腐葉のみの混入
- 10 黒色土：L多し
- 11 褐色土：腐葉のみの混入
- 12 黒色土：L多し

# TP-30

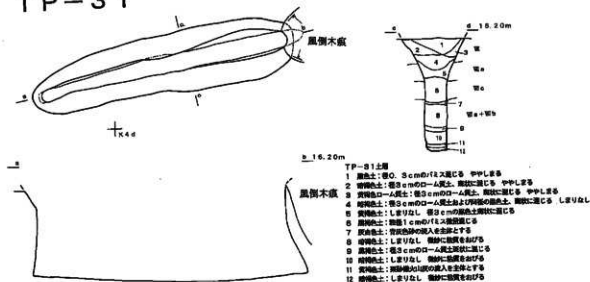


## TP-30土層

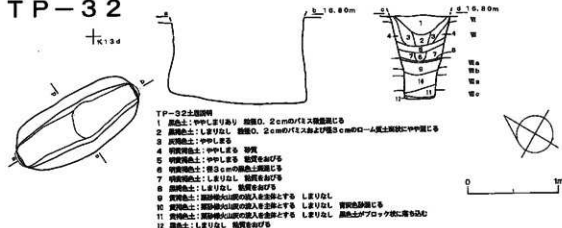
- 1 黒色土：L多しあり
- 2 明灰褐色ローム瓦土：L多しあり、径3cmの黒色土夾層に属す
- 3 明灰褐色ローム瓦土：径3cmの黒色土夾層に属す
- 4 褐色土：L多し、径3cmの黒色土夾層に属す
- 5 褐色土：腐葉をあげ、L多し
- 6 灰褐色土：L多し、腐葉のみの混入を主とする
- 7 褐色土：腐葉をあげ、L多し

図V-5-12 TP-28~30

## TP-31



## TP-32



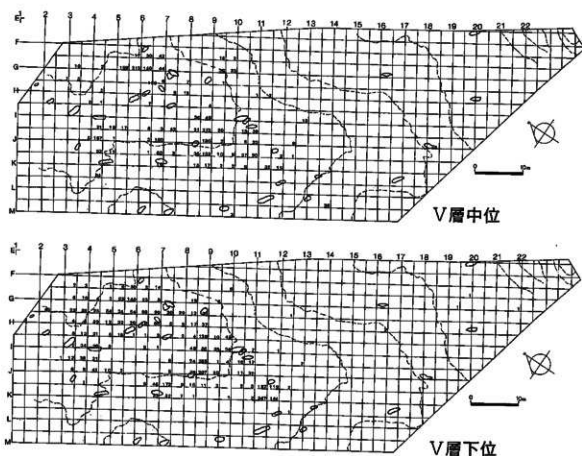
図V-5-13 TP-31・32

TP-32 (図V-5-1・13/表V-1-1・2、-5-1/図版48)

位置：K13 a, K13 d 規模：1.48×0.68/1.53×0.33/(0.94)m

特徴：包含層調査の際、K13グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為にベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半部は著しい崩落によって、外へ向かって開く形状をしている。壊底面は中央部がやや窪む。遺構上端の東端は、一部、風倒木によって壊されている。

包含層、基本層序V層の黒色土は平均して50cm以上の堆積があった。遺物はV層の下位である、V bからの出土が主で、V層上位のものは風倒木によって上がってきたものである可能性が高い。



図V-5-14 ローム質土に伴う凝灰岩のV層中位、下位における分布図

鷗川町および門別町の遺跡を発掘時、ローム層において、土器に似た質感の、黄褐色の凝灰岩が多く含まれている。その層位は、宮戸3遺跡において基本層序VI層からVII層とした層位である。今回の調査では、ところどころV層中位、V2層上面およびそのやや上にまで、その凝灰岩がまとまって掘りあがっていた。なんらかの攪乱によってV層に上がってきたものとし、凝灰岩のV層中位および下位における出土分布状況を確認した。すると、傾向として、大部分は、流れて沢状地形の底にたまっている様子が見られたが、傾向としてTピットの位置に対応している(図V-5-14)、検出した層位も、Tピットの掘り込み面と考えたV層中位から下位であり、対応している可能性はあるものとした。風倒木等の影響に加えて、Tピットの掘りあげ土に混じったものであるという可能性を示すものとする。

今回検出したTピットについて、形態別にまとめてみる。上部構造については、崩落が著しく、変形しているため、下部構造について比較検討した。下部構造について、壊底面をつくるものと、つくりえないもの(TP-8、9、11、12、16、22)に概略分けられる。

壊底面をつくるものについては、長軸が2.5mより長いもの(TP-3、6、7、17、19、21、23、26、27、31)、長軸が1.7~1.9mと、やや大型なもの(TP-1、4、28、29)、長軸長1.2~1.6mの中型なもの(TP-2、10、14、15、18、20、24、25、30、32)、長軸長1.2m以下の小型なもの(TP-5、13)に分けられる。長軸長1.6m以下の中型、小型としたものについては胆振東部に多く出土する、さらに小判型をした幅広い壊底面を持つものに類似した形状のものとして、(TP-5、15、20、24、25、32)がある。また、逆杭痕と考えられる付属遺構を壊底部に持つもの(TP-13)



が1基あった。また、墳底面を明確に作り出さないタイプのものは長軸長が2m以上のものがほとんどであり、墳底面を作り出すタイプの大型のものと規模的に類似する。

これらのTピットについて、形態別の分布をみると沢地形を横切るような配置、配列をそれぞれの形態について想定できる。A形態の大型、そしてやや大型について、TP-1・4、TP-7・28、TP-21・23・27、TP-3・31、A形態の中型で、TP-24・25、TP-20・32、B形態で、TP-9・11である。沢地形は調査区外にも広がっており、全体の様相は掌握しかねる。墳底面を持つもので小型なものについての配列や、TP-13のような逆杭痕跡をもつものが調査区内には出土しない等、不明点は多いが、沢地形をイモッペ川の方へ追いつくような狩猟方法を可能性のひとつとして挙げることは可能である。また、別章の米原4遺跡A地区・B地区、次年度報告予定の宮戸4遺跡についても沢地形に沿ってTピットの集中が見られる傾向は明らかであった。

今回切り合いをもったTピットについてみると、TP-15より新しいTP-12、TP-24より新しいTP-17という2か所について切り合い関係がみられた。その2例から、小型でやや幅広い墳底面を持つものよりも、長軸が長く、幅がやや狭い底面、もしくは墳底面が不明瞭なものが新しいという傾向が窺える。この傾向は筆者が調査した千歳市ユカンボシC15遺跡でも同じように見られた。ユカンボシC15遺跡(2)のTP-49とTP-45の切り合い関係がそれにあたる。

この同じ千歳市の調査では、比較的幅が狭い墳底面を持つ小型のものが墳底面を持たない中型のものより古い例(同遺跡(2)のTP-49とTP-45)とほとんど同じ規模で、狭い墳底面を持つものより、持たないものが古い例(同遺跡(2)のTP-31とTP-35)があった。ちなみにこのTP-31と35については、遺物の出土状況から北箭式トコロ6類の時期あるいはその直前のものである事がわかった。

付記として、今回、形態分類にあたってという表現を用いた。このユカンボシC15遺跡(2)のTP-52がこの形態で、逆杭をもつものに相当する。この遺構は墳底部の出土遺物(余市式並行の土器)から、後期初頭のものとした。宮戸3遺跡から主に検出された長楕円形の形態(墳底部の有無は問わず)が先述の千歳市の例から、中期後葉のものであるならば、長楕円の形態より「小判型をした幅広い墳底面を持つもの」が新しいのではないかと仮定が成り立つ。その事について、千歳市キウス5遺跡B地区(4)のTP-24、TP-25の切り合い関係、および、苫小牧市静川20遺跡の1号落とし穴と2号落とし穴の切り合い関係、の2例において、その仮定通りの新旧関係が実際、確認されている。中期後葉から後期初頭という期間のなかでTピットの形態変化が頻繁であったと考える。今後時期のわかるもの、切り合いを持つものの出土例の増加により、形態の変遷とそれに伴う狩猟方法についての変化について検討の余地はあるものとする。(大森司)

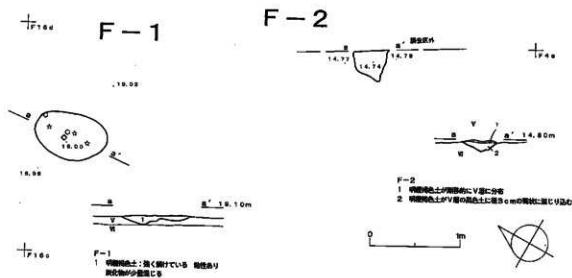
### (3) 焼土

2ヶ所検出した。F-1はV層下位の検出、F-2はVI層上面からの検出である。層位の差が時期の差である可能性がある。

F-1 (図V-5-1・15/表V-1-1・2、-5-1・4/図版49)

位置：F16d 規模：0.80×0.51/0.10m

特徴：調査区南東側のやや小高いところに位置する。V層下位の調査中、炭化物を伴う明るい橙褐色土の広がりを検出した。半載したところ、腐植土が強く焼けて変色しており、焼土と認定した。形成面もほぼ同じV層下位と考えられる。灰層は確認できなかったが、径1~3cmほどの炭化物が上面で散乱していた。また、焼土のサンプルを採取して水洗したが、骨片などの微細遺物は得られなかった。



図V-5-15 F-1、F-2

遺物：焼土中よりⅡ群 a 類の土器片が3点出土した。

時期：検出面の層位と出土遺物から、縄文時代前期前半の遺構である。

(芝田)

F-2 (図V-5-1・15 / 表V-1-1・2、-5-1・4 / 図版49)

位置：F3d 規模：(0.40) × (0.35) / 0.13m

特徴：調査区北西側の沢状地形の低いところに位置する。包含層をⅥ層上面まで掘り下げたところ、明褐色土が腐植土に斑状にはいりこんでいるの広がりを検出した。調査区壁際で半截したところ、レンズ状に同様の土が入り込んでおり、焼土粒と認定した。形成面もほぼ同じⅥ層上面と考えられる。灰層、炭化物は確認できなかった。また、焼土のサンプルを採取して水洗したが、骨片などの微細遺物は得られなかった。

遺物：遺物は伴出しなかった。

時期：検出面の層位と、周囲の遺物出土状況について、Ⅰ群 a 類平底の貝殻条痕土器並行~コッタロ式並行の土器が主に出土しており、層位的にも合致する。縄文時代早期中葉~後葉のものという可能性がある。

(大森司)

表V-5-2 TP-18掲載遺物一覧

掲載番号	分類	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
1	スクレイパー	1	覆土中	66.8×31.0×7.0	12.5	黒曜石	

表V-5-3 TP-18出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数
覆土中	土器	Ⅱ群 a 類	1
覆土中	土器	Ⅰ群 b 1 類	1
覆土中	石器	スクレイパー	1
覆土中	剥片	剥片	2
合計			5

表V-5-4 F-1出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数
焼土中	土器	Ⅱ群 a 類	3
合計			3

## 6 包含層の出土遺物

## (1) 土器

## 概要

2,146点が出土している。包含層V層下位からVI層にかけて、主に出土している。V層上位からの出土は5点の前期前半の土器である。しかしこれらは時期的な層位差ではなく、風倒木によって土が掘りあがっている状態が検出されたグリッドからの出土であり、それに関連するものと考えられる。

土器は調査区内において、台地上の平坦面である、E～F-14～19グリッドと、調査区内において、等高線的に一番低いところ、沢地形の底の平坦部、F～H-3～6グリッドに集中している。沢地形出土のものについては、流れて動いたものもあるが、平坦面であるため、なんらかの生活の様相も示しているものと考えられる。これらの遺物の集中場所はおおむね石器の状況とも合致するものである。

分類別の出土は、縄文時代早期前半、I群a類が32点、これらは同一個体の破片である。縄文時代早期後半、I群b類は1,797点出土している。目立つのはコッタロ式426点と東銅路Ⅳ式の428点である。また縄文地紋でやや厚みのあるI群b類土器のなかには東銅路Ⅲ式が混在している可能性が高い。II群a類は317点出土している。

## 縄文時代早期の土器 (図V-6-1・2・4・5/表V-6-1・2/図版50・51)

## I群a類 (図V-6-1・2・4-1/表V-6-1・2/図版50)

同一個体の破片のみ出土した。沢地形の底の平坦部である、F3、FG4グリッドのV層下位からの出土である。F3グリッド調査区壁際からは焼土を検出しており、調査区北川に分布が広がる可能性がある。1に図化した。器内外面には丁寧なナデ調整を施す。その後口唇が外側へ反り返るようにナデつけて成形する。草本原体による沈線を1.2cm間隔で縦に施す。口唇部の縁は後がたつように面をとる。胎土は水箆したようにキメ細かく、白色小砂粒がまばらに混じる。縄文時代早期中葉、平底の貝殻条痕土器と並行するものと考えられる。口縁部形態のみ取り上げるならば、ムシリ1式に類似する。

## I群b類 (図V-6-1・2・4・5-2～27/表V-6-1・2/図版50・51)

I群b-1類、東銅路Ⅲ式の可能性が高い、縄文地紋で比較的厚めの胴部破片が472点、コッタロ式が426点、東銅路Ⅳ式が428点出土した。I群bⅠ類土器について口縁部破片はなく、断定的な根拠はない。沢地形底の平坦部分に分布の集中がある。

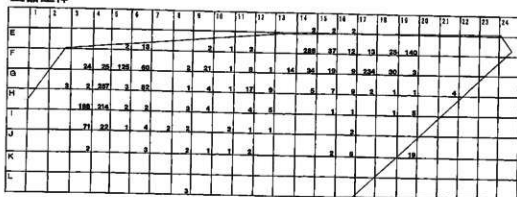
## I群b-2類 コッタロ式 (図V-6-1・2・4-2～16/表V-6-1・2/図版50)

コッタロ式については概略2つのグループに分ける事ができる。ひとつには口縁部の断面形態が、東銅路Ⅲ式に似るものである。口唇部に平坦面をとり、なんらかの原体で連続刺突を施す。文様構成はコッタロ式の組紐状痕を主体とするものである。古手のコッタロ式でとも言うべきもの(2～5)で、128点の出土である。もうひとつには節が比較的細かくて中茶路式によく似た、縄文地紋を持つ

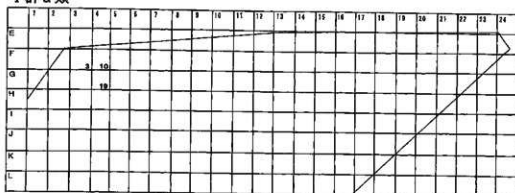
表V-6-1 層位別出土土器一覧

分類	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層				Ⅵ層	攪乱 風倒木	誤採 排土	計
			上位	中位	下位	細分無				
I群 a類			1	31					32	
			23	259		1	187	1	471	
			2	335			109	26	472	
I群 b類			19	336		1	68	2	426	
			17	26			378	7	428	
			(61)	(956)		(2)	(742)	(36)	(1797)	
II群 a類			5	17	108		185	2	317	
合計			5	79	1095	2	927	38	2146	

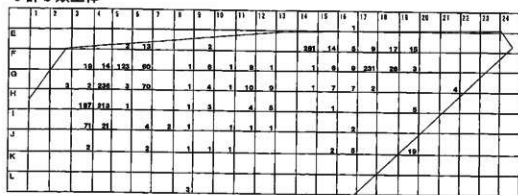
### 土器全体



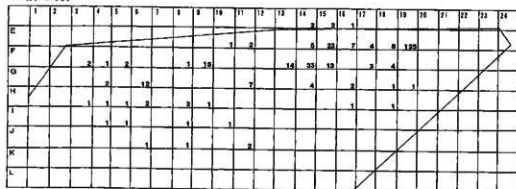
### I群 a類



### I群 b類全体

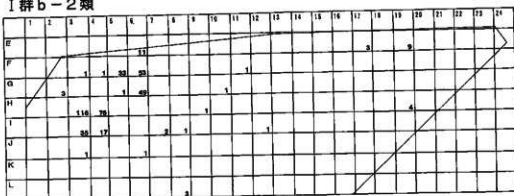


### II群 a類

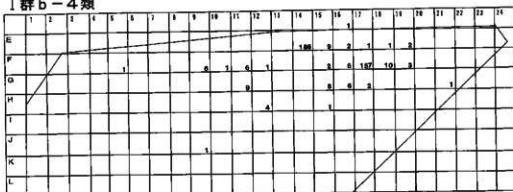


図V-6-1 包含層出土土器分布図(1)

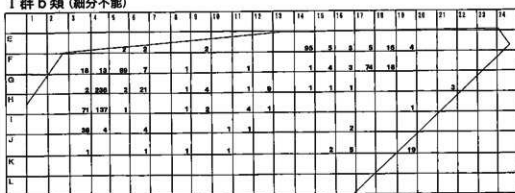
## I 群 b-2 類



## I 群 b-4 類



## I 群 b 類 (細分不能)

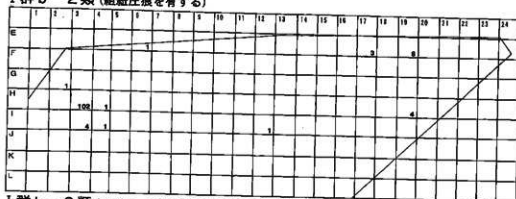


## I 群 b 類 (厚手で縄文地紋 I 群 b-1 類の可能性有り)

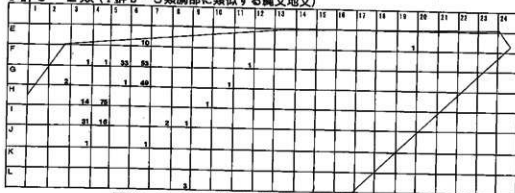


図V-6-2 包含層出土土器分布図(2)

I群b-2類 (組紐圧痕を有する)



I群b-2類 (I群b-3類陶部に類似する縄文地文)



図V-6-3 包含層出土土器分布図(3)

つ破片である。コッタロ式という範疇のなかで新しいもの(6~16)であり、298点の出土があった。コッタロ式は沢地形底の平坦部(F~H-3~6グリッド)に多く分布する。2分したそれぞれの土器群について、分布上および、層位上の、顕著な差異はない。新しい範疇のものとした、縄文地紋を持つ土器群については、隆帯の明瞭な貼付があり、隆帯上にはなんらかの原体による連続した押圧が明らかである。このことを踏まえて中茶路式とは区別するものとした。この新しいとした、土器群について今回特徴的であったことは、赤色味をおびた色調の器壁を持ち、さらに、意図的な破砕が行われた破片が目立って見られる。これについては、再生土製品の製作と関連があると考えられる。この行為の時期について、狭い調査区ではあるが、中茶路式土器がなく、東鋼路IV式および、前期縄文尖底土器の破片と当期の土器について、明瞭な分布上の違いがあったことから、コッタロ式の時期の所作である可能性が高いとしておく。

内面調整は横方向のナデ調整である。比較的薄い器壁とややしまった胎土に特徴がある。胎土には小砂粒が目立つ。3、4、6、11、14、15繊維を含む個体もある。8~11、13~15のような新し手のものには白色の小砂粒が混じる。8、11、14~16は目立ってキメが細かい。

2は口縁部破片である。RL縄地紋を器面に施した後、口縁部文様帯を擦り消して、1縄による短軸絡条体圧痕を5条施す。また胴部の途中についても擦り消しによる無文帯を施してから、LR縄による連続圧痕を施す。口唇部はナデ調整で内湾気味に形を整えたあと、1縄による短軸絡条体圧痕を連続して施す。3は口縁部破片である。コッタロ式の意匠を持つ土器で、東鋼路III式に似る古手のものである。ナデ調整の後、r縄による短軸絡条体圧痕を斜方向に施文する。口唇部は平坦に整え、口縁部および口唇部には短軸絡条体圧痕を施す。4は胴部破片である。胴下部のくびれ部分である。r縄と1縄による組紐圧痕を施した後、隆帯を貼り付け、LR縄による連続押圧を施す。5a、bはコッタロ式の意匠を持つ土器だが、口唇部の断面形態が、東鋼路III式に似る古手のものである。口唇

部には平坦面をとり、沈線を施す。口縁部内側にはL R縄による縦圧痕がめぐる。表面にはL R縄を用いた組紐圧痕を器面に巡らせる。破片には補修孔がある 外面には煤が付着する。板状の粘土を輪積みで組みあけて、化粧土により隙間を充填する。6は口縁部破片で、R LとL Rの結束第1種羽状縄文を施した後、隆帯を貼付する所をナデ調整によって無紋にし、そこへ隆帯を貼り付ける。その上から同一原体によって縄文を施文する。胎土はキメが細かい。7のナデ調整を施してある口唇部は、平坦面を持つ。L R L縄による絡糸体を回転施文した後ナデによって無紋部を造り、そこへ隆帯を貼り付ける。その後R L縄による押圧を施す。8は中茶路式に似た節の細かい縄文地を持ち、胴部上半はよく膨らみ、口唇部には平坦面を持つ。横方向に隆帯を貼り付けては縄線を押圧、貼り付けては押圧、の順で、下から上へと順番に施文する。R L縄による圧痕とr縄、1縄を組み合わせた絡糸体による回転施文を交互に施す。胴部下半部にはL R縄による縦絡糸体圧痕も連続して施す。9はL R縄、R L縄を交互に施して羽状にする。その上に波状に細い隆帯を貼付、上からR L縄文を施す。10は胴部下部のくびれ部分である。節の細かいL R縄文を施した後、隆帯を貼付し、その上から棒状工具によって連続刺突を施す。11は胴部破片であるR L縄による圧痕を持つ。12はナデ調整の後に、柔らかい軸に密に1縄を巻きつけた原体である口縁部はナデ調整であり、口唇部は外反するようにナデつける。13はR L縄とL R縄による結束羽状縄文である。14は底部破片である。ナデ調整による無紋地にR L R縄による連続押圧を施す。底面は無紋で、平坦である。15は底部破片で、底面は無紋で平坦である。R L縄2本を結束した羽縄文である。底部際にはR L R縄による連続押圧を施す。16は底部破片で、R L縄を施した後R L縄の節による連続圧痕を施す。r縄による1縄を矢羽根状になるように縄線を底部の張り出し部分のくびれに施す。底面の縁には粘土紐を貼り付け、高台風な上げ底にする。内面は輪積み痕跡が残るがナデ調整を施す。

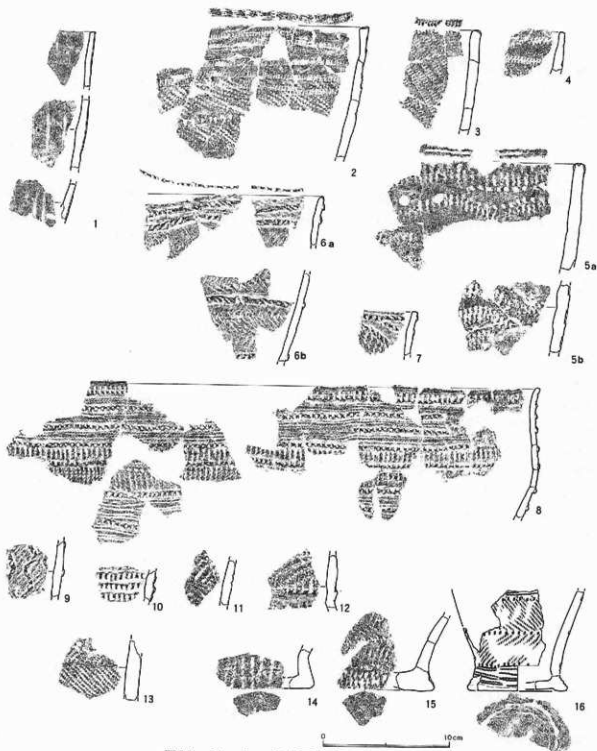
#### I群b-4類 東鋼路IV式(図V-6-5-17~23/表V-6-1・2/図版51)

東鋼路IV式は調査区内台地の平坦部(E~F-14~19グリッド)を分布の中心とする様子が窺える。内面は横方向のナデ調整である。17と21は同一個体である。ナデ調整によって器面を調整した後、R L R縄圧痕を施す。その後、擦り消し、L R縄、による短軸絡糸体を施す。口縁部は内外共に稜がたつような面をとる。胎土には繊維と白色砂粒が目立つ。18、19と22は同一個体である。ナデによって器面調整後、R L縄、L R縄、L縄線による短軸絡糸体を施す。板状の粘土を輪積み様に積み上げて成形する。その後、化粧土によって隙間を充填する。内面は剥落が激しい。20はR L縄とL R縄の絡糸体によって羽状に施した後、ナデ調整を施す。内面は輪積み痕跡の上からナデ調整を施す。23はR L縄、L R縄による絡糸体による装飾を施した後ナデ調整を施す。胎土には繊維と白色砂粒が目立つ。ややしまりがある。24は口唇部に、切り落としたような面を取る。R LとL Rの結束羽状縄文を施す。口縁部は擦り消しによって2本の無文体を持つ。内面はケズリのようなナデ調整である。25は再生土製品の可能性がある。周囲を打ち欠いて調整する。L R縄、R L縄によって羽状に器面を飾る内面はナデ調整である。26はR L縄による圧痕とR L縄絡糸体を施した後ナデ調整を施す。27は胎土が26と類似しており、同一個体の可能性がある。残存部分にはR L地紋が残る。その上からナデ調整を施す。丸底といって差し支えないが、微妙な平坦面がある。

#### 縄文時代前期の土器(図V-6-1・2・4/表V-6-1・2/図版51)

#### II群a類(図V-6-1・2・4-28~30/表V-6-1・2/図版51)

317点出土した。分布は調査区内台地の平坦部(E~F-14~19グリッド)と調査区内で一番低い沢地形の底の平坦部(F~H-3~6グリッド)である。量的に多く分布するのは台地上であり、台

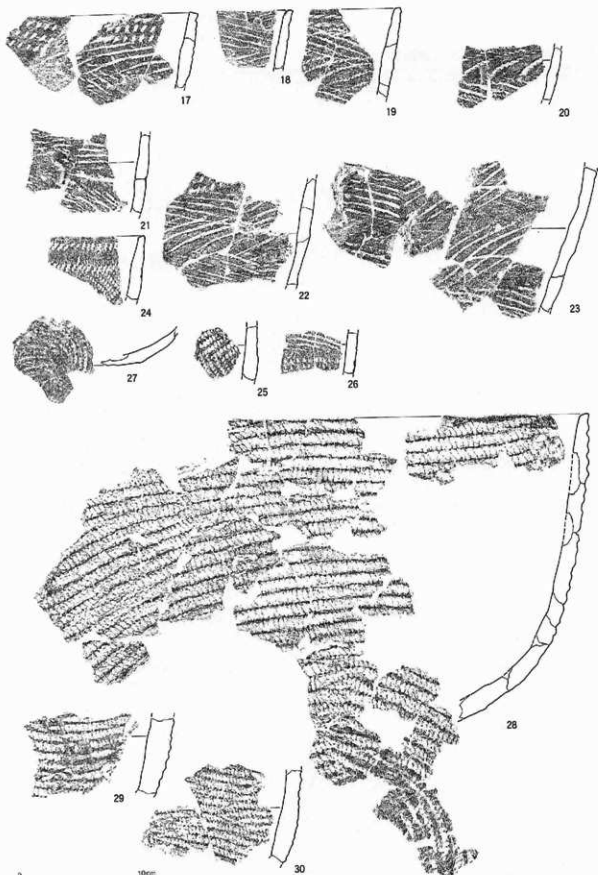


図V-6-4 包含層出土の土器(1)

地部分F 19グリッドに集中して出土しているのが28である。包含層V層下位からVI層にかけて、主に出土しており、早期I群土器と出土層位について顕著な差異はなかった。網文式土器か、静内中野式か判然としない個体が多いが、強いというならば、網文式土器の破片の方が台地上の集中か所に目立った。明らかに羽状縄文地紋を持つ個体はなく、口唇部、裏面に縄文を施した個体もない。

28は網文式土器である。多条RL縄によって縄文を施文した後、節をナデ調整によって潰す焼成は良好であるが、器壁は厚く、胎土には縦線が目立つ。29と30は胎土と地紋から、同一個体と考える。





図V-6-5 包含層出土の土器(2)



## (2) 石器等

## 概要

宮戸3遺跡では遺物包含層より17,076点の石器類が出土した。このうち、VI・VII層を起源とする凝灰岩礫が15,948点(93.4%)と大部分を占める。これらはTピットの掘り上げ土に由来するものを含むと考えられる。凝灰岩以外の礫・礫片が733点(4.3%)でこれに次ぐ。砂岩、泥岩、安山岩が多い。フレイクは173点(1.0%)出土している。石材は、黒曜石135点、チャート26点、流紋岩5点、頁岩4点、粘板岩2点である。チャートと流紋岩のフレイクは、F13グリッド付近でまとまって出土した。定型的な石器は、剥片石器156点、磨製石器17点、礫石器50点の計223点(1.3%)と非常に少ない。

凝灰岩礫を除く石器類は、全体的に出土傾向にやや特徴が見られる。層位別ではVI層、次いでV層下位よりの出土が多く、III～IV層からはほとんど出土していない。出土分布では、大きく分けて2つの集中域がある。まず、調査区北西側のF～H-3～6グリッド付近、ごく浅い沢に沿った低位部分である。そして、南東側のE・F-13～17グリッド付近、やや高まりを持った台地上である。

## 1) 剥片石器

石鏃(図V-6-10-1～14/表V-6-4/図版52)

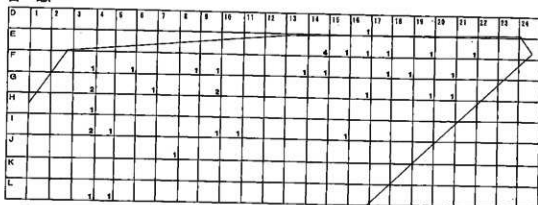
37点出土している。このうち36点が黒曜石で、1点のみ頁岩である。形態別では、三角形15点、有茎5点、柳葉形4点、五角形4点、菱形1点、未製品・破片8点となっている。三角形のものは、E・F-14～16グリッド付近で多く、柳葉形・菱形のものはG～I-3・4グリッド付近にまとまる。

層位別の出土点数は、V層下位が15点と最も多く、VI層が13点で次ぐ。14点図示した。1～7は三角鏃。1～3は長幅の差が小さく、正三角形に近いもの。4～7は縦長の二等辺三角形のもの。1、7は平基、2～6は凹基である。3、7は裏面に主剥離面を残す。5は基部の挟りが深く、両面に細かな調整が施される。8、9は薄身で柳葉形のもの。いずれも先端部を欠損する。10、11は五角形になるもので、下端部に挟りが見られる。12は菱形のもの。先端部を欠損する。13、14は有茎鏃。13は平基で、側縁が直線状のもの。14は凸基で、側縁が外湾するもの。先端部と基部を欠損する。石材は5のみが頁岩で、ほかは黒曜石である。

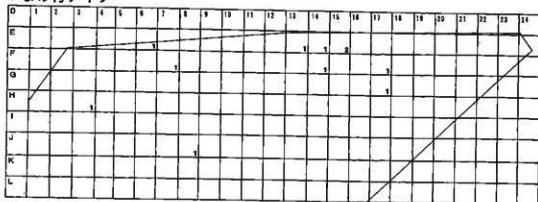
表V-6-3 層位別出土石器等一覧

	分類	III層	IV層	V層			VI層	攪乱層樹木	表層排土	計
				上位	中位	下位				
剥片石器	石鏃		1	1	7	15	13			37
	石槍・ナイフ						2			2
	石鏃						1	1		3
	つまみ付きナイフ				4	4	3			11
	スクレイパー			1	1	9	9			20
	ピース・エスキュー					4	7			11
	Rフレイク				1	13	5			19
	Uフレイク			2	6	30	14		1	53
剥片	フレイク			3	2	88	79			173
	磨製石器				1	4	12			17
礫石器	たたき石				3	7	6			16
	くぼみ石						2			2
	すり石				1	1	1			3
	北海道式石冠				1	2	1			4
	礫			7			5			18
	台				3	2	2			7
礫・礫片	礫・礫片(凝灰岩)		8		2694	3667	9360	19	200	15948
	礫・礫片(その他)	4		13	82	253	351	26	4	733
合	計	4	9	27	2806	4106	9877	46	205	17077

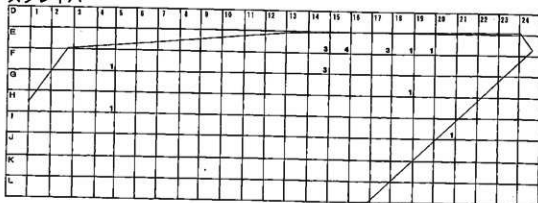
石 鏃



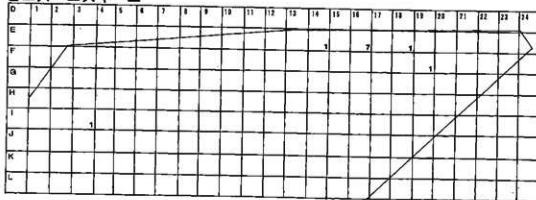
つまみ付ナイフ



スクレイパー

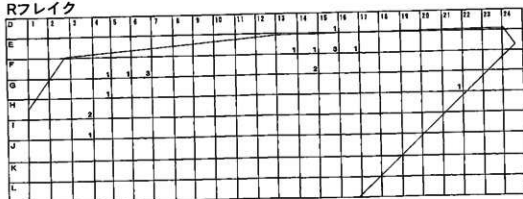


ピエス・エスキーユ

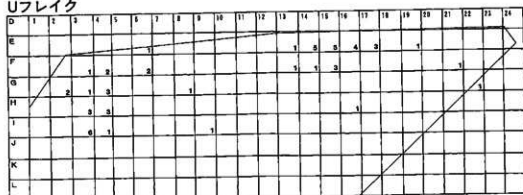


図V-6-6 包含層出土石器等分布図(1)

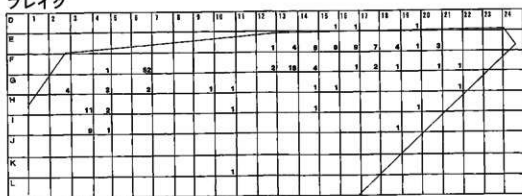
## Rフレイク



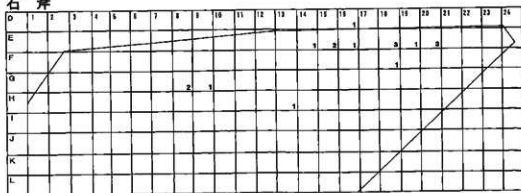
## Uフレイク



## フレイク

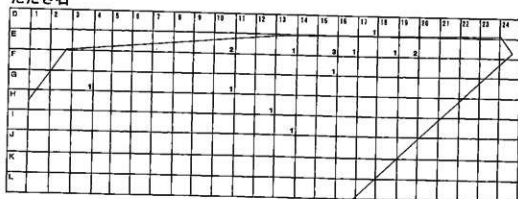


## 石 斧

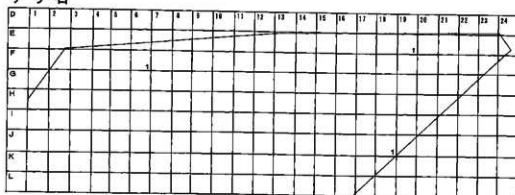


図V-6-7 包含層出土石器等分布図(2)

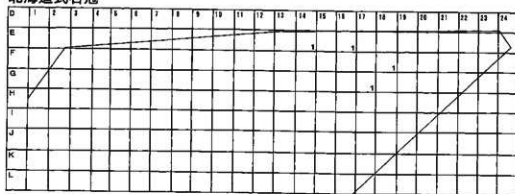
たたき石



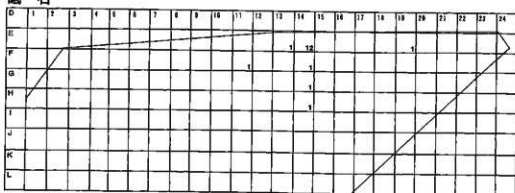
すり石



北海道式石冠

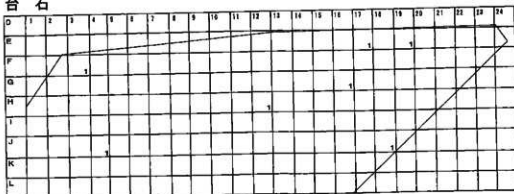


砥石

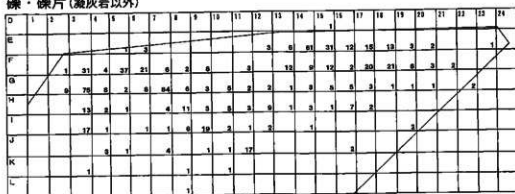


図V-6-8 包含層出土石器等分布図(3)

## 台石



## 礫・礫片(凝灰岩以外)



図V-6-9 包含層出土石器等分布図(4)

## 石槍・ナイフ(図V-6-10-15・16/表V-6-4/図版52)

2点のみ出土している。15は茎を有するもの。左右で非対称になっている。裏面に主剥離面を残す。16は茎が明瞭ではないもの。先端部に礫皮表面が残る。加工が粗雑であることから、未製品の可能性がある。いずれも黒曜石製である。

## 石錐(図V-6-10-17・18/表V-6-4/図版52)

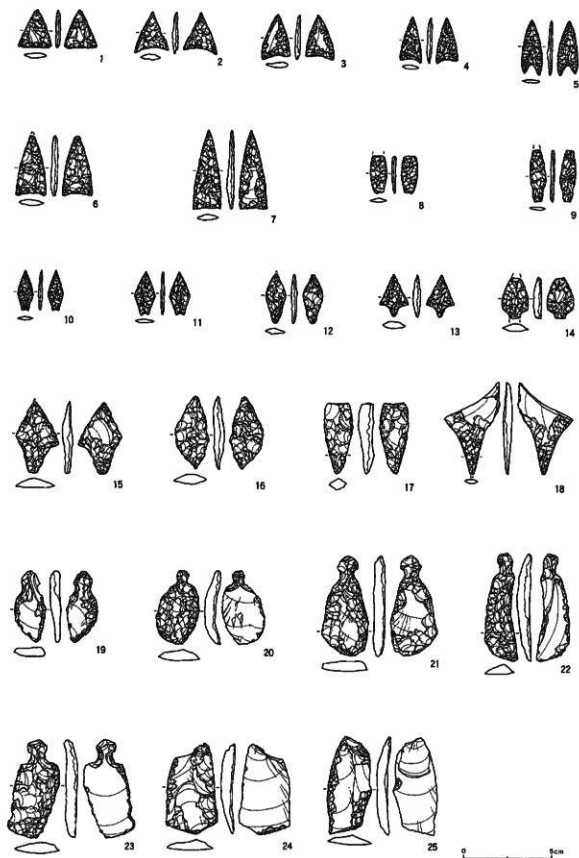
3点出土している。このうち2点が頁岩、1点が黒曜石である。2点図示した。17は棒状のもの。基部の大部分が磨滅しており、刺突部の先端が使用によって潰れている。18は刺突部を作り出したもの。両面加工されている。基部を破損している。石材は17が頁岩、18が黒曜石である。

## つまみ付ナイフ(図V-6-10-19~23/表V-6-4/図版52)

11点出土している。このうち7点が黒曜石、3点が頁岩、1点がメノウである。5点図示した。19は表裏面の周縁を加工したもの。20はつまみ部を除き、片面のみが加工されているもの。21は両面に粗い加工が施され、剥離面を残しているもの。22・23は片面が全面加工され、裏面の側縁に刃部を有するもの。22は三日月形、23は方形の刃部である。石材は19、21が黒曜石、20がメノウ、22、23が頁岩である。

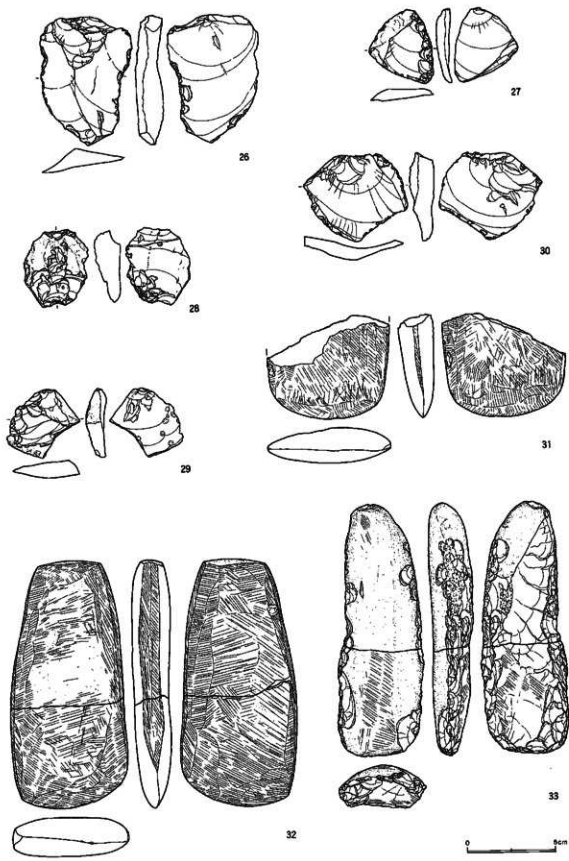
## スクレイパー(図V-6-10-24・25、11-26・27/表V-6-4/図版52)

20点出土している。このうち17点が黒曜石、3点が頁岩である。4点図示した。24~26は縦長剥片の側縁に刃部を設けているもの。24は直線状、25は外湾する刃部を片面に有する。26は剥離調整が粗雑である。27は素材の形状を大きく変えず、側縁に調整を施したものの。礫皮表面を残す。石材は24、25、27が黒曜石、26が頁岩である。



図V-6-10 包含層出土の石器(1)





図V-6-11 包含層出土の石器(2)

ビエス・エスキュー (図V-6-11-28/表V-6-4/図版52)

11点出土している。すべて黒曜石製である。E16グリッドで7点と最も多く出土した。1点図示した。28は剥片の上下端が打撃によって階段状に潰れているもの。礫皮表面を残す。

Rフレイク (図V-6-11-29/表V-6-4/図版52)

19点出土している。このうち18点が黒曜石、1点が流紋岩である。層位別では、V層下位が13点と最も多く出土した。1点図示した。29は加工痕の見られる剥片。片面に粗い調整が施される。礫皮表面を残す。黒曜石製。

Uフレイク (図V-6-11-30/表V-6-4/図版52)

53点出土している。このうち52点が黒曜石、1点が流紋岩である。層位別では、V層下位が30点と最も多く、VI層が14点で次ぐ。1点図示した。30は使用痕の見られる剥片。縁辺が鋸歯状に剥離している。黒曜石製。

## 2) 磨製石器

石斧 (図V-6-11-31~33/表V-6-4/図版53)

17点出土している。このうち完形品は1点のみで、破片が9点、未製品が7点である。層位別では、VI層が12点で最も多く出土した。3点図示した。31は刃部の破片。全面が強く研磨されている。32側縁と頭部が研磨されており、表裏面との間に稜を作り出す。基部のほぼ中央で切損する。33は未製品。長楕円形の偏平礫を敲打整形している。一部に研磨痕が残る。下端に未調整ながら刃部を作り出そうとしている。ほぼ中央で切損する。石材は31が蛇紋岩、32、33が泥岩である。

## 3) 礫石器

たたき石 (図V-6-12-34/表V-6-4/図版53)

16点出土している。1点図示した。34は破片。棒状礫の主に側縁を敲打している。上面が擦られており、浅くくぼんでいる。石材は片麻岩である。

くぼみ石 (図V-6-12-35/表V-6-4/図版53)

2点出土している。1点図示した。35は円礫の腹部が敲打されているもの。同一箇所重複して2回の敲打が認められる。全体的に被熱により赤化している。石材は流紋岩である。

すり石 (図V-6-12-36・37/表V-6-4/図版53)

3点出土している。2点図示した。36・37は破片。どちらも断面三角形の礫の下辺を擦っている。37は裏面にも擦痕が見られ、被熱している。石材は36が泥岩、37が砂岩である。

北海道式石冠 (図V-6-12-38/表V-6-4/図版53)

4点出土している。すべて破片である。38は未製品で、3点が接合したもの。2回にわたって製作を試みる過程が推測できる資料である。まず、偏平礫を打ち欠いて擦り面を作り出そうとしたところ、縦方向に割れてしまったと考えられる。端部には、把握部を設けるための敲打整形が見られる。次に、一方の破片の周縁を敲打し、鉢巻き状の溝が巡らそうとした痕跡がある。石材は凝灰岩である。

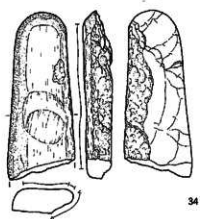
磁石 (図V-6-12-39/表V-6-4/図版53)

18点出土している。すべて破片である。層位別では、V層上位が7点と最も多く、VI層が6点で次ぐ。出土分布は、E14グリッドが12点と多い。1点図示した。39は板状礫の上面に研磨痕が見られる。また、側面の一部が敲かれている。石材は砂岩である。

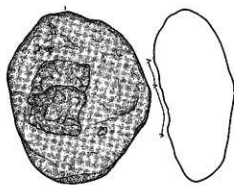
台石 (図V-6-12-40/表V-6-4/図版53)

7点出土している。このうち6点が破片である。1点図示した。40は、上面および側面が敲打されている。被熱により一部が赤く変色している。石材は凝灰質砂岩である。

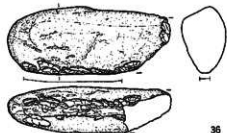
(芝田)



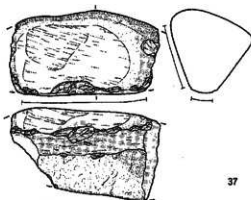
34



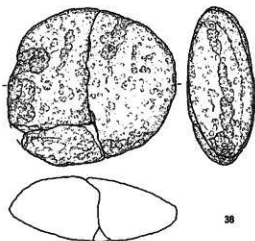
35



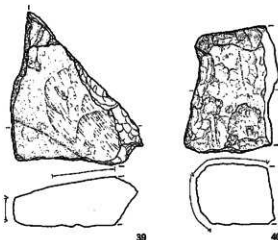
36



37



38



39



40



図V-6-12 包含層出土の石器(3)

表V-6-4 包含層掲載石器一覧

番号	分類	産地・産層	層位	長さ×幅×厚さ (cm)	重量(g)	石質	備考
1	石	畿 G19c-1	V層中	2.17×1.85×0.27	0.9	黒曜石	
2	石	畿 F17d-4	VI層	2.38×1.91×0.34	0.8	黒曜石	
3	石	畿 J7a-2	V層下	2.55×1.64×0.28	0.9	黒曜石	
4	石	畿 F3b-1	V層中	2.63×1.23×0.27	0.6	黒曜石	
5	石	畿 I4d-2	V層下	3.16×1.16×0.27	0.7	頁岩	
6	石	畿 I9c-1	V層中	(3.40)×1.70×0.36	(1.9)	黒曜石	欠損品
7	石	畿 L3a-1	V層中	4.45×1.55×0.40	2.0	黒曜石	
8	石	畿 G3c-7	VI層	(2.11)×0.94×0.22	(0.5)	黒曜石	欠損品
9	石	畿 F18b-1	V層下	(2.96)×0.88×0.21	(0.6)	黒曜石	欠損品
10	石	畿 F20c-3	VI層	2.24×1.87×0.23	0.3	黒曜石	
11	石	畿 F5b-4	V層中	2.42×1.16×0.20	0.4	黒曜石	
12	石	畿 I3a-1	V層下	(2.78)×1.16×0.32	(0.7)	黒曜石	欠損品
13	石	畿 E17c-1	V層下	2.37×1.60×0.42	0.9	黒曜石	
14	石	畿 I10b-3	V層下	(2.33)×1.51×0.49	(1.5)	黒曜石	欠損品
15	石槍・ナイフ	J3a-3	VI層	(4.02)×2.30×0.56	(3.5)	黒曜石	欠損品
16	石槍・ナイフ	F8a-1	VI層	4.10×1.90×0.59	3.3	黒曜石	
17	石	畿 G4d-1	V層下	4.00×1.63×0.90	5.1	頁岩	
18	石	畿 E19b-1	VI層	(5.20)×3.13×0.50	(4.6)	黒曜石	欠損品
19	つまみ付ナイフ	J8c-2	V層中	4.04×1.80×0.60	3.7	黒曜石	
20	つまみ付ナイフ	E14c-1	VI層	4.17×2.40×0.60	6.3	メノウ	
21	つまみ付ナイフ	E15a-3	V層下	5.68×2.60×0.62	9.3	黒曜石	
22	つまみ付ナイフ	H3c-2	V層下	6.10×1.75×0.70	6.8	頁岩	
23	つまみ付ナイフ	F17b-6	VI層	5.62×2.54×0.68	9.8	頁岩	
24	スクレイパー	E17a-1	V層下	5.20×2.95×0.72	9.4	黒曜石	
25	スクレイパー	E14d-2	V層上	5.60×2.50×0.60	7.4	黒曜石	
26	スクレイパー	E17b-1	V層下	7.30×5.20×1.30	48.9	頁岩	
27	スクレイパー	F14a-3	V層下	4.20×3.60×0.76	10.0	黒曜石	
28	ピレス・エスキュー	F19b-4	VI層	4.40×3.60×1.72	23.9	黒曜石	
29	R フレイク	E16c-2	VI層	3.92×4.14×1.00	12.9	黒曜石	
30	U フレイク	I9d-1	V層中	4.94×5.93×1.40	23.3	黒曜石	
31	石	斧 F18d-1	VI層	(5.85)×(7.00)×(2.00)	(99.5)	蛇紋岩	破片 (刃部)
32	石	斧 D16c-1	VI層	14.15×6.60×2.20	375.4	泥岩	E16a-2と接合
33	石	斧 E14a-4	V層下	14.30×4.90×2.40	236.6	泥岩	未製品 E16a-2と接合
34	たたき石	E16d-1	V層下	(14.24)×(5.76)×2.40	301.8	片麻岩	破片
35	くぼみ石	E19a-1	VI層	14.50×12.20×6.50	1470.0	流紋岩	被熱
36	すり石	F6c-4	V層下	5.70×(13.80)×4.00	(422.9)	泥岩	
37	すり石	J18d-2	V層中	7.10×(12.60)×7.20	(800.0)	砂岩	被熱
38	北海道式石冠	E16a-1	V層下	13.40×14.30×5.70	1520.0	凝灰岩	未製品 F18d-2 G17a-3と接合
39	砥石	E14c-7	VI層	(13.05)×(10.90)×4.53	(594.3)	砂岩	破片 G14c-1と接合
40	台石	E19d-3	VI層	(14.30)×(10.85)×7.60	(1400.0)	凝灰質砂岩	破片 被熱

## VI 米原4遺跡

## 1 調査の概要

イモッペ川の左岸、標高23.5～27.5mのところの位置する。IV、V章で報告する米原4遺跡と宮戸3遺跡の中間に位置する。遺跡は町道米原1号によって東西に分断されており、今年度の調査区においてはその西側をA地区、東側をB地区とした。A地区については畑地の造成によって包含層が削平されていたため調査範囲の350㎡を重機を用い黄褐色のロームもしくは火山灰層まで掘り下げ遺構確認を行った。調査区の南西端に一部包含層が残っており、通常の発掘調査を行った。B地区は東側の一部を除き、包含層は良好に保存されていた。調査区の東端は牧草地の造成によるプラウによって包含層が削平されていた。遺跡はイモッペ川に注ぐ数条の沢状地形によって開かれている。遺物は縄文時代早期から後期初頭のものまで出土するが、主体となる時期は縄文時代中期後半～末葉である。遺構は、A地区では後葉～後期初頭の集石1ヶ所、焼土が2ヶ所、Tピット3基が検出されている。いずれも縄文時代中期末葉に属する遺構である。B地区では堅穴住居跡6軒、土壇4基、Tピット7基、焼土11ヶ所を検出した。A地区とはほぼ同じく縄文時代中期後半～後期初頭に属する遺構である。この遺跡で特徴なのは、河岸の台地を開く沢状地形を利用していたと考えられる遺構や遺物が検出されていることである。Tピットは宮戸3遺跡と同様、沢状地形を意識して作られていると考えられる。焼土は、標高が高い部分や平坦面に点在するが、それに関連すると考えられる被熱した糠、糠片が沢状地形となる部分に多く出土する。住居跡は川に面する台地の尾根に構築されている。今年度調査した範囲は遺跡の一部分であり断片的にしか窺い知ることができないが、時期を同じくして調査を行った、対岸に広がる宮戸4遺跡(平成13年度以降報告)も類似した遺構が検出されており、宮戸3遺跡を含め概時期におけるこの地域の特徴といえよう。(袖岡)

表VI-1-1 検出遺構数一覧

検出層位	住居跡(H)	土壇(P)	Tピット(TP)	焼土(F)	集石(S)	遺構数
V層中位				2	1	3
V層下位	3		7	11		21
VI層上面	2	3				5
VI層	1					1
VII層上面		1				1
合計	6	4	7	13	1	31

表VI-1-2 出土遺物一覧

土器			土			石器								
分類	点	数	分類	点	数	分類	点	数	分類	点	数	分類	点	数
I b	16	944	IV b	4		石	58	257	た	16	166	た	16	166
I b-1	14	1,723	不明			石	25	423	す	4	163	す	4	163
I b-3		2				石	5	33	扁		2	扁		2
I b-4		1				つ	2	42	北		150	北		150
II a	9	831				ス	28	102	延	13	110	延	13	110
II a-1		481				ピ	2	12	台	9	62	台	9	62
II a-2	4	665				R	104	260	摩	529	10,112	摩	529	10,112
II b		545				U	114	304	土		4	土		4
III a		85				石	11	60	再		1	再		1
III b	201	4,760				フ	1,890	6,082	焼		2	焼		2
III b-1		15				石	612	1,736	焼			焼		
III b-2		261												
III b-3		214												
IV a		76												
計				719	12,189								3,414	20,083
土器			計											
			計		12,908									23,497
			計		12,908									36,405

## 2 調査区の設定

基本図には北海道開発局室蘭開発建設部の「日高自動車道鶏川町田浦米原間用地測量業務現況平面図1,000分の1図」を使用した。工事予定中央線上のSTA.30200とSTA.30400を結んだ線を基軸のMラインとしようとしたが、基軸が調査区域と比高差のある河川敷にあると不便、住居跡が想定される部分にHラインが来る、同時に調査するA地区東北部分と宮戸4遺跡にアルファベット小文字のラインが来てまぎらわしい等の点から、変則的ながら工事予定中央線の11m北東の工事予定北東側線を基軸のMラインとした。STA.30300から90°北東に振った線とMラインとの交点をM-49又はM49として、5m方眼を設定した。この方眼は北東端交点のあるアルファベットとアラビア数字の組み合わせで呼称し、さらに必要に応じて2.5m方眼に4分割し小発掘区とした。小発掘区は北西端から反時計廻りにa、b、c、dと呼ぶ(例：M-49-a又はM49a)。

平面直角座標系第四系の各座標は以下の通り。

STA.30200 X = -159633.1812 Y = -21875.3153

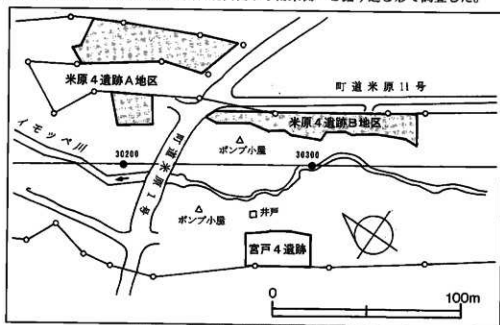
STA.30300 X = -159717.7309 Y = -21521.9174

## 3 調査の方法

調査範囲は鶏川支流のイモツベ川右岸台地縁部である。町道1号の鶏川市街側をA地区、富川市街側をB地区とした。A地区北東側は大半が耕地造成のため地山まで削平され、沢部分にのみ包含層が残っていた。A地区南西側は川に面した急斜面であり、表土の下には流れ込んだ土が堆積していた。B地区は川に向かって傾斜する沢地形で、3つの尾根と2つの沢からなり、調査範囲の南側からは川に面した急斜面となる。

### 包含層調査

A地区北東側は移植ゴテと三角ホーを用いて黒色土を数cmずつ掘り下げていった。南西側斜面では表土に流れ込みの土が厚く堆積しており、表土除去の際に取り残した表土をスコップとジョレンにより除去し、黒色土をスコップ、ジョレン、移植ゴテ、三角ホーにより掘り下げた。B地区は地形から北西側尾根部分とその両側の沢部分に、住居跡とTピットがあると想定され、土の搬出場所が調査範囲の南東であることから、調査範囲の北西側から南東側へと掘り進む形で調査した。



図VI-3-1 調査区周辺の現況図

Ⅲ～Ⅵ層の各層は調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら、必要に応じてスコップ、ジョレン、移植ゴテ、三角ホー、竹べらなどを用いた人力による手掘り作業により掘り下げた。本来の遺物包含層であるⅤ層については細かく区分(上面、上位、中位、下位)して調査した。

#### 遺構調査

包含層調査時に掘り上げ土が確認された住居跡、落ち込みが確認されたTピットについては、その平面形長軸・短軸で半載し土層観察用の土手を残して掘り下げた。想定される床・底面等の検出は、土層観察用の土手に接して先行溝を掘るなどして慎重に行った。

#### 遺物の取り上げ

包含層の遺物は位置や層位を記録し小発掘区ごとに取り上げた。遺構の遺物は実測図により位置、層位、標高を記録して取り上げた。出土状況に応じて写真や出土状況図など詳細な記録化に努めた。

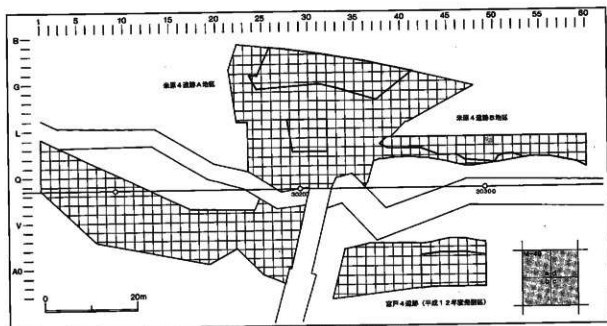
#### 遺物整理の方法

野外作業と並行して現地で水洗・注記作業を行った。小片や微細なものを除く大多数の遺物には、遺跡名略号、発掘区名(遺構名)、層位名、遺物番号を記入した。現地では、遺物収集帳点検、補正(遺物台帳作成)、大まかな遺物の分類まで行った。冬季の室内作業で、土器の接合・復元、石器や黒曜石剥片類の接合、土器・石器の実測・製図、集計、写真撮影、記録類の整理を行った。(録田)

#### 4 土層

A地区のセクション図はⅥ章に、B地区はⅦ章に掲載した。

米原4遺跡A地区はイモッペ川に向かう沢状地形となっている。基本土層は米原3遺跡、宮戸3遺跡と同様である。Ⅱ層のUs-b1～6までの一部が比較的明瞭に区分できるところがあること、Ⅳ層としたB-Tmがここでは明瞭に観察できる。B地区は基本層序どおりであり特筆することはない。(福岡)



図Ⅵ-3-2 調査区設定図

## 5 A地区の遺構と出土遺物

### (1) 概要

米原4遺跡A地区からは3基のTピット(TP-1~3)と2ヶ所の焼土(F-1, 2)、1ヶ所の集石(S-1)を検出した。A地区は台地上側と川に面した斜面側のふたつの調査区から成る。いずれの遺構も台地上側の調査区からの検出である。Tピットは調査区を横切る沢状地形の底に並んでいた。Tピットについては沢地形に沿って、調査区外側に広がっている可能性が高い。焼土はTピットの埋没後に形成されたものの可能性がある。集石は石組み炉を思わせる配列で、内部には、わずかな焼土粒が混じるV層主体の土を伴っていたが、明瞭な焼土は伴っていない。集石を構成する石はすべて被熱していた。削平箇所については、ローム上に遺構の掘り込み痕跡はなかった。ただし、焼土や集石などがあつた可能性は否定できない。斜面側の調査区について、斜面へりについては基本層序V層まで削平されていた。削平か所について、V層上面には遺構の掘り込みについて痕跡はなかった。斜面部分は包含層断面から、土が頻繁に下方へ動いた様子があつた。河川敷の際部分は、イモッペ川の流れによって頻繁に削られ、土砂が流出している様子が見て取れ、遺構は検出できなかった。

河川敷部分は湧水が著しかった。その上飲料水をくみ上げるポンプ小屋があるため、ポンプによるくみ上げは排水場所がなく、不可能であつた。そこで、西側半分について、胴付き長靴を着用し、腐植土がなくなるまで土をさらひ、遺物確認を中心とする調査を行なった。しかし、土砂の流出が絶え間なかったためか、遺物の出土はなく、出土した礫についても石器は混じっていないあつた。遺構があつたとしても、土砂の流出のため残存している可能性はほとんどない状況であつた。調査区内の河川敷部分東側についても同様と判断し、その時点で河川敷の調査は終了とした。(大森司)

### (2) Tピット

米原4遺跡A地区において3基のTピットを確認した。形状はいずれも幅の細い横底部を持つ長楕円形の形状である。沢地形の底、沢筋に沿って配列がある。狭い調査区ではあるが、配列を考慮すると、いずれも同時期のものの可能性が高い。調査区壁面の土層堆積状況(図VI-5-1)から、TP-3

表VI-5-1 検出遺構数一覧

検出層位	Tピット(TP)	焼土(F)	集石(S)	遺構数
V層中位		2	1	3
V層下位	3			3
合計	3	2	1	6

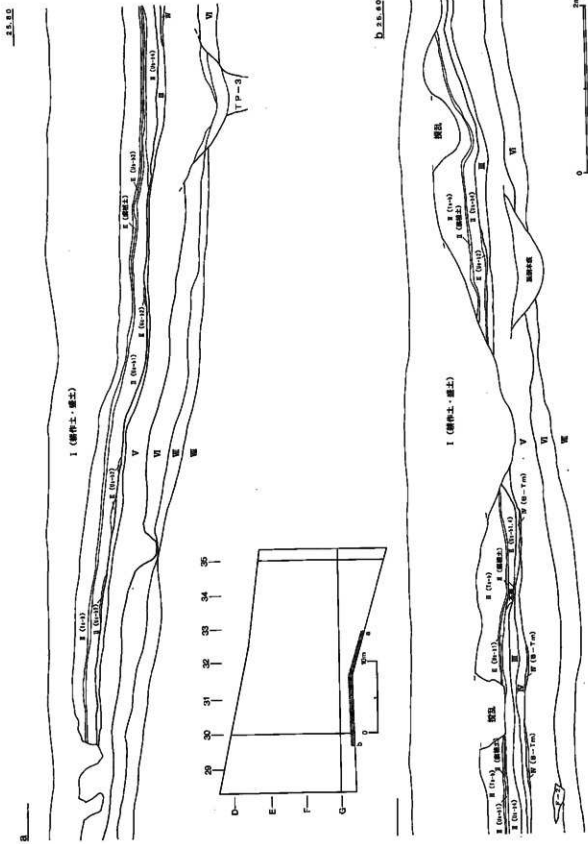
表VI-5-2 出土遺物一覧

分類	土		石		骨角		合計
	遺物	包含物	分	層	遺物	包含物	
1層中位	9	石			4	石	57
1層上層	81	石	石	石・ナイフ	5	た	15
1層下層	15	ス	ク	レイ	3	す	2
1層下層2時	1	475	ビ	エ	2	北	2
1層中位	16	フ	レ	イ	1	北	5
1層中位	1	ウ	フ	レ	16	台	2
1層中位	120	フ	レ	イ	36	・	11
						焼	1
計	1	717					11
土層計	718						571
							1289

表VI-5-3 検出遺構一覧

遺構名	遺構種類	発掘区	検出層位	座標(m)	長軸方向	時期
TP-1	Tピット	E21b-c	V層下位	2.8215.90/2.6440.18/0.982	N-8-E	縄文時代前期
TP-2	Tピット	F90d, F91a-b	V層下位	2.8211.10/2.4810.26/1.140	N-8'-W	縄文時代前期
TP-3	Tピット	F30a-c, G30a-d	V層下位	3.2611.11/2.5410.20/1.277	N-65'-E	縄文時代前期
F-1	焼土	G29d	V層中位	0.3210.34/0.040	不明	縄文時代中期後葉
F-2	焼土	G29d, G30a	V層中位	0.6110.09/0.12	不明	縄文時代中期後葉
S-1	集石	F21a	V層中位	1.9410.66/-	N-32'-W	縄文時代中期後葉





図VI-5-1 A地区メインセクション

は焼土F-2より古く、包含層V層の下位からの検出である。掘り込み面より下は宮戸3遺跡のメインセクション図(図V-4)におけるV2層に対応すると考える。時期は苫小牧市東部、千歳市の類例から縄文時代中期後半から後期前葉と考える。その点については宮戸3遺跡Tピットの項目の末に記した。宮戸3遺跡で試みた形態的分類にあてはめると、墳底面が不明瞭な長軸2.5m前後の大型なものが3基(TP-1~3)である。

尚、TピットについてⅦ層を1m近く掘り込んだため、多様化がみられた。そのため表記について4通り設けた。

Ⅶ：黄褐色ローム質土

Ⅶa：橙色味をおびた黄色バミス

Ⅶb：黄褐色ローム質土がグライ化したもの

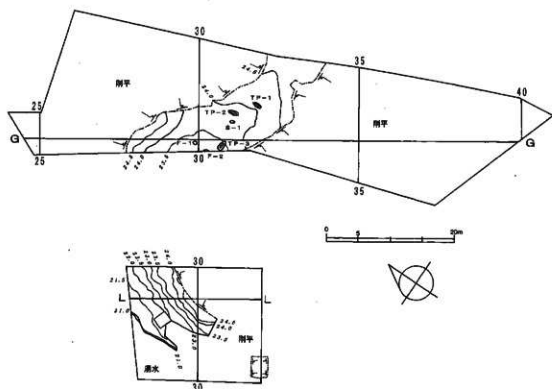
Ⅶc：褐色味の強い黄褐色粘土 しまりがよい

の4通りである。

TP-1 (図VI-5-1・2/表VI-1-1・2/図版61)

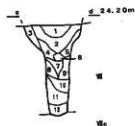
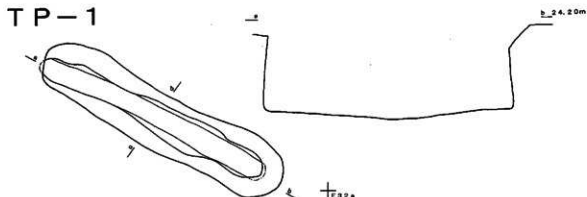
位置：E31b・c 規模：2.82×5.90/2.64×0.18/(0.98)m

特徴：表土除去の際、遺構確認調査範囲を、バックホーによって漸移層下面まで掘り下げた。すると、G31グリッドの、長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、墳底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端はオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、墳底部からほぼ垂直に立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。墳底面はおおよそ平坦だが、中央部が窪む。



図VI-5-2 遺構位置図

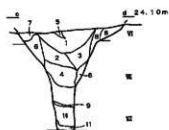
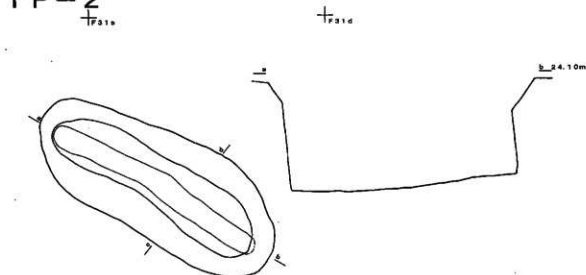
## TP-1



## TP-1土層

- 1 黒色土：ややしまりあり
- 2 黒褐色土：厚3cmの黄褐色ローム質土層と同様の黒色土層が1:1の割合で混じりあう
- 3 黄褐色ローム質土：厚3cmの黒色土層混じり
- 4 黄褐色ローム質土：黒色土混じり
- 5 黄褐色ローム質土：黒色土混じり
- 6 黒褐色土：粘質をおびる。しまりなし
- 7 黒褐色土：しまりなし
- 8 黄褐色土：粘質をおび、しまりあり 黒色土と黄褐色ローム質土の混在
- 9 黄褐色ローム質土：粘質をおび、しまりあり 黒色土混5cm混じり 黒色土と黄褐色ローム質土の混在
- 10 黒褐色土：しまりなし
- 11 黄褐色ローム質土：しまりなし
- 12 黒褐色土：しまりなし 粘質をおびる

## TP-2



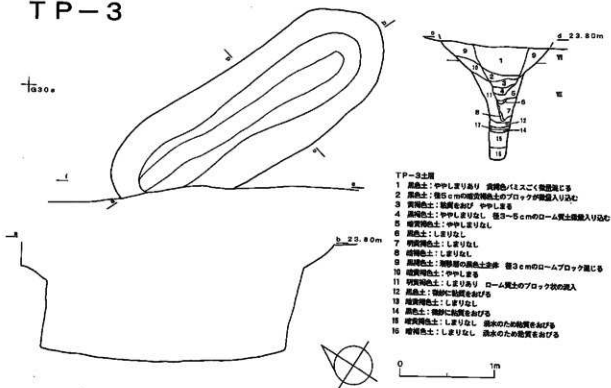
## TP-2土層

- 1 黒褐色土：厚1cmの(粘土層混じり) ややしまる 厚3-5cmのローム質土がブロック状に混じり
- 2 黄褐色土：厚3cmの粘質をおびる黒色土が塊状に混じり 厚0.5cmの黄褐色(粘土層混じり) ありなし
- 3 黄褐色ローム質土：しまりなし 厚1cmの黒色土層混じり
- 4 黄褐色土：もろい 厚3cmの黒色土層混じり
- 5 黄褐色土：ブロック状に入り込んだローム質土全体の上
- 6 黄褐色土：ローム質土の塊混 しまりあり 粘質をおびる
- 7 黒褐色土：しまりあり 粘質をおびる
- 8 黄褐色土：ややしまる 粘質をおびるローム質土
- 9 黒色土：しまりがある 粘質をおびる
- 10 黄褐色土：ややしまる 粘質をおびるローム質土
- 11 黒色土：しまりがある 粘質をおびる この層の厚下より黒水



図VI-5-3 TP-1・2

# TP-3



- TP-3土層
- 1 黒色土：中しまりあり 腐植色くミスごく微塵混じり
  - 2 黒色土：厚5cmの腐植層黒土のブロックが埋入入り込む
  - 3 黄褐色土：腐植をおび ややしまる
  - 4 黒褐色土：ややしまりなし 厚3-5cmのローム黒土埋入入り込む
  - 5 腐植層黒土：中しまりなし
  - 6 黒色土：しまりなし
  - 7 黄褐色土：しまりなし
  - 8 腐植層土：しまりなし
  - 9 黒褐色土：腐植層の黒色土混雑 厚3cmのロームブロック混じり
  - 10 腐植層黒土：中しまる
  - 11 黄褐色土：しまりあり ローム黒土のブロック状の混入
  - 12 黒色土：腐植に腐植をおびる
  - 13 黄褐色土：しまりなし
  - 14 黒色土：腐植に腐植をおびる
  - 15 腐植層黒土：しまりなし 遺物のため腐植をおびる
  - 16 腐植層土：しまりなし 遺物のため腐植をおびる

図VI-5-4 TP-3

遺物：出土遺物なし。

時期：時期は類例から縄文時代中期後半から後期前葉と考える。

TP-2 (図VI-5-1・2 / 表VI-1-1・2 / 図版61)

位置：F 30 d, F 31 a・b 規模：2.82×1.10/2.45×0.26/(1.14) m

特徴：表土除去の際、遺構確認調査範囲を、バックホーによって漸移層下面まで掘り下げた。すると、

F 30、F 31グリッドの、長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸南端はオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、北端については壊底部からほぼ垂直に立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。壊底面は北側がゆるやかに低くなる。底面はおおよそ平坦だが、中央部が微妙に窪む。

遺物：出土遺物なし。

時期：時期は類例から縄文時代中期後半から後期前葉と考える。

TP-3 (図VI-5-1・3 / 表VI-1-1・2・25 / 図版62)

位置：F 30 a・c, G 30 a・d 規模：3.26×1.11/2.54×0.20/(1.27) m

特徴：包含層調査の際、F 30、G 30グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。

土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸東端は墳底部から開きながら立ち上がる。西端は微妙にオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、墳底部から垂直に立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。墳底面はおおよそ平坦だが、中央が微妙に窪む。西端の遺構上面は調査区の際にかかっている。調査区壁面の土層堆積状況(図VI-5-1)を考慮すると、焼土F-2より古く、包含層V層の下位からの検出である。掘り込み面より下は宮戸3遺跡のメインセクション図(図V-4)におけるV2層に対応するものと考える。

遺物：出土層位から判断すると出土遺物はすべて流れ込んだものである。

時期：時期は類例から縄文時代中期後半から後期前葉と考える。

(大森司)

### (3) 焼土

2ヶ所検出した。いずれもV層中位からの検出である。時期は検出面から、ほぼ同時期と考える。沢地形のもっとも低い位置からの検出である。調査区南東壁のセクションから、Tピット埋没後の遺構と考える。

F-1 (図VI-5-1・4/表VI-1-1・2/図版60)

位置：G 29 d

規模：0.32×0.34/(0.04) m

特徴：包含層V層を中位まで掘り下げた段階で、並んだ2ヶ所の焼土を検出した。そのうちのひとつをF-1とした。分布を記録した後、サブトレンチを設定し、土層を確認した。

遺物：遺物の出土はなかった。

時期：検出面の層位と、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期後葉の遺構であると判断した。

F-2 (図VI-5-1・4/表VI-1-1・2/図版60)

位置：G 29 d, G 30 a

規模：(0.5)×(0.06)/0.12m

特徴：包含層V層を中位まで掘り下げた段階で、並んだ2ヶ所の焼土を検出した。そのうちの調査区壁面にかかっている方をF-2とした。分布を記録した後、調査区壁面の土層を確認した。すると、TP-3の掘り込み面より上位であり、層位的に、TP-3が埋没した後に形成されたものと想定した。

遺物：遺物の出土はなかった。

時期：検出面の層位と、周囲の遺物出土状況から、縄文時代中期後葉の遺構であると判断した。

(大森司)

## F-1 F-2

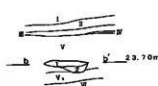
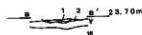
G29d

G30a

F-1

1 焼土層位：ややしりみりあり、粘灰をおびる 厚1-3cmの褐色土が中位に露出

2 焼土層位：しりみりなし、粘灰をおびる 厚1-3cmの褐色土が中位に露出



0 1m

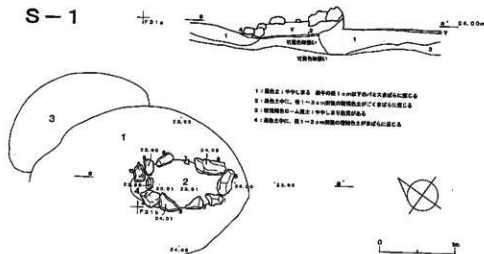
図VI-5-5 F-1・2

F-2

1 焼土層位：粘灰が中位に露出 粘灰をおびる

2 包含層V層中に1が厚1-3cmの深さに露出

S-1



図VI-5-6 S-1

## (4) 集石

S-1 (図VI-5-1-5 / 表VI-1-1-2・3 / 図版59)

位置: F 31 a

規模: 134×0.66 / -m

特徴: 包含層V層を中位まで掘り下げた段階で、11個の礫が楕円形に並んでいる状況を検出した。

礫は風倒木痕跡の黒色土の上に配置されていた。集石の東側について、礫に接するように焼土粒を含む土を検出した。礫でかこまれた土層中にも微妙に焼土粒がはいりこんでおりセクション図に示したが、その層界の線は不明瞭であったが、目安として示した。石についてはすべて被熱しており、意図的に角ばっていない長楕円形に近い形状の礫を配したものと考える。明瞭な焼土は伴わないが、礫の出土状況から、屋外における石組み炉と判断した。

遺物: 礫を11個検出した。石器としての明らかな、使用痕跡はなかった。表で1、3、6としたものについては、被熱時の剥落が著しい。7についてはごく小さな礫であり、意図した配石の一個とは考えにくく計測時に除外した。

時期: 検出面の層位と、周囲の出土遺物の状況から縄文時代中期後葉の可能性が高い。レベル的には焼土よりやや高いが、沢地形を考慮すると面的にはほぼ同時と言える。(大森司)

表VI-5-4 S-1 礫属性一覧表

遺物	円形度	長軸長×短軸長×最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	歪円礫	13.4×9.1×7.2	920.0	砂岩	焼けている
2	歪円礫	13.9×10.9×4.8	700.0	泥岩	斑に焼けている
3	歪角礫	14.1×9.2×3.9	660.0	砂岩	焼けている
4	円礫	13.8×11.5×5.4	1050.0	砂岩	焼けている
5	歪角礫	18.5×(11.9)×(7.8)	(2180.0)	礫岩	焼けている
6	歪円礫	21.0×(10.4)×(6.9)	(2280.0)	泥岩	焼けている
8	歪円礫	11.9×6.0×4.8	510.0	流紋岩	焼けている
9	円礫	12.6×7.4×6.5	820.0	砂岩	焼けている
10	歪円礫	12.2×8.1×4.2	530.0	珪岩	焼けている
11	歪円礫	11.6×7.7×6.7	640.0	珪岩	焼けている

表VI-5-5 TP-3 出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数
覆土中	土器	Ⅲ群b類	1
覆土中	剥片	剥片	1
合計			2

## 6 A地区の包含層の遺物

## (1) 土器

## 概要

717点出土した。縄文時代早期後半、I群b類の可能性が高い胴部破片が9点、縄文時代前期前半II群a類が81点、縄文時代前期後半II群b類が15点、縄文時代中期後半III群b類土器が612点出土した。III群b類については天神山式並行と判断できたIII群b-1類が16点、柏木川式並行III群b-2類が1点、III群b-3類のうち、北筒式並行が120点、煉瓦台式あるいはノダップⅡ式並行のものが22点である。I群b類について細片、磨耗が著しく図化したものはない。

包含層出土土器の分布は沢地形の最も低いところに集中している。型的には東銅路Ⅲ式の可能性があるが判然としない。層位的にはI群～II群b類土器は比較的・層下位からの出土が多い。III群b類についてはV層中位からの出土が多い。分布図において、調査区内の削平が著しく遺物が分布しない所が多い。傾向として沢地形の底に、溜まるように遺物が多く出土する。

## 縄文時代前期の土器 (図VI-6-1・2/表VI-6-1/図版63)

## II群a類 (図VI-6-1・2-1~4/表VI-6-1/図版63)

81点出土し、4点を図化した。網文式土器と静内中野式の出土があったが、判別できない破片が多かった。強いて言うならば網文式土器が目立った。斜行縄文の個体が目立ち、明らかに羽状縄文地紋の破片や、裏面に縄文を施す個体はない。

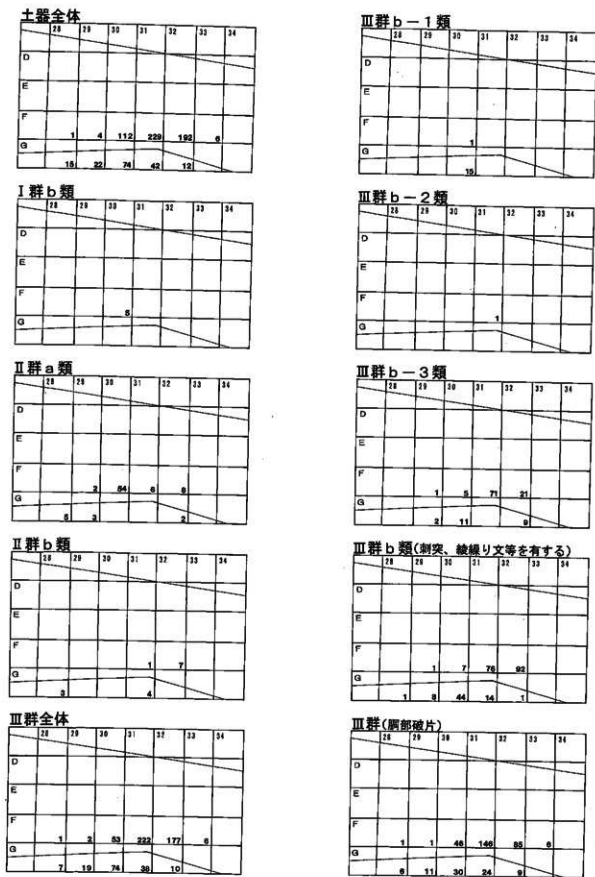
1は静内中野式である。口唇が屈曲するように立ち上がる。内面は粗いナデ調整である。口唇部は丁寧に面をとる。口唇端部内面は丸みをおびる。RL多条縄文である。胎土は粗く、繊維を多く含む。2~3は網文式土器と考える。LR縄文地紋を施した後、口唇部に面をとる。また縄文施文後、節をナデ調整する。胎土には繊維が目立ち、小石粒を含む。内面はナデ調整である。口縁端部内面についても後がはしる。3はRL撚りの縄文原体を施文した後、節をナデつけて滑らかにする。胎土には繊維を多く含む、砂粒が目立つ。縄文施文後ナデ調整である。4は網文式土器のように節を指でなぞって網文文様とするが、静内町中野台地A遺跡1号住居址の遺物のような静内中野式になる可能性がある。RL多条縄文を施文した後、節を指でなぞる。内面は丁寧なナデ調整で、器壁は厚く繊維を多量に含む。

## II群b類 (図VI-6-1・2-5/表VI-6-1/図版63)

15点出土し、1点を図化した。円筒下層b~c式に並行するものとする。胴部破片について、III群b-3類と紛らわしいものが多かった。今回、米原3遺跡出土の、モチーフ的に明らかなII群b類と判断できた。土器破片を観察したところ、内面調整が、丁寧ではあるが、調整時の指痕が残り気味であり、それをひとつの判断の目安とした。

表VI-6-1 層別別出土土器一覽

分類	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層			Ⅵ層	攪乱 風倒木	表掘 探土	計
			上位	中位	下位				
I群b類				1	4		4		9
II群a類			2	27	51		1		81
II群b類				2	13				15
III群b類	未辨分	1	5	250	206		12	1	475
	b 1			2	14				16
	b 2					1			1
	b 3			10	90	20			120
	(小計)	(1)		(15)	(342)	(241)	(12)	(1)	(612)
合計	1		17	372	309		17	1	717



図VI-6-1 包含層出土土器分布図



5の胎土には繊維とバミス片が目立つ。r縄による短軸絡条体を縦方向に転がす。器壁が剥落した、その器表面側である。

縄文時代中期の土器 (図VI-6-1・2/表VI-6-1/図版63)

Ⅲ群b類 (図VI-6-1・2-6~20/表VI-6-1/図版63)

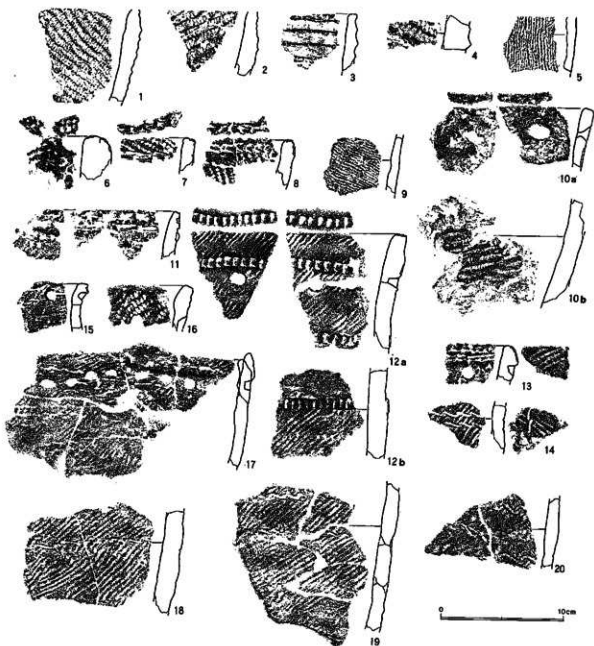
612点出土したⅢ群b類のうち、475点の胴部破片については型式名レベルの判断は出来なかった。Ⅲ群b1類は16点出土し、4点を図化した。天神山式並行のもの(6~8)は黒褐色の胎土が特徴的であった。Ⅲ群b1類は細片で図化できなかった。Ⅲ群b-1類としたものは北筒式が主だが煉瓦台式あるいはノダップⅡ式並行のものが22点出土した。

6~8はⅢ群b-1類土器、天神山式並行である。6は口縁部の山形突起である。口縁波状口縁の頂部から隆帯を垂下するように貼り付けた後、半載竹管による半隆起線状態の押し引きを口縁上端も含めて連続して施す。口唇部については草本茎の押し引き風の刺突を連続して施す。内面はナデ調整である。胎土には繊維が目立ち、粒径1mm以下の白色小石粒をまばらに含む。刺突の施文状況から7と同一個体である可能性が高い。7の口縁部には肥厚帯はなく、LR縄地紋を施した後、半載竹管による半隆起線状態の押し引きを口縁上端に連続して施す。口唇部については草本茎の押し引き風の刺突を連続して施す。内面はナデ調整である。胎土には繊維が目立ち、粒径1mm以下の白色小石粒をまばらに含む。8には口縁部の肥厚帯はなく、LR縄地紋を施した後、口縁部を擦り消して半載竹管によるC字形の押し引きを連続して施す。口縁上端と口唇部については内面はナデ調整である。胎土には繊維が目立ち、粒径1mm以下の白色小石粒をまばらに含む。

9はⅢ群の胴部破片である。見晴町式並行の時期と考える。r無節縄文を地紋に持つ。内面は指頭による調整痕が明瞭だがナデ調整である。焼成は良好であり、胎土には繊維と小石粒が混じる。

10は煉瓦台式あるいはノダップⅡ式並行である。10bは胴下部破片である。LR縄地紋である。胎土は脆く剥落が激しい。胎土には繊維と白色砂粒が目立つ。内面は丁寧なナデ調整である。10aは口縁部破片である。LR縄地紋である。胎土は脆く剥落が激しい。胎土には繊維と白色砂粒が目立つ。内面は丁寧なナデ調整である。口唇部は丸みをおびるが、端部には面取りを行う。補修孔の可能性のある穿孔がある。10aは口縁部破片である。胎土は脆く剥落が激しい。そのため、地紋は不明である。胎土には繊維と白色砂粒が目立つ。内面は丁寧なナデ調整である。口唇部は平坦面をとる。

11~20は北筒式土器、トコロ6類である。11は口縁部破片である。口縁部には肥厚帯を持ち、口唇部外側と肥厚帯の下端には後線が出来る程度の面をとる。口縁部内側の調整は不明瞭だが、端部には後線が微妙作られる。肥厚帯直下には1条の押し引きと口縁部肥厚帯には2条の押し引きを施す。押し引きは断面長方形で左方向に引く。LR地紋施文後に肥厚帯を貼付する。胎土には粒径1mm前後の白色砂粒と小石粒が目立つ。12は口径が30cm近い土器の口縁部破片である。貼付による隆帯を貼り付けた後、LR地紋でありLR縄文を施す。断面長方形の連続押し引きを隆帯上に施す。口唇部側の隆帯直下には円形刺突がめぐる。13はⅢ群b-3類の口縁部破片である。肥厚帯形成後、ナデ調整を施し、半載竹管による2列の連続押し引きを施す。内面にはLR縄文を施す。後援部断面形態は三角形である。14はⅢ群b-3類の口縁部破片である。縦織りLR縄地紋。裏面にも同一原体で縦方向に縄文を施文する。胎土には1mm前後の砂粒が混じる。焼成は比較的良好である。Ⅲ群b-3類の胴部破片である。15はⅢ群b-3類の口縁部破片である。縦織りを持つLR縄文地紋施文後、刺突を施す。内面と口唇部にはナデ調整を施す。口唇部は内面から外反する形態で端部は外側にナデつけるように調整する。胎土はまばらで繊維と白色の小砂粒が目立つ。16はⅢ群b-3類の口縁部破片である。LR地紋を施した後口縁端部について、外へ反るようにナデつける。穿孔は縄文施文の後である。胎土



図VI-6-2 包含層出土の土器

にしまりはなく、繊維が混じる。直径1mm以下の白色砂粒がまばらにある。17は直径25cm前後のⅢ群b-3類の口縁部破片である。口縁部は断面三角形に肥厚する。肥厚部の直下には円形刺突が巡る縦線を持つRL地紋である。内面はナデ調整である。器壁はややしまりない胎土がまばらで繊維が目立つ。白色の小砂粒がまばらに入り込む。18は胴部破片である。表面には煤がよく附着する。内面は縦方向のミガキ調整である。胎土はしまりがなく、繊維と1mm以下の白色小砂粒が目立ち、小石がまれに入る。19は胴部破片である。内面は剥落が著しいが、丁寧な調整が窺える。器壁はまばらでしまりがなく繊維がよく混じる。20はⅢ群b類の胴部破片である。21は縦線を持つLR縄文地紋である。内面はナデ調整である。胎土はしまりがなく、白色の砂粒がまばらに混じる。

(大森司)

表VI-6-2 包含層掲載土器一覽表

包含層組名	分類	形制・種類	層位	点数	胎・骨・色など 器形名と器形番号、数量と器形別点数	備 考
第6-2 1	Ⅱ群a類	F30c16	V層下位	1	F32d8, V中(1),	2点 胎肉中野式
第6-2 2	Ⅱ群a類	F30c12	V層下位	1	F29c3, VF(1), F30b5, V中(1)	2点 陶文土器
					F30b8, VF(1),	4点
第6-2 3	Ⅱ群a類	G28d3	V層下位	1		1点 陶文土器
第6-2 4	Ⅱ群a類	K28d1	V層中位	1	F32b9, VF(1),	2点 陶文土器
第6-2 5	Ⅱ群b類	F32d10	V層下位	1	F31b7, - (1), F31c3, V中(1)	胎土には繊維とパミス
					F31c12, VF(1), F32a6, VF(1)	厚輪筋条体
					F32c7, VF(1), F32c8, VF(2)	
					F32d8, V中(2),	10点
第6-2 6	Ⅱ群b-1類	F30c5	V層中位	1		1点 山形突起部分 平縁竹管の連続押し引き
第6-2 7	Ⅱ群b-1類	F30b2	V層中位	1	F30b3, V中(1), F31d4, V中(1)	6, 7, 8の胎土は類似する
					G29a3, VF(1), G29a5, VF(1)	平縁竹管の連続押し引き
					G30a1, V中(1), G30a4, V中(1)	7点
第6-2 8	Ⅱ群b-1類	G30a2	V層中位	1		肥厚寄を持たない口縁部
		G30a5	V層下位	1		2点
第6-2 9	Ⅱ群b-1類	F31d2	V層中位	1	F31b7, VF(1), F31c6, V中(1),	胎土には繊維と小石粒
					F32a6, VF(1), 横土(1),	
						5点
第6-2 10a	Ⅱ群b類	F31c8	V層中位	1	F30c1, V中(1), F31a7, V中(2)	滑い胎土には繊維と白色粒が目立つ
		F31c4	V層中位	1	F31a10, VF(1), F31b5, V中(2)	
第6-2 10b	Ⅱ群b類	F31d1	V層中位	2	F31b8, V中(2), F31c3, V中(1)	
		F31d4	V層中位	1	F31c4, V中(1), F31c5, V中(2)	
					F31c7, V中(1), F31c11, VF(1)	
					F32a8, VF(1), G28d1, V中(1)	
					G30d1, V上(1),	
						22点
第6-2 11	Ⅱ群b-3類	F32a6	V層下位	1	F32d7, VF(2), G32a4, VF(1)	陶文施文後に粘土紐を貼り付ける
		F32a4	V層下位	1		5点
第6-2 12a	Ⅱ群b-3類	F31c1	V層中位	1	F29c1, V中(1), F30a4, VF(1)	口唇部分に平縁面をとり押し引きを施す
		F32d8	V層中位	1	F30c1, V中(2), F31b6, VF(1)	
		F31d5	V層下位	1	F31d1, V中(1), F32a2, V中(2)	
第6-2 12b	Ⅱ群b-3類	F31b1	V層上位	1	F32d1, V上(2), G29a2, V中(1)	
					G29a3, VF(1),	16点
第6-2 13	Ⅱ群b-3類	F32d8	V層中位	1	F30c8, V中(1), F30d3, V中(1)	口縁部内面にも地紋と同一層体によるLR
					F31b8, V中(1), G30a8, VF(2)	陶文施文
						6点
第6-2 14	Ⅱ群b-3類	F31d2	V層中位	1	F32a15, VI(1),	2点 胎土には砂粒が目立ち、焼成良好
第6-2 15	Ⅱ群b-3類	F31b9	V層中位	2	F31b10, VF(1), G31a4, V中(1)	胎土には繊維と白色粒が目立つ
						4点
第6-2 16	Ⅱ群b-3類	F32b4	V層中位	1	F31c8, V中(1), F32a1, V中(1)	もろい胎土には繊維と白色粒が目立つ
					G29a1, V中(1), G31d3, VF(1)	
						5点
第6-2 17	Ⅱ群b-3類	G30a10	V層下位	7	F30c10, V中(1), F31a1, V上(1)	もろい胎土には繊維と白色粒が目立つ
					F31a2, V中(2), F31a5, V中(2)	
					F31a6, V中(5), F31b2, V中(1)	
					G30a10, VF(3), G32d1, V中(2)	
						24点
第6-2 18	Ⅱ群b-3類	F32c3	V層中位	1	G31a3, V中(1), G31d3, VF(1)	胎土には繊維と白色粒が目立つ、まばらに
		F32c2	V層中位	1	N25b1, VF(2),	小石が入り込む
第6-2 19	Ⅱ群b類	F31b2	V層中位	2	F32a1, V中(2), F32a5, V中(1)	胎土にはしまりがなく、繊維が目立つ
		G32d3	V層	1	F32a10, VF(1), F32b11, VI(1)	
		F31c3	V層中位	1	F32b12, VI(1), F32c6, V中(1)	
		G31d5	V層下位	1		
		G31d7	V層下位	1		
						13点
第6-2 20	Ⅱ群b類	G32a1	V層中位	2	F31b12, VF(1), F31d1, V中(1)	縁線のあるLR陶文地紋胎土には白色粒
					F32a5, V中(1), F32d8, V中(1)	が目立つ
					G32a1, V中(5),	11点

## (2) 石器等

米原4遺跡A地区では560点の石器類が出土している。このうち大部分が北側の沢筋から出土しており、斜面からはわずかに7点を得たのみである。大分類では礫・礫片が407点と最も多い。定型的な石器は、剥片石器33点、磨製石器57点、礫石器26点の計116点である。

### 1) 剥片石器

石鎌 (図VI-6-4-1/表VI-6-4/図版64)

4点出土している。1点図示した。1は三角鎌。基部の挟りが深い。両面に細かな調整が施される。左脚部を欠損する。黒曜石製。

石槍・ナイフ (図VI-6-4-2~5/表VI-6-4/図版64)

5点出土している。4点図示した。2は茎を有するもの。調整はやや粗い。先端を欠く。3~5は菱形もしくは木の葉形で、茎が明瞭ではないもの。調整は丁寧である。いずれも黒曜石製。

スクレイパー (図VI-6-4-6~8/表VI-6-4/図版64)

5点出土している。3点図示した。6は破片で、全体の形状は不明である。側縁および下端が調整されており、使用による刃部の潰れが見られる。7は縦長の剥片の側縁に刃部を設けているもの。裏面に主剝離面を残す。8は素材の形状を大きく変えず、両面に粗い調整を施したもの。両側縁に使用痕が見られる。下面に自然面が残る。いずれも黒曜石製である。

ピエス・エスキュー (図VI-6-4-9/表VI-6-4/図版64)

2点出土している。1点図示した。9は剥片の上下端に階段状の細かな剝離が認められる。黒曜石製。

Uフレイク (図VI-6-4-10/表VI-6-4/図版64)

16点出土している。1点図示した。10は使用痕により、縁辺が鋸歯状に剝離している。黒曜石製。

### 2) 磨製石器

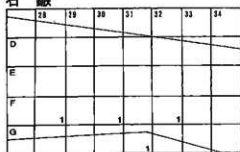
石斧 (図VI-6-4-11~13/表VI-6-4/図版64)

57点出土している。3点図示した。11は擦り切り手法によって製作されたもの。両側縁に痕跡が残る。全面が研磨されているが、使用による欠損が著しい。12、13は未製品。12は両面が丁寧に研磨されているが、刃部が未調整である。13は楕円形の縁辺を打ち欠いて扁平に整形しようとしている。ほとんど研磨されておらず、礫面を残す。石材は11が千枚岩、12、13が泥岩。

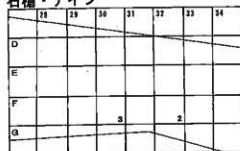
表VI-6-3 層別出土石器等一覧

	分類	III層	V層			VI層	斜面	攪乱 層倒木	表採 掘土	計
			上位	中位	下位					
剥片石器	石鎌		1	2	1					4
	石槍・ナイフ		1	2	2					5
	スクレイパー			3	2					5
	ピエス・エスキュー			2						2
	Rフレイク				1					1
	Uフレイク			9	6	1				16
剥片	フレイク		2	21	10	2		1		36
磨製石器	石斧		2	30	25					57
礫石器	たたき石			6	4		3	1	1	16
	すり石			1					1	2
	北海道式石冠				1			1		2
	砥石			4	1					5
	台石				2					2
礫・礫片	礫・礫片	19	111	242	27	5	3			407
土製品	焼成粘土塊				1					1
合	計	19	117	322	83	8	7	2	2	560

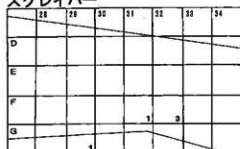
## 石 鏃



## 石槍・ナイフ



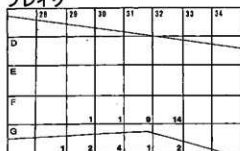
## スクレイパー



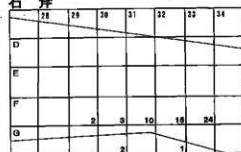
## Uフレイク



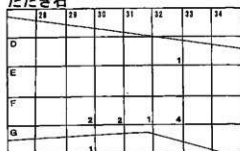
## フレイク



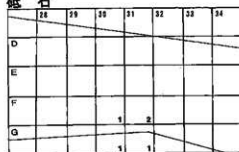
## 石 斧



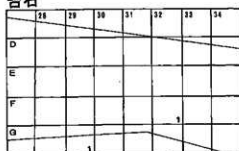
## たたき石



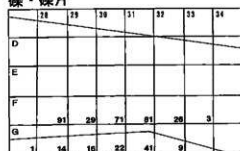
## 砥 石



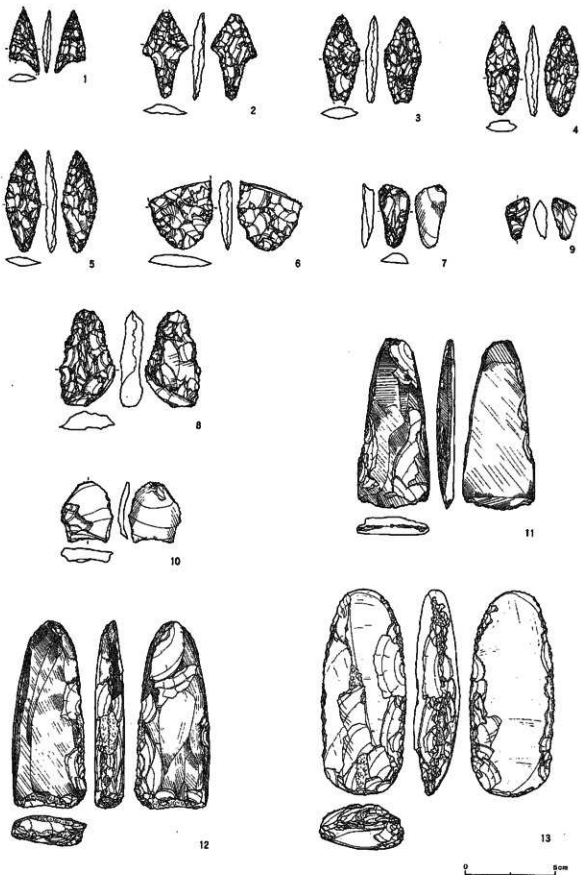
## 台石



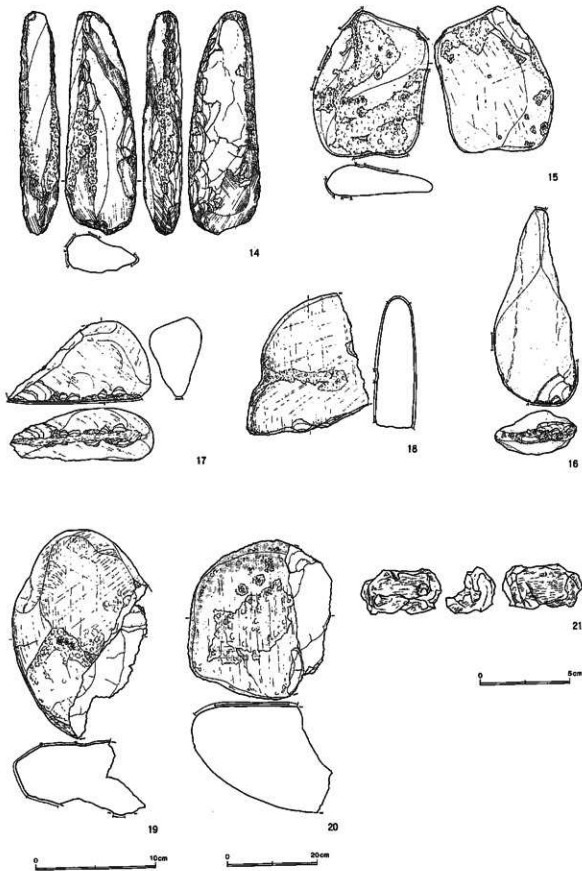
## 礫・礫片



図VI-6-3 包含層出土石器等分布図



图VI-6-4 包含層出土の石器(1)



図VI-6-5 包含層出土の石器(2)・土製品

### 3) 礫石器

たたき石 (図VI-6-5-14~16/表VI-6-4/図版64)

15点出土している。3点図示した。14は石斧未製品を転用したもの。左側縁に擦り切り痕が残る。主に両側縁を敲打している。15は方形の偏平礫の表面および側縁・下端に敲打痕が見られるもの。16は瓢箪形の偏平礫の上下端を敲打している。14が泥岩製、16が流紋岩製、15が安山岩製である。

すり石 (図VI-6-5-17/表VI-6-4/図版64)

2点出土している。1点図示した。17は破片で、断面三角形の礫の下辺を擦っている。石灰岩製。

北海道式石冠 (図VI-6-5-18/表VI-6-4/図版64)

2点出土している。1点図示した。18は破片で、縦方向に割れている。偏平礫の両面を擦り、敲打によって擦り面を作り出している。また、端部を打ち欠き、鉢巻き状の浅い溝を巡らして、把握部を設けている。下部の擦り面に当たる部分は、ほとんど使用されていない。凝灰岩製。

砥石 (図VI-6-5-19/表VI-6-4/図版64)

5点出土している。1点図示した。19は破損品。上面が研磨によって凹む。また、研磨面を平らにしようとしたと考えられる敲打痕が見られる。側面や下面にも部分的に研磨面を有する。砂岩製。

台石 (図VI-6-5-20/表VI-6-4/図版64)

2点出土している。1点図示した。20は破片。上面が擦られた後、敲打されている。被熱により一部が赤く変色している。付近のF-2に関連する遺物と考えられる。安山岩製。 (芝田)

### 4) 土製品

焼成粘土塊 (図VI-6-5-21/表VI-6-4/図版64)

水じされたようなキメの細かい粘土に砂粒が目立って混じる。指頭でひねった痕跡と、刺突具による圧痕がある。強いというならば、調査区内出土のⅢ群b-3類土器の胎土に似る。 (大泰司)

表VI-6-4 包含層撿載石器等一覧

群	分類	出土地・遺物種	層位	長さ×幅×厚さ (cm)	重量(g)	石質	備考
1	石 鏃	G31d-1	V層中	(3.45)×(1.65)×0.45	(1.9)	黒曜石	欠損品
2	石槍・ナイフ	F32c-15	V層下	(4.80)×2.50×0.65	(4.2)	黒曜石	欠損品
3	石槍・ナイフ	F30d-14	V層中	(4.80)×2.50×0.68	(5.2)	黒曜石	欠損品
4	石槍・ナイフ	F30d-16	V層下	(5.00)×1.85×0.75	(5.6)	黒曜石	欠損品
5	石槍・ナイフ	F30d-6	V層上	5.60×2.00×0.65	5.2	黒曜石	
6	スクレイパー	F31a-6	V層下	(3.80)×(3.55)×(0.75)	(8.3)	黒曜石	破片
7	スクレイパー	F32d-10	V層下	3.50×1.75×0.65	2.9	黒曜石	
8	スクレイパー	G29d-3	V層中	5.30×3.10×1.25	18.0	黒曜石	
9	ピレス・エスキュー	F31d-6	V層中	2.30×1.40×0.80	1.8	黒曜石	
10	Uフレイク	F32d-7	V層中	3.35×2.85×0.75	4.3	黒曜石	
11	石 斧	F32d-4	V層中	9.40×4.00×1.00	52.7	千枚岩	
12	石 斧	F31b-6	V層中	10.45×4.15×1.65	120.9	泥岩	未製品
13	石 斧	G32a-3	V層中	11.50×4.75×2.55	182.4	泥岩	未製品
14	たたき石	斜面部-1	表採	18.70×5.90×3.35	548.6	泥岩	石斧未製品を転用
15	たたき石	L2800-1	V層	12.10×9.80×2.90	430.5	砂岩	
16	たたき石	F32c-18	V層	16.10×6.80×3.60	402.1	流紋岩	
17	すり石	斜面部-2	表採	(6.60)×(11.90)×4.45	(356.2)	石灰岩	破片
18	北海道式石冠	F33a-2	V層下	(11.70)×(10.10)×3.55	(463.0)	凝灰岩	破片
19	砥石	F30c-10	V層下	(17.40)×(11.50)×6.20	(1109.0)	砂岩	破損品
20	台石	G29d-7	V層下	17.80×(16.20)×(12.95)	(4025.0)	安山岩	破片 被熱
21	焼成粘土塊	F32c-19	V層下	4.55×2.50×2.80	13.2		



## 7 B地区の遺構と遺構出土の遺物

## (1) 概要

米原4遺跡B地区から検出した遺構は住居跡6軒、土壌4基、Tピット4基、焼土11ヶ所である。いずれも縄文時代中期後半～後期初頭に位置付けられる。遺跡はイモツペ川の右岸に位置し、台地の東西を緩い2本の沢状地形によって開かれている。これに挟まれる、川に向かって南西側に張り出す台地の尾根状のところに住居跡、土壌が多く検出される。東側の弱く張り出す台地においてはH-6、調査区南西端にはH-4がある。住居跡で一番大きいものはH-1で、長軸が8mを越す。この大型の住居は平面形が卵型である。この他に小型で平面が円形の住居で、直径が2.5m～3m程度のH-3、4、平面形が楕円のH-6がある。H-2、H-4、H-5を除きこれらの住居跡に共通するのは剥片、剥片石器、石斧片が床面から多く出土することである。剥片石器で多いのは石鏃で、二次調整が確な未製品が殆どである。次いで多いのは石斧片で、特にH-3、6に多くみられる。H-4からは剥片石器類の出土が少ないが、住居の形態からH-3と類似する遺構であると考えられる。H-1、H-3、H-6

表VI-7-1 検出遺構一覧

遺構名	遺構種類	発掘区	検出層位	規模 (m)	長軸方向	時期
H-1	住居跡	M45a~d, N45a~d, N46a~d,	V層下位	7.76×5.56/7.50×5.28/0.70	N-44°-W	縄文時代中期後半
H-2	住居跡	N46c~d, N47a~b	V層下位	3.50×2.60/2.82×2.11/0.55	N-15°-E	縄文時代中期後半-前期
H-3	住居跡	N47b~d, N48	V層下位	3.36×3.18/2.80×2.78/0.40	N-43°-E	縄文時代中期後半
H-4	住居跡	M39b, N39a	VI層上部	2.20×(1.76)/2.04×(1.68)/0.15 (3.50)×(1.94)/(3.16)×(1.86) /(0.25)	N-8°-W	縄文時代中期後半
H-5	住居跡	O43c, O44b	VI層上面		N-13°-W	縄文時代中期後半-前期
H-6	住居跡	M54a~d, M55a~b	VI層	4.46×3.28/4.34 3.22/0.20	N-20°-W	縄文時代中期後半
P-1	土壌	N44a~d	VI層上面	1.90×1.65/1.58×1.20/0.25	N-40°-E	縄文時代中期後半
P-2	土壌	M44d	VI層上面	0.73×0.64/0.45×0.40/0.15	N-19°-W	縄文時代中期後半
P-3	土壌	N44d	VI層上面	0.80×0.70/0.70×0.52/0.22	N-0°-E	縄文時代中期後半
P-4	土壌	N48b	VI層上面	0.82×(0.56)/0.62×(0.42) /(0.16)	N-38°-E	縄文時代中期後半
TP-4	Tピット	M41c, M42b	V層下位	2.56×0.51/2.55×0.24/(0.90)	N-8°-W	縄文時代中期後半-前期
TP-5	Tピット	O48d, O49a	V層下位	2.36×0.57/2.24×0.21/(1.04)	N-27°-W	縄文時代中期後半-前期
TP-6	Tピット	N52c~d, N53	V層下位	1.58×0.64/1.38×0.27/(0.84)	N-0°-W	縄文時代中期後半-前期
TP-7	Tピット	N54d, N55a	V層下位	3.01×0.30/2.85×0.17/(0.72)	N-20°-E	縄文時代中期後半-前期
F-3	焼土	M43b	V層下位	1.05×0.48/0.10	N-105°-W	縄文時代中期後半
F-4	焼土	N43b, M43a	V層下位	0.84×0.62/0.06	N-94°-W	縄文時代中期後半
F-5	焼土	N43b, M43a	V層下位	0.76×0.06×0.04	N-10°-W	縄文時代中期後半
F-6	焼土	M48d	V層下位	0.92×0.34/0.12	N-27°-W	縄文時代中期後半
F-7	焼土	M52b	V層下位	0.69×0.63×0.14	N-93°-W	縄文時代中期後半
F-8	焼土	M54b	V層下位	0.58×0.50×0.06	N-114°-W	縄文時代中期後半
F-9	焼土	M55a~b	V層下位	0.55×0.46×0.08	N-20°-W	縄文時代中期後半
F-10	焼土	M50d	V層下位	0.65×0.52×0.11	N-75°-W	縄文時代中期後半
F-11	焼土	M57c	V層下位	0.81×0.63×0.08	N-44°-W	縄文時代中期後半
F-12	焼土	M46d, M47a~b	V層下位	0.42×0.28×0.06	N-3°-E	縄文時代中期後半
F-13	焼土	M50a~d	V層下位	0.58×0.34/0.10	N-8°-W	縄文時代中期後半

から出土する剥片石器、剥片類は肉眼観察により赤井川産の黒曜石が多い。これらは礫皮表面のような節理もしくは流理構造をもつもので、剥片石器の素材に多く用いられる。石斧片においては、住居の床面から出土するのは石斧調整時に排出される泥岩の礫皮表面が多く、住居内で石斧が作られた後、屋外へ持ち出されたと考えられる。H-1から出土した石斧未製品は礫皮表面を打ち欠いただけのものである。このことから、B地区から検出される遺構は石器製作を行っていた場であると考えた。

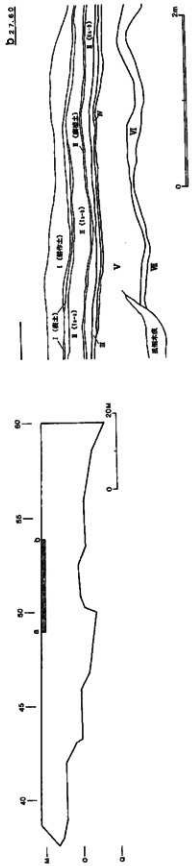
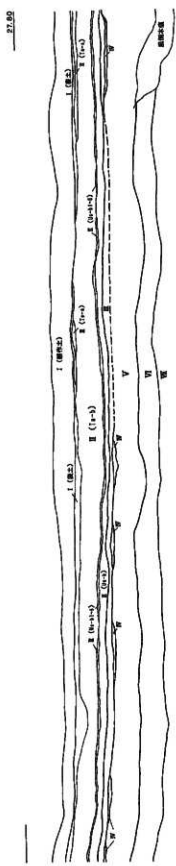
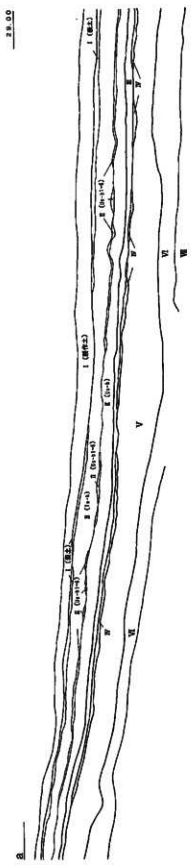
土壌についてはP-1~3までほぼ同一時期のものと考えられるが性格は不明である。P-4は人為的に埋め戻された可能性が高い。

焼土は調査区の北西側や北東側に点在する。F-3、4、5は焼土やその周辺に剥片石器類や礫片が出土する。これらの焼土が位置するところは西側の沢状地形となっており、この下に被熱礫片が多く出土するM42グリッドがある。F-7の位置するM51、M52グリッドからは被熱した石槍・ナイフ片と礫・礫片が多く出土している。ここより川に向かって、緩い沢状となる。発掘区では川に向かって土砂が流出するのを防ぐためのクリアランスが河岸の肩まで確保されたため、調査区に掛る台地と沢状地形の遺構、遺物の全容を知りえることが出来なかった。この続きは次年度以降の調査となる。

(補関)

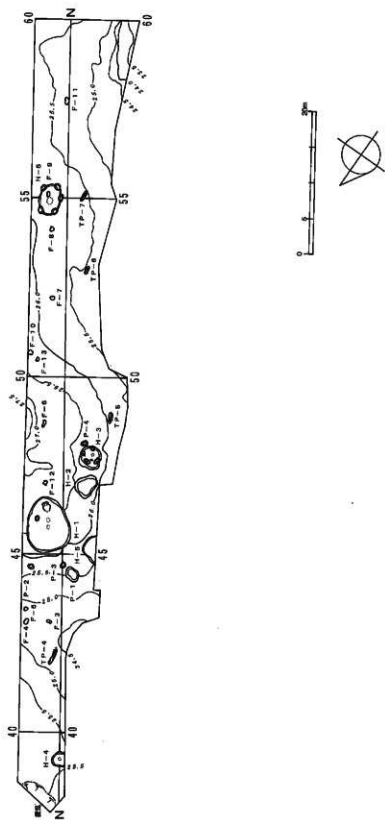
表VI-7-2 出土遺物一覧

土器			土器			石器等						
分類	遺構	数量	分類	遺構	数量	分類	遺構	数量	分類	遺構	数量	
I b	16	935	IV b		4	石槌	58	253	たたく石	16	151	
I b-1	14	1728	不明		1	石槍・ナイフ	25	418	すり石	4	161	
I b-3		2				石鏃	6	32	両平打製石器		2	
I b-4		1				つまみ針ナイフ	2	42	北樽式石刃	2	148	
II a	9	750				スクレイパー	28	97	砥石	13	105	
II a-1		451				ピロ-ヒト-ス	2	16	骨片	9	60	
II a-2	4	605				スフレイク	104	259	礫・礫片	515	9705	
II b		530				ロフレイク	114	288	土製品		4	
III a		88				石鏃	11	60	再生土製品		1	
III b	200	4285				フレイク	1880	6045	焼成粘土塊		1	
III b-2	161	641				石斧	512	1679				
III b-3	214	1290										
IV a		76										
計			718	11472	計						3423	19523
土器計			13190			石器等計						22925
			総計									36116



米原4遺跡

図VI-7-1 B地区メインセクション図



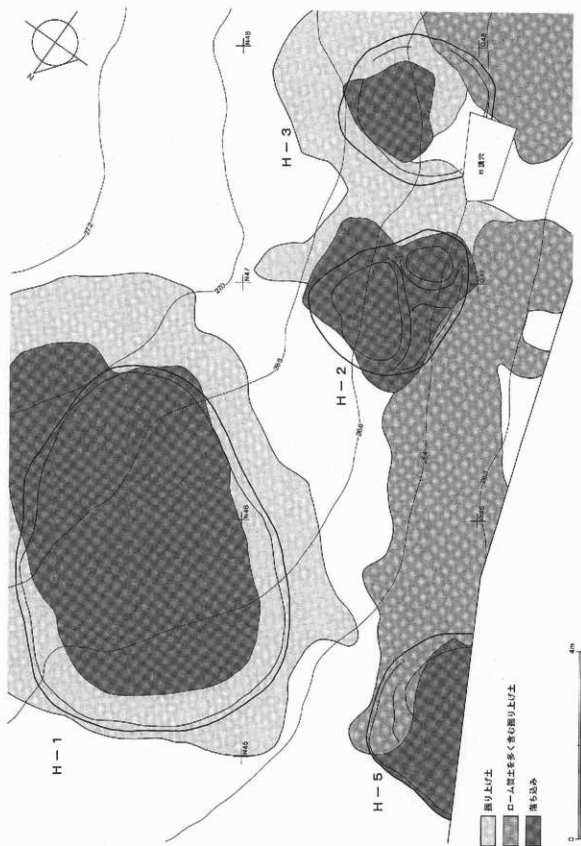
图VI-7-2 B地区遗址位置图

## (1) 住居跡

米原4遺跡B地区から検出した遺構は6軒である。すべて縄文時代中期後半～未業に属する。住居の平面は3種類に分けられる。卵形で長径が8m近くあるもの(H-1)、ほぼ円形で直径が3mほどのもの(H-3、4)、楕円形の住居(H-6)が確認されている。その他に、風倒木によって擾乱された住居(H-2)がある。H-4とH-6の床面からはⅢ群b-2類の柏木川式に比定される土器が

表VI-7-3 H-1出土遺物一覽

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数		
覆土	土器	Ⅲ群b-3類	53点			Rフレイク	7点		
	剥片石器	Uフレイク	1点			Uフレイク	3点		
	剥片	フレイク	2点		礫石器	石斧	25点		
	礫・礫片	礫・礫片(被熱)	1点			砥石	2点		
		合計	57点		剥片	フレイク	67点		
覆土上面	土器	I群b類	3点		床	土器	I群b類	2点	
		I群b-1類	4点					I群b-1類	1点
		Ⅲ群b類	59点					Ⅱ群a類	9点
		Ⅲ群b-2類	27点					Ⅲ群b類	11点
		Ⅲ群b-3類	15点					Ⅲ群b-2類	15点
	剥片石器	石鏃	7点			Ⅲ群b-3類	3点		
		石槍・ナイフ	6点	剥片石器		石鏃	8点		
		スクレイパー	6点				石鏃	1点	
		ピエス・エスキュー	1点				スクレイパー	3点	
		Rフレイク	8点				ピエス・エスキュー	1点	
		Uフレイク	21点			Rフレイク	14点		
		石核	2点			Uフレイク	6点		
	礫石器	石斧	73点		礫石器	石斧	27点		
		たたき石	1点				たたき石	6点	
		北海道式石鏃	1点				砥石	1点	
		砥石	3点				台石	2点	
						剥片	フレイク	149点	
	剥片	フレイク	268点		礫・礫片	礫・礫片	22点		
	礫・礫片	礫・礫片	92点			礫・礫片(被熱)	3点		
		礫・礫片(被熱)	172点		合計	284点			
		合計	769点	H P	土器	Ⅲ群b-2類	1点		
	覆土下面	土器	I群b類	3点		合計	1点		
I群b-1類			6点	H F	剥片	フレイク	27点		
Ⅲ群b類			8点					合計	27点
Ⅲ群b-2類			5点		合計	27点			
Ⅲ群b-3類			4点		合計	27点			
剥片石器		石鏃	1点		合計	27点			
		石槍・ナイフ	3点		合計	1,316点			
				総計					



図VI-7-3 検出遺構とその掘り上げ土

床面から出土する。その他の住居の床面及び覆土中からⅢ群b類、Ⅲ群b-3類土器が出土することから並行する時期に構築されたか、もしくは大幅な時期差がないと考えた。住居の床面では剥片石器を製作したと考えられる、黒曜石のフレイク、チップや石鏃未製品と、石斧を製作時に排出された泥岩の破片が多く出土した(H-1、3、6)。調査の結果、H-1、3、4、6を中心に柏川式期もしくは並行する時期に石器製作を行っていたところであると判断した。

H-1 (図VI-7-3~9/表VI-7-1・2~5/図版67~70・86・87)

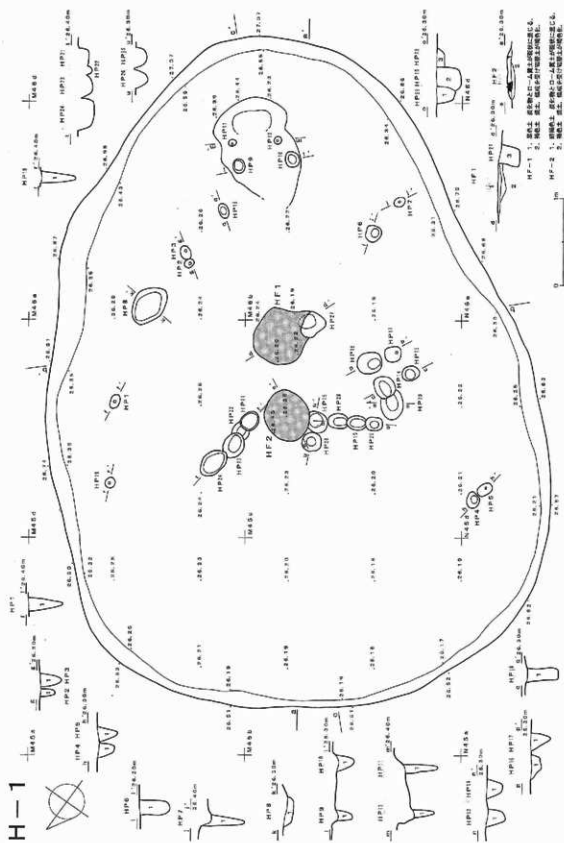
位置: M45 a~d、N45 a・d、N46 a~d

規模: 7.76×5.56/7.50×5.28/0.70m

特徴: 調査区南西側、標高26.0~26.5mの所に位置する。調査区の中で最も大型の住居跡である。火山灰除去後、緩やかな落ち込みを確認し遺構の存在を想定した。V層の下位まで掘り下げたところ、明瞭な掘り上げ土と黒色土の落ち込みを確認し住居跡と判断した。この段階で他にも、台地の南西側に張り出す尾根の部分に教軒の竪穴式住居の存在を示唆する黒色土の落ち込みが確認できた(H-2~3、5図VI-7-3)。土層観察用のベルトを設定し覆土を掘り下げた。平面形は東側に向かってやや尖る卵形である。床面は東側の突き出た先端部と、46ラインの東側を除いて平坦である。先端部は深さ20cmほど掘り窪められている。住居の東壁に向かって立ち上がりが明瞭であるが西側の床面中央部へは土壌状にはならず、なだらかに床面に延びる。このピット状の周辺の床、グリットラインにして46より1mほど西側は、床面から壁にかけて曲線を描くように立ち上がる。

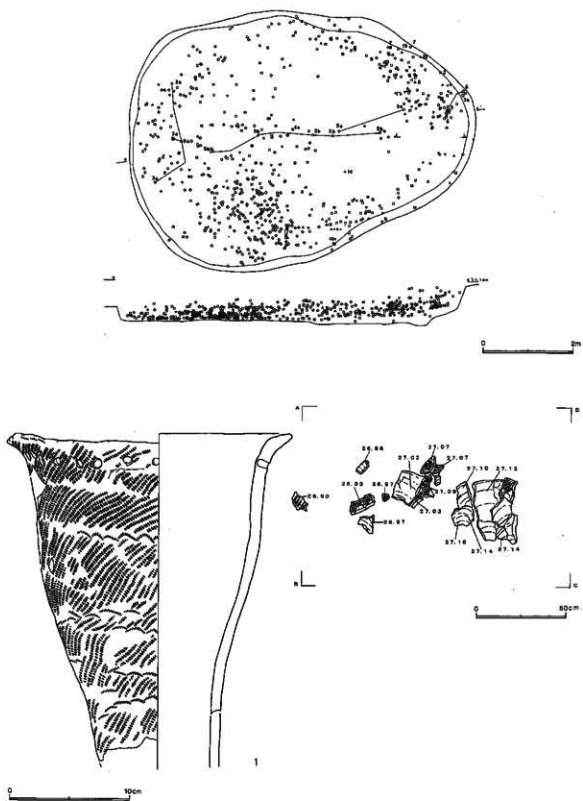
覆土は自然埋没によるものである。住居の西側においては比較的短時間に堆積したものと考えられる。グリットラインにして45より西側に堆積する覆土はローム質土を多く含む覆土で、色は褐色から暗褐色を呈し(a a'セクション22~24まで)、また分層できる部分が少ないことから埋没までの時間が短いことが想定される。住居東側の覆土については、埋没過程のなかで住居の窪みを利用して廃棄されたと考えられる縄文時代中期末葉の土器が1個体検出されている(図VI-7-5、図版68、86)。床面のほぼ中央には2ヶ所の地床炉と考えられる焼土がある。床面を精査中に暗褐色土で焼土粒と微細な炭化物を含む広がりを2ヶ所確認した。半裁したところ両方共に焼土粒の広がりの下に褐色土の焼成を受けた面を検出した。炉を構築するための掘り込みなどは無いが前述した床面のフレイク、チップの検出面と同じ面に存在することから地床炉とした。この2ヶ所の焼土で東側のF-1はHP-27によって切られている。HF-2からは被熱し褐色化したところから黒曜石のチップが27点出土している。付属ピットは28ヶ所検出した。先に述べた住居の東側に位置する先端部の土壌状の窪みには4ヶ所の付属ピットが検出されている。グリットライン46より東側の床面に付属ピットが確認された。この部分は前述したとおり、壁の立ち上がりが曲線を描くようになっており、西側の平坦面に比べ若干ではあるが低くなっている。ここから確認された付属ピットは大きく2つの形に分類できる。断面の尖ったものと円柱状の比較的浅いもので、後者は重複しているものが多い。断面の尖ったものは床面と壁の境から40cmから1mほど床面に入った所、HF-1、2を中心として放射状に回る。円柱状のピットはHF-1、HF-2周辺に多く、重複する形で検出した。性格は不明である。先端部の尖ったものは柱穴である可能性がある。付属ピットの確認されない西側の部分では黒曜石の剥片、剥片石器の未製品、石斧未製品、たたき石などが多く出土した(図VI-7-7、8、9)。この住居跡は剥片石器を製作していた場と考えられる。

遺物: 1・5はⅢ群b-3類、2~4はⅢ群b-2類、6はⅢ群b類である。1は覆土およびM46グリッドのV層下位から56点出土した。口径31.6cm、残存器高36.5cmを計る。口縁は外反する。器面には結束第2種の縄文、口縁には棒状工具によるやや下方向からの円形刺突文が施される。口唇・内面

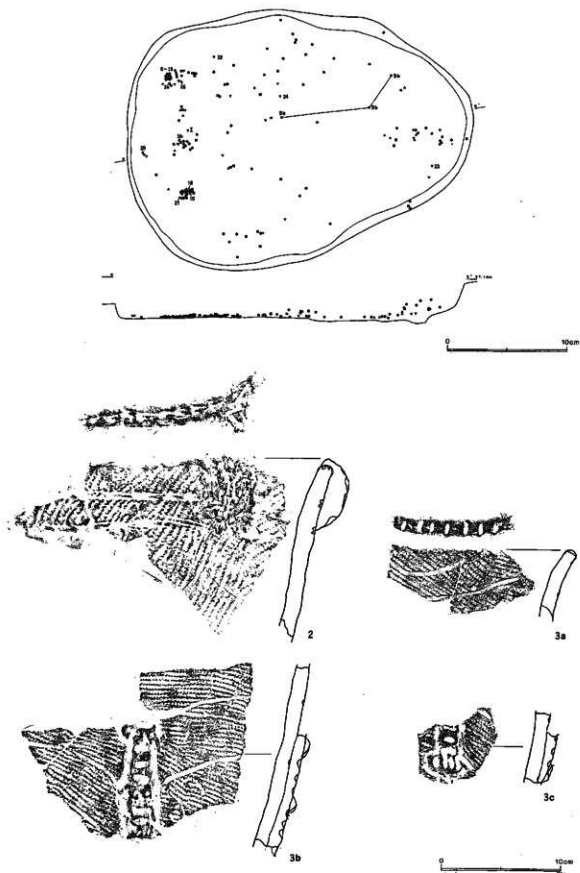




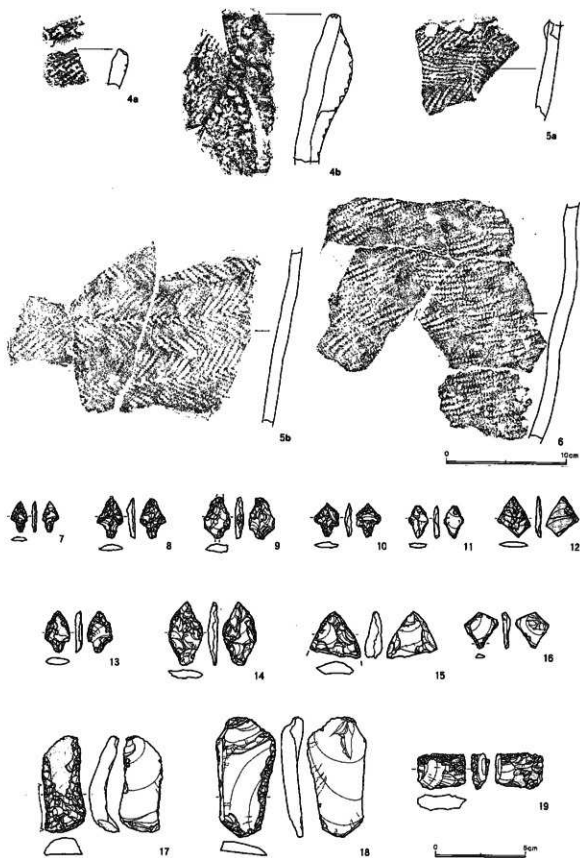




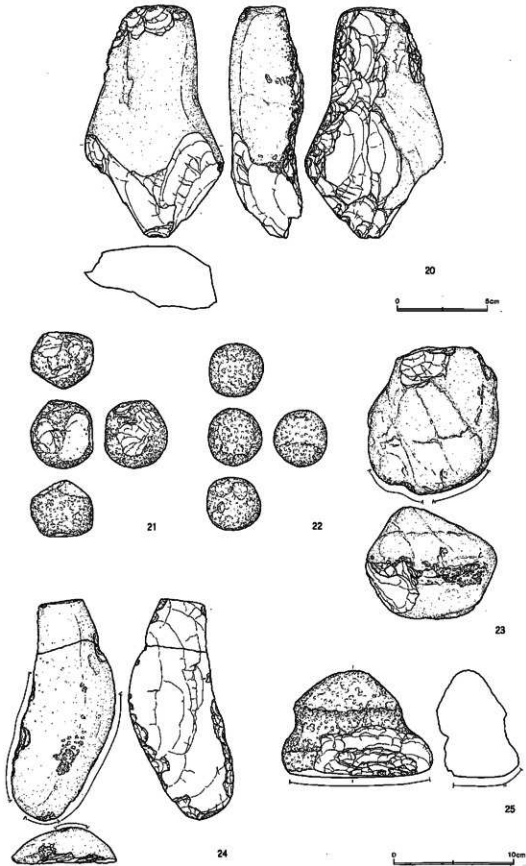
図VI-7-6 H-1と遺物(1)



図VI-7-7 H-1と遺物(2)



図VI-7-8 H-1の遺物(3)



図VI-7-9 H-1の遺物(4)

表VI-7-4 H-1 掲載土器一覽

図番	分類	遺物名 所属区	遺物 番号	層位	点数	集合-同一個体なら 調査区名と遺物番号、層位と点数・合計破片点数		備考	
						(前項と同じ部分は何と省略、掲載土器破片を含む破片)			
1	Ⅱb-3	H-1	1197	覆土	38	H-1-1197, 覆土(1B), 66点		円形刺突文	
			M-46-b	35	V 層下位	3			結束部2個、LR
			H-1	119	覆土上位	1	H-1-851, 覆上(1), M46a1, VF(1), 陶a7, 陶(1), 陶c16, 陶(2)		垂下する粘付帯
2	Ⅱb-2	H-1	M-46-d	17	V 層下位	1	陶c20, V(2), 陶d22, VF(1), 陶d26, 陶(2), M47b37, 陶(1)		押引文
			M-46-d	18	V 層下位	1	N46a19, 覆上(1), 陶a31, V(1), 19点		LR斜行刺突文
			M-46-c	19	覆り上げ土	1	H-1-672, 覆上(1), 陶1193, 覆下(1), 陶1344, 陶(1),		垂下する粘付帯
3a	Ⅱb-2	H-1	M-46-d	15	V 層下位	1	陶1386, 陶(1), L40b6, V(1), M45c6, VF(1), M46a16, 陶(1),		刷み
			M-46-b	14	V 層下位	1	陶a33, 陶(1), 陶b37, 陶(2), 陶c23, 覆上(1), 陶c28, V下(1),		沈線文
			M-46-c	19	覆り上げ土	2	陶c37, 陶(1), 陶c50, 陶(1), 陶d11, 陶(1), N46c13, 陶(1),		RL斜行刺突文
3b	Ⅱb-2	H-1	M-46-c	43	V 層下位	1	N51a6, 陶(1), O47a10, 陶(1), 陶d20, 陶(1), O48a3, 陶(5),		
			H-1	1023	覆土上位	1	陶b2, 陶(1), 覆土(1), 38点		
			N-51-d	2	V 層下位	1	H-1-1127, 覆上(1), H-2-2, 陶(1), M44a6, VF(2), 陶d3, 陶(1),		垂下する粘付帯
4b	H-1	1351	床	1	M46a14, 覆上(1), 陶b7, VF(1), M47d5, 陶(1), 陶d7, 陶(1),		刺突文		
		M-46-c	21	覆り上げ土	1	陶d9, 陶(1), M53d5, V中(1), N44d10, 覆上(1), N46a7, VF(1),		刷み	
						N46d7, 陶(1), N51c8, 陶(1), 18点		LR	
5a	Ⅱb-3	H-1	869	覆土下位	1	H-1-521, 覆上(2), 陶1045, 床(1), 陶1081, 陶(1),		円形刺突文	
			H-1	1170	覆土上位	1	陶1160, 覆下, 陶1168, 覆上(1), 陶1171, 覆下(1), 陶1185, 陶(1),		結束部1個
			H-1	521	覆土上位	1	H-2-29, 覆土(1), 陶39, 陶(1), M47b19, VF(1), 19点		
5b	H-1	1049	床	1					
		M-46-b	15	V 層下位	2				
		H-1	702	覆土上位	1	H-1-1002, 覆上(1), M46d11, VF(1), 陶d17, 陶(1),		LR	
6	Ⅱb	H-1	46	覆土上位	1	陶d34, 陶(1), 9点			
			H-1	1024	覆土上位	1			
			M-46-d	27	V 層	1			
			M-46-d	51	V 層上位	1			
			M-46-d	81	V 層上位	1			

表VI-7-5 H-1 掲載石器一覽

番号	分類	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
7	石 鏃	107	覆土上面	1.68 × 0.89 × 0.23	0.3	黒曜石	未製品
8	石 鏃	641	覆土上面	(2.22) × 1.41 × 0.42	(0.9)	黒曜石	未製品・欠損品
9	石 鏃	1338	床	(2.26) × 1.45 × 0.50	(1.4)	黒曜石	未製品・欠損品
10	石 鏃	1338	床	1.83 × 1.32 × 0.35	0.6	黒曜石	未製品
11	石 鏃	1338	床	1.78 × 1.08 × 0.27	0.5	黒曜石	未製品
12	石 鏃	1338	床	(2.26) × (1.82) × (0.26)	(0.8)	黒曜石	被蝕
13	石 鏃	1338	床	2.30 × 1.40 × 0.36	1.1	黒曜石	未製品
14	石 鏃	779	覆土下	3.50 × 2.88 × 0.52	2.7	黒曜石	未製品
15	石槍・ナイフ	870	覆土下	(2.60) × (2.80) × (0.92)	(5.1)	黒曜石	破損品
16	石 鏃	1353	床	2.00 × 1.87 × 0.39	0.9	黒曜石	
17	スクレイパー	389	覆土上面	5.40 × 2.20 × 0.95	13.5	黒曜石	
18	スクレイパー	1404	床	6.75 × 3.30 × 0.98	21.6	珪質頁岩	
19	ピエス・エスキュー	1407	床	6.75 × 3.30 × 0.98	5.7	黒曜石	
20	石 斧	1379	床	12.9 × 7.75 × 4.2	495.4	泥岩	未製品 II-1-1364・1366(床)と接合
21	たたき石	1397	床	5.6 × 5.2 × 4.7	219.1	燧燐岩	
22	たたき石	1377	床	4.7 × 4.4 × 4.4	151.0	燧燐岩	
23	たたき石	1415	床	12.3 × 10.85 × 9.3	1360	砂岩	
24	たたき石	1376	床	18.4 × 7.2 × 3.1	450	砂岩	H-1-1227(床)と接合
25	北海道式石冠	815	覆土上	8.9 × 12.6 × 7.24	390	デイサイト	

はなで調整で、指頭痕が認められる。胎土に淡黄白色粒、砂粒を含む。2は覆土上位およびM45～47グリッドの掘り上げ土、V層下位から19点出土した。口縁が外反する。器面にLR斜行縄文を施し、口縁に突起と突起から垂下する貼付帯をつけ、口唇・口縁に半截竹管状工具による右方向からの押引文が施される。口縁突起は欠損している。垂下する貼付帯の右下器面には補修孔がある。胎土に淡白色粒、砂粒を含む。3は覆土上位およびM46グリッドの掘り上げ土、V層下位を中心に38点出土した。口縁は外反する。RL斜行縄文を施した器面に垂下する貼付帯をつけ、その両側を棒状工具により沈線状に調整している。器面には同様の工具の沈線文、貼付帯には部分的にさらに横長の小さな貼付をつけてこれらを棒状工具により刻んでいる。胎土には淡黄白色粒、砂粒を含む。4は床、覆土上位およびM46グリッドの掘り上げ土、V層下位などから18点出土した。LR斜行縄文を施した器面にY字状に垂下する貼付帯がある。口唇・器面に半截竹管状工具による刺突文、貼付帯は同様の工具により刻まれている。胎土には黄白色粒、小礫を多く含む。5は床、覆土下位、覆土上位およびM45・47グリッドのV層下位から19点出土した。結束第1種羽状縄文を施した器面に円形刺突文が廻らされる。胎土に微量の黄白色粒、小礫を含む。6は覆土上位、M46グリッドのV層上位、V層下位から9点出土した。器面にはLR斜行縄文が施されている。いずれも内面調整は横なで、指頭痕がある。

石器は主に床面出土のものを掲載する。7～14まで石鏃。黒曜石製。破損品の12を除き、すべて有茎鏃で未製品のもの。荒い二次調整が施され、基部と先端部が明瞭に作り出されていない。7は両面に一次剥離面を残す。薄手の剥片の縁辺に二次調整を加えている。8は二次調整が非常に粗雑なもの。先端部をわずかに欠く。9、10も8と同様のもの。主剥離面を残す。11は剥片背面の縁辺をわずかに打ち欠いただけのもの。12は被熱し破損しているもの。腹面にのみ丁寧な二次調整が加えられている。13は主剥離面と礫皮表面を残す。14は比較的大きく、粗雑な二次調整が目立つ。15は石槍・ナイフの未製品。破損している。礫皮表面を残す。黒曜石製。16は石鏃。黒曜石製。剥片の背面をわずかに打ち欠き刺突部を作り出す。上端には礫皮表面を残す。17、18はスクレイパー。17は礫皮表面に残る剥片の両側縁に調整を加え刀部とする。背面右側縁が細かい潰れ状の剥離によって内湾する。黒曜石製。18は背面左側縁を刀部とする。珪質頁岩製。19はピエス・エスキューとした。黒曜石製。床面出土のもの。断面は凸レンズ状で上端、下端ともに階段状の割れがある。20は石斧の未製品。泥岩の亜角礫を打ち欠いて、刀部部分と基部部分の調整がわずかに行われており、接合した。21、22は燧岩製たたき石。全面に敲打調整により球状に整形されている。23は大型の垂円礫の端部をたたき石として使用しているもの。砂岩製。24は礫皮表面を残し板状に割れている礫片の、礫皮表面と端部にたたき痕のあるもの。表面には縁辺を調整するための打ち欠きが施される。25は北海道式石冠。デイサイト製。機能面を除き全面敲打によって敲打整形されている。

時期：覆土及び床面からⅢ群b-2、3類土器が出土したことから縄文時代中期後半と考えられる。

H-2 (図VI-7-3・10～12/表VI-7-1・2・6～8/図版71・72・88)

位置：N46c・d、N47a・b

規模：3.50×2.60/2.82×2.11/0.55m

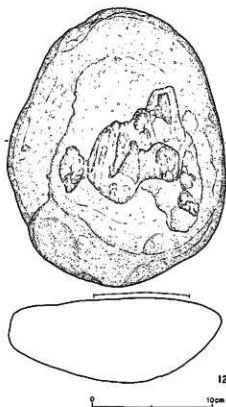
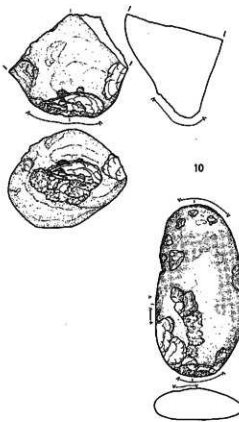
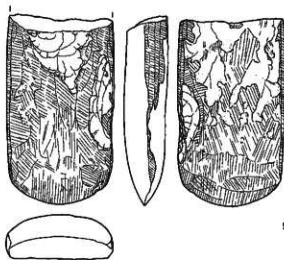
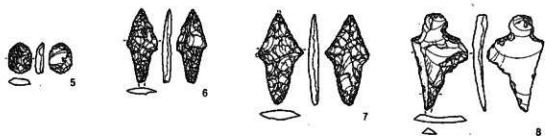
特徴：調査区南西側、標高26.0～26.5mのところ位置する。H-1、H-3と関連し、掘り上げ土とその落ち込みから遺構の存在は想定されていた。土層観察用のベルトを設定し掘り下げを行った。掘り下げ途中で南西側と北側の一部で床面と誤認する面があった。この調査を行っている段階で既に、H-3、6のような床面に浅い土壌を持つ住居が検出されており、H-2も同様の落ち込みが床面に







図VI-7-11 H-2の遺物(1)



図VI-7-12 H-2の遺物(2)

存在すると想定した。この面で土層観察用の土手ははずし、床面とした面を掘り広げたと、さらに下、北側と南側に、新たに2ヶ所の落ち込みを検出した。これらを半截したところ覆土中から土器片や礫、台石、石斧破損品と剥片石器がまとまって出土した。南側の落ち込みについては、その土層の堆積状況から観察すると風倒木によって、V層とVII層が互層となって流入した状況が伺える。北側の落ち込みでは遺物がまとまりを持って出土しているが、これらはいずれも覆土中のものである。このH-2北側の落ち込みも南側と同様、風倒木によるものと見た場合、H-2の北東側に黒色土が流入し、起きあがりのローム質土が南西側の台地の尾根より下へ流失していったことが考えられる。(図VI-7-2)。風倒木によって流入した黒色土はb'セクションの4~8層とそれ以下の北側落ち込みの覆土であると考えられる。H-2は床面とした面より下が風倒木によって攪乱されており、

表VI-7-6 H-2出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数	
覆土	土層	I層b層	1点	露石層	石斧	石斧	24点	
		II層b層	32点			たたき石	2点	
		III層b-2層	4点			すり石	2点	
		III層b-3層	116点		砥石	1点		
	剥片石器	石鏃	2点		台石	台石	3点	
		石槍・ナイフ	9点			剥片	フレイク	87点
		つまみ付ナイフ	1点		鏃・鏃片		鏃・鏃片	23点
		スタレイベー	3点		鏃・鏃片(焼熟)		9点	
		Rフレイク	4点		合計	325点		
		Lフレイク	2点		総計			325点
石銃	1点							

表VI-7-7 H-2掲載土器一覧

調査区	分類	遺物名	調査区	遺物番号	層位	点数	総合一覽表など		備考
							調査区名と遺物番号、層位と点数・合計片数点	(前項と同じ部分は同定省略、埋土器破片を含む点数)	
1	IIIb-3	H-2	26	覆土	4	H-2-2, 覆土(2), 同11, 同(1), 同12, 同(1), 同13, 同(1), 同20, 同(1), 同24, 同(3), 同40, 同(1), 同119, 同(1), 同122, 同(1), 同124, 同(1), 同126, 同(1), 同130, 同(1), 同142, 同(1), 同144, 同(1), 同146, 同(2), 同160, 同(2), M40b3, V中(1), 同c3, 同(1), M43a8, VF(1), 同a26, 同(1), M46a5, VF(1), 同b17, 同(3), 同c3, 同(1), M48b5, 同(1), 同b9, 同(2), 同c2, V中(1), 同c3, 同(1), N46b17, VF(1), 同b19, 同(1), 同c11, 同(1), 同d2, 同(1), 同d11, 同(1), 同d35, 同(1), 同d38, 同(2), 同d42, 同(1), N47c10, 同(1), 同d18, 同(2), N48a15, 同(2), 同b2, 同(1), 同b18, 同(1), 56点	埋土器2種		
2	IIIb-3	H-2	106	覆土	1			別表、結束器2種	
3	IIIb	H-2	149	覆土	1			LR	
		H-2	150	覆土	1				
4	IIIb	H-2	110	覆土	1	H-1-1316, 覆土(1), H-2-2, 覆土(1), 同111, 同(1), 同132, 同(1), M40d3, VF(1), M47c5, 同(1), 同c10, 同(1), M51c16, 同(1), N47a29, 同(1), 10点		土器燬滅, LR	

表VI-7-8 H-2掲載土器一覧

番号	分類	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
5	石鏃	64	覆土	1.69×1.26×0.43	0.9	黒曜石	未製品
6	石槍・ナイフ	123	覆土	(4.10)×1.70×0.49	(2.2)	黒曜石	欠損品
7	石槍・ナイフ	7	覆土(N-46-c)	(5.03)×(2.52)×0.55	(4.5)	黒曜石	欠損品
8	つまみ付ナイフ	113	覆土	(5.40)×2.92×0.60	(5.7)	黒曜石	欠損品
9	石斧	43	覆土	(10.5)×5.97×2.4	(272.1)	泥岩	破損品
10	たたき石	140	覆土	(8.5)×(9.9)×(8.1)	(660.0)	不明	破損品
11	たたき石	1	覆土(N-46-c)	14.36×7.3×3.2	453.1	片麻岩	被蝕
12	台石	158	覆土	31.0×24.5×9.6	10,800.0	片麻岩	

ットもしくは住居跡が風倒木により攪乱を受けた跡と考えられる。

遺物：1・2はⅢ群b-3類、3・4はⅢ群b類である。1は覆土およびM・N46グリッドのV層下位を中心に56点出土した。口唇と肥厚した口縁に半截竹管状工具による右方向からの押し文が施されている。器面には結束第2種の縄文を施し、肥厚帯直下には棒状工具による円形刺突文が施されている。胎土には径3~15mmの礫を多く含む。2は覆土から出土した。器面には結束第2種のLRの縄文が施される。外反する口縁には半截竹管状工具による右方向からの刺突文、その直下には円形刺突文が施される。胎土に砂粒と、微量の黄白色粒を含む。3にはLR斜行縄文が施されている。内面は指頭により、横・斜めに調整されている。胎土に黄白色粒と砂粒を多く含む。覆土から出土した。4は覆土およびM47グリッドのV層下位を中心に10点出土した。やや上げ底で器面にLR斜行縄文が施される。胎土には石英粒を多く含む。

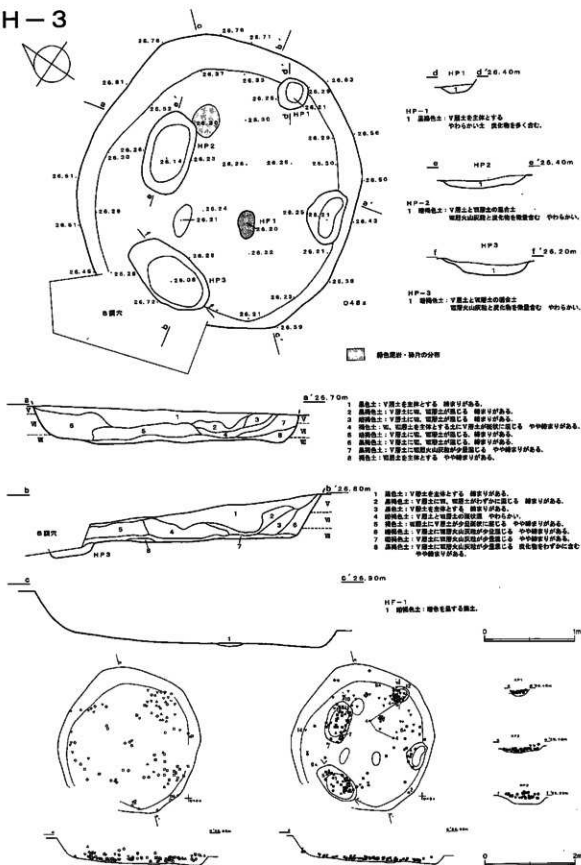
石器はすべて覆土中から出土している。5は石鏃。黒曜石製。未製品と考えられる。主剥離面を残す。粗雑な二次調整が加えられているもの。6、7は石槍・ナイフ。黒曜石製。基部は明瞭である。7は先端部をわずかに欠くもの。8はつまみ付きナイフ。黒曜石製。背面の打点に近い部分に挿入する調整でつまみ部分を作っている。背面左側縁を刃部とする。縁部は石鏃と複合していた可能性がある。9は石斧。破損品。敲打調整の後に研磨が施された石斧。刀縁に潰れや破損の痕跡は見られない。使用していないものの破損品と考えられる。泥岩製。10は大型のたたき石。亜円もしくは亜角礫の端部にたたき痕がある。破損品と思われる。石質は不明。11は楕円の扁平礫の表面にたたき痕のあるもの。被熱する。片麻岩製。12は台石。幅広く扁平な礫の平坦面のほぼ中央に弱い窪みがある。片麻岩製。

時期：覆土中の遺物と周辺の遺構から縄文時代中期後半~末葉と考えられる。

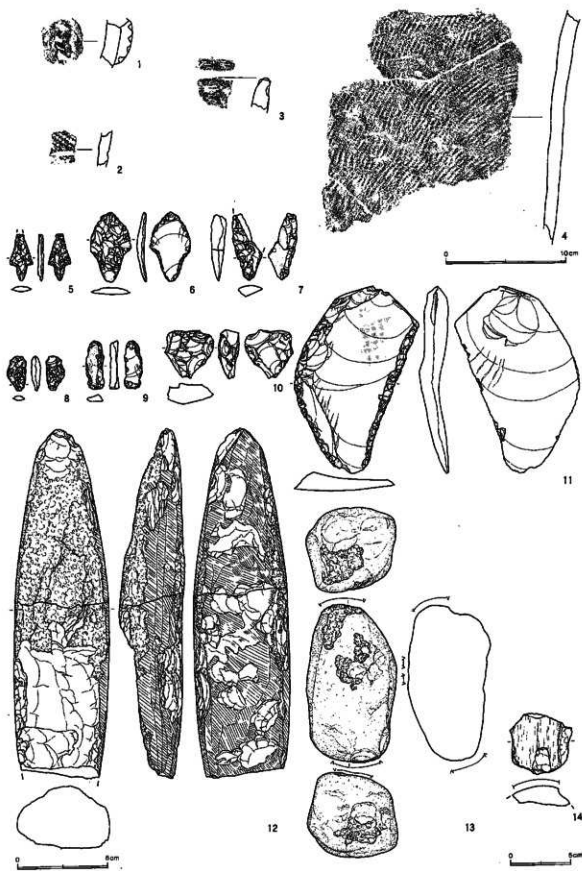
表Ⅵ-7-9 H-3出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数			
覆土	土器	Ⅲ群b類	5点	床	土器	合計	56点			
		Ⅲ群b-3類	7点			Ⅲ群b類	2点			
		剥片石器	Rフレイク			2点	Ⅲ群b-2類	1点		
			Uフレイク			3点	Ⅲ群b-3類	1点		
		礫石器	石斧			20点	剥片石器	石鏃	1点	
			剥片			フレイク		11点	石鏃	1点
			礫・礫片			礫・礫片		16点	Rフレイク	4点
			合計			64点		石槍	1点	
		覆土上面	土器			Ⅲ群b類	1点	礫石器	石斧	35点
						Ⅲ群b-3類	4点		すり石	1点
剥片石器	石鏃			1点	台石	1点				
	石槍・ナイフ			2点	剥片	フレイク	32点			
	石鏃			1点		礫・礫片	礫・礫片		10点	
	Rフレイク			1点	合計		90点			
	Uフレイク			3点	H P	土器	Ⅲ群b類		5点	
	石槍			1点			Ⅲ群b-2類		1点	
礫石器	石斧			11点			Ⅲ群b-3類		8点	
	剥片			フレイク			18点		剥片石器	石鏃
	礫・礫片	礫・礫片	8点	石槍・ナイフ			1点			
礫・礫片(被熱)		3点	スクレイパー	2点						
	合計	54点		Rフレイク			5点			
覆土下面	土器	Ⅲ群b類	1点				Uフレイク	7点		
		Ⅲ群b-3類	1点	礫石器			石斧	37点		
		剥片石器	石槍・ナイフ				1点	たたき石	1点	
			スクレイパー		3点	礫石	1点			
			Rフレイク	2点	剥片	フレイク	71点			
		礫石器	石斧	21点		礫・礫片	礫・礫片	2点		
			たたき石	1点	合計		142点			
			剥片	フレイク	22点	H F	礫・礫片	礫・礫片	1点	
		礫・礫片	礫・礫片	3点	合計			1点		
				礫・礫片(被熱)	1点	総計	407点			

H-3



図VI-7-13 H-3



図VI-7-14 H-3の遺物

H-3 (図VI-7-3・13・14/表VI-7-1・2・9~11/図版73・74・89)

位置: N 47 b~d, N 48 b

規模: 3.36×3.18/2.80×2.78/0.40m

特徴: 調査区南西側、標高26.0~26.5mのところ位置する。H-1、H-2と関連し、掘り上げ土とその落ち込みから遺構の存在は想定されていた。この落ち込みに土層観察用のベルトを残し掘り下げを行った。その結果、Ⅷ層までの明瞭な掘り込みと床面を検出し遺構と認定した。壁の立ち上がりは急で明瞭である。床面のほぼ中央からは楕円形の地床炉が検出されている。この住居の床面には円形から楕円形で、浅い皿状のピットが床面に4ヶ所ある。それぞれ住居の北東側、東側、南側、西側に位置する。中からは石器製作に係る遺物が多く出土する。HP-1からは石斧製作のときに排出された泥岩の破片が多く出土した。またHP-2からは黒曜石のフレイク・チップやRフレイク、Uフレイク、石鏃未製品等が多く出土している。このピットの北東側床面では泥岩の砂状化した礫層が直径30センチほどの範囲で検出されている。HP-3からも黒曜石のフレイク・チップが多く出土した。柱穴は床面、壁際、検出面からⅧ層上面にかけて精査を行ったが検出されなかった。住居の外側に柱穴があることを想定し検出面からⅧ層上面にかけて掘り下げと精査を行ったがここからも検出されなかった。

床面と床面に構築されているピットの遺物の接合を試みたが、石斧、剥片石器共に殆ど接合しなかった。剥片石器については石鏃未製品、Uフレイク、Rフレイクが多く出土している。調査の結果、この遺構は石器製作を行った場と判断した。

遺物: 1・2はⅢ群b-2類、3はⅢ群b-3類、4はⅢ群b類である。1~3には笥状工具による施文が施されている。1は垂下する貼付帯が刻まれる。2には沈線文、3には刺突文が施される。4にはL R斜行縄文が施される。いずれも胎土に微量の黄白色粒や砂粒を含む。

石器は主に床面出土のものと同層の土壌中から出土したものを掲載する。5、6は石鏃。黒曜石製。両方共に有茎鏃。5は二次調整が丁寧なもの。先端部を欠損する。6は未製品と考えられるもの。腹

表VI-7-10 掲載土器一覽

図番	分類	遺構名 調査区	遺物 番号	層位	点数	接合・同一個体など 調査区名と遺物番号、層位と点数・合計破片点数 (前項と同じ部分は同じ省略、掲載土器破片を含む点数)		備 考
1	Ⅲb-2	H-3	263	床	1			垂下する貼付帯
2	Ⅲb-2	H-3	134	床	1			沈線
3	Ⅲb-3	H-3	5	覆土	1			刺突文
4	Ⅲb	H-3	185	覆土	1			RL
		H-3	192	覆土	1			
		H-3	215	床	1			

表VI-7-11 掲載石器一覽

番号	分類	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	材質	備 考
5	石 鏃	258	床面 (HP-3-10)	(2.58)×1.25×0.30	(0.7)	黒曜石	欠損品
6	石 鏃	209	床 面	3.86×2.26×0.40	2.8	黒曜石	未製品
7	石槍・ナイフ	331	覆土 (HP-2-20)	(3.70)×(1.64)×(0.82)	(3.1)	黒曜石	破損品 転用の可能性有
8	石 鏃	205	床 面	1.92×1.05×0.50	0.9	黒曜石	
9	R フレイク	96	床 面	2.70×1.00×0.50	1.3	黒曜石	
10	石 核	106	床 面	2.67×2.69×1.12	7.2	黒曜石	
11	スクレイパー	310	覆土 (HP-2-3)	10.42×5.95×1.16	68.1	珪質頁岩	
12	石 斧	92	覆土上面	(19.5)×5.27×3.52	(498.0)	泥岩?	H-3-189(床面直上)(HP-1-1)と接合破損品
13	たつき石	183	床面直上(HP-2-1)	13.1×7.4×7.1	930.0	砂 岩	
14	砥 石	99	床 面	(5.06)×(5.1)×(1.7)	(51.3)	砂 岩	破損品

面は縁辺を除き未調整である。先端部の調整が荒く歪である。7は石槍・ナイフの未製品とした。黒曜石製。礫皮表面を残す剥片の腹面に調整が加えられている。礫皮表面の残るほうには縦長に表面を削ぐような剥離面と、その打点に近い部分ではビエス・エスキューのような階段状の剥離がみられる。転用された可能性もある。8は石錐。黒曜石製。両面に二次調整が加えられ、刺突部を作り出す。9はRフレイク。黒曜石製。礫皮表面の残る剥片の縁辺にわずかに調整が施されているもの。10は石核。黒曜石。礫皮表面を残す。11はスクレイパー。珪質頁岩製。剥片の背面両側縁を刀部とする。表面にはタール状のものが附着する。12は石斧。刀部を欠損する。打ち欠きと敲打調整を行ってから研磨を施している。基部は尖った形をしている。泥岩製。13はたたき石。比較的大型の亜円礫の端部と表面の一部にたたき痕があるもの。砂岩製。14は砥石片。砂岩製。

時期：床面及び覆土中からⅢ群b類土器が出土していることから縄文時代中期後半と考えられる。

H-4 (図VI-7-15/表VI-7-1・2、12~14/図版75・90)

位置：M39 b、N39 a

規模：2.20×(1.76)/2.04×(1.68)/0.15m

特徴：調査区西端、標高25.5mのところに位置する。この遺構の上面は風倒木により攪乱を受けていた。VI層上面まで掘り下げたところ、北側の一部を除き、攪乱を受けていない落ち込みを確認した。西側の一部、緩やかな地形に傾斜に沿って土層観察部分を残し掘り下げたところ、床面より15cm上からの掘り込みを確認し、遺構と認定した。平面はやや不正な円形である。構築面はV層下位である。床面は平坦である。床面のほぼ中央からは槽円形の地床炉を検出した。また、床面からは柏木川式期の土器が1個体出土している。壁の立ち上がりは明瞭である。床面と、住居跡周辺を確認面から精査を行い、柱穴の検出に努めたが確認されなかった。

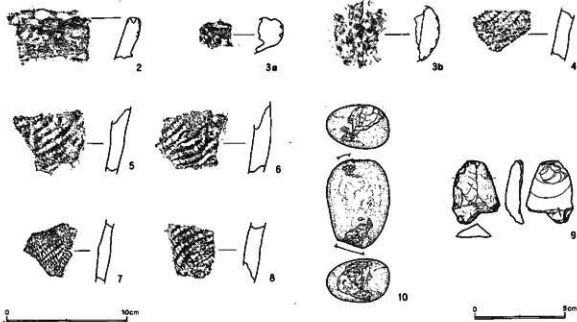
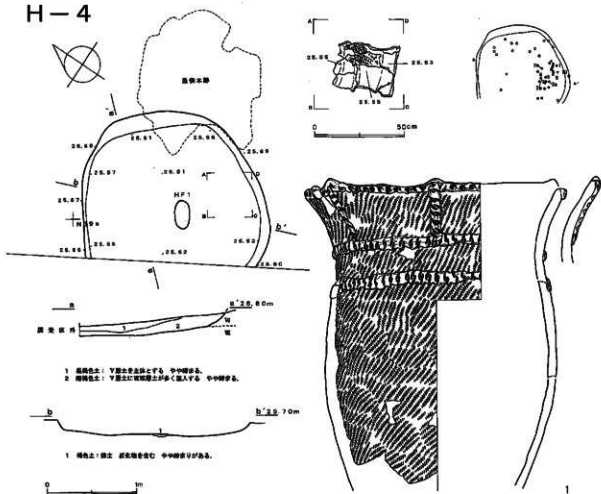
遺物：1は床および覆土、M39グリッドのV層中位～V層下位から49点出土し、40点が接合したⅢ群b-2類土器である。胴部が膨らみ、頸部がくびれ、口縁が外反する器形である。口縁には3対、6ヶ所の山形小突起をもつ。口径29.2cm、残存器高35.5cmを計る。器面にL R斜行縄文を施し、口縁に1本、頸部に2本の横環する貼付帯を廻らせている。口縁の小突起の直下から垂下する貼付帯をつけて、口縁と頸部の上側の横環する貼付帯をつないでいる。口縁貼付帯には縄端によると思われる刺突文が廻らされている。垂下する貼付帯は横位に、頸部の横環する貼付帯は縦位に、L Rの縄により刻まれている。口唇および内面は丹念な横なでにより調整されている。内面には環積みの痕が凹凸に残っている。胎土には黄白色粒や網粒を多く含む。焼成はあまりよくなく、指ではじくと鈍い音がする。2は覆土から出土したⅢ群b-2類土器である。口唇には内面方向からの指頭および爪によるものと思われる刺突文が施されている。口縁には径3mmほどの細い竹管状工具により、右方向からの刺突文が1列廻らされている。器面・内面とも粗雑な横なでにより調整されており、指頭痕が残っている。

表VI-7-12 H-4出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数
覆土	土器	Ⅲ群b類	1点	床	土器	Ⅲ群b類	76点
		Ⅲ群b-1類	3点			Ⅲ群b-2類	3点
		Ⅲ群b類	16点		Ⅲ群b-2類	58点	
		Ⅲ群b-2類	23点		剥片石器	スクレイパー	1点
	剥片石器	Rフレイク	1点			Rフレイク	1点
		Uフレイク	3点		礫石器	たたき石	1点
	礫石器	台石	1点		剥片	フレイク	3点
	剥片	フレイク	1点		礫・礫片	礫・礫片(被熱)	1点
	礫・礫片	礫・礫片	6点			合計	65点
		礫・礫片(被熱)	21点			総計	144点



H-4



図VI-7-15 H-4と遺物

表VI-7-13 H-4掲載土器一覧

調査区	分類	遺器名	遺物番号	層位	点数	総合・同一個体など		備考
						調査区名と遺物番号、層位と点数・合計破片点数	(調査区と同じ部分は同じと省略、掲載土器破片を含む点数)	
1	Ⅲb-2	H-4	13	床	31	H-4-1.1, 覆土2層(1), Ⅲ1.3, 床(1), Ⅲ2.5, 床(1), Ⅲ3.9, 床(1)		6層の小瓦器
			25	床	4	Ⅲ4.3, 床(2), M39b2.9, VF(1), N39d, V中(1), 4.9点		口縁貼付帯
			26	床	1			縦溝刻文
			40	床	1			横溝する貼付帯
			41	床	1			垂下する貼付帯
			45	覆土	1			施刻み
			N-39-d	3	V層中位		L.R斜行縄文	
2	Ⅲb-2	H-4	45	覆土	1			刻文
3a	Ⅲb-2	H-4	22	床	1	H-4-2.0, 床(1), 3点		垂下する貼付帯
3b	H-4	21	床	1			刻文	
4	Ⅲb	H-4	14	床	1			L.R
5	Ⅲb	H-4	17	床	1			L.R
6	Ⅲb	H-4	4	覆土2層	1	H-4-4.8, 覆土(3), 4点		L.R
7	Ⅲb	H-4	1	覆土2層	1			L.R
8	Ⅲb	H-4	45	覆土	1			L.R

表VI-7-14 H-4掲載石器一覧

調査区	分類	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
9	スクレイパー	36	床	3.55×2.63×0.82	6.8	黒曜石	
10	たたき石	34	床	7.4×5.2×3.6	177.1	砂岩	

胎土には白色粒、砂粒を含む。3は床から出土したⅢ群b-2類土器である。3aは横環する貼付帯、3bは垂下する貼付帯部分である。横環する貼付帯には横位に、垂下する貼付帯には縦位に、半截竹管状工具による刻文が施されている。内面は横位に調整されている。胎土には黄白色粒、砂粒を含む。4～8には器面にL.Rの斜行縄文が施されている。4・5は床出土、6・7は覆土2層出土、8は覆土出土のⅢ群b類土器である。4・6の内面は平滑で縦に磨かれている。胎土には砂粒と、微量の白色粒を含む。5の内面は丹念な横位である。胎土には粒が揃い均質で、微量の砂粒と淡黄白色粒を含む。7は内面が横位に調整され、指痕が残る。胎土には白色粒と、微量の小礫を含む。8は内面が縦位に調整され、胎土に微量の砂粒と小礫を含む。

石器は床面出土のものを掲載する。9はスクレイパー。黒曜石製。礫皮表面を残す。10はたたき石。やや縦長の亜円礫の両端にたたき痕があるもの。砂岩製。

時期：床面からⅢb-2類土器、柏木川式期に比定される土器が出土していることから縄文時代中期後半である。

H-5 (図VI-7-3・16/表VI-7-1・2・15・16/図版76・90)

位置：O43c、O44b

規模：(3.50)×(1.94)/(3.16)×(1.86)/(0.25)m

特徴：調査区南西側の標高25.5mのところ位に位置する。V層を掘り下げていたところ、調査区と調査

表VI-7-15 H-5出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数	
Ⅲ土層	土層	Ⅲ群b類	2点	Ⅲ土層	土層	Ⅲ群b-2類	1点	
	割片石礫	リフレイク	2点		割片石礫	石片	1点	
	燧石礫	石片	3点		割片	フレイク	2点	
	割片	フレイク	16点		燧・燧片	燧・燧片	5点	
	燧・燧片	燧・燧片	5点		合計	合計	12点	
	合計	合計	31点		合計	合計	45点	
	Ⅲ土層	燧・燧片	燧・燧片(焼物)		1点			
	合計	合計	1点					

表VI-7-16 H-5掘載土器一覽

調査	分類	遺構名 調査区	遺物 番号	層位	点数	整合-同一個体など	備考
						調査区名と遺物番号、層位と点数・金釘破片点数 (前項と同じ部分は同と省略、異個体破片を含む点数)	
1	Ⅲb-3	H-5-12		掘土	1		掘取第2層

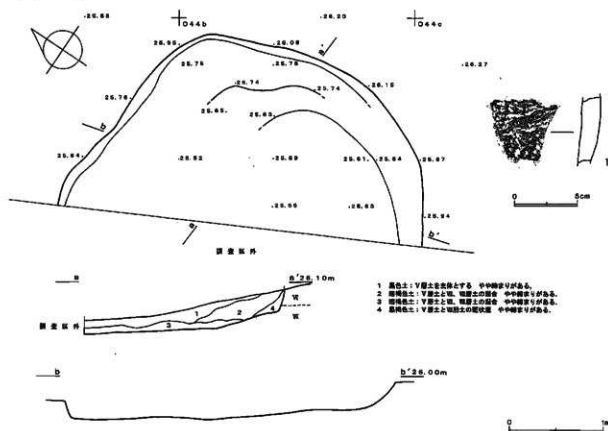
区外の境、地形の傾斜に沿って暗色の落ち込みを検出した。住居である可能性があったため、土層観察用の土手を残し掘り下げを行ったところ、明瞭な壁の立ち上がりを確認し遺構と認定した。壁の立ち上がりは北東側にやや階段状になっており、ベンチ状に似た段差が床面と壁際を生じる。床面はほぼ平坦である。土層の堆積状況は自然埋没によるものである。床面の遺物は検出できなかった。遺構のほぼ半分の調査しかし得ないため、遺構の内容を把握し得なかった。炉などの焼土は確認されていない。

遺物：1は覆土から出土したⅢ群b類土器である。器面には結束第2種のLRの縄文が施されている。内面は丹念な横などでより調整されている。胎土には微量の小礫、少量の淡黄白色粒と砂粒を含み、手にザラつく感触がある。焼成は良好で、堅く焼き締まる。

覆土からは同様の地文をもつ土器片が出土しており、出土遺物一覽ではⅢ群b類と記載したが、Ⅲ群b-3類と推定される。なお、床からはⅢ群b-2類と思われる小片が出土しているが、施が不明なため掲載できなかった。

時期：床面のⅢ群b-2類と思われる土器の出土から縄文時代中期後半～末葉と考えられる。(袖岡)

## H-5



図VI-7-16 H-5と遺物

H-6 (図VI-7-17~20/表VI-7-1・2・17~19/図版76~79)

位置: M54 a~d, M55 a~b

規模: 4.46×3.28/4.34×3.22/0.20m

特徴: 台地のへりからの検出である。包含層調査の際、M54グリッドVI層中位において、焼土F-9を検出した。VI層中位において、終了後、周囲の包含層を精査した。すると、M54、M55グリッドにおいて黒色味をおびた褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みの平面形は小判型に近い楕円形である。平面形の四隅および南側の辺中央には黒色土の落ち込みがからんでいた。小判型の長軸と短軸にそってベルトを残し、落ち込みの土を掘り下げた。剥片および石斧片を主体とした遺物が多く出土した。柏木川式土器の残存率の高いもの(1)と、床面近くから出土した、大型の砥石が特に目立つ。

中央部、ちょうどベルトが十字に交差するあたりにおいて床面から、明橙褐色に変色した土層を検出した。焼土と判断して、地焼炉を想定した。遺物を取り上げ、焼土の分布場所を除いてベルトをはずした。その作業時にもやはり床面直上において、剥片および石斧片を主体とした遺物が多く出土した。床面はおおよそ平坦ではあるが、全体に、斜面側にややかたむいている。またHP-9周辺と地焼炉周辺については微妙に窪んでいる。また砥石の周辺は酸化鉄によって赤みをおびている。

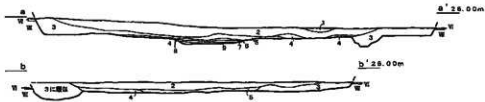
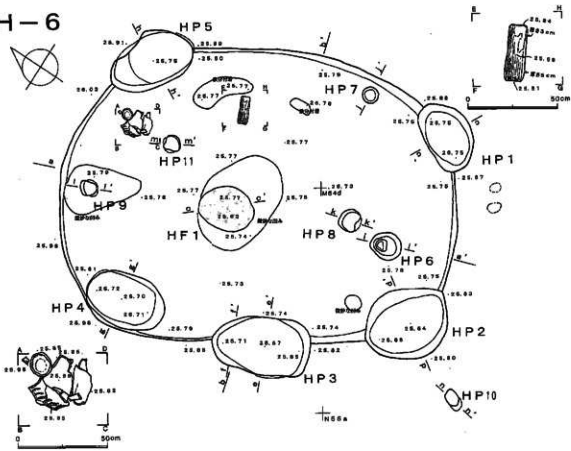
層位の観察の結果と遺物の出土状況を踏まえて、床面直上から覆土3~5層までを、生活面としてとらえられると判断した。それは柏木川式土器と砥石を検出した層位である。取り上げにあたって覆土1、2層を覆土上位、覆土3~5層を覆土下位(生活面)とした。生活面の下位から床面にかけて、焼土は分布していた。検出状況から地焼炉と判断した。剥片、石斧片については石鏃、石斧未製品等の出土から、石器の製作場所を想定できる。

付属遺構について、HP-6、HP-8、HF-1、HP-9はおおよそ住居の長軸上に並んでいる。またHP-7を北隅、HP-11を東隅、として3本支柱穴の可能性を考えると、明瞭な掘り込みではないが、南隅の位置には黒色土の浅い入り込みがある。西隅にあたるものはないが、配置から、HP-9をその代用とも想定できる。比較的大型の長楕円形の付属遺構HP-1~5はいずれについても、オーバーハングした壁面を持ち、フレイク、石斧片が多く出土した。住居覆土を一段下げたで

表VI-7-17 H-6出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数		
覆土上層	土器	瓦葺り類	6点	HP	土器	瓦葺り類	6点		
		瓦葺り-2類	19点			瓦葺り-2類	19点		
	剥片石器	石鏃	9点		剥片石器	石鏃	7点		
		石鏃-ナイフ	1点			石フレイク	13点		
		スクレイパー	2点			礫石類	石斧	76点	
		石フレイク	21点			剥片	フレイク	114点	
		石フレイク	13点			礫・礫片	礫・礫片	6点	
	砥石	2点	合計		241点				
	礫石類	石斧	46点		礫石類	瓦葺り類	9点		
		たたき石	1点			瓦葺り-2類	3点		
		剥片	フレイク			237点	剥片石器	石鏃	6点
	礫・礫片	礫・礫片	11点		礫・礫片	石フレイク	3点		
		合計	362点			石フレイク	4点		
	覆土下層	土器	I層上層		2点	HP	礫石類	石鏃	3点
			瓦葺り類		29点			たたき石	1点
			瓦葺り-2類		85点			砥石	4点
		剥片石器	石鏃		18点		剥片	フレイク	81点
スクレイパー			7点	合計	114点				
石フレイク			26点	剥片	フレイク			158点	
石フレイク			31点	合計	158点				
砥石			4点	不明	土器			瓦葺り類	1点
礫石類		石斧	206点		剥片石器		石鏃	1点	
		たたき石	1点				石フレイク	1点	
剥片		砥石	1点	剥片	石フレイク		2点		
		フレイク	446点		礫石類		石斧	1点	
礫・礫片		礫・礫片	7点	剥片	フレイク		31点		
		合計	859点		合計		37点		
床		土器	I層上層	5点	合計		1771点		

H-6

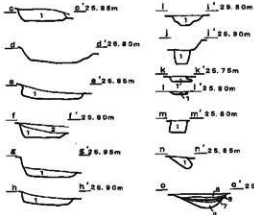


H-6

H-6の位置図

- 1 黄粘土・粘板状黄粘土、中しるる
- 2 黄粘土：黄褐色ローム層土と黄粘土が1:1で混じる 厚3cm前後のローム層土が散在する
- 3 黄褐色土：粘板状黄粘土 厚3cm前後のローム層土が散在する、そして数1cm以下のローム層土が散在する
- 4 黄褐色土：数1cm以下のローム層土が散在する

- 5 黄粘土：数1cm以下のローム層土が散在する
- 6 黄粘土：黄褐色土の層土が散在する
- 7 黄褐色土：粘土
- 8 黄粘土：黄褐色土として入り込む
- 9 黄褐色土：ローム層土が散在した土



HP1

- 1 黄褐色土：厚1-3cmのローム層土が散在する
- 2 黄褐色土：中しるる 底部に粘土層をのびる
- 3 1に似るが、底が深い H-6の層土が混じり中しるる

HP2

- 1 黄褐色土：中しるる 厚1-3cmのローム層土が散在し、そして数1cm以下のローム層土が散在する

HP3

- 1 黄褐色土：よくしるる

HP4

- 1 黄褐色土：よくしるる 底部に粘土層をのびる

HP5

- 1 黄褐色土：しるりなし 厚1-3cmの黄褐色土と黄褐色土が1:1の割合で混じる

HP6

- 1 黄褐色土：黄褐色土の層土が散在する

HP7

- 1 黄褐色土：粘土

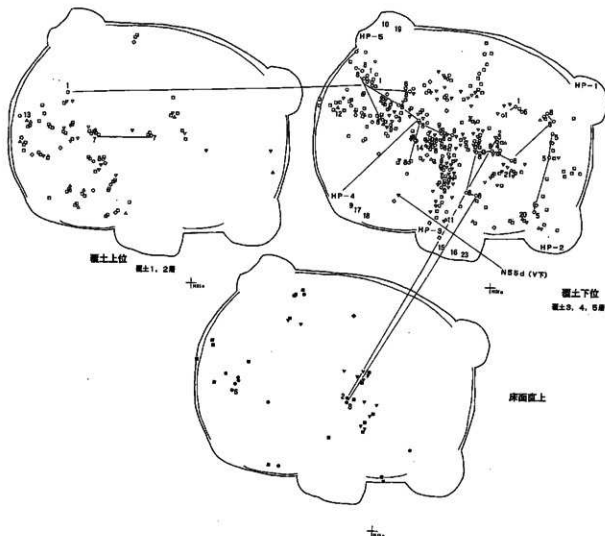
HP8

- 1 黄褐色土：黄褐色土として入り込む

HP9

- 1 黄褐色土：ローム層土が散在した土

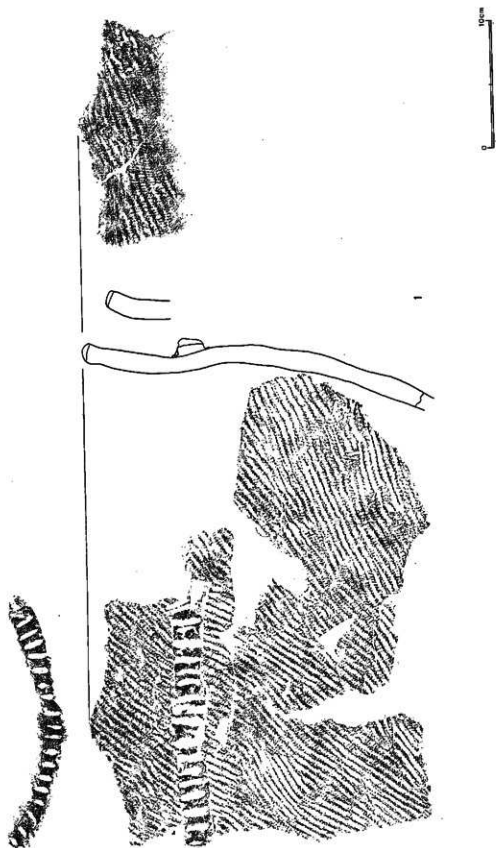
図Ⅵ-7-17 H-6 (1)



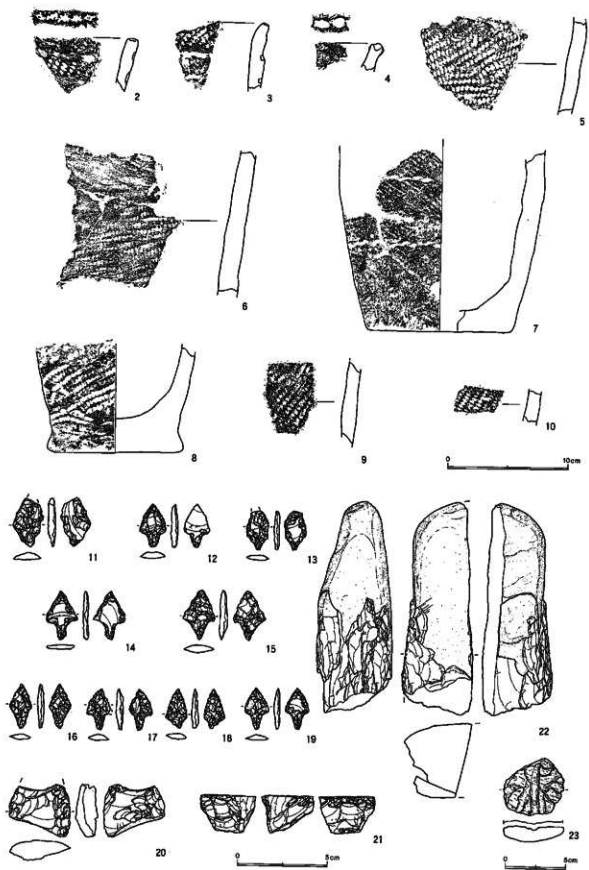
図VI-7-18 H-6 (2)

明瞭に3層より黒色味が強い土が入り込んでいた。段階住居が埋まりかけたところに掘り込んだもので、覆土2層が堆積する直前に埋まったものである。HP-3について、覆土2層がかぶさるように堆積しており、生活面(覆土下位)の堆積した後のものであり、かつ、住居廃棄の前に掘られたものである。廃棄行為に伴う土壌かどうかは、生活面と土壌出土遺物の出土層位がレベル的に同じであるため、判然としない。廃屋墓の可能性についても可能性は否定できない。しかし規格的には屈葬に使用できるものだが、覆土にはしまりがなく、掘り上げ土が混じらない事から、埋め戻しとは推定しがたく、なんらかの生活活動に伴うものと考えられる。

遺物：1は覆土から29点出土したⅢ群b-2類土器である。胴部が膨らみ、頸部がくびれ、口縁が外反する器形である。口縁には山形の突起をもつ。器面にLRの斜行縄文を施し、頸部には厚い横環する貼付帯がつけられている。貼付帯の上下の器面は棒状工具により調整されて沈線状を呈している。貼付帯は棒状工具で刻まれ、口唇は角と曲面のある施文具で刻まれていることから、半截竹管状の工具を用いているのかもしれない。内面は丹念に横なでにより調整されている。貼付帯がつけられている部分より上の内面には、器面と同じLRの斜行縄文が施されている。胎土には微量の黄白色粒と砂粒を含む。2は床面直上から出土したⅢ群b-2類土器である。口唇および器面にはLRの縄文が施



図VI-7-19 H-6の遺物(1)



図VI-7-20 H-6の遺物(2)



表VI-7-18 H-6掲載土器一覧

器名	分類	遺構名調査区	遺物番号	層位	点数	接合・同一層位など 調査区名と遺物番号、層位と点数・合計破片点数 (断頭と同じ部分は胴と有地、縄線土器破片を含む点数)	備考
1	Ⅲb-2	H-6	487	-	8	H-6-6、覆下(1)、同97、b(1)、同298、a(1)、同487、-(13)、 同488、-(3)、同540、-(1)、同541、HP-1(1)、29点	小突起、貼付帯 刻み、LR
2	Ⅲb-2	H-6	81	床直	1	H-6-10、覆下(1)、2点	刺突文、沈線文
3	Ⅲb-2	H-6	147	覆土下位	1		押引文
4	Ⅲb-2	H-6	13	覆土下位	1		刺突文
5	Ⅲb	H-6	21	覆土下位	1	H-6-19、覆下(1)、同38、同(1)、3点	LR
6	Ⅲb	H-6	234	床直	3	H-6-8、b(1)、同126、床直(1)、同234、同(1)、6点	LR
7	Ⅲb	H-6	564	-	1	H-6-565、覆上(1)、4点	縄線文
		H-6	565	覆土上位	1		RL
		H-6	566	覆土上位	1		底部張り出さず
8	Ⅲb-2	H-6	487	-	1	H-6-15、覆下(1)、同18、同(1)、同81、床直(1)、同91、覆下(1)、 同92、同(1)、同104、同(1)、同105、同(1)、同125、同(1)、 同143、同(1)、同155、同(1)、同282、同(1)、同347、同(1)、 同418、同(1)、同422、同(1)、同453、同(1)、同469、同(1)、 同483、同(1)、同488、-(1)、同505、覆下(1)、同509、同(1)、 同514、同(1)、23点	LR 底部張り出す
9	Ⅲb	H-6	552	HP-4	1	H-6-552、HP-4(2)、同350、覆下(1)、同398、同(1)、 同506、同(1)、6点	LR
10	Ⅲb	H-6	558	HP-5	1		LR

表VI-7-19 H-6掲載土器一覧

器名	分類	遺物番号	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考	
11	石	織	100B	覆土下位	(2.70)×1.54×0.42	(1.4)	黒曜石	未製品、欠損品
12	石	織	327B	覆土下位	2.38×1.42×0.42	0.9	黒曜石	未製品
13	石	織	239B	覆土下位	(2.15)×1.20×0.30	(0.7)	黒曜石	未製品、欠損品
14	石	織	517B	覆土下位	2.70×1.74×0.28	0.9	黒曜石	未製品
15	石	織	548	HP-3	2.76×1.77×0.48	1.4	黒曜石	未製品
16	石	織	548	HP-3	2.45×1.20×0.36	0.7	黒曜石	未製品
17	石	織	551	HP-4	2.27×(1.03)×0.40	(0.7)	黒曜石	未製品
18	石	織	551	HP-4	2.18×1.18×0.38	0.7	黒曜石	未製品
19	石	織	556	HP-5	2.30×1.33×0.3	0.6	黒曜石	
20	スクレイパー		40	覆土下位	(2.90)×3.40×1.19	(9.2)	黒曜石	破損品
21	石	核	30B	覆土下位	2.10×3.07×2.90	16.1	黒曜石	
22	石	弁	572	覆土下位	(11.83)×(3.95)×(3.17)	(262.8)	泥岩	未製品 N504-25(V層下)と接合
23	砥	石	549	HP-3	4.8×5.0×1.3	7.8	軽石	

され、口唇には竹管状工具による刺突文、口縁には沈線文が施されている。内面調整は横なである。胎土には白色粒と砂粒を含む。3・4は覆土下位から出土したⅢ群b-2類土器である。3は口縁に山形と思われる突起をもつ。突起部分は欠損している。器面にLRの縄文を施し、口唇と口縁に半截竹管状工具による右方向からの押引文が施されている。4は口唇に指頭による刺突文がある。いずれも内面は平滑で、丹念な横なでにより調整されている。胎土は粒が揃い均質で、微量の白色粒、砂粒を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。5は覆土下位、6は床面直上から出土したⅢ群b類土器である。いずれも、器面にはLRの斜行縄文が施され、内面は平滑で丹念に縦に調整されている。胎土には白色粒を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。7は覆土上位から出土したⅢ群b類土器である。底部は張り出さず、磨耗した器面にはRL斜行縄文と縄線文が認められる。内面には凹凸がある。調整は横なで、指頭痕が残っている。胎土には黄色粒、小礫、砂粒を含む。8は床面直上および覆土下

位から23点出土したⅢ群b-2類土器である。底部は張り出している。器壁には凹凸があり、指頭痕が残る。器面にはLRの斜行縄文が施され、内面調整は横なのである。胎土には黄白色粒を含む。焼成はあまりよくなくもろい。内面が剥落している部分もある。9はHP-4、10はHP-5から出土したⅢ群b類土器である。器面にはLR斜行縄文が施されている。9は内面が平滑で、縦に調整されている。10の内面は横になで調整されている。9は胎土が緻密で、微量の白色粒を含む。10には微量の白色粒、小礫を含む。9は焼成が良好で堅く焼き締まる。

石器は覆土下面のもの、付属の土壌から出土したものを掲載する。11~19は石鏃。黒曜石製。11は未製品。両面に一次剥離面を残す。背面に中途半端な二次調整が施されている。先端部にかけてと、基部にかけて未調整となっている。腹面は先端部にかけてと基部にかけて粗雑な調整が加えられる。先端部を欠損する。12は背面の縁辺に調整を加え石鏃としている。背面には礫皮表面が残る。腹面には基部付近にわずかに剥離痕があるが二次調整は見られない。13は先端部の調整が丸みを帯びる。両面に一次調整面を残す。両面の縁辺に二次調整を加えている。基部は比較的明瞭である。未製品と考えられる。14も剥片の縁辺を両面から粗雑な調整を加えている。先端部がやや歪で基部は比較的長く、明瞭である。15は二次調整が荒いもので、先端部、基部、両側縁共に歪である。16も先端部へかけての二次調整が若干歪であるが、この住居跡から出土したほかの石鏃に比べ完成度が高い。17も一次剥離面を残し、二次調整が荒いが茎は明瞭で長い。18は、二次調整は丁寧であるが茎の調整に失敗したのか、基部には歪な調整が施される。19は、調整は丁寧であるが主剥離面と、礫皮表面を残す。20はスクレイパー。黒曜石製。背面両側縁を刀部とする。縁端部に礫皮表面を残す。21は石核。黒曜石製。礫皮表面を残す。22は石斧未製品とした。泥岩。礫片の、刀部とする方向に打ち欠きによって調整を行った際、破損したものと考えられる。23は砥石。軽石製で有溝のもの。

時期：時期は遺物の出土状況から、縄文時代中期後半、柏木川式期である。

(大森司)

## (2) 土壌

土壌は4基検出した。検出した層位と覆土の遺物出土状況から縄文時代中期後半~末葉の土壌であると判断した。P-1~3までは確認した層位と覆土の堆積状況から同様な用いられ方をし、自然埋没した土壌であると考えた。P-4については覆土が人為的な埋め戻しが考えられることから先に検出した土壌とは性格が異なると考えた。

P-1 (図VI-7-21/表VI-7-1・2・20・23・24/図版80・92)

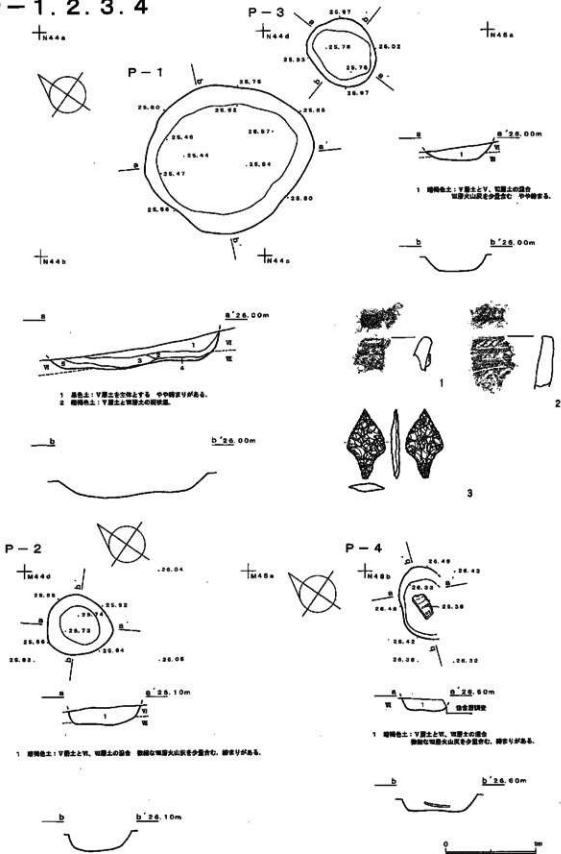
位置：N44 a・d

規模：1.90×1.65/1.58×1.20/0.25m

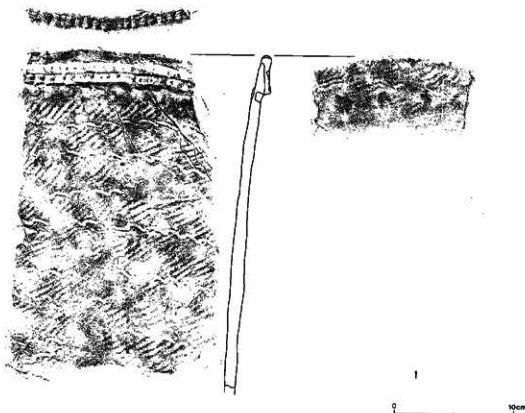
特徴：調査区南西側の比較的なだらかな沢状地形に面する台地の尾根状のところに位置する。包含層を掘り下げたところ、VI層上面で黒色土の落ち込みを確認した。土壌であることが想定されたため、半載し掘り下げたところ明瞭な掘り込みを確認し土壌と認定した。平面形はやや不正な円形である。土壌としてはH-4に近い大きさであるが、住居跡のような床面が存在しないことや地床炉がないこと、また周辺から確認された土壌と検出状況や覆土の堆積状況が類似していること、自然埋没した覆土からは包含層の出土遺物とあまり差異が無いこと等これらのことを総合的に判断して、遺構の種類としては土壌とした。性格は不明である。

遺物：1・2は覆土から出土したⅢ群b-2類土器である。1は口縁が外反する器形である。2次焼成を受けたものが磨耗し、施文が不鮮明である。器面にはLRの縄文が認められる。口縁に幅11mm、厚さ2mmの貼付帯を運らせ、貼付帯には半載竹管状工具による左方向からの刺突文が施されている。断面形が丸みを帯びた口唇と内面は平滑で、丹念な横なでにより調整されている。胎土には微量の白

P-1. 2. 3. 4



図VI-7-21 P-1~4・遺物



図VI-7-22 P-4の遺物

色粒、砂粒を含む。2は口唇の断面形は角形で、内面側にわずかに張り出している。器面にはLRの縄文が認められる。口縁には半截竹管状工具による、2本1組の沈線文が2列認められる。内面は粗雑な横なでにより調整されている。胎土には径2~9mmの礫を含み、器面が豆餅状を呈している。2次焼成を受けており、器面・内面とも荒れている。

3は石鏃。覆土中からの出土。茎が明瞭なもの。二次調整は比較的丁寧である。黒曜石製。

時期：覆土中のⅢ群b-2類の出土と周辺の遺構から縄文時代中期後半と考えられる。

P-2 (図VI-7-21/表VI-7-1・2/図版80)

位置：M 44 d

規模：0.73×0.64/0.45×0.40/0.15m

特徴：査調区南西側の比較的なだらかな沢状地形に面する台地の尾根状のところに位置する。包含層を掘り下げていたところ、VI層上面でP-1、3の北側に位置する黒色土の落ち込みを確認した。土壌であることが想定されたため、半截し掘り下げたところ明瞭な掘り込みを確認し土壌と認定した。平面形はやや不正な円形である。覆土は自然に埋没していったものと考えられる。この土壌はP-1、3と同時期で同じ目的や用途であったことが推測される。性格は不明である。

時期：P-1と同様の土壌と判断したため、縄文時代中期後半と考えられる。

P-3 (図VI-7-21/表VI-7-1・2・21/図版80)

位置：N 44 d

規模：0.80×0.70/0.70×0.52/0.22m

特徴：調査区南西側の比較的なだらかな沢状地形に面する台地の尾根状のところに位置する。包含層を掘り下げていたところ、VI層上面でP-1の北側に位置する黒色土の落ち込みを確認した。土壌であることが想定されたため、半載し掘り下げたところ明瞭な掘り込みを確認し土壌と認定した。平面形はやや不正な円形である。覆土は自然に埋没していったものと考えられる。この土壌はP-1、2と同時期で同じ目的や用途であったことが推測される。性格は不明である。

時期：P-1、2と同様の土壌であると判断したため、縄文時代中期後半と考えられる。

P-4 (図VI-7-21・22/表VI-7-1・2・22・23/図版81・92)

位置：N 48 b

規模：0.82×(0.56)/0.62×(0.42)/(0.16) m

特徴：H-3の東側に位置する。包含層調査でVII層上面まで掘り下げていたところ暗褐色土の落ち込みと、口縁から胴部にかけての比較的大型な土器片を検出した。土壌であると判断したため、半載を行ったところ明瞭な掘り込みを確認した。検出した部分が土壌の坑底部分と思われ、構築面がV層下位であったものと推測する。平面形は楕円形である。覆土は締りがあり、人為的に埋め戻されたことが考えられる。先に検出したP-1～3とは覆土の堆積状況や遺物の出土状況が違うため、これらの土壌とは性格が異なるものと考えられる。性格は不明である。

遺物：1はP-4の覆土およびM 47、O 47、O 48グリッドのV層下位から6点出土したⅢ群b-3類土器である。口縁に向かって緩やかに開く器形である。口縁には肥厚帯をもち、そこに半載竹管状工具による右方向からの押し文が2列施されている。口唇にも同様の押し文がある。器面には結束第2種のLRの縄文が施されており、内面の口縁肥厚帯のある部分まで同様の縄文が施されている。口縁肥厚帯直下の器面には、竹管状工具による円形刺突文が廻らされている。内面は横になで調整されており、指頭痕が残っている。胎土は均質で粒が揃っており、淡黄白色粒と砂粒を含む。焼成は良

表VI-7-20 P-1出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数	
覆土	土器	Ⅲ群b-2類	2点	床	礎・礎片	礎・礎片	8点	
		Ⅲ群b-2類	8点			礎・礎片(被熱)	1点	
	剥片石器	石鏃	1点				合計	36点
		石槍・ナイフ	2点		土器	Ⅲ群b-2類	1点	
		Rフレイク	1点			礎石器	1点	
		礎石器	石斧		1点			合計
	剥片	フレイク	12点				総計	38点

表VI-7-21 P-3出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数
覆土	礎・礎片	礎・礎片(被熱)	1点			総計	1点
		合計	1点				

表VI-7-22 P-4出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数
覆土	土器	Ⅲ群b-3類	2点			総計	2点
		合計	2点				

表VI-7-23 土壌掲載土器一覧

層位	分類	遺物名	調査区	番号	層位	点数	検出同一遺体など 調査区名と遺物番号、層位と点数・合計検片点数		備考
							(前項と同じ部分は同と省略、掲載土器破片を含む点数)		
1	Ⅲb-2	P-1		5	覆土	1			貼付書、刺突文
2	Ⅲb-2	P-1		1	覆土	1			紋線文
3	Ⅲb-3	P-4		1	覆土	2	M47 d 1.9, VF(1), O47 d 1.4, 同(1), O48 a 8, 同(1), 同 d 4, 同(1),		押し文
						6点			円形刺突文

表VI-7-24 P-1掲載土器一覧

群	分類	検出区	層位	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	材質	備考
3	石	礎	16	覆土	3.84×2.13×0.47	2.3	黒曜石

好である。

時期：埋め戻しの覆土からⅢ群b-3類土器が出土している。縄文時代中期末葉と考えられる。

(袖四)

### (3) Tピット

米原4遺跡B地区において4基のTピットを確認した。沢地形に沿って配列がなされる。狭い調査区ではあるが、配列を考慮すると、いずれも同時期のものとする。調査区の際から検出した、A地区における、TP4~5についても同一時期と考える。TP-3の土層堆積状況を考慮すると、焼土F-2より古く、包含層V層の下位からの検出であり、TP4~5についてもそれと同一時期と考える。時期は苫小牧市東部、千歳市の類例から縄文時代中期後半から後期前葉と考える。その詳細については宮戸3遺跡Tピットの項目の末に記した。宮戸3遺跡で試みた形態の分類にあてはめると、墳底面が不明瞭な長軸2.5m前後の大型なのが3基(TP-4, 5, 7)である。墳底面を持つ小型なのが1基(TP-6)である。

尚、TピットについてV層を1m近くの深さで掘り込んだため、表記について4通り設けた。

Ⅶ：黄褐色ローム質土

Ⅶa：橙色味をおびた黄色バミス

Ⅶb：黄褐色ローム質土がグライ化したもの

Ⅶc：褐色味の強い黄褐色粘土 しまりがよい 4の通りである。

TP-4 (図Ⅵ-7-2・3/表Ⅵ-1-1・2・7-1・2・26/図版81)

位置：M41a 規模：2.56×0.51/2.55×0.24/(0.90)m

特徴：包含層調査の際、M41, 42グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、墳底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸南端は墳底部から開きながら立ち上がる。北端は著しくオーバーハングする。短軸方向の断面形態は、墳底部から微妙に開きながら立ち上がる。遺構の上部は著しい崩落によって、外へ向かってよく開く形状をしている。墳底面はおおよそ平坦だが、中央に窪みを持つ。

遺物：出土遺物なし

時期：時期は類例から縄文時代中期後半から後期前葉と考える。

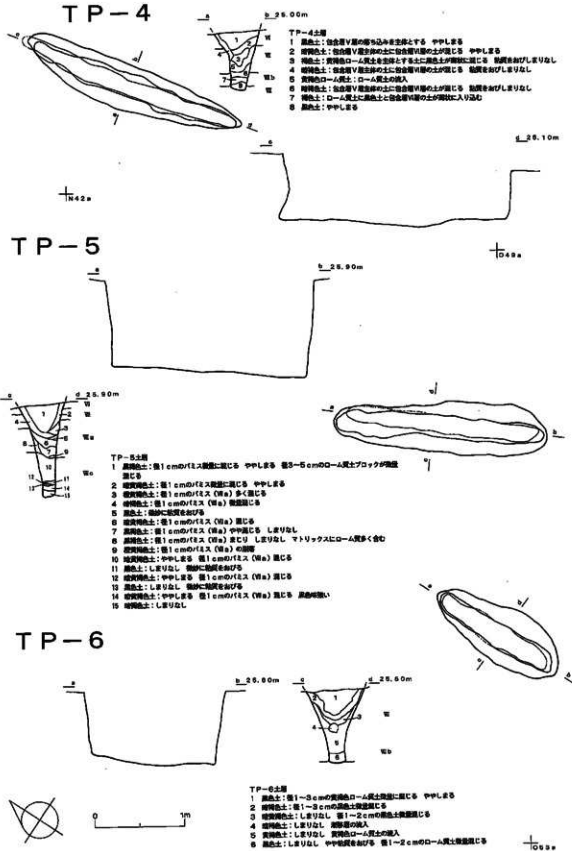
TP-5 (図Ⅵ-7-2・3/表Ⅵ-1-1・2・7-1・2・26/図版81)

位置：O48d, O49a 規模：2.36×0.57/2.24×0.21/(1.04)m

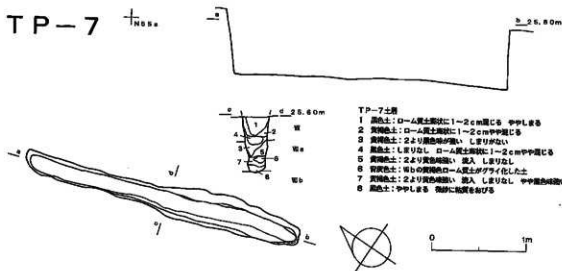
特徴：包含層調査の際、O48, 49グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、墳底部と壁面であると判断した。

表Ⅵ-7-25 TP-4 出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数
埋土	土器	Ⅲ群a-2型	2点		縄・礫片	礫・礫片	5点
	礫石	たたき石	1点				13点
	剥片	フレイク	5点				13点
					総計		13点



図VI-7-23 TP-4~6



図VI-7-24 TP-7

土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は壊底部から微妙に開きながら立ち上がる。短軸方向の断面形態は、壊底部から微妙に開きながら立ち上がる。遺構の上部は崩落によって、外へ向かってより開く形状をしている。壊底部はおおよそ平坦だが、南東端に向かって傾斜する。中央に微妙な窪みを持つ。

遺物：出土遺物なし

時期：時期は類型から縄文時代中期後半から後期前葉と考える。

TP-6 (図VI-7-2・3/表VI-1-1・2・-7-1・2/図版81)

位置：N 52 c, d, N 53 b 規模：1.58×0.30/2.85×0.27/(0.84)m

特徴：包含層調査の際、N 52、53グリッドの、基本層序V層下位において楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸両端は壊底部から微妙に開きながら立ち上がる。短軸方向の断面形態は、壊底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半部は著しい崩落によって、外へ向かってより開く形状をしている。壊底部はおおよそ平坦だが、南端に向かって傾斜する。中央に微妙な窪みを持つ。

遺物：出土遺物なし

時期：時期は類型から縄文時代中期後半から後期前葉と考える。

TP-7 (図VI-7-2・3/表VI-1-1・2、-7-1・2/図版82)

位置：N 54 d, N 55 a 規模：3.01×0.30/2.85×0.17/(0.72)m

特徴：包含層調査の際、N 54、55グリッドの、基本層序V層下位において長楕円形をした、黒色土の落ち込みを確認した。さらに掘り下げて、落ち込みの平面形が明瞭になった段階において、短軸方向に土層確認の為のベルトを残し、落ち込みの覆土を掘り下げた。すると、しまりのあるロームを面的に検出した。しまりのあるロームはそのまま立ち上がりを示し、壊底部と壁面であると判断した。土層断面は崩落と流入の連続を示していた。人為的な土壌であり、その形状からTピットであると判断した。長軸西端は壊底部から微妙に開きながら立ち上がる。東端はほぼ垂直に立ち上がる。短軸方



向の断面形態は、墳底部から垂直に立ち上がる。遺構の上半部は著しい崩落によって、外へ向かってより開く形状をしている。墳底面はおおよそ平坦だが、東端に向かって傾斜する。中央に微妙な窪みを持つ。

遺物：出土遺物なし

時期：時期は類例から縄文時代中期後半から後期前葉と考える。

(大森司)

#### (4) 焼土

焼土はB地区から13ヶ所検出した。いずれも縄文時代中期後半に属すると考えられる。これらの焼土および焼土周辺からは礫片や石礫未製品、被熱した剥片石器片と(F-4、5、7)、焼土中からⅢb-3類土器(F-5、9)が検出されている。ほかに時期差のある遺物が焼土の周辺から検出されているが(F-4、11)その焼土の時期を反映するものではないと判断する。これらの焼土は包含層から多く出土した被熱した礫、礫片を排出した焼土と考えられる(図VI-8-14)。また、包含層からは被熱した石槍・ナイフの破片が多く検出されており(図VI-8-14)、F-7が位置するM52グリッドから45点と、西側に隣接するM51グリッドから68点出土する。またその西側のM50グリッドからはF-10、13と石槍・ナイフが24点出土する。これらの礫や剥片石器を熱した可能性が大きい。

F-3、4、5(図VI-7-25/表VI-7-1・2・26・27・31~33/図版83、92)

位置：N43b、M43a、M43b

規模：1.05×0.48/0.10m 0.84×0.62/0.06m 0.76×0.06×0.04m

特徴：調査区北西側の緩やかな沢状地形の、標高が比較的高いところに位置する。包含層を掘り下げていたところV層下位で褐色土の広がり、その周辺から遺物を検出した。焼土である事が想定されたため半截を行ったところ被熱し褐色化した土層断面を確認し焼土と認定した。これらの焼土中や、焼土周辺からは剥片石器や礫片が出土している。

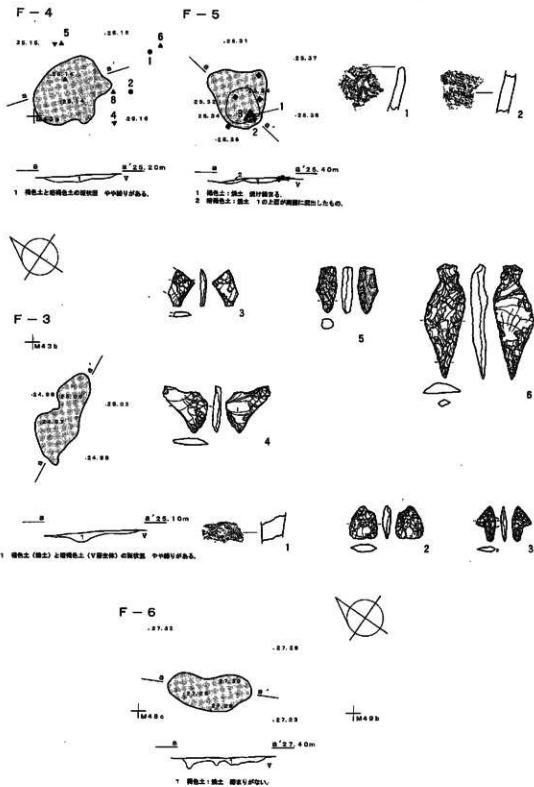
また、これらの焼土と直接関連付けるには不十分ではあるが、焼土が検出された、イモツ川に向かう沢状地形で、標高が低くなるM42グリッドでは被熱した礫片が953点出土している。

遺物：O47グリッド F-4の1・2はF-4周辺のV層下位で出土したⅡ群a-2類土器である。1は2次焼成を受けている。器面にはLRの斜行縄文が施されている。内面は横になで調整されている。胎土には白色粒、小礫、繊維を含んでいる。2は器面にRLの斜行縄文が施されている。内面は平滑で丹念に横になで調整されている。胎土には繊維を含んでいる。

F-5の1は焼土中から出土したⅢ群b類土器である。器面の施文は判然としない。内面は平滑で、縦になでより丁寧に調整されている。胎土は緻密で粒がそろっており、微量の淡黄白色粒を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。

F-4の3~6まで剥片石器。3は石礫。黒曜石製で未製品。両面に一次剥離面を残す。腹面の左側縁と背面の左側縁に二次調整を施す。先端部から腹面の左側縁にかけて破損していることから二次調整は途中で中断されたものと考えられる。4はRフレイク。黒曜石。石礫の未製品に近いものと考えられる。剥片の、背面右側縁と腹面の左側縁縁辺に二次調整を施し、石礫に近い形を作っている。先端部に相当する部分が、素材となる剥片が薄かったことと、基部に相当する部分が短いことなどから途中で石礫を作るのを止めてしまったものと推測する。5は石礫。黒曜石製。被熱し発砲直前ぐらゐまで膨らむ。両面に二次調整を施し、刺突部を作り出している。上端は礫皮表面が残っていたものと推測する。6はつまみ付きナイフ。黒曜石製。剥片の背面前面に二次調整を施し、両側縁を刀部とする。つまみ部分は腹面からも挟入する二次調整が施される。先端部は石礫と複合しており、背面からも調整を施し、刺突部を作り出す。

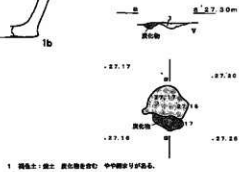
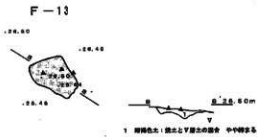
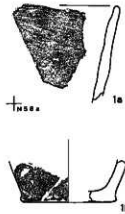
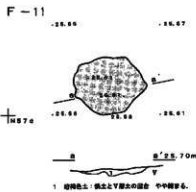
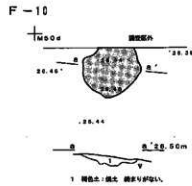
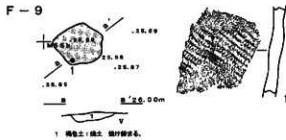
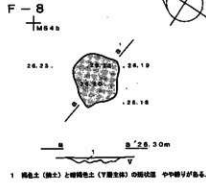
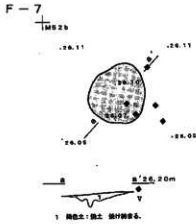
# F-3.4.5.6



図VI-7-25 F-3~6・遺物



F-7. 8. 9. 10. 11. 12. 13



↑M500

0 1m

図VI-7-26 F-7~13・遺物

F-5の3、4は石鏡。ともに黒曜石製。未製品と考えられる。剥片の両面に荒い二次調整を施す。先端部は明瞭に作り出されていない。4は破損しているもの。

時期：焼土周辺からⅢ群b類土器が出土している。縄文時代中期後半と考えられる。

F-6 (図VI-7-25/表VI-7-1、2)

位置：M48d

規模：0.92×0.34/0.12m

特徴：調査区北東の標高27.0mの比較的高いところに位置する。包含層を掘り下げていたところ、V層下位で褐色土の広がりを確認した。半載したところ被熱し褐色化した土層断面を確認し焼土と認定した。平面形は不正な楕円である。

時期：周辺の焼土と同様の検出状況から縄文時代中期後半と考えられる。

F-7 (図VI-7-26/表VI-7-1、2、28/図版83)

位置：M52b

規模：0.69×0.63×0.14m

特徴：調査区北東側の比較的平坦なところに位置する。包含層を掘り下げていたところ、V層下位で褐色土の広がりを確認した。半載したところ被熱し褐色化した土層断面を確認し焼土と判断した。平面形は不正な円である。焼土とその周辺から被熱した礫片が出土している。

時期：周辺の焼土と同様の検出状況から縄文時代中期後半と考えられる。

F-8 (図VI-7-26/表VI-7-1・2)

位置：M54b

規模：0.58×0.50×0.06m

特徴：H-6の西側に位置する。包含層を掘り下げていたところ、V層下位で褐色土の広がりを確認した。半載したところ被熱し褐色化した土層断面を確認し焼土と判断した。平面形は不正な円である。

時期：周辺の焼土と同様の検出状況から縄文時代中期後半と考えられる。

F-9 (図VI-7-26/表VI-7-1・2・29・31/図版83・92)

位置：M55a・b

規模：0.55×0.46×0.08m

特徴：H-6の覆土中に位置する。包含層を掘り下げていたところ、V層下位で褐色土の広がりを確認した。半載したところ被熱し褐色化した土層断面を確認し、焼土と判断した。平面形は不正な円である。

遺物：1は焼土から出土したⅢ群b類土器である。器面にはRLとLRの縄文が認められる。内面は指頭により横になで調整されている。胎土には小礫を多く含む。また、微量の白色粒、礫も含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。

時期：周辺からⅢ群b類土器が出土している。縄文時代中期後半と考えられる。

F-10 (図VI-7-26/表VI-7-1・2)

位置：M50d

規模：0.65×0.52×0.11m

特徴：調査区北東の平坦なところに位置する包含層を掘り下げていたところ、V層下位で褐色土の広

がりを確認した。半載したところ被熱し褐色化した土層断面を確認し焼土と判断した。平面形は不正な円である。

時期：周辺の焼土と同様の検出状況から縄文時代中期後半と考えられる。

F-11 (図VI-7-26/表VI-7-1・2)

位置：M57c

規模：0.81×0.63×0.08m

特徴：調査区北東の平坦なところに位置する。包含層を掘り下げていたところ、V層下位で褐色土の広がりを確認した。半載したところ被熱し褐色化した土層断面を確認し焼土と判断した。平面形は不正な円である。

遺物：1はF-11周辺のM58グリッド、N-57・58グリッド、O57グリッドのV層下位から14点出土したI群b-1類土器である。口縁は歪んでいる。底部は張り出す。口唇の断面形は丸みを帯びる。器面・内面は指頭による横なでにより丁寧に調整されている。胎土には砂粒を含む。

時期：周辺の焼土と同様の検出状況から縄文時代中期後半と考えられる。

F-12 (図VI-7-26/表VI-7-1・2)

位置：M46d、M47a・b

規模：0.42×0.28×0.06m

表VI-7-26 F-4出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数
焼土付近	土器	I群a-2類	2点	焼土中	石器	石斧	1点
		合計	2点			北海道式石剣	1点
焼土中	剥片石器	石鏃	1点		剥片	フレイク	3点
		石鏃	1点		縄・礫片	縄・礫片	1点
		つまみ付ナイフ	1点		合計	11点	
		Rフレイク	2点		総計	13点	

表VI-7-27 F-5出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数
焼土中	土器	I群b類	1点	焼土中	縄・礫片	縄・礫片	5点
		剥片石器	2点			縄・礫片(被熱)	2点
	礫石器	1点	合計		16点		
	剥片	フレイク	5点		総計	16点	

表VI-7-28 F-7出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数
焼土中	縄・礫片	縄・礫片(被熱)	5点	V層下	縄・礫片	縄・礫片(被熱)	10点
		合計	5点			合計	10点
				総計			15点

表VI-7-29 F-9出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数
焼土中	土器	I群b類	2点				2点
		合計	2点				
				総計			

表VI-7-30 F-13出土遺物一覧

層位	遺物名	分類	点数	層位	遺物名	分類	点数
焼土中	剥片	フレイク	11点	V層下	剥片	フレイク	1点
		合計	11点			合計	1点
				総計			12点

特徴：H-1の東側に位置する。包含層を掘り下げていたところ、V層下位で褐色土の広がりを確認した。半裁したところ被熱し褐色化した土層断面を確認し焼土と判断した。平面形は不正な円である。  
 時期：周辺の焼土と同様の検出状況から縄文時代中期後半と考えられる。

F-13 (図VI-7-26/表VI-7-1・2)

位置：M50 a・d

規模：0.58×0.34/0.10m

特徴：調査区北東の平坦なところ、F-10の南西隅に位置する。包含層を掘り下げていたところ、V層下位で褐色土の広がりを確認した。半裁したところ被熱し褐色化した土層断面を確認し焼土と判断した。平面形は不正な楕円である。焼土中からは礫片が出土している。

時期：周辺の焼土と同様の検出状況から縄文時代中期後半と考えられる。

(補図)

表VI-7-31 焼土掲載土器一覧

図番	分類	遺構名 調査区	遺物 番号	層位	点数	接合・同一器体など 調査区名と遺物番号、層位と点数・合計破片点数 (前項と同じ部分は阿と省略、掲載土器破片を含む点数)		備考
F4-1	II a-2	F-4周辺	11	V層下位	1			L R、繊維
F4-2	II a-2	F-4周辺	3	V層下位	1			R L、繊維
F5-1	III b	F-5	8	焼土中	1			
F9-1	III b	F-9	1	焼土中	1	F-9-1、焼土中(1)、2点		R L
F11-1a	I b-1	O57 a	5	V層下位	1	M58 a 4, V下(1)、同C5、同(1)、 同C12、VI(1)、N57 c 10, V下(2)。		無文
F11-1b	N57 b		9	V層下位	1	同d 12, 同(2)、N58 b 5、同(1)、 O57 a 3, 同(2)、同a 5、同(1)、14点		底部張り出す
		O57 a	3	V層下位	1			

表VI-7-32 F-4掲載石器一覧

番号	分類	遺物 番号	層位	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
3	石 鏃	9	焼土付近(V層下)	(2.02)×(1.48)×0.31	(0.6)	黒曜石	未製品・破損品
4	R フレイク	6	焼土付近(V層下)	2.60×2.46×4.00	1.9	黒曜石	石鏃未製品と考えられるもの
5	石 鏃	7	焼土付近(V層下)	2.60×1.10×0.58	1.8	黒曜石	被熱
6	つまみ付ナイフ	2	焼土付近(V層下)	6.36×2.10×0.89	8.3	黒曜石	石鏃と複合

表VI-7-33 F-5掲載石器一覧

番号	分類	遺物 番号	層位	長さ×幅×厚さ(mm)	重量(g)	石質	備考
2	石 鏃	5	焼土中	1.86×1.57×0.47	1.2	黒曜石	未製品
3	石 鏃	b	焼土中	1.92×(1.08)×0.31	(0.4)	黒曜石	未製品・欠損品

## B地区の包含層の遺物

## (1) 土器

B地区の包含層からは縄文時代早期後半から後期中葉の土器が11,472点出土した。このうち、縄文時代中期のものが過半数を占める。これらの土器はⅢ～Ⅴ層の各層から出土しているが、Ⅴ層下位から8,492点(74%)が出土した。

## 縄文時代早期の土器 (図Ⅵ-8-4/表Ⅵ-8-2・3/図版93)

縄文時代早期の土器は2,661点(19.7%)出土した。早期の土器のうち、I群b-1類が1,723点(64.8%)、I群b-3類が2点(0.08%)、I群b-4類が1点(0.04%)で、I群b-1類が大半を占める。

I群b-1類: 1～12は東銅路Ⅱ式、13～27は東銅路Ⅲ式に相当する。

東銅路Ⅱ式に相当するものには、刺突文をもつもの(1～3)、縄の側面圧痕をもつもの(4～10)、附加条の施されるもの(11)、羽状縄文の施されるもの(12)がある。

1は無文地に、2はLRの縄文が認められる器面に竹管状工具による刺突文が施されている。3は無文地に縄端による刺突文が施される。内面調整は横などで、3には捺痕がある。1の胎土は均質で粒が揃っている。2・3は胎土に微量の白色粒、黒色鉱物を含む。

4はM-42区のⅤ層下位を中心に13点出土した個体である。4・5は縄線文と口縁の間に短縄文が施される。断面形が丸みを帯びた口唇および内面は横などで調整されている。4は胎土に微量の淡黄白色粒を、5は微量の小礫を含む。いずれも焼成温度が低く脆い。

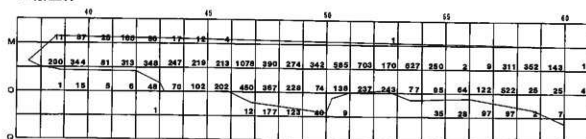
6～9にはLR(6・8)およびRL(7・9)の縄により、幅3～4mmの縄線文が施される。6はM-41区のⅤ層下位を中心に23点出土した個体で、上から4本目の縄線文からそのまま原体を縦回転させて、器面にLRの斜行縄文を施している。7はM58グリッドのⅤ層下位を中心に171点出土した個体で、口唇断面形は丸みを帯びる。8はM57グリッドを中心に45点出土した個体である。10はLRの細い

表Ⅵ-8-1 層別出土土器一覧

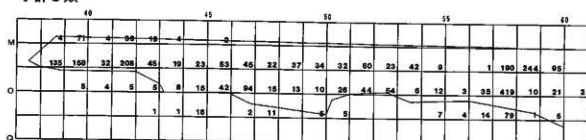
分類	層位							表探・辨土 攪乱・風割	合計
	Ⅲ・Ⅳ層	Ⅴ層					Ⅵ・Ⅶ層		
		上位	中位	下位	掘り上げ土	Ⅴ層			
I b	3	9	171	604	13	1	131	3	935
I b-1	12	12	167	1178	27	11	290	26	1723
I b-3	0	0	0	2	0	0	0	0	2
I b-4	0	0	0	1	0	0	0	0	1
I群計	15	21	338	1785	40	12	421	29	2661
Ⅱ a	22	6	95	561	0	2	63	1	750
Ⅱ a-1	2	6	101	335	1	2	34	0	481
Ⅱ a-2	4	1	67	534	5	6	47	1	665
Ⅱ b	4	2	52	453	9	0	9	1	530
Ⅱ群計	32	15	315	1883	15	10	153	3	2426
Ⅲ a	0	0	8	55	1	5	18	1	88
Ⅲ b	3	7	289	3328	297	65	288	8	4285
Ⅲ b-2	1	0	42	431	58	5	33	71	641
Ⅲ b-3	2	0	92	966	115	30	64	21	1290
Ⅲ群計	6	7	431	4780	471	105	403	101	6304
Ⅳ a	30	0	3	43	0	0	0	0	76
Ⅳ b	0	0	0	1	0	0	3	0	4
Ⅳ群計	30	0	3	44	0	0	3	0	80
不明	0	0	1	0	0	0	0	0	1
合計	83	43	1088	8492	526	127	980	133	11472

Ⅳ層からはⅣ aが1点、Ⅶ層からはI b-1とⅢ b-3が1点ずつの出土である。

### 土器全体



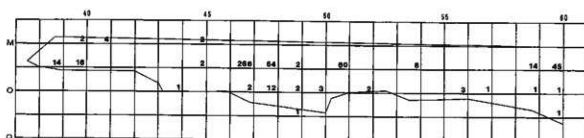
### I群b類



### II群a類



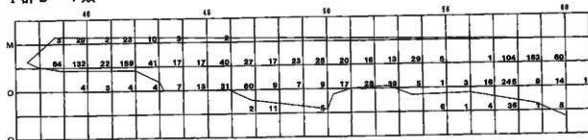
### II群b類



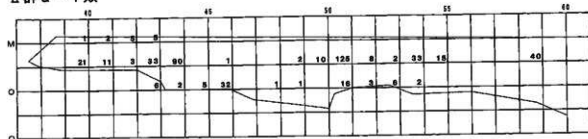
図VI-8-1 包含層出土器分布図(1)



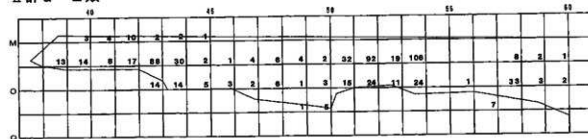
## I 群 b-1 類



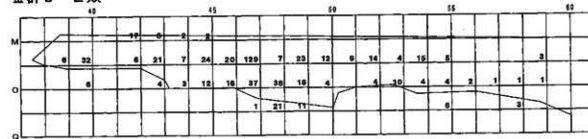
## II 群 a-1 類



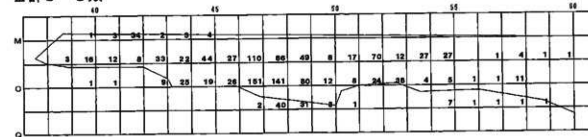
## II 群 a-2 類



## III 群 b-2 類

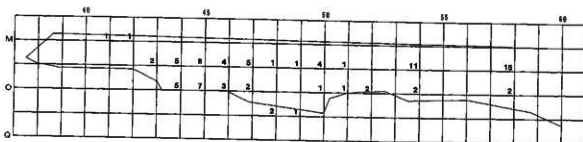


## III 群 b-3 類

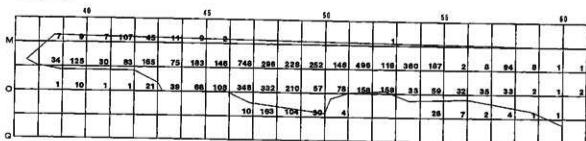


图VI-8-2 包含層出土土器分布图(2)

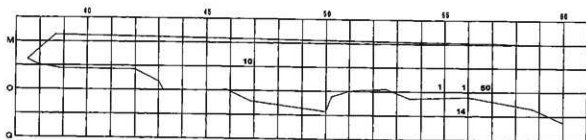
Ⅲ群 a類



Ⅲ群 b類



Ⅳ群 a類



Ⅳ群 b類

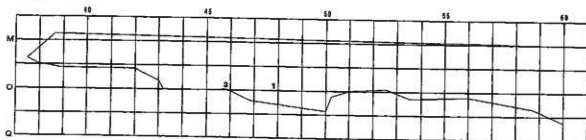
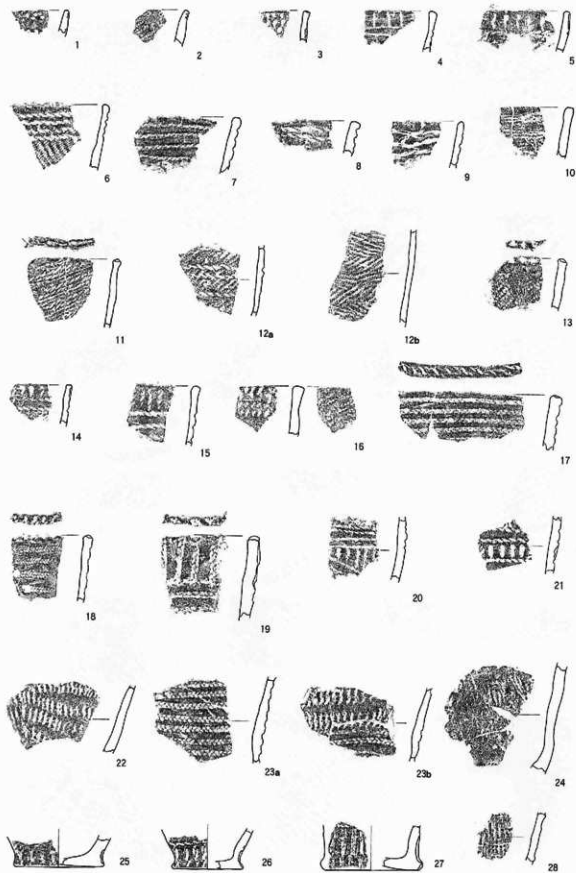
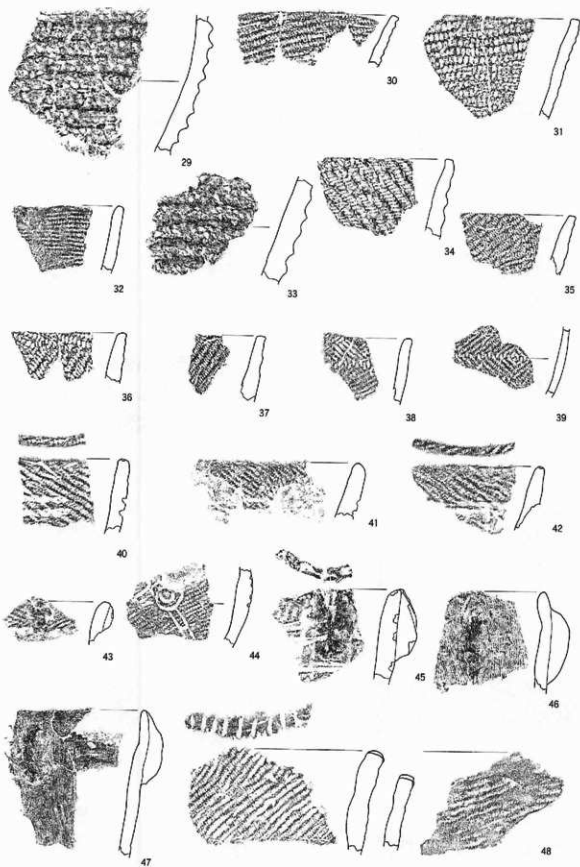


圖 VI-8-3 包含層出土土器分布圖 (3)



図VI-8-4 包含層出土の土器(1)



図VI-8-5 包含層出土の土器(2)

縄により、幅0.8～1mmの縄の側面圧痕が3本単位で施されている。いずれも、口唇および内面は横などで調整されており、胎土には微量の白色粒と小礫(4・5・9・10)、黒色鉱物(6～8)を含む。1・9は胎土の粘土分が多い。4・5・9は焼成温度が低く脆く、6～8は良好で堅く焼き締まる。10の焼成は中程度である。

11は口唇が指頭によりつままれ、断面形は外側に張り出す。器面には附加条のLR斜行縄文が施されている。12a・12bはM45グリッドのV層下位を中心に30点出土した同一個体である。羽状縄文と縄線文が施されている。11の内面には縦の擦痕がある。12は横などで調整されている。11は胎土に黄白色粒と砂粒を含む。12は胎土に粘土分が多い。11は焼成温度が低く脆い。12は焼成が良好で堅く焼き締まる。

東銅路Ⅲ式に相当するものには、口唇に刺突文をもつもの(13)、縄の側面圧痕をもつもの(14～16・20～22・23・25・26)、組紐圧痕文をもつもの(17・19・27)、斜行縄文の施されるもの(13・24)がある。

13は器面にLRの斜行縄文、外傾する口唇には縄端刺突文が施され、内面調整は横などで、胎土に淡黄白色粒と砂粒を含む。14は縄端圧痕と縄線文、15は短縄文と縄線文が施される。縄線文は幅3～4mm、LRの縄による。16は短縄文が施されている。断面形が丸みを帯びる口唇および内面は横などで調整されている。14は胎土に微量の黄白色粒、15・16は淡黄白色粒と砂粒を含む。17～19は3本の縄による平組紐の圧痕のあるもので、17・18は横位に、19は縦位・横位に施されている。組紐圧痕の幅は17が4mm、18が5mm、19が6mmである。18は器面に縄端刺突文が加えられる。17・18の口唇には縄、19の口唇には組紐の圧痕がある。内面は横などで調整され、胎土には微量の黄白色粒を含む。19は微量の小礫も含む。17・19の焼成は良好、18は中程度である。17はM57グリッドのV層中位～V層下位を中心に37点出土した。

20・21は縄線文と短縄文、22は短縄文が施される。内面は横などで調整され、21の内面は平滑である。20・22は胎土に砂粒、小礫を含む。21は粒が揃って均質である。いずれも焼成は良好で堅く焼き締まる。23はM39グリッドのV層中位～下位を中心に28点出土した個体である。3本の縄による平組紐の圧痕と短縄文が施されている。24は器面にLRの縄文が認められる。いずれも、内面は横などで調整されており、胎土には微量の淡黄白色粒を含む。25～27は底部が張り出す。25には短縄文、26には短縄文と縄線文、27には組紐圧痕文が施されている。

I群b-3類：28は中茶路式に相当する。器面に幅2mmの貼付帯を廻らせ、その間に短縄文が施されている。部分的に貼付帯にかかると縦の短い貼付帯がつけられている。内面調整は横などで、胎土に微量の白色粒、砂粒を含む。

I群b-4類：磨耗した小片のため掲載しなかった。1点のみの出土である。

縄文時代前期の土器 (図VI-8-5/表VI-8-3/図版93・94)

縄文時代前期の土器は2,426点(21.1%)出土した。前期の土器のうち、II群a類が1,896点(78.2%)、II群b類が530点(21.8%)である。II群a類のうち、II群a-1類としたものは481点(25.4%)、II群a-2類としたものは665点(35.1%)である。

II群a-1類：29～33は網文式に相当する。器面に横走気味の縄文が施され、縄文を施した上を指頭によりなで調整している。29・33はRLR、30～32はLRの斜行縄文である。内面は横などで調整され、30・33は平滑である。胎土には繊維と小礫を含む。31はM43グリッドのV層下位を中心に95点出土した個体である。

II群a-2類：34～37は静内中野式に相当する。器壁に比し口唇が薄くなる。器面には斜行縄文

が施されるが、その上はなで調整されず、条や節が明瞭である。34はLR縦回転、35・37にはLR横回転の斜行縄文が施される。36にはRLとLRの縄文が認められる。34はM39～43グリッド、N42～44グリッドのV層中位～V層下位を中心に30点出土した個体である。いずれも内面は横になで調整されている。胎土には繊維と、微量の白色粒を含む。

38・39は春日町式に相当する。38はN57グリッドのV層中位～V層を中心に37点、39はO56グリッドのV層中位～V層下位から出土した個体である。いずれも結束第1種の縄文が向きを変えて施される。口唇・内面は磨かれている。胎土には微量の黄白色粒を含む。焼成は良好で堅く焼き締まる。

Ⅱ群b類：40～42は植苗式に相当する。40はM58・59グリッドのV層中位～V層を中心に55点、41はM46グリッドのV層中位～V層を中心に55点出土した個体である。LR縦回転の斜行縄文を施した器面に太さ5mmほどのLRの縄により、長さ指2～3本ほどの縄線文が施されている。42も器面に同様の斜行縄文が施されている。40・42の口唇には縄の圧痕がある。いずれも内面は丹念な横になでにより調整されている。胎土には、黄白色粒、砂粒、小礫を含み器面がザラついている。割れ口はバイ状を呈する。焼成は良好で堅く焼き締まる。

縄文時代中期の土器 (図VI-8-5～8/表VI-8-3～5/図版94～97)

縄文時代中期の土器は6,304点(55.0%)出土した。中期の土器のうち、Ⅲ群a類が88点(1.4%)、Ⅲ群b類が6,216点(98.6%)である。Ⅲ群b類のうち、Ⅲ群b-2類としたものは641点(10.3%)、Ⅲ群b-3類としたものは1,290点(20.8%)である。

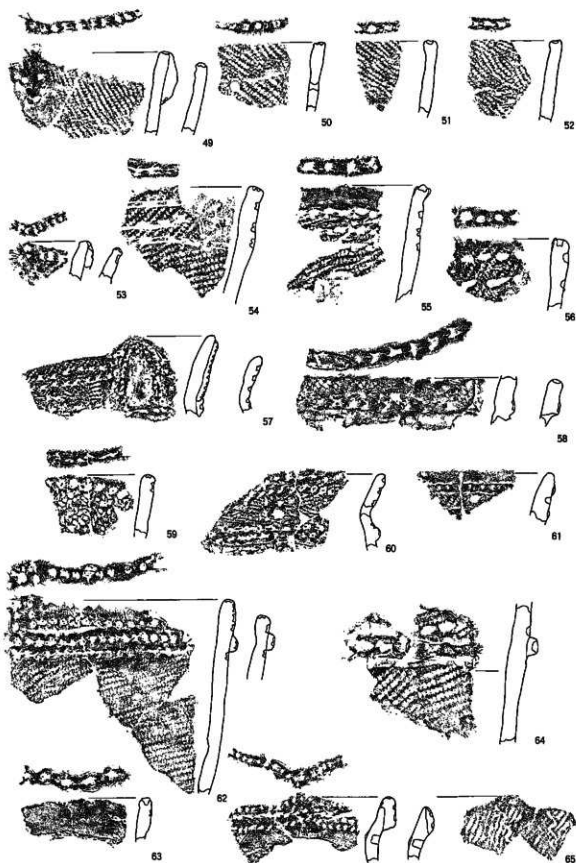
Ⅲ群a類：43は口縁の山形小突起をもつ。器面にはLRとRLの縄文が認められる。小突起の器面にはボタン状突起をつけ、そこに縄の圧痕が施される。口唇および内面は平滑である。44はLR斜行縄文を施した器面に、沈線により渦巻き、2本組の直線、弧線が描かれている。内面は磨かれている。胎土はいずれも均質で粒が揃っており、微量の淡黄白色粒を含む。

Ⅲ群b-2類：45～64は貼付帯、沈線文、刺突文などをもつ口縁部破片である。柏木川式あるいはモコト式に相当する。

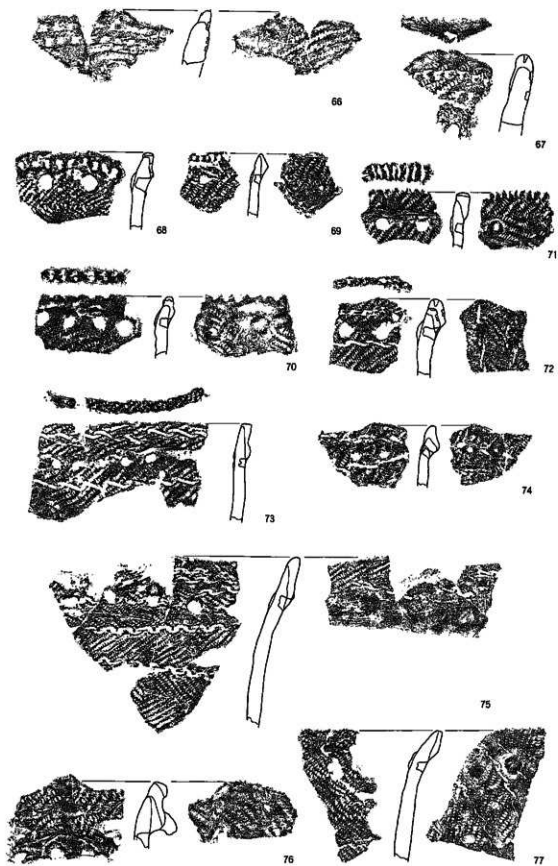
鼻状の横断面三角形を呈する垂下する貼付帯をもつもの(45～47・49)、沈線文をもつもの(45～47)、口唇が刻まれるもの(48)、口唇・口縁に刺突文をもつもの(49～56・58・59・62・63)、横環する貼付帯をもつもの(57・58・60～62・64)などがある。

沈線文、刻み、刺突文は、細い鋭利な工具(46・47)、棒状工具(63)、半截竹管状工具(45・48・50・53・54・55)、竹管状工具(51・52・56・60・62・64)、篋状工具(58)、半截竹管状工具と竹管状工具の併用(49・61)、竹管状工具と棒状工具の併用(57)、竹管状工具と篋状工具の併用(59)などにより施されている。刺突文には施文する部分に垂直に刺突したもののほか、土器に向かって右方向から施されたもの(49・51・52・53・54・55・56・57・58・60・63・64)と左方向から施されたもの(50・59・61)、下方向から施されたもの(53)がある。

45・46は緩やかな波状口縁をもち、波状部直下に垂下する貼付帯がある。47は平口縁である。45は器面に半截竹管による沈線文、垂下する貼付帯に半截竹管による縦位の押引文と下方向からの刺突文、口唇に右上低い角度からの沈線文が施される。46・47は無文地に細い鋭利な工具による縦位の沈線文が施される。48は口縁に山形突起をもち、肥厚気味の口唇は半截竹管により刻まれる。49～52は口唇に刺突文がある。49は口縁の小突起から垂下する貼付帯の左右には竹管状工具、口唇には半截竹管状工具による右方向からの刺突文が施される。50は左方向から半截竹管状工具、51・52は右方向からの竹管状工具による刺突である。53は口縁の小突起から垂下する貼付帯には下

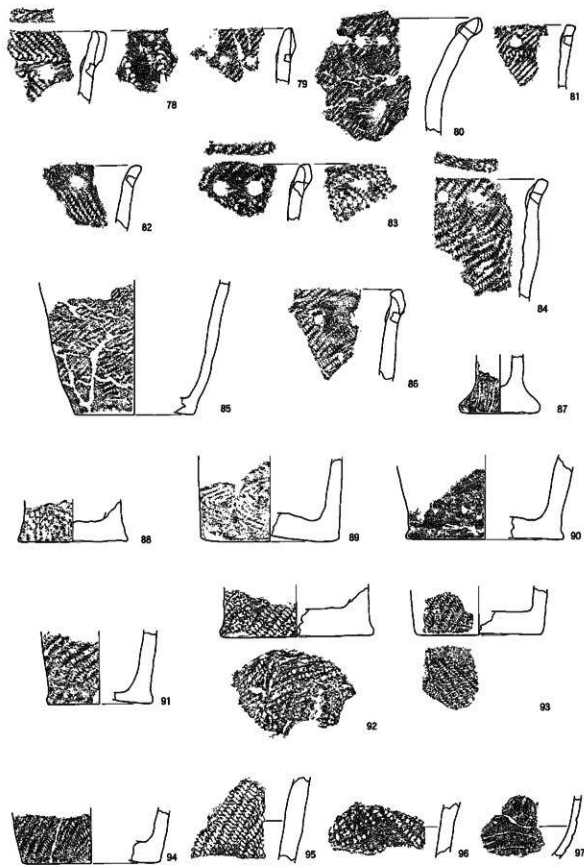


図VI-8-6 包含層出土の土器(3)



図VI-8-7 包含層出土の土器(4)





图VI-8-8 包含層出土の土器(5)

方向からの、口唇には右方向からの半載竹管状工具による刺突文が施される。口縁直下には口縁に沿って、篋状工具による右方向からの刺突文が廻らされる。

54～56・58は口唇と器面に右方向からの半載竹管(54・55)、竹管状工具(56)、篋状工具(58)による連続刺突文が施される。57は口縁に小さな山形突起をもち、大部分欠損しているが口縁部に横環する貼付帯をつけ、突起から垂下する山形の貼付帯でつないでいる。横環する貼付帯とその器面に接する部分には竹管状工具による刺突、垂下する貼付帯とその外側の器面に接する部分には細い棒状工具による刺突が加えられる。口縁直下の器面には、口縁に沿って半載竹管状工具による右方向から2列の刺突文が廻らされる。この刺突列と横環する貼付帯の間には部分的に同じ施工具による下方向からの2列の刺突文が認められる。

59は口縁に沿って竹管状工具による刺突文、口唇に竹管状工具と篋状工具による刺突文がある。60は頸部がくびれ口縁が外反する器形である。器面に横環する貼付帯をつけ、貼付帯とその上の器面に竹管状工具による刺突文を廻らせている。口縁には同じ工具による刺突文が2列施され、部分的に口縁の文様帯と頸部の文様帯が縦位の2列の刺突文により繋がれている。内面は磨かれている。61は2本の横環する貼付帯があり、貼付帯の間の器面には竹管状工具による刺突文が廻らされている。貼付帯には左方向からの半載竹管状工具による刺突文が施されている。62は口縁に小突起をもつ。口縁にタガ状に貼付帯をつけ、貼付帯およびその上下の器面と口唇に竹管状工具による刺突文が廻らされる。小突起と貼付帯は2列の刺突文により繋がれている。63は無文地の口縁に竹管状工具による刺突文が認められる。口唇には施工具不明の刺突文が施されている。64は器面に横環する貼付帯をつけ、貼付帯とその上の器面に右方向からの竹管状工具により刺突文を廻らせている。貼付帯直下の器面は同じ工具の曲面により横に調整され、沈線状を呈している。

地文はL R斜行縄文(48・54～56・59)、R L斜行縄文(49～52・60・62・64)、L Rの縄文が認められるもの(45・57・58・61)などがあり、内面にも縄文の施されるもの(48)もある。内面調整は横なでが多い。丹念な横なでにより平滑なもの(61)、磨かれているもの(57・60)もある。胎土には微量の白色粒と砂粒を含む。均質で粒が揃っているもの(45～47)、小礫を含むもの(48)、繊維を含むもの(53～58)、微量の石英粒を含むもの(57)などがある。黒色鉱物を含むもの(61)、黒色鉱物と小礫を含むもの(63)がある。焼成はおおむね良好で、45～48・53～58は堅く焼き締まる。

Ⅷ群b-3類：65～84は口縁に円形刺突文をもつ口縁部破片である。北筒式に相当する。

口縁に突起をもつもの(65～67・69・72)、肥厚帯をもつもの(65・68・69～80・83・84・86)、肥厚帯をもたないもの(66・67・81・82)があり、口唇・口縁に施文があるもの(65～72)と、口唇・口縁が地文のみもの(73～84・86)がある。

口唇・口縁の施文には、篋状工具によるもの(65～69)と半載竹管状工具によるもの(70～72)がある。篋状工具による施文では、右方向からの刺突文が口縁にあるもの(65～67・69)、口唇と口縁にあるもの(68)がある。半載竹管状工具による施文には、刺突文(70・72)と刻み(71)がある。刺突文が口唇に施されるもの(70)、口唇と口縁に施されるもの(72)がある。70は左方向から、72は右方向から施されている。口唇・口縁に地文のみ施されるものでは、口唇に縄文のあるもの(73・75・77・78・83・84・86)がある。

85は胴部～底部破片、87～94は底部破片である。底部が張り出すもの(87・88・90～92)と張り出さないもの(85・89・93・94)がある。87・88は底部に縦位の細い沈線が刻まれている。

地文には結束第1種(68・78・81・83・89)、結束第2種(65・72・73・74・75・80・85)、斜行縄文(69・70・71・76・77・79・82・84・86・91～94)などがある。また、内面にも縄文

表VI-8-2 包含層掲載土器一覧(1)

層番	分類	調査区	遺物 番号	層位	点数	包含・同一体など 調査区名と遺物番号、層位と点数、資料種別と点数 (前述と同じ部分以降は省略、掲載土器破片も含む)	備考
1	Ib-1	M-46-b	37	V層下位	1		陶片文
2	Ib-1	M-48-a	22	V層下位	1		陶片文、LR
3	Ib-1	M-62-d	11	V層	1	M52d7, VF(1)・2点	短筒灰文
4	Ib-1	M-42-a	38	V層下位	1	L41c36, VF(1), M38c13, V(1), 陶d8, V中(1), M39c8, (1), M40c8, V(1), 陶d4, VF(1), M41a16, 陶(1), 陶c9, 陶(1), M42a11, 陶(1), 陶c4, 陶(1), 陶c11, 陶(1), 陶d16, V(1)・13点	短筒文、陶片文
5	Ib-1	M-59-b	8	V層下位	1		短筒文、陶片文
6	Ib-1	M-41-d	22	V層下位	1	M38b12, 陶(4), 陶b16, VF(1), M41d7, 陶(1), 陶d8, 陶(3), 陶d14, 陶(1), 陶d18, 陶(3), 陶d22, 陶(2), 陶d23, 陶(2), M42a38, 陶(1), 陶a43, 陶(1), 陶a44, 陶(1), 陶b10, 陶(2)・23点	陶片文、RL
7	Ib-1	M-58-b	4	V層下位	2	M57a3, VF(3), M58a3, 陶(1), 陶a4, 陶(1), 陶a6, 陶(1), 陶b3, 陶(1), 陶b4, 陶(2)・3, 陶c5, 陶(1)・6, 陶c6, 陶(1)・7, 陶c12, V(2)・9, 陶c13, 陶(3)・1, 陶c16, 陶(2), 陶c17, 陶(2), 陶c18, V下(4), 陶c20, 陶(2), 陶d11, 陶(1), 陶d14, 陶(1), M59a1, V中(1), 陶a10, VF(1), 陶b5, 陶(2), 陶b6, 陶(1), 陶b9, 陶(2), 陶d3, 陶(2), N67c14, 陶(1), N59a5, 陶(1), 陶a6, 陶(1), 陶d1, 陶(2)・171点	陶片文
8	Ib-1	M-57-a	3	V層下位	1	M57a3, VF(1)・7, 陶d6, 陶(1)・3, 陶d7, 陶(8), 陶d11, 陶(1), M58d7, 陶(1), M59b10, VF(1), 陶b13, 陶(2)・45点	陶片文
9	Ib-1	M-46-a	31	V層下位	2	L41c37, VF(1), M41a13, V(1), 陶a15, VF(1), M42c14, V(1), M43a23, VF(1), 陶c4, 陶(1), M45d12, 陶(1), 陶d21, 陶(1)・10点	陶片文
10	Ib-1	N-46-a	26	V層下位	2		陶片文
11	Ib-1	N-45-d	30	V層下位	2	N46d26, VF(1), 陶d30, 陶(2)・5点	附加糸、口唇指環
12a	Ib-1	M-45-a	19	V層下位	1	M45a19, VF(2), M45c9, 陶(1), 陶d47, 陶(1), N46b23, 陶(5),	陶片文
12b		M-45-a	3	V層下位	2	陶c10, 陶上(1), 陶d29, 陶(1), 陶d33, VF(6), 陶d43, 陶(1), 陶d45, 陶(9)・30点	羽状陶片文
13	Ib-1	N-51-c	6	V層下位	1		口唇糸刺文、LR
14	Ib-1	M-38-c	8	V層下位	1	M38c13, V(2), M39b5, V中(1), 陶b7, VF(4), 陶b13, 陶(2), 陶b19, V(1), 陶b23, V底面(1), 陶b24, 陶(1), 陶d18, V(1), 14点	短筒刺文、LR
15	Ib-1	M-39-a	15	V層下位	1	M41d21, VF(1), N40a1, 陶(1)・4点	短筒文、線条状瓦
		M-39-a	19	V層下位	1		
16	Ib-1	N-50-d	11	V層下位	1		短筒文、内蓋LR
17	Ib-1	N-57-b	4	V層中位	2	M54b11, VF(1), N57b1, 蓋(1), 陶b2, 陶(1), 陶b3, V中(4), 陶b4, 陶(7), 陶b7, 陶(3), 陶b11, VF(1), 陶b12, V中(1), 陶b18, V(1), 陶c5, VF(1), 陶c6, 陶(1), 陶c8, 陶(1), 陶c10, 陶(5), 陶d14, V(1), O57a2, VF(4), 陶d1, 陶(1), O58a2, V(1)・37点	短筒灰文、口唇陶
18	Ib-1	M-39-d	12	V層下位	1		短筒灰文、口唇陶
19	Ib-1	M-38-d	9	V層中位	2	M38a2, VF(1), 陶b5, 陶(1), 陶d6, 陶(1), M39a12, V中(1), 6点	短筒灰文、口唇陶
20	Ib-1	L-41-c	37	V層下位	1	L41c37, VF(1), 陶c42, 陶(2), M38d11, 陶(1), M41d27, V(1), M42a14, VF(1)・7点	線条状瓦、短筒文
21	Ib-1	M-39-d	12	V層下位	1	L39b4, V中(1), 陶b13, VF(1), 陶b16, V上(1), M38b18, V中(1), M41d10, VF(1)・6点	線条状・陶片灰文
22	Ib-1	N-51-a	24	V層下位	1		短筒文
23	Ib-1	M-39-a	3	V層中位	2	L39b16, V上(1), M38b10, VF(2), M39a3, V中(1),	短筒灰文、短筒文
		M-39-a	12	V層中位	1	陶a9, VF(2), 陶a16, 陶(5), 陶a19, 陶(2), 陶b13, 陶(1),	
		M-39-a	15	V層下位	1	陶c8, 陶(3), 陶d6, V中(3), 陶d12, VF(1), 陶d14, V(1),	
		M-39-d	11	V層下位	1	M40b5, VF(1)・28点	
24	Ib-1	O-57-d	1	V層下位	1		RL
		O-57-d	5	V層下位	1		
		O-57-d	6	V層下位	1		

表Ⅵ-8-3 包含層揚載土器一覽(2)

階層	分類	用途	建物	番号	層位	点数	集合・同一体など		備考	
							調査箇所と調査番号	階位と点数		
							(調査箇所と調査番号、階位と点数、合計枚数)			
							(調査箇所と調査番号、調査土器番号を含む)			
25	Ib-1	M-39-d	11	V層下位	1	1	L39b6, VF(1), 同b10, VI(1), 同b13, VF(1), M39a3, V中(1)	5点	掘削文	
26	Ib-1	N-51-a	21	V層下位	1				掘削文, 記録文	
27	Ib-1	M-39-a	16	V層下位	1				掘削文	
28	Ib-3	N-50-c	14	V層下位	1				掘削文	
29	IIa-1	M-40-c	1	且層	1	1	L40c4, VF(1), M39d16, VI(1), M40a10, V中(1), 7点		R.L.R., 掘削で検出	
		M-40-c	5	V層下位	3					
30	IIa-1	N-45-d	27	V層下位	3	3	M45d14, VF(1), N45b19, 同(1), 同b21, 同(1), 同d11, 同(1), 同d10, VF(1), M43a1, 同(1), 同a3, V中(6), 同a7, VF(7), 同a9, 同(1), 同a10, 同(3), 同a11, 同(5), 同a12, 同(1), 同a18, 同(3), 同a21, 同(2), 同b3, 同(1), 同b7, 同(1), 同b14, 同(1), 同c8, 同(1), 同c12, 同(8), M53c9, 同(1), N42c1, 同(2), 同d3, 同(2), N52d7, 同(1), 95点		L.R.	
31	IIa-1	M-43-a	19	V層下位	3	3	M41b4, VI(1), M42c1, VF(3), 同c9, 同(2), 同d2, V中, 同d10, VF(1), M43a1, 同(1), 同a3, V中(6), 同a7, VF(7), 同a9, 同(1), 同a10, 同(3), 同a11, 同(5), 同a12, 同(1), 同a18, 同(3), 同a21, 同(2), 同b3, 同(1), 同b7, 同(1), 同b14, 同(1), 同c8, 同(1), 同c12, 同(8), M53c9, 同(1), N42c1, 同(2), 同d3, 同(2), N52d7, 同(1), 95点		L.R.	
32	IIa-1	M-58-c	11	且層	1	1	M58c11, VI(2), 3点		L.R.	
33	IIa-1	M-39-d	13	V層下位	1				R.L.R., 掘削で検出	
34	IIa-2	M-39-a	16	V層下位	1	1	L44b4, VF(1), M39a13, V中(1), 同b12, VF(1), 同b17, VI(1), 同d2, V中(1), M40a2, VF(2), 同b1, V中(1), M41a8, VF(2), M42d14, 同(1), M43b12, 同(2), M47d17, 同(1), M53c31, 同(1), N42d3, 同(2), 同d9, V中(2), N43a2, VF(3), 同a6, 同(1), 同a6, 同(3), N44d7, VI(1), N58b3, V中(2), 30点		L.R.	
35	IIa-2	M-52-b	12	V層下位	1				L.R.	
36	IIa-2	L-42-b	5	V層下位	1	1	M43a4, VF(1), 3点		R.L., L.R.	
		M-42-a	8	V層下位	1					
37	IIa-2	M-58-c	14	V層下位	1				L.R.	
38	IIa-2	N-57-d	3	V層下位	1	1	N57c3, V中(1), 同c4, 同(1), 同c6, VF(1), 同c9, 同(2), 同c14, 同(1), 同c16, VI(1), 同d1, V中(2), 同d3, 同(1), 同d6, VI(2), 同d7, VF(1), 同d9, 同(6), 同d12, 同(2), 同d13, VI(1), N58a4, VF(1), N59c1, 同(2), 37点		掘削第1層	
		N-57-d	12	V層下位	1					
39	IIa-2	O-56-d	6	V層下位	3	3	O56a6, VF(1), 同a7, 同(1), 同a8, 同(1), 同d2, V中(1), 同d6, VF(1), 7点		掘削第1層	
40	IIb	M-53-a	11	V層下位	1	1	M53a7, VI(4), 同a8, 同(1), 同d2, VF(2), 同d5, 同(4), 同d8, VI(1), 同d12, 同(1), M59a2, V中(2), 同a3, VF(8), 同a4, 同(8), 同a5, 同(1), 同a5, 同(2), 同a7, 同(1), 同a8, 同(2), 同b1, 同(5), 同b3, 同(1), 同b4, 同(4), 同d1, 同(1), 同d2, 同(2), 同d4, 同(1), N55d1, 同(1), N58d1, VF(1), N59a2, 同(1), 55点		掘削文 口部に掘文 L.R.	
41	IIb	M-46-b	24	V層下位	2	2	M46a21, VI(4), 同a24, VF(1), 同a27, 同(5), 同a28, 同(4), 同b2, V中(2), 同b16, VF(1), 同b19, 同(2), 同b24, 同(2), 同b35, 同(1), 同c7, 同(4), 同c18, 掘上(1), 同d1, V中(1), M47a4, VF(1), 同b11, 同(1), 同c18, 掘上(1), N46d1, VF(1), N47d17, 同(1), N48b5, 同(2), 55点		掘削文 口部に掘文 L.R.	
42	IIb	M-58-d	1	V層下位	1				口部に掘文, L.R.	
43	IIa	M-57-d	8	且層	1				ボタン状小突起	
44	IIa	M-49-d	7	V層下位	1	1	L42c13, V中(1), M42b8, VF(1), 同c7, 同(1), M43a28, VI(1), 同b9, VF(1), 同c3, 同(1), M44b3, V中(1), 同b6, 同(4), 同b16, VI(1), M46a5, VF(1), N43d4, 同(1), N46a7, 同(1), O47d11, V(1), O48a4, V中(1), 18点		掘削文 R.L.	
45	IIIb-2	M-46-d	19	V層下位	1	1	M46b17, VF(1), 同b35, 同(1), N46d25, 掘上(1), 6点		掘下する掘削層	
		M-46-a	20	V層下位	1				掘削文, 記録文	
46	IIIb-2	N-45-b	2	V層下位	1				掘下する掘削層	
47	IIIb-2	M-38-c	11	V層下位	1	1	M38c2, VF(1), N39a2, 同(1), 6点		掘下する掘削層 記録文	
		M-39-b	27	V層下位	1					

表VI-8-4 包含層掲載土器一覽(3)

調査	分類	調査区	遺物 番号	層位	高さ	調査・同一層位など 調査区名と遺物番号、層位と高さ、合計枚数		備考
						(調査区と同一部分には同と省略、掲載土器破片を含む)		
		M-46-d	3	V層中位	2			
48	Ⅱb-2	M-54-b	16	V層下位	1	N54b7, VF(1)	2点	口縁部、L.R
49	Ⅱb-2	M-48-a	13	盛り上げ	1			落下する貼付帯
		N-47-c	7	盛り上げ	1			割欠文、L.R
50	Ⅱb-2	M-45-d	1	V層中位	1			口縁部、R.L
51	Ⅱb-2	M-48-a	9	V層下位	1			口縁部、R.L
52	Ⅱb-2	M-46-c	16	V層下位	1			口縁部、R.L
53	Ⅱb-2	M-52-b	10	V層下位	1	M52d8, VF(1)	2点	突起、貼付帯、割欠
54	Ⅱb-2	N-45-d	12	V層下位	1			押引文、L.R
55	Ⅱb-2	O-54-a	1	V層下位	1			連続割欠文、L.R
		O-54-a	4	V層下位	1			
56	Ⅱb-2	N-43-b	1	V層下位	1			割欠文、L.R
57	Ⅱb-2	M-43-a	13	V層下位	1	M42a24, V中(1), 同a35, 同(1), N42c1, VF(1), O47d8, 同(1)		小突起、貼付帯
		M-43-a	24	V層下位	1	O48a8, V中(1)	7点	割欠文
58	Ⅱb-2	M-45-b	6	V層下位	1			貼付文
		M-46-c	15	V層下位	1			連続割欠文
59	Ⅱb-2	M-45-b	17	V層下位	1			割欠文
		M-46-d	45	V層下位	1			L.R
60	Ⅱb-2	M-44-b	4	V層中位	1			貼付帯、割欠文
		O-48-a	6	V層下位	1			
		O-48-a	8	V層下位	1			
61	Ⅱb-2	N-44-a	4	V層中位	1	N44d16, V(1)	3点	貼付帯、割欠文
		N-44-a	6	V層中位	1			内面割欠文、L.R
62	Ⅱb-2	M-46-a	13	盛り上げ	1	H-1-706, 墓土上(1), 同855, 同(1), 同1001, 同(1)		小突起、貼付帯
		M-46-d	4	V層下位	1	M45b1, VF(1), M46a28, 同(1), 同a38, 同(1), 同b5, 同(1)		口縁部割欠文
		M-46-d	11	V層下位	1	同b15, 同(1), 同b18, 同(1), 同b29, 同(1), 同b31, 同(1), 同b35, 同(2), 同c37, 同(2), 同c7, 同(1), 同c16, 同(1), 同c23, 同(1), 同d19, 同(1), 同d50, VF(1), M47a22, 同(1), M48a14, 同(1), M51c17, 同(1), M52b3, 同(1), N44d8, 同(1), N45b6, 同(1), 同d26, VF(1), N46a8, 同(1), 同a24, 同(1), 同c13, 同(1), N47d6, V(1), 同d9, 同(1), 35点		割欠文、L.R
63	Ⅱb-2	M-53-d	22	V層	1	O47d5, VF(1)	3点	口縁部、割欠文
		N-54-a	5	V層下位	1			
64	Ⅱb-2	M-46-d	1	V層中位	1	M46b23, VF(1), M48a16, 同(1), 高さ1, (6), 10点		貼付帯、連続割欠文
		N-44-a	1	切取面	1			沈没文、L.R
66	Ⅱb-3	N-43-a	12	V層下位	1			小突起、口縁部
		N-44-d	1	V層下位	1			連続割欠文、L.R
66	Ⅱb-3	N-47-c	3	V層下位	1	N47c14, VF(1)	3点	小突起、押引文
		N-47-c	5	V層	1			内面L.R
67	Ⅱb-2	M-44-c	5	切取	1			口縁部、連続割欠
		N-44-d	13	V層中位	1			
68	Ⅱb-3	M-46-b	25	V層下位	1			口縁部、連続割欠
69	Ⅱb-3	M-51-a	6	V層下位	1	M47c15, 墓土(1), M51a6, VF(1)	3点	口縁部、連続割欠
70	Ⅱb-3	M-43-d	7	V層下位	1			口縁部、連続割欠
71	Ⅱb-3	M-44-b	7	V層下位	1	L41c34, VF(1), M43c2, 同(1), M44c5, 同(1)	4点	口縁部、口縁部
72	Ⅱb-3	N-42-a	7	V層中位	1			口縁部、連続割欠
72	Ⅱb-3	M-47-b	28	V層下位	2	N46d15, 墓土(1), N47a11, VF(1)	6点	口縁部
		M-47-b	38	V層	1			内面割欠文
		M-47-b	42	V層下位	1			継ぎ目2層
74	Ⅱb-3	M-51-a	2	V層中位	2	M54a7, VF(1), 同a21, 同(1), N61b8, 同(1)	5点	口縁部
75	Ⅱb-3	N-47-d	8	盛り上げ	1	O47a12, VF(2)	6点	口縁部
		N-47-d	21	V層	2			内面割欠文
		N-48-a	16	V層下位	1			継ぎ目2層
76	Ⅱb-3	N-45-d	2	V層	1			口縁部

表VI-8-5 包含層掲載土器一覽(4)

器群	分類	器型名	通体 形状	胎土	底面	器面・同一器面など 調査区名と器物番号、器位と底面、合計枚数		備考
						(器位と同じ部分は同一器位、掲載土器枚数を示す)		
77	Ⅳb-3	N-48-b	15	V腹下位	1	M45d20, VF (1), N48a18, 陶 (1), 陶b9, 陶 (1), 4点	口縁肥厚	
78	Ⅳb-3	M-44-a	2	V腹中位	1		口縁肥厚	
79	Ⅳb-3	M-44-c	9	腹り上付土	1	M45a17, VF (1), M46a33, 陶 (1), 陶b37, 陶 (1), 陶c44, 陶 (1),	口縁肥厚	
		M-44-c	11	V腹下位	1	N45c18, 甗上 (1), N50d5, VF (1), 3点	円形斜交文, L R	
80	Ⅳb-3	M-47-a	5	V腹下位	1	M46c4, VF (1), 陶c23, 甗上 (1), N46b4, VF (1), 陶d6, 陶 (1),	口縁肥厚	
		M-47-b	2	V腹下位	1	N47a8, 陶 (1), 7点	甗次第2層	
81	Ⅳb-3	N-57-c	19	V腹下位	1		甗次第1層	
82	Ⅳb-3	N-47-d	3	V腹下位	1	N47c7, 甗上 (1), 陶d3, VF (1), 3点	円形斜交文	
83	Ⅳb-3	M-51-c	12	V腹下位	1	M43b14, VF (1), M47b26, 甗上 (1), M51c4, V中 (1),	口縁肥厚	
						陶d2, 陶 (1), 5点	甗次第1層	
84	Ⅳb-3	N-47-d	21	V腹	1		円形斜交文, L R	
85	Ⅳb-3	N-47-c	10	V腹下位	3	O48a1, VF (1), 陶b6, 陶 (1), 9点	底面直立	
		N-47-c	11	V腹下位	1		甗次第2層	
		N-47-c	16	V腹下位	2			
		O-47-d	1	V腹下位	1			
86	Ⅳb-3	M-47-b	10	V腹下位	1	H-2-137, 甗上 (1), M46a33, VF (1), 陶a39, 陶 (1),	口縁肥厚	
						陶b10, VF (1), M47a6, VF (1), 陶9, 陶 (1), 陶b10, 陶 (1),	円形斜交文, L R	
						陶17, 陶 (1), 陶19, 陶 (1), 陶25, 甗上 (1), 陶35, VF (1),		
						陶d14, 陶 (1), M48a19, 陶 (1), 陶b9, 陶 (1), 陶c6, 陶 (2),		
						M51c4, V中 (1), N46d39, VF (1), N47a5, 陶 (1), 陶b, 陶 (2),		
						陶15, 陶 (1), 陶17, 陶 (1), 陶b2, 陶 (1), N49d5, 陶 (1), 26点		
87	Ⅳb-2	N-48-b	30	V腹下位	1		底面傾出す, 沈線文	
88	Ⅳb-2	O-48-a	4	V腹下位	1	3点	底面傾出す, 沈線文	
		O-48-a	5	V腹下位	2		L R	
89	Ⅳb-2	N-47-a	5	V腹下位	1	N46b17, VF (1), N46d13, 甗上 (1), 陶35, VF (1), N47a4, 陶 (1),	底面直立	
		N-47-a	25	腹り上付土	1	陶5, 陶 (1), 陶6, 陶 (1), 陶9, 陶 (1), 陶15, 陶 (4), 陶17, 陶 (1),	甗次第1層	
		N-47-a	30	V腹下位	2	陶18, 甗上 (1), 陶19, 甗上 (1), 陶24, VF (1), 陶b8, 陶VF (1),		
						N47d6, V (1), 22点		
90	Ⅳb-3	M-43-b	4	V腹下位	1	M42b5, VF (1), 陶c1 (1), 陶d8, 陶 (1), M48a11, 陶 (1), 5点	底面傾り出し気味	
91	Ⅳb-3	M-50-c	6	V腹下位	1	M50c2, V中 (1), 3点	底面傾り出し気味	
		M-50-d	5	V腹下位	1		L R	
92	Ⅳb-3	N-53-d	14	V腹下位	1	M51a5, VF (1), 陶d4, VF (1), 陶19, VF (1), 4点	底面傾り出し気味	
93	Ⅳb-3	N-50-b	4	V腹下位	1		底面直立	
94	Ⅳb-3	N-52-b	15	V腹下位	1	3点	底面直立	
		O-67-a	10	V腹中位	1			
95	Ⅳa	O-55-a	10	V腹	1	O55a4, VF (2), 3点	L R	
96	Ⅳa	N-54-d	1	V腹中位	1		L R, R L	
97	Ⅳb	N-43-a	8	V腹	2	N45a5, V (1), 陶b, V (1), 4点	5字状沈線文	

の施されるもの(65・66・69～72・74～78・83)、底面にも縄文の施されるもの(92・93)もある。これらの内面は横なでにより調整されている。胎土には微量の淡黄白色粒と砂粒を含み、加えて、小礫を含むもの(69)、礫を含むもの(78)がある。

縄文時代後期の土器 (図VI-8-8/表VI-8-5/図版97)

縄文時代後期の土器は80点(0.7%)出土した。後期の土器のうち、Ⅳ群a類が76点(95%)、Ⅳ群b類が4点(5%)である。

Ⅳ群a類：95・96はタブコブ式に相当する。95は器面にL R斜行縄文が施される。96は器面にR LとL Rの縄文が認められる。いずれも胎土には小礫を多く含み、割れ口はパイ状を呈する。焼成は良好で堅く焼き締まる。

Ⅳ群b類：97は手稻式に相当する。R L斜行縄文を施した器面に細い施文具により沈線文を施し、沈線で区画された部分が擦り消されている。

(鎌田)

## (2) 石器

## 1) 剥片石器

米原4遺跡B地区の包含層で出土した石器類は19,523点出土している。剥片石器の占める割合の内訳はフリイクが6,046点(30%)と最も多く、ついで石槍・ナイフ418点(2.1%)、Uフリイク288点(1.4%)、Rフリイク259点(1.3%)、石鏃253点(1.2%)、スクレイパー97点(0.4%)、石核60点(0.3%)、つまみ付きナイフ42点(0.2%)、石鏃33点(0.1%)などの順で多い。おもに使用される石材としては9割以上が黒曜石である。原産地別に見ていくと赤井川産の黒曜石が最も多く、ついで肉眼観察により十勝三股や白滝産の剥片石器がみられる。1割弱は珪質頁岩が占める。稀なものでは粘板岩、メノウ、泥岩製のものが1点ずつ出土する。赤井川産の黒曜石が多いのは本遺跡と時期を同じくする米原3遺跡と共通する。石槍・ナイフは418点出土しているがそのうち160点(38.2%)が被熱し破損する。

石鏃(図VI-8-5、9、13、15/表VI-8-7/図版98)

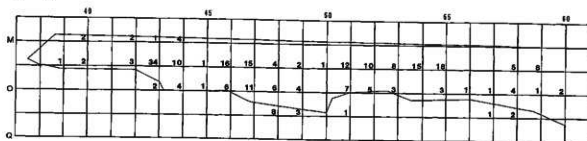
石鏃は包含層から253点出土している。うち28点を図示した。形態は柳葉形～五角形に近いもの、平基で三角形～凹基のもの、菱形や未製品、有基鏃とパラエチーに富む。形態別の分布図を見ていくと柳葉形のは調査区の西側に比較的多く分布し、平基のもので三角形～凹基のものは調査区西側の沢状地形と調査区中央の台地で東側の尾根状のところから多く出土する。未製品や有基鏃は遺構が多く確認されたところと重複する形で分布する。

1は粘板岩製。層状の摂理に沿い、薄く板状に剥がれている粘板岩をわずかに調整して作り出している。先端部を欠損する。2、3は三角形のもの。2は一次剥離面を残す。二次調整は必要最小限しか加えられていない。4～8は基部が弱く凹むもの。三角形のものを含め、この形態の石鏃は赤井川産の黒曜石製のものは見られない。4、7は被熱により表面が白濁し、二次調整が明瞭に観察できない。4は両面に一次剥離面が見られる。7は表面の白濁化が著しい。先端部を欠損する。5はメノウ

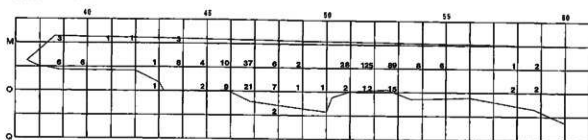
表VI-8-6 層別別出土石器等一覧

分類	I層	II層	V層	V層			VI層	VII層	掘削 層木	表掘 跡土	計	
				上位	中位	下位						
剥片石器	石 鏃	1	7	2	32	179	13	15			253	
	石 槍・ナイフ	1	8	17	2	61	293	10	25	1	418	
	石 鏃				4	4	21		4		33	
	つまみ付きナイフ	1	1	1		12	24		3		42	
	スクレイパー		2	2		17	58	2	12		97	
	ピエス・エスキュー					2	8				10	
	R フリイク			3	2	33	189	10	21		1	259
	U フリイク	1		1		49	211	11	13		2	288
石 核		1	1		8	48	2				60	
剥 片	フ レ イ ク	5	46	50	28	551	4302	651	306	8	193	6046
磨製石器	石 斧	1	5	22	1	93	1334	131	91		1	1679
礫石器	た た き 石		3	1	1	13	119		7	7		151
	す り 石		1	3		12	131		12		2	161
	北 海 道 式 石 冠		3			8	121	1	15			148
	砥 石			2		3	92	1	5		1	106
	倉 石			1	1	2	52	2	2			60
	備 平 打 製 石 器						2					2
礫・礫片	礫・礫片	14	102	62	8	602	3171	120	338		75	4492
	礫・礫片(被熱)	7	26	204	5	362	3686	265	357		3	4915
	礫・礫片(凝灰岩)	1	2	2		128	162		3			298
土製品	土 製 品			1			3	1				5
	焼成粘土塊						1					1
合 計		32	207	375	52	1992	14208	1127	1229	9	285	19523

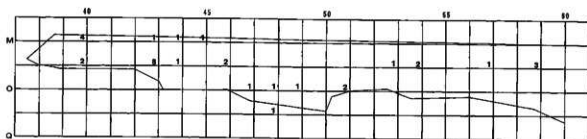
石 鏃



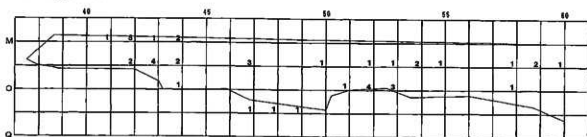
石槍・ナイフ



石 鏟



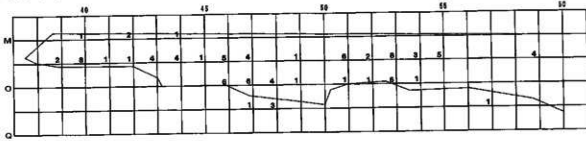
つまみ付ナイフ



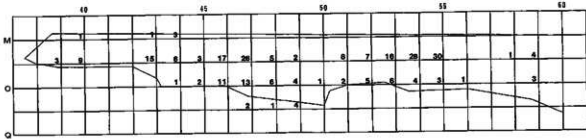
図VI-8-9 包含層出土石器等分布図(1)



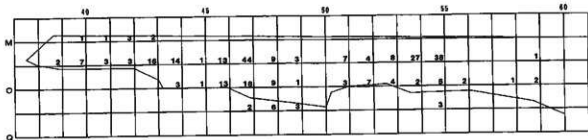
## スクレイパー



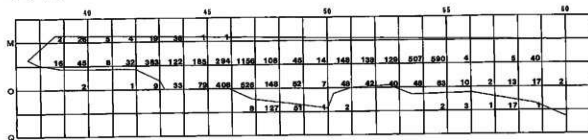
## Rフレイク



## Uフレイク

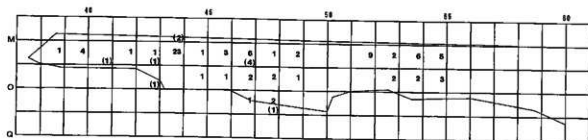


## フレイク

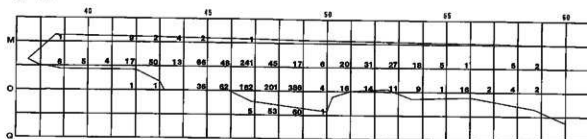


図VI-8-10 包含層出土石器等分布図(2)

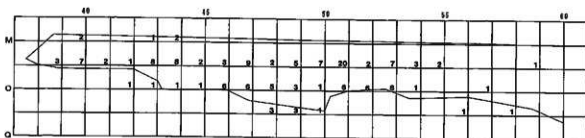
石核 (ピエス・エスキュー)



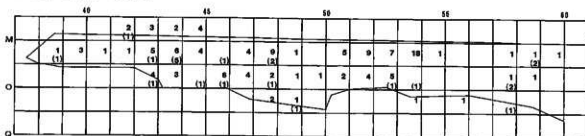
石 斧



たたき石

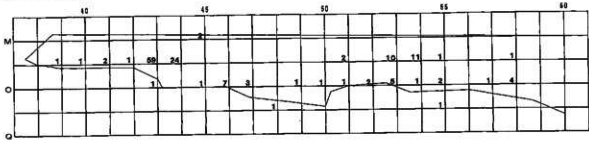


すり石 (断面三角形)

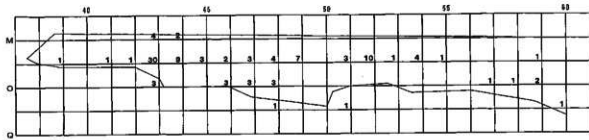


図VI-8-11 包含層出土石器等分布図(3)

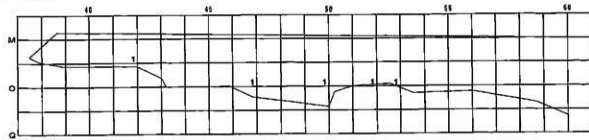
北海道式石冠



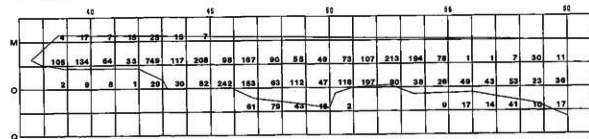
砥石



土製品

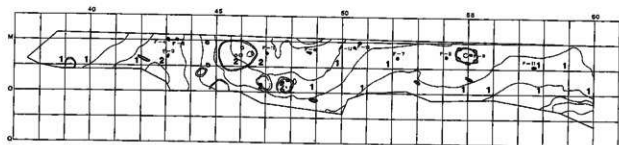


礫・礫片

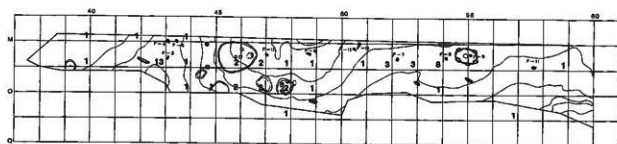


図VI-8-12 包含層出土石器等分布図(4)

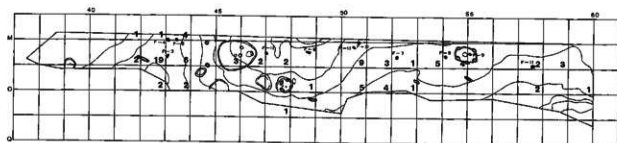
石鏃 (柳葉形)



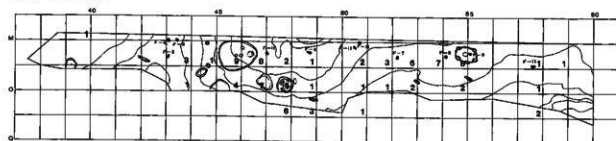
石鏃 (菱形・未製品)



石鏃 (三角形~凹基)

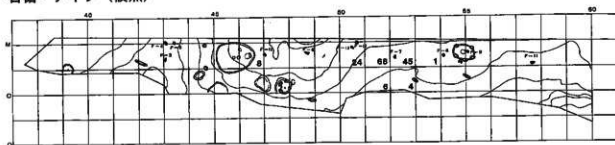


石鏃 (有基鏃)

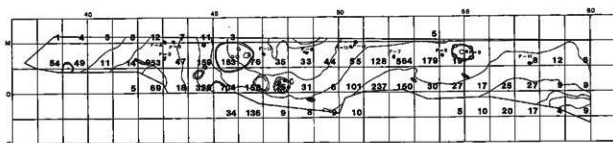


圖VI-8-13 包含層出土石器等分布圖(5)

## 石槍・ナイフ (被熱)



## 礫・礫片 (被熱)



図VI-8-14 包含層出土石器等分布図(6)

製。一次剥離面を残す。二次調整が雑であり、縁辺が歪む。先端部は鋭利である。

10～14は、柳葉形から五角形に近いもの。10は二次調整が非常に丁寧なもの。先端部は鋭利に作り出される。12は先端部が欠損する。二次調整は非常に丁寧であり整った柳葉形のもの。11、13、14はやや五角形に近いもの。二次調整は丁寧である。13は先端部が欠損する。14は先端部が平坦になるように調整されている。15～19は菱形もしくは有茎礫の未製品と考えられるもの。15、16は二次調整が雑なもの。先端部が明瞭に作り出されていない。16は一次剥離面が残る。双方共に基部が明瞭ではない。17、18は剥片に二次調整が僅かに見られるもの。18は礫皮表面を残す。19は菱形のもの。二次調整はやや粗雑である。20～28までは有茎礫。20は今回出土した中で最小のもの。一次剥離面を残す。先端部は鋭利である。21、23は二次調整がやや粗雑でやや弱いかえし状の張り出しがあるもの。24は泥岩製。一次剥離面を残し、調整は粗雑なもの。25は剥片の背面に丁寧な二次調整が施されているもの。基部は腹面からも二次調整を施し明瞭に作り出している。26～28は縦に長い有茎礫。28は先端部と張り出しの部分が欠損している。

石槍・ナイフ (図VI-8-9、14、16、17 / 表VI-8-7、8 / 図版99)

石槍もしくはナイフは包含層から418点出土している。うち27点を図示した。定型的な剥片石器としては最も多く出土しているものである。形態としては茎が明瞭な槍型のもの、菱形のもの、両面調整でナイフと考えられるものなどがある。特異なもので石錐と複合するものがある。

調査区全域でその分布を見ていくと、調査区中央の台地から尾根状のところに多く出土する。

この石器は被熱し破損しているものが多く、調査区M-50～M-53グリッドに集中して出土して

いる。被熱の状態も、石器にモザイク状にひびが入る割れ方である。この割れ方は石槍・ナイフに分類される石器に限定されており、非常に特徴的である。他にも被熱している黒曜石製の剥片石器は出土しているが、白く濁ったような表面になるものが殆どである。このような遺物の状況は、一時的に同じ温度、熱し時間などの同じ環境下で化学変化があったものと考えられる。これは調査区南東側、川に向かって緩く傾斜する斜面の稜線上に位置する。同じグリッドと重複する位置で被熱した礫片が多く出土している。またおなじ区域にF-7が検出されているが、焼土自体からは剥片石器が出土しておらず、この焼土との直接的な関連は見受けられなかった。

29～39、43～47は有茎鏃。29～39は茎が明瞭で二次調整が丁寧なもの。29、30は茎の下端が二次調整により丸みを帯びるもの。先端部は鋭利に作られている。33は張り出し部分を長く突出するように作り出しているもの。36は一次剥離面を残す。37は先端部を欠損する。37、38は張り出しの調整は左右対称になっていない。39は比較的大型のもの。先端部を破損する。40、41は縁辺に不規則で細かな剥離がめぐる。ともに先端部は鋭利ではない。41は微細な潰れ状の剥離により両側面の稜線が歪む。42は柳葉形をしたもの。器幅が最大になる所から先端部にかけては、両側面の稜線が不規則で細かな剥離により歪む。先端部にかけて欠損する。43～47は茎がやや不明瞭で二次調整が粗雑なもの。43は一次剥離面を残し、先端部は鋭利に作り出されていない。44は礫皮表面を残す。先端部は丸みを帯びる。45は張り出す部分から、先端部にかけての二次調整が丁寧で鋭利に作り出されている。47は二次調整が粗雑なもの。48～50、53、54は菱形のもの。48、49は先端部に相当する部分に丁寧な二次調整が施され、尖る。48は被熱しモザイク状のひびが入る。熱を受け本来の厚さより膨張している。50は剥片の側縁を両面から二次調整を施し石槍もしくはナイフの形をつくる。両面に一次剥離面を残す。51は二次調整が粗雑で歪なもの。52は剥片の背面に丁寧な二次調整が施される。背面は両側縁から先端部にかけて調整が施される。一次剥離面を残す。先端部は石鏃と複合すると考えられる。53は二次調整があまり施されていない。一次剥離面と礫皮表面を残す。54は剥片の背面にやや粗雑な二次調整が施される。腹面は縁辺にのみ二次調整が施され菱形にしている。一次剥離面を残す。55は被熱しているもの。破損品。モザイク状のひびが入る。先端部に礫皮表面が残る。

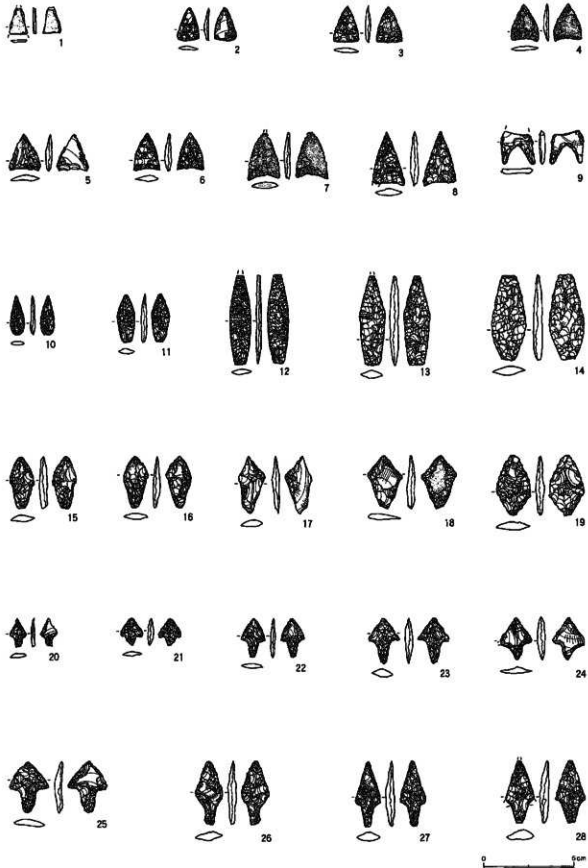
#### 石鏃 (図VI-8-9、17/表VI-8-8/図版99)

石鏃は33点出土している。うち6点を図示した。剥片に刺突部を作り出すものと棒状のものがある。分布をみると台地の尾根状のところに散漫に分布する。

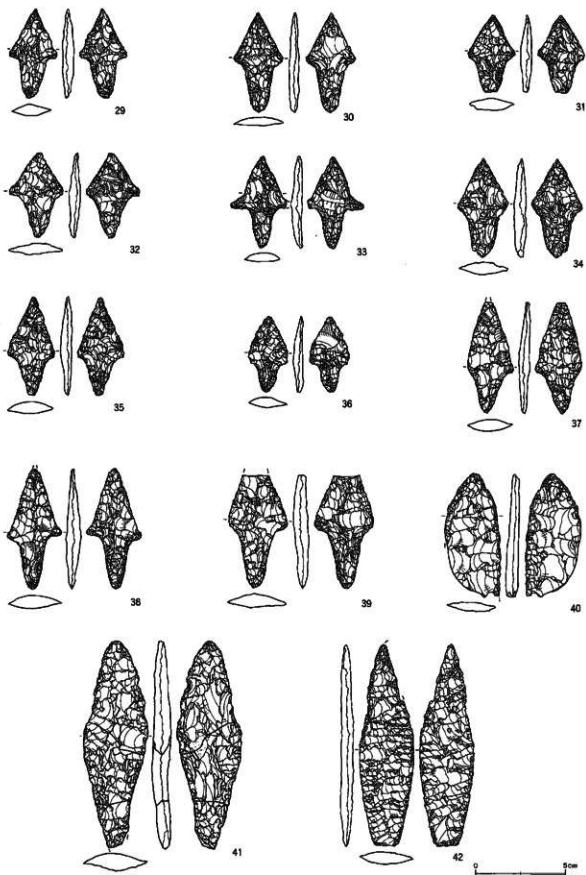
56～59は剥片に刺突部を作り出すもの。背面、腹面両方から二次調整を施し刺突部とする。58は礫皮表面を残す。60、61は棒状のもの。双方共に一次剥離面を残す。60は礫皮表面を残す。上端には潰れたような階段状の剥離痕がある。61は剥片の両面に粗雑な二次調整を施し棒状の石鏃を作り出す。刺突部の調整は丁寧である。

#### つまみ付ナイフ (図VI-8-9、18、19/表VI-8-8/図版99、100)

つまみ付ナイフは包含層から42点出土している。うち19点を図示した。分布を見ていくと調査区西側の沢状地形から西端のやや低い台地に比較的多く出土する。この器種は頁岩製のものが比較的多い。62～64まで片面全面加工のもの。62、64は珪質頁岩製で63は黒曜石製。62は剥片の背面全面に二次調整が施される。下端と腹面の左側縁に更に調整が加えられ刀部とする。つまみ部分は腹面からも調整が加えられるが歪である。63はつまみ部のみ背面からも挟入する調整が加えられている。背面下端に主なる刀部がある。64は背面右側縁を刀部とする。つまみ部分は腹面からも弱く挟入する調整があるが、明瞭ではない。下端は尖っており、石鏃に転用しようとした可能性がある。65、67は背

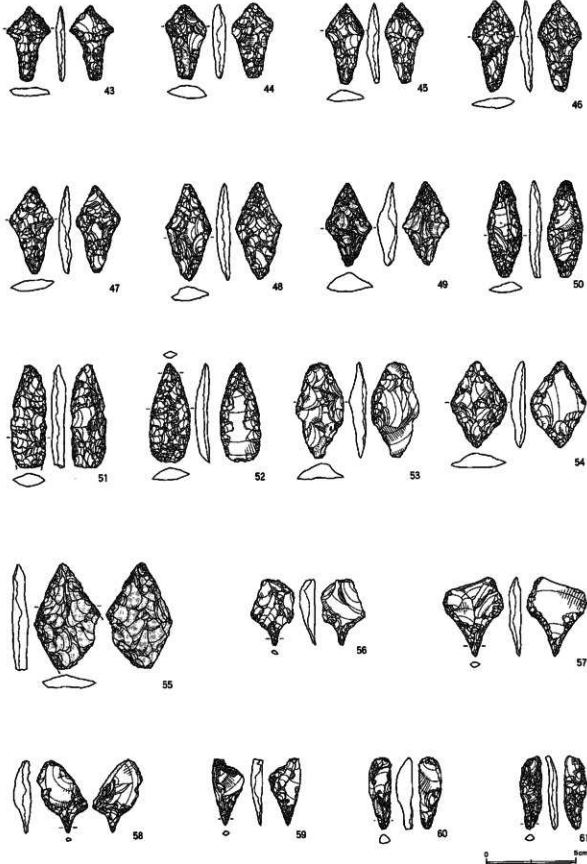


図VI-8-15 包含層出土の石器(1)

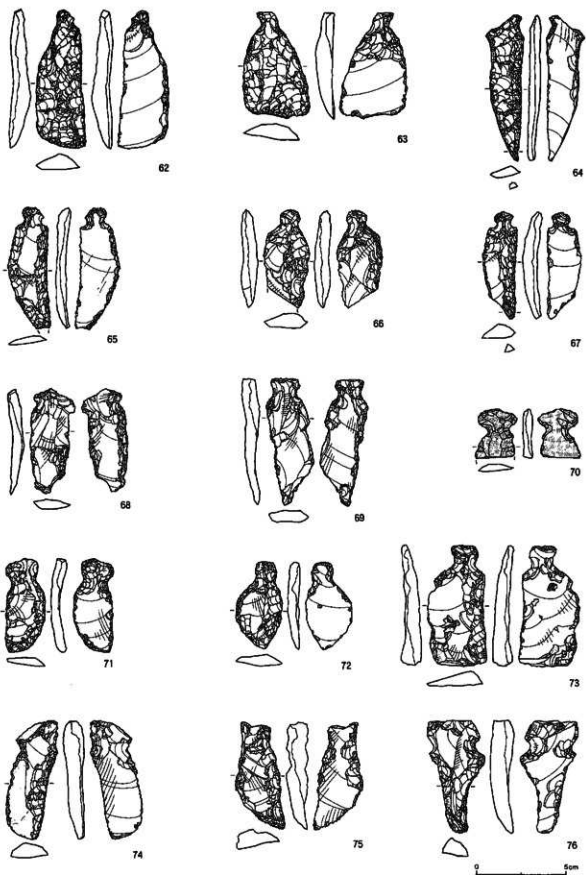


図VI-8-16 包含層出土の石器(2)

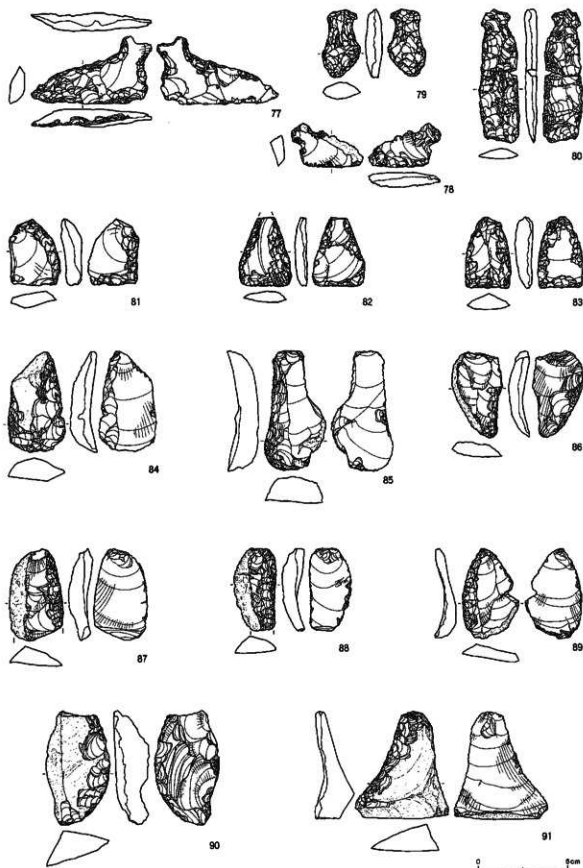




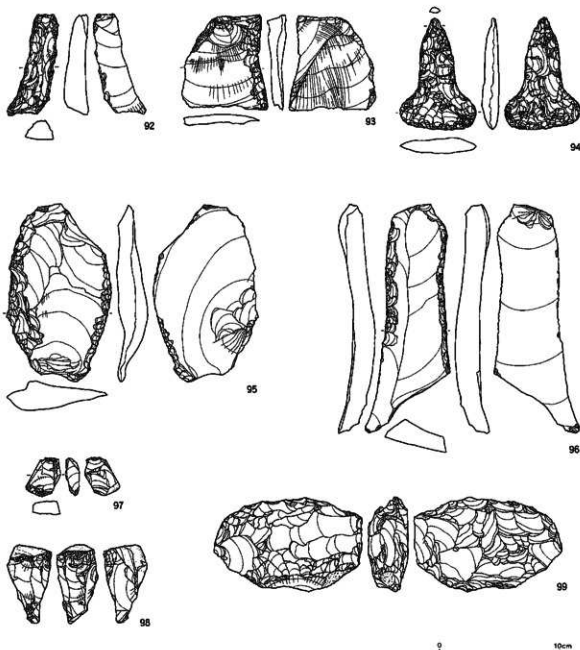
図VI-8-17 包含層出土の石器(3)



図VI-8-18 包含層出土の石器(4)



図VI-8-19 包含層出土の石器(5)



図VI-8-20 包含層出土の石器(6)

面の両側縁を刀部とするもの。65は腹面の左側縁からも調整が加えられる。下端を欠損する。67は下端が尖っており石錐と複合せようとした可能性がある。66は両面の側縁に二次調整を施し刀部とする。67は先端部が尖っており、石錐に転用しようとした可能性がある。68、69は剥片の腹面両側縁に刀部が作られているもの。68は腹面右側縁の二次調整が粗雑である。この側縁は背面からも僅かに調整が施される。69は腹面右側縁が黒曜石の礫皮表面を持つ摂理により破損している。70は被熱しているもの。71～74は剥片の側縁を刀部とするもの。75は背面の先端部に両側縁からの調整が施され、先端が尖る。76は剥片の稜線が残る背面の両側縁を刀部とする。つまみ部は両面から挟入する調整を施している。77、78は横型のもの。77は刀部に細かい刃潰れ状の剥離がみられ

る。78は剥片の腹面に刀部を作り出す。腹面には礫皮表面を残す。79、80は両面加工のもの。  
スクレイパー (図VI-8-10、19、20/表VI-8-9/図版100)

スクレイパーは包含層から97点出土している。うち16点を掲載する。分布をみていくと、調査区中央の南西側に張り出す尾根状のところに偏りがある。これは遺構が多く確認されるところと重なる。

81は剥片背面の左側縁に刀部が作られている。腹面からも二次調整が施されるが素材剥片の整形と思われる。82は剥片の上端を除く腹面縁辺に刀部が作られる。背面からも僅かに二次調整が施される。83は背面を主なる刀部とする。他は82とほぼ同じである。84から91は礫皮表面を残している。87、88は背面の左側縁を刀部とする。89は背面の右側縁を刀部とする。90、91は礫皮表面を残す剥片の1縁辺に二次調整を施し刀部とする。92は背面全面に二次調整が施される。背面の両側縁を刀部とする。93は剥片の腹面左側縁を刀部とする。94は両面加工のもの。上端は石錐と複合している。95、96は頁岩製で比較的大型のもの。剥片背面の両側縁を刀部とする。

ピエス・エスキュー (図VI-8-11、21/表VI-8-9/図版100)

ピエス・エスキューは包含層から10点出土している。うち1点を掲載する。97は断面が凸レンズ状となる。剥片の上、下端に階段状の剥離痕がある。

石核 (図VI-8-11、21/表VI-8-9/図版100)

石核は包含層から60点出土している。うち2点を掲載する。分布をみていくと調査区中央の台地上に多く出土している。98は上面と黒曜石の摂理がみられる面に礫皮表面が残る。99は肉眼観察により赤井川産の黒曜石とみられる。球果が多く摂理となって無数に層状になる。一部に礫皮表面を残す。

## 2) 磨製石器

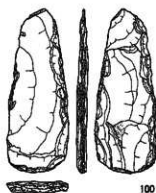
石斧 (図VI-8-11、22、23/表VI-8-9/図版101)

石斧は包含層から1,679点出土している。うち12点を掲載する。包含層出土石器等総数の8.6%を占める。分布をみていくと、H-1、3が検出された周辺に濃く分布する。石斧はその破片や破損品、未製品が多く、また被熱した石斧も多い。破片や未製品が多いのは、遺構の床面から出土する遺物と同様で、これらは身近な所に廃棄されたものと考えられる。石斧のほとんどが素材となる礫に打ち欠きや敲打調整を施してから研磨し石斧としている。擦り切り痕のあるものは石斧片で1点のみ出土している。

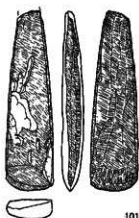
100は層状に剥離する片岩の縁辺に打ち欠きを施し石斧の形を作っている。未製品と考えられる。101、102は整形のもの。102は表面に細かな傷がある。刀縁に傷は見られない。103は基部の上端を欠損する。104は小さなもので実用に不向きと考えられる。105は被熱し破損している。表面を打ち欠きによる整形後、研磨している。刀縁左端に僅かに剥離痕がある。106は打ち欠きによる整形後、敲打調整により作り出している。僅かに研磨した痕跡が見られる。製作途中に破損したものと見られ、刀部や基部の調整には及んでいない。107は未製品が破損したものの、扁平で縦長の礫に打ち欠きを施しただけのもの。ほぼ中央から2つに折れている。108は全面に研磨が施されるもの。基部は尖る形になる。109はやや厚みのある縦長の扁平礫に打ち欠きと敲打調整が施されている未製品。被熱する。110は基部が尖るもの。刀縁は使用によるものと考えられる剥離がみられる。111は大型のもの。破損しているが今回出土した石斧の中で最も大きいものである。被熱しており表面の剥落は著しい。煤のようなものが付着している。

## 3) 礫石器

定型的な礫石器は包含層から627点出土している。包含層出土石器等総数の3.2%である。剥片石器に比べその出土量は少ない。内容としては住居の床面や付属ピットから出土したものと同様のたき



100



101



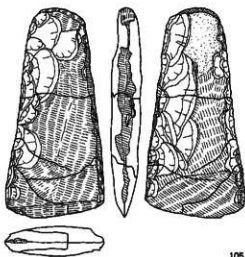
102



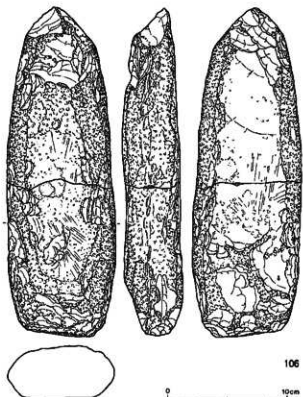
103



104



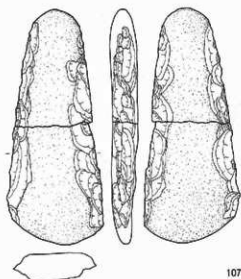
105



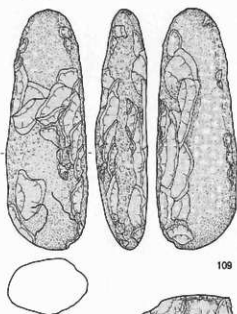
106

0 10cm

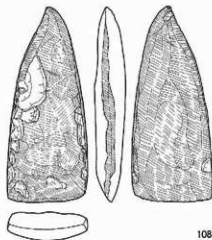
図VI-8-21 包含層出土の石器(7)



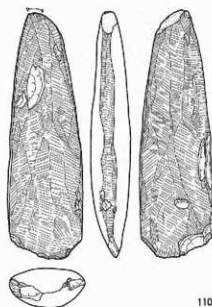
107



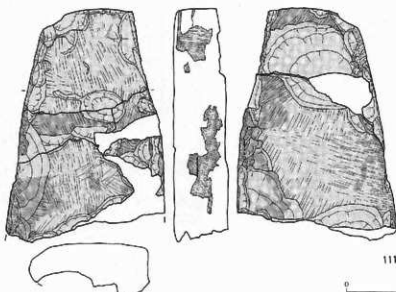
109



108



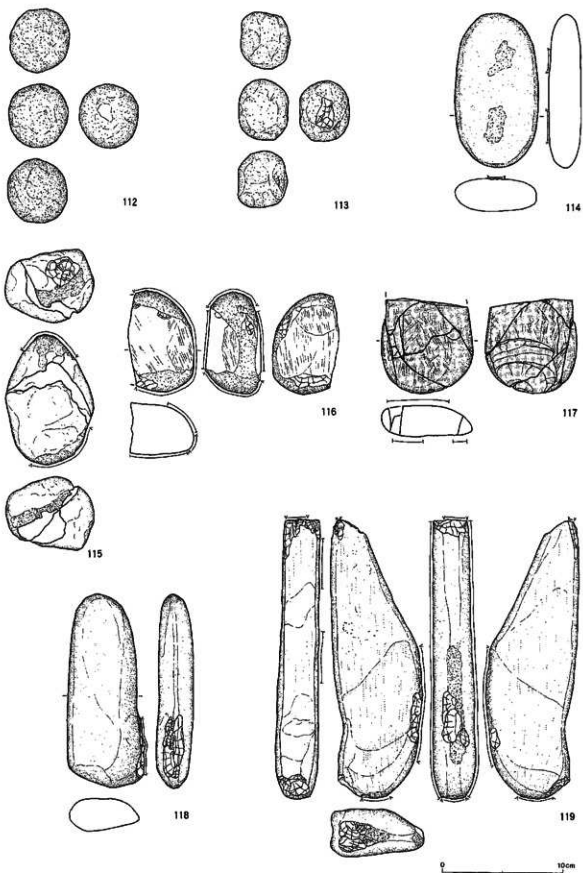
110



111

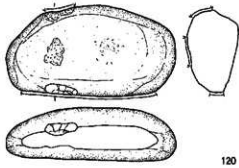
0 10mm

図VI-8-22 包含層出土の石器(8)

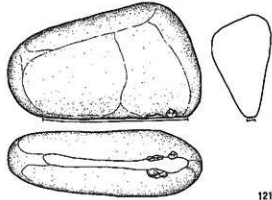


図VI-8-23 包含層出土の石器(9)





120



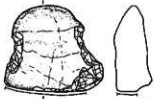
121



122



123



124



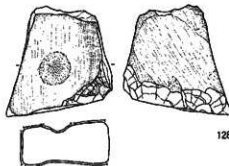
125



126



127



128



129



130



図VI-8-24 包含層出土の石器(10)

石や軽石製の砥石、縄文時代中期後半～末葉の遺跡に多く出土する多面砥石、縄文時代早期に位置付けられる断面三角形のすり石が主なものとなる。稀なもので道南の縄文時代中期遺跡で多く出土する安山岩製の扁平打製石器が出土している。

#### たたき石 (図VI-8-11、24 / 表VI-8-9、10 / 図版102)

たたき石は包含層から151点出土している。うち7点を図示した。包含層の分布を見ていくと、調査区東側を除き、台地から尾根状のところに満遍なく分布する。120、121は球状のたたき石。全面に敲打調整が施される。114はくぼみ石と称するもの。扁平な礫に弱い窪みが2ヶ所ある。被熱する。115は重円礫の上、下端にたたき痕のあるもの。116は平滑な擦り面を有する。118、119は扁平な棒状礫の側縁や端部を機能面とするもの。

#### すり石 (図VI-8-11、24、25 / 表VI-8-10 / 図版102)

すり石は包含層から161点図示した。うち3点を図示する。包含層の分布を見ていくと、調査区東側を除き、台地から尾根状のところに満遍なく分布する。117は扁平礫に平滑な擦り面を有するもの。被熱する。120、121は断面三角形のすり石。120にはたたき痕がみられる。122から124まで北海道式石冠。122は表面風化が著しい。扁平礫に剥離や敲打調整によって把握部を作り石冠としている。すり面は掲載図正面としたエッジ部分にしか有しない。123は自然礫に鉢巻状の溝を巡らせたものである。すり面は掲載図の裏になるエッジ部分にそれらしき痕跡がみられるが、明瞭なすり面は有しない。被熱し赤褐色化する。124は小型のもの。自然礫に2ヶ所の抉入する調整が施され把握部を作り出す。エッジ部分を巡る打ち欠きが見られる。明瞭な擦り面を有する。

#### 砥石 (図VI-8-12、25 / 表VI-8-10 / 図版103)

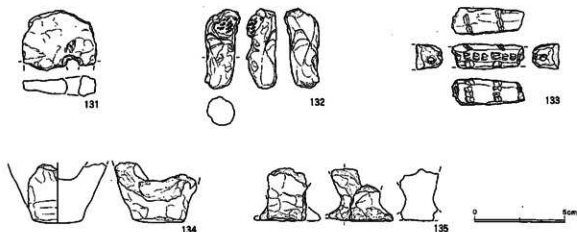
砥石は包含層から105点出土した。うち5点を図示する。包含層の分布を見ていくと調査区中央の南西側に張り出す台地の尾根状部分と沢状地形の一部に比較的多く出土する。125～129まで砥石。いわゆる多面砥石と称するもの。125、128は被熱する。126は2面に溝状の傷があり、128は円形のくぼみ痕がある。129は有溝のもの。130は扁平打製石器の破片。

#### 土製品 (図VI-8-12、25 / 表VI-8-10 / 図版103)

土製品は包含層から5点出土した。その全部を掲載する。131は土製円盤の破損品。中央にある孔は土器を焼成前にあけられたものとみられ、刺突文を有する土器などの再生品。表、裏面が剥落している。縁辺を打ち欠いて円形にしている。132は焼成粘土塊。紐状にした粘土に3ヶ所の爪痕と、僅かに縄文がみられる。縄文のみられる端は粘土紐を引きちぎったような痕跡が見られる。133は中空円形の孔が空けられているもの。表面を半截竹管状の工具により連続した押し引き文が施される。隆帯として柏木川式土器に貼り付いていた可能性がある。134はミニチュアの土器と考えられる。底部のみのもの。底面と胴部の境目は横方向へのものでよって整形される。内面は底がもりあがり、歪である。135は底部が横に張り出す土製品。破損している。底面は楕円形である。張り出す底部から上部にかけて広がる。同様の土製品は「キウス5遺跡(4)B・C地区」(1998)において報告、集成したものに類例がみられる。

#### 被熱した礫・礫片 (図VI-8-14 / 表VI-8-11 / 図版104)

定型的な礫石器は殆ど含まれない、被熱した礫、礫片が包含層から4915点出土した。包含層出土石器等の25.1%を占める。これらの分布を図VI-8-14に示す。これをみていくと、調査区西側の沢状になったM42グリッドから953点と、突出して多く出土している。次いで多いのはこの沢状を望む台地の南西側尾根から川に向かう斜面及び南東側の弱く沢状になる部分とその斜面である。調査区西側の濃い分布を示す周辺では、F-3、4、5がある。これらの焼土や焼土周辺では被熱した剥片石器



図VI-8-25 包含層出土の土製品

や礫片などが出土する。調査区東側の濃い分布を示すところでは、F-7が検出されている。これらは可能性として礫を焼成した場として考えられる。またこれらは意図的に沢状地形や斜面に置かれたかもしくは廃棄されたものと考えられる。置かれたとみられるところでM42グリットが挙げられる。ここより低いN42グリットでは62点しか出土していない。またこのグリットの接合作業を行った際、出土総重量47.83kgのうち40.7kgが礫の元の形状が判る状態にまで接合した重量である。その他、形状が復元できなかったが接合した礫の重量は4.26kgであった。残り、全く接合しなかった礫片の重量は2.87kgである。礫は亜角礫もしくは亜円礫の砂岩が最も多い。接合したものの計測値や石質を表VI-8-11に示した。破損の仕方は焼け弾けである。何に用いられたか不明であるが、大きさや重量、質がほぼおなじような石を集めて火に関連する作業を行い、使用後は沢状の所に置かれたものと考えられる。これとほぼ同様な礫片の出土状況を示す遺跡としてイモッペ川対岸の宮戸4遺跡（平成12年度調査、13年度以降報告）があり、周辺の遺跡では多く出土している。（袖岡）

表VI-8-7 包含層掲載石器一覧(1)

番号	分類	出処・測料	層位	長さ×幅×厚さ (cm)	重量(g)	石質	備考
1	石	鐵 N52 a-1	Ⅲ層	(1.5)×1.0×0.1	0.2	粘板岩	欠損品
2	石	鐵 N46 c-76	掘り上り土	1.8×1.2×0.2	0.4	黒曜石	
3	石	鐵 M57 c-9	V層下	2.0×1.4×0.3	0.7	黒曜石	
4	石	鐵 M42 c-19	V層下	2.0×1.5×0.2	0.6	黒曜石	被熱
5	石	鐵 M45 b-61	Ⅴ(H-1)	2.0×1.8×0.3	0.7	めのう	
6	石	鐵 N43 a-25	V層下	2.1×1.4×0.4	0.7	黒曜石	
7	石	鐵 N42 a-12	V層下	2.6×1.8×0.3	1.2	黒曜石	欠損品 被熱
8	石	鐵 N50 d-12	V層下	3.0×1.8×0.4	1.4	黒曜石	
9	石	鐵 M45 a-32	V層下	(1.8)×(1.8)×(0.3)	(0.8)	黒曜石	破損品
10	石	鐵 N48 b-51	V層下	2.2×0.8×0.2	0.3	黒曜石	
11	石	鐵 N54 c-8	V層下	2.7×1.0×0.3	0.7	黒曜石	
12	石	鐵 N50 b-13	V層下	(4.9)×1.2×0.3	1.6	黒曜石	欠損品
13	石	鐵 N55 a-3	V層下	(4.9)×1.5×0.4	3.0	黒曜石	欠損品
14	石	鐵 M49 d-19	V層下	4.7×1.9×0.5	4.1	黒曜石	
15	石	鐵 M42 b-5	V層下	2.9×1.4×0.4	1.5	黒曜石	未製品
16	石	鐵 M47 a-38	V層下	2.9×1.4×0.4	1.1	黒曜石	未製品
17	石	鐵 M51 d-76	V層下	3.2×1.5×0.4	1.2	黒曜石	未製品
18	石	鐵 M51 a-13	V層下	3.0×2.0×0.4	1.5	黒曜石	未製品
19	石	鐵 M54 b-12	V層中	3.3×1.9×0.5	2.1	黒曜石	
20	石	鐵 O48 a-40	V層下	1.6×0.9×0.2	0.2	黒曜石	
21	石	鐵 M50 b-2	V層中	1.5×1.3×0.3	0.3	黒曜石	
22	石	鐵 M54 b-53	V層下	2.2×1.3×0.3	0.5	黒曜石	
23	石	鐵 M53 c-33	V層下	2.5×1.7×0.5	0.9	黒曜石	
24	石	鐵 M50 c-26	V層下	2.4×(1.8)×0.4	1.2	泥岩?	未製品 欠損品
25	石	鐵 M52 d-9	V層中	2.9×2.2×0.3	1.6	黒曜石	
26	石	鐵 M51 a-33	V層下	3.6×1.5×0.4	1.5	黒曜石	
27	石	鐵 N47 c-40	Ⅴ(H-3)	3.7×1.4×0.5	1.5	黒曜石	
28	石	鐵 M58 b-2	V層中	(3.5)×1.6×0.6	2.0	黒曜石	欠損品
29	石槍・ナイフ	M51 a-12	V層下	4.92×2.65×0.58	4.6	黒曜石	
30	石槍・ナイフ	M51 d-2	V層中	5.51×2.80×0.55	5.0	黒曜石	
31	石槍・ナイフ	M51 b-6	V層中	4.29×2.60×0.68	4.5	黒曜石	
32	石槍・ナイフ	M52 a-28	V層下	5.09×3.13×0.61	4.7	黒曜石	
33	石槍・ナイフ	M43 a-37	V層下	4.68×2.99×0.64	4.8	黒曜石	欠損品
34	石槍・ナイフ	N52 a-16	V層下	5.50×2.80×0.70	6.9	黒曜石	
35	石槍・ナイフ	M38 a-1	V層上	5.41×2.60×0.61	5.5	黒曜石	
36	石槍・ナイフ	N45 a-78	V層下	4.18×2.20×0.57	3.4	黒曜石	
37	石槍・ナイフ	N47 a-6	V層下	(6.18)×2.55×0.61	6.0	黒曜石	欠損品
38	石槍・ナイフ	N45 b-34	Ⅴ 掘り上り	(6.70)×3.08×0.70	7.2	黒曜石	欠損品
39	石槍・ナイフ	M51 c-65	V層下	(6.28)×3.29×0.81	11.1	黒曜石	破損品
40	石槍・ナイフ	M51 a-29	V層下	(6.9)×(3.1)×(0.8)	(14.1)	黒曜石	破損品

表VI-8-8 包含層掲載石器一覧(2)

№	分類	註記・資料	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
41	石槍・ナイフ	M52b・18	V層下	(11.06)×3.60×1.00	(33.4)	黒曜石	M52b-17(V層7), M52b-4c(V層8)と結
42	石槍・ナイフ	N57b・7	V層中	(11.3)×3.1×0.8	(25.0)	頁岩	破損品
43	石槍・ナイフ	N47a・14	V層下	4.20×2.41×0.49	3.2	黒曜石	
44	石槍・ナイフ	N52b・43	V層下	4.12×2.25×0.69	5.0	黒曜石	
45	石槍・ナイフ	M46c・42	V層下	4.48×2.11×0.59	4.3	黒曜石	
46	石槍・ナイフ	N51a・1	Ⅲ層	5.04×2.31×0.61	5.5	黒曜石	
47	石槍・ナイフ	M52c・6	V層中	4.81×2.41×0.56	4.6	黒曜石	
48	石槍・ナイフ	M46b・56	V層下	5.39×2.50×0.75	6.9	黒曜石	
49	石槍・ナイフ	M51d・73	V層下	4.61×2.59×0.96	7.4	黒曜石	被熱
50	石槍・ナイフ	M51d・92	Ⅵ層	5.35×1.90×0.59	5.5	黒曜石	
51	石槍・ナイフ	M51d・28	V層下	5.20×2.00×0.78	8.8	黒曜石	
52	石槍・ナイフ	N38d・12	V層下	5.5×2.2×0.8	8.1	黒曜石	
53	石槍・ナイフ	M45c・16	V層下	5.29×2.65×0.80	8.1	黒曜石	
54	石槍・ナイフ	M51c・7	V層中	4.8×3.1×0.8	9.3	黒曜石	
55	石槍・ナイフ	M50d・69	V層下	(5.9)×(3.7)×1.0	(15.9)	黒曜石	破損品 被熱
56	石 鏃	L39c・8	V層上	3.7×2.4×0.9	4.4	黒曜石	
57	石 鏃	L39c・8	V層上	4.4×3.4×0.7	7.0	黒曜石	
58	石 鏃	N50d・19	V層下	4.1×2.8×1.0	5.7	黒曜石	
59	石 鏃	M39d・11	V層下	3.7×1.8×0.7	3.1	黒曜石	
60	石 鏃	M42c・11	V層下	4.0×1.3×0.9	3.6	黒曜石	
61	石 鏃	M42c・70	Ⅵ層	4.1×1.2×0.5	2.4	黒曜石	
62	つまみ付ナイフ	N52d・42	V層下	7.7×2.9×1.2	20.1	頁岩	
63	つまみ付ナイフ	M41c・8	Ⅳ層	5.9×3.8×1.0	16.9	黒曜石	
64	つまみ付ナイフ	N57c・10	V層中	8.1×2.1×0.7	8.7	頁岩	
65	つまみ付ナイフ	N52c・8	V層下	(6.7)×2.4×0.8	(8.2)	頁岩	欠損品
66	つまみ付ナイフ	O48d・2	V層下	(5.5)×2.6×0.9	(10.1)	黒曜石	破損品
67	つまみ付ナイフ	N50b・2	V層中	6.0×1.9×1.1	8.8	頁岩	
68	つまみ付ナイフ	M59c・3	V層下	5.2×3.75×0.90	8.3	黒曜石	
69	つまみ付ナイフ	M43b・10	V層下	7.0×2.6×1.0	11.4	黒曜石	
70	つまみ付ナイフ	L41c・8	V層中	(2.7)×(2.3)×(0.5)	(3.3)	黒曜石	破損品 被熱
71	つまみ付ナイフ	L40c・4	V層中	5.2×2.2×0.9	7.1	黒曜石	
72	つまみ付ナイフ	M49b・20	V層下	4.9×2.6×0.7	6.4	黒曜石	
73	つまみ付ナイフ	L41c・3	V層中	6.7×3.3×1.2	19.2	黒曜石	
74	つまみ付ナイフ	N52b・29	V層下	6.6×2.85×1.18	13.7	黒曜石	
75	つまみ付ナイフ	M43b・31	V層下	6.0×2.7×1.2	14.4	黒曜石	
76	つまみ付ナイフ	M46b・134	Ⅵ層	6.3×3.2×1.3	19.5	頁岩	
77	つまみ付ナイフ	M42c・23	V層下	3.7×6.7×1.0	16.2	黒曜石	
78	つまみ付ナイフ	N51d・3	V層中	2.4×4.0×0.8	5.0	黒曜石	
79	つまみ付ナイフ	M52a・112	V層	3.72×2.12×0.93	6.4	黒曜石	
80	つまみ付ナイフ	L43b・30	V層下	7.4×2.3×0.7	(11.2)	黒曜石	欠損品

表VI-8-9 包含層掲載石器一覧(3)

番号	分類	社名・遺跡名	層位	長さ×幅×厚さ (cm)	重量(g)	石質	備考	
81	スクレイパー	N47c-49	V層下(H-3)	3.70×2.75×0.80	10.3	黒曜石		
82	スクレイパー	M40a-1	Ⅲ層	(3.82)×2.90×0.60	(6.5)	黒曜石		
83	スクレイパー	M54b-51	V層下	3.95×2.54×1.00	9.8	黒曜石		
84	スクレイパー	M51b-8	V層中	5.6×3.2×1.2	19.2	黒曜石		
85	スクレイパー	M52b-5	V層中	6.6×3.5×1.4	30.1	黒曜石		
86	スクレイパー	M39d-9	V層下	4.8×2.8×0.7	10.7	黒曜石		
87	スクレイパー	M50d-19	V層下	(5.1)×3.0×1.1	(16.1)	黒曜石		
88	スクレイパー	M50d-37	V層下	(4.6)×2.3×1.0	(10.5)	黒曜石		
89	スクレイパー	M50d-20	V層下	5.0×3.2×0.8	9.5	黒曜石		
90	スクレイパー	M52d-29	V層下	6.4×3.6×1.9	33.9	黒曜石		
91	スクレイパー	N52a-19	V層下	6.0×5.2×1.9	34.7	黒曜石		
92	スクレイパー	M46b-55	V層下	5.6×2.9×1.4	12.8	黒曜石		
93	スクレイパー	M43b-25	V層下	5.3×4.8×1.0	19.8	黒曜石		
94	スクレイパー	M52a-6	V層中	6.2×4.3×0.9	15.8	黒曜石		
95	スクレイパー	M39d-10	V層下	9.9×5.9×1.6	68.1	頁岩		
96	スクレイパー	O46d-3	V層下	12.8×4.7×1.3	66.7	頁岩		
97	ピエス・エスキーユ	M42c-24	V層下	2.1×2.0×0.7	2.9	黒曜石		
98	石	核	O47d-36	V層下	4.3×2.5×2.3	20.3	黒曜石	
99	石	核	M43a-8	V層下	5.2×8.3×2.2	89.0	黒曜石	
100	石	斧	M51a-87	V層上	9.1×3.5×0.6	24.2	粘板岩	未製品
101	石	斧	N46b-23	V層下	(10.0)×2.7×1.1	(50.7)	片岩	欠損品
102	石	斧	M51d-89	V層下	11.8×2.2×1.5	62.8	泥岩?	
103	石	斧	M52a-64	V層下	(6.2)×3.5×0.8	25.4	泥岩	欠損品
104	石	斧	N46d-126	Ⅵ層	3.3×1.4×0.3	2.0	片岩	
105	石	斧	M52a-64	V層下	11.6×5.5×1.7	142.4	泥岩	録編 M52a-19(V層下)録Hと録I
106	石	斧	N48c-35	V層下	18.3×6.0×3.2	660.0	橄欖岩	録編 N48b-49(V層下)と録I
107	石	斧	N48a-15	V層下	13.1×5.3×1.5	159.8	泥岩	録編 O48d-18(V層下)と録I
108	石	斧	M45b-6	V層下	10.9×4.5×1.6	120.1	泥岩	
109	石	斧	N52a-6	V層中	13.4×4.5×3.1	261.5	泥岩	未製品
110	石	斧	N50d-5	V層中	13.7×4.2×2.2	174.9	泥岩	
111	石	斧	M46c-138	V層下	(13.0)×(8.9)×(3.1)	(521.8)	泥岩	録編 M46b-45(V層下)(2). M46c-8(V層下). N46d-64(録I録I) H-1-506(録I)と録I
112	たたき石	N45b-8	V層下	5.3×4.9×5.3	159.6	橄欖岩		
113	たたき石	L39c-7	V層中	5.0×4.1×4.7	205.5	橄欖岩		
114	たたき石	M50d-23	V層下	12.8×7.0×2.7	361.2	砂岩	被熱	
115	たたき石	M52b-49	V層下	10.7×7.4×5.8	(555.3)	珪岩	録編 M53b-17(V層下)と録I	
116	たたき石	O48a-13	V層下	(8.4)×(5.5)×(4.6)	(361.4)	橄欖岩	破損品	
117	すり石	M42c-48	V層下	(7.8)×7.6×(2.8)	(249.9)	砂岩	録編 M42b-3-24-39-42(V層下) M42c-77(V層下). M42c-84(V層下)と 録I 録I	

表VI-8-10 包含層掲載石器一覧(4)

番号	分類	社名・器物	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
118	たたき石	M39d・20	V層下	16.2×6.6×3.0	454.7	砂岩	被熱
119	たたき石	M45b・69	V層下	23.1×7.7×4.0	946.8	片麻岩	
120	すり石	M50c・27	V層下	7.5×14.1×4.4	781.7	片麻岩	
121	すり石(断面三角)	M38b・36	VI層	9.6×16.0×5.5	1080.0	砂岩	
122	北海道式石冠	N56a・1	III層	7.7×12.3×4.2	684.3	片麻岩	
123	北海道式石冠	M53b・18	V層下	7.1×13.9×3.6	489.3	砂岩	被熱
124	北海道式石冠	N52a・10	V層	7.2×8.2×3.1	198.1	砂岩	片岩になりかかっている砂岩
125	砥石	M51b・66	V層	7.6×4.3×2.8	64.9	砂岩	M51a・73(V層)と接合 被熱
126	砥石	M48a・19	V層下	(7.3)×(2.3)×(2)	(47.8)	砂岩	
127	砥石	M43c・5	V層下	(11.7)×6.4×2.1	164.7	砂岩	
128	砥石	M51d・46	V層下	9.2×8.8×3.6	324.6	砂岩	被熱
129	砥石	M45b・71	V層下	8.9×6.9×1.2	12.0	軽石	
130	偏平打製石器	N56a・11	V層下	(2.5)×6.4×(0.75)	13.8	安山岩	被換品
131	土製品	M41b・12	V層下	(3.3)×(4.1)×(1.12)	(10.5)		被熱
132	焼成粘土塊	M52d・67	V層下	4.4×1.9×1.6	(10.4)		
133	土製品	N49・2	V層	(4.0)×1.4×(1.45)	(6.7)		
134	土製品	N46d・134	層上?土	3.34×4.5×3.5	(36.5)		
135	土製品	N51a・59	V層下	(2.9)×(3.6)×(2.53)	(14.2)		被換品 N52a 65(V層下)と接合

表VI-8-11 M-42グリッド被熱碟・碟片属性表

遺物番号	形 状	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石 質	備 考
1	亜角碟	(11.9)×7.6×6.8	(790)	砂 岩	b・17、c・39・41・42(2)・44・45・46(3)・47・48(2)(V層下)、ほか4点と接合 計17点
2	亜角碟	10.3×7.1×4.9	440		c・33(V層下) 計1点
3	亜角碟	10.4×8.2×4.5	(480)	砂 岩	c・39・42(3)・45・47(V層下)と接合 計6点
4	亜角碟	(8.8)×9.2×7.3	(780)	砂 岩	c・42・64(2)・73(2)・74・75・76(6)(V層下)と接合 計13点
5	亜角碟	(14.0)×12.6×6.0	(1,030)	砂 岩	b・7、c38(2)・43・44・45(3)・46(2)・47(2)・64(5)・74・75(3)・77(5)・84(2)(V層下)、ほか3点と接合 計31点
6	亜角碟	9.5×8.3×5.4	(520)	砂 岩	c・38・40・41・45・46・47(3)・48(V層下)、ほか3点と接合 計12点
7	亜角碟	(13.7)×8.1×(6.3)	(570)	砂 岩	c・41(3)・42・43・45(3)・47(10)・48(3)・76・84(V層下)、ほか16点と接合 計39点
8	亜角碟	14.7×9.5×5.1	(940)	砂 岩	b17(2)・30・43(2)・45・46・48(4)・73(4)・74・76(9)(V層下)、ほか1点と接合 計26点
9	亜角碟	(13.2)×8.5×5.2	(790)		c・40・41・47・72・75(V層下)と接合 計5点
10	亜角碟	8.4×(7.2)×(3.1)	(240)	砂 岩	c39(2)・41(2)(V層下)と接合 計4点
11	亜円碟	11.3×7.8×6.5	(800)		b28・30・41、c84(2)(V層下)と接合 計5点
12	亜角碟	(7.3)×(6.7)×4.4	(180)		c・73(2)・76(9)(V層下)、ほか6点と接合 計17点
13	亜円碟	9.1×7.8×2.0	(210)	砂 岩	c・37・38(V層下)と接合 計2点
14	亜円碟	9.4×8.9×2.6	(250)		c・42・46・47・75(V層下)と接合 計4点
15	亜円碟	11.8×(6.6)×4.6	(370)	砂 岩	c・64・73・75・76・84(6)・94(V層下)、ほか3点と接合 計14点
16	亜角碟	15.3×6.7×(4.6)	(640)		c・38・40・45(2)・48・64(3)・74・75(2)・77(V層下)、ほか3点と接合 計15点
17	亜角碟	(12.1)×(8.3)×(4.7)	(640)	砂 岩	c・38・41(2)・42(3)・43・45(3)・47・64・67・84(2)(V層下)、ほか1点と接合 計16点



## VI 米原4遺跡

18	亜角礫	9.1×7.0×5.9	480	砂岩	c74・84 (3)(V層下)、ほか2点と接合 計6点
19	亜円礫	9.6×8.8×7.0	(570)		c38・39 (2)・41 (2)・43 (5)(V層下) ほか2点と接合 計12点
20	亜角礫	21.3×8.9×5.0	(800)	砂岩	c・45 (2)・47 (3)・48・64 (2)・ 74 (2)・75 (6)・77 (6)・84 (V層下)、 ほか3点と接合 計26点
21	亜円礫	(10.3)×8.8×7.3	(720)	砂岩	c・39・41・42・45・64 (2)・68・75・ 84 (V層下)、ほか2点と接合 計11点
22	亜角礫	15.7×11.5×5.6	(970)	砂岩	c・39・41 (3)・43 (2)・45 (6)・47 (6)・48・64 (2)・73・75 (2)・76 (4)・ 84 (V層下)、ほか3点と接合 計32点
23	亜角礫	(18.7)×(8.1)×4.2	(650)	砂岩	c・45・74・76(5)(V層下)と接合 計7点
24	亜円礫	11.2×6.4×4.7	(390)		b・17 (4)・42・44・45 (4)・47 (2)・ 84 (V層下)、ほか3点と接合 計16点
25	亜角礫	(9.9)×(7.3)×(5.7)	(400)		b・41・42・47・48・64・76・84(8)・ 89 (V層下)、ほか3点と接合 計18点
26	亜角礫	(9.3)×(6.0)×(3.2)	(190)	砂岩	b・41・43・48(3)(V層下)と接合 計5点
27	亜角礫	(8.9)×(9.1)×(6.1)	(410)		c41 (4)・43 (4)・47・64 (4) (V層下)、ほか7点と接合 計20点
28	亜角礫	11.7×10.2×(6.0)	(410)		c41 (4)・43 (4)・47・64 (4) 77・84(5)(V層下)、ほか3点と接合 計13点
29	亜角礫	(8.4)×(6.0)×(6.8)	(380)	砂岩	c・41・42・45(2)・47(2)・60・64 (V層下)、ほか3点と接合 計8点
30	亜角礫	19.5×(11.0)×7.4	(2,330)		c・36・41・42 (3)・47・64・84 (V層下)、ほか1点と接合 計9点
31	亜角礫	13.7×10.5×8.6	1,590		c・74 (V層下) 計5点
32	亜円礫	17.7×12.1×9.4	2,830		c・40・41・42・43・84 (V層下)、 ほか3点と接合 計8点
33	亜角礫	9.1×5.6×3.3	(240)	砂岩	c・73・76(4)(V層下)と接合 計5点
34	亜角礫	12.3×8.0×5.5	(780)		c・6 (V層下) 計1点
35	亜円礫	7.9×6.7×3.1	(180)	砂岩	b・18(2)・44・c・84 (V層下)、ほか2点 と接合 計6点
36	亜円礫	(10.7)×(9.5)×(4.5)	(460)	砂岩	c・45 (2)・48・75 (5) (V層下)、 ほか3点と接合 計11点
37	亜円礫	11.3×7.2×2.9	(270)	砂岩	c・76 (V層下) 計1点

3 8	亜角礫	(7.7)×8.8×6.7	(580)	砂 岩	c・40 (V層下)一部すり面有 計1点
3 9	亜角礫	11.0×7.4×5.8	(570)		c・72・74(2)・75(V層下)と接合 計4点
4 0	亜角礫	(11.5)×5.5×4.9	(400)		c・84 (V層下) 計1点
4 1	亜円礫	9.1×6.9×3.8	280		c・61 (V層下) 計1点
4 2	亜角礫	18.8×(10.2)×(7.6)	(1,210)	砂 岩	c・16・39・42(2)・45(3)・46・48(2)・64(2)・75(2)・77(2)・84 (V層下)、ほか1点と接合 計18点
4 3	亜角礫	(16.8)×10.3×6.4	(1,260)	砂 岩	c・44・73(5)・74(2)・75(3)・76(8)・78(2)・84・96(V層下)、ほか5点と接合 計28点
4 4	亜角礫	11.7×6.5×6.3	(620)	砂 岩	c・39・41・42(2)・45(2)・46・47・48・75・84(3)(V層下)、ほか5点と接合 計18点
4 5	亜角礫	11.0×8.4×(6.6)	(540)	珪 岩	c・47(2)・64(3)・73(8)・74・75(3)・76(7)・77・84(3)(V層下)、ほか9点と接合 計37点
4 6	亜円礫	(13.0)×9.0×4.9	(610)	砂 岩	b17, c・15・42・64(3)・75(2)・76・77(2)(V層下)、ほか7点と接合 計12点
4 7	亜角礫	11.4×(8.2)×4.9	(480)	砂 岩	c・64(2)・73・74・76(5)(V層下)、ほか3点と接合 計12点
4 8	亜角礫	(9.9)×(8.2)×(7.5)	(760)	珪 岩	c・38・39(2)・41・43・44・45(3)・46・47(3)・64(2)・74・75(3)・77・84(V層下)、ほか7点と接合 計28点
4 9	亜角礫	9.6×7.1×(6.4)	(490)	流紋岩?	c・42・64(4)・74・84(4)(V層下)、ほか5点と接合 計15点
5 0	亜角礫	9.7×(7.0)×(4.0)	(290)	砂 岩	c・75(2)・84(6)(V層下)と接合 計8点
5 1	亜角礫	11.2×9.3×5.5	(550)	砂 岩	c・42・46・47・48・64(6)・75(3)・84(8)(V層下)、ほか2点と接合 計23点
5 2	亜角礫	(13.4)×(10.9)×(7.1)	(910)	砂 岩	c・40 (V層下) 計1点
5 3	亜角礫	18.4×9.6×8.8	2,530	不 明	c・72 (V層下) 計1点
5 4	亜角礫	9.7×(7.3)×(3.3)	(310)	砂 岩	c・84 (V層下) 計1点
5 5	亜円礫	10.0×6.9×4.3	350		b・15 (V層下) 計1点
5 6	亜角礫	15.8×(9.3)×6.2	(1,350)		b・2 (V層下) 計1点
5 7	亜円礫	7.4×6.8×2.4	190	砂 岩	b・28 (V層下) 計1点
5 8	亜角礫	10.4×8.9×8.0	810		c・40 (V層下) 計1点
5 9	亜角礫	12.1×(5.0)×5.5	(370)		c・61 (V層下) 計1点
6 0	亜角礫	(12.7)×(9.3)×(3.2)	(260)	砂 岩	c・39・42・45(2)(V層下)、ほか2点と接合 計6点

## Ⅶ 自然科学的手法による分析結果

### 1 鶴川町米原3・宮戸3・米原4遺跡出土の黒曜石製石器の原材産地分析および非破壊分析による水和層の測定

藁科 哲男 (京都大学原子炉実験所)

#### はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法により黒曜石およびサヌカイト製遺物の石材産地推定を行なっている<sup>1, 2)</sup>。

石材移動を証明するには必要条件と十分条件を満たす必要がある。地質時代に自然の力で移動した岩石の出発露頭を元素分析で求めるとき、移動原石と露頭原石の組成が一致すれば必要条件を満たす。また、その露頭からの流れたルートを地形学などで証明できれば、十分条件を満たす。よって、ただ1カ所の一致する露頭産地の調査のみで移動原石の産地が特定できる。遺物の産地分析では「石器とある産地の原石が一致したからと言って、その産地のものと言い切れないが、しかし一致しなかった場合その産地のものでないと言い切れる」が大原則である。

考古学では、人工品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味をもち、見える様式として形態や文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調査素材がある。これらが一致するということは古代人が意識して一致させた可能性があり、すなわち古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する上で重要な結果となる。石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、例えば石材産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する、産地地方との交流を示す土器が出土しているなどを十分条件の代用にするなど産地分析は中途半端な結果となる。よって、遠距離伝播した石器原材であっても、遺跡近くの似た組成の原石産地の石材と思ひこみ誤判定する可能性がある。

人が移動させた石器の元素組成とA産地原石の組成が一致し、必要条件を満足しても、原材産地と出土遺跡の間に地質的関連性がないため、十分条件の移動ルートを自然の法則に従って地形学で証明できず、その石器原材がA産地の原石と決定することができない。従って、石器原材と産地原石が一致したことが、直ちに考古学の資料とならない。確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなったが、B、C、Dの産地でないと証拠がないために、A産地だと言い切れない。B産地と一致しなかった場合、結果は考古学の資料として非常に有用である。それは石器に関してはB産地と交流がなかったと言い切れる。ここで、可能なかぎり地球上の全ての原産地(A、B、C、D・・・・)の原石群と比較して、A産地以外の産地とは一致しないことを十分条件として証明すれば、石器がA産地の原石と決定することができる。この十分条件を肉眼観察で求めることは分類基準が混乱し不可能であると思われる。また、自然科学的分析を用いても、全ての産地が区別できるかは、それぞれが使用している産地分析法によって、それぞれ異なり実際に行ってみなければ分からない。産地分析の

結果の信頼性は何ヶ所の原産地の原石と客観的に比較して得られたかにより、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。

黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられる。このため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合（マハラノビスの距離）を求める。次に、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地点が異なる可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限に近い個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT2乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある石器原材と同じ成分組成の原石はA産地では10個中に1個みられ、B産地では1万個中に1個、C産地では100万個中に1個、D産地では・・・1個と各産地毎に結果を得る。このような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析した遺物は北海道鶴川町に位置する米原3遺跡出土の縄文時代の黒曜石製石器、石片11個、宮戸3遺跡出土の縄文時代の黒曜石製石器、石片6個および米原4遺跡出土の縄文時代の黒曜石製石器、石片17個の合計34個である。これらの産地分析および非破壊分析による水和層厚さの結果が得られたので報告する。

#### 黒曜石原石の分析

黒曜石原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの各元素を主に分析した。塊状試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比量をそれぞれ用いる。

黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に分布する。調査を終えた原産地を図1に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくさされている。元素組成によってこれら原石を分類し、表4に示す。この原石群に原産地は不明の遺物で作った遺物群を加えると196個の原石群になる。以下、北海道地域および一部の東北地域の産地について記述する。

白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿砦北方2kmの採石場の赤石山の露頭、鹿砦東方約2kmの幌加沢地点、また白土沢、八号沢などより転搬として黒曜石が採取できる。赤石山の大産地の黒曜石は色に関係無く赤石山群（旧白滝第1群）にまとまる。また、あじさいの滝の露頭からは赤石山と肉眼観察では区別できない原石が採取でき、あじさい群を作った（旧白滝第2群）。また、八号沢の黒曜石原石と白土沢の転搬は梨肌の黒曜石で組成はあじさい滝群に似るが石肌で区別できる。幌加沢よりの転搬の中で70%は幌加沢群になりあじさい滝群と元素組成から両群を区別できず、残りの30%は赤石山群に一致する。

置戸産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取され、原石の元素組成は所山置戸群にまとまる。また、同町の秋田林道で採取される原石は置戸山群にまとまる。

留辺蘂町のケショマップ川一帯で採取される原石はケショマップ第1および第2群に分類される。

この原産地は、常呂川に通じる流域にある。この常呂川流域で黒曜石の円礫が採取されるが現在まだ調査していない。

十勝三股産原石は、河東郡上士幌町十勝三股の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取される。この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十三の沢から音更川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の組成は、十勝三股産の原石の組成と相互に近似している。また、上士幌町のサンケオルベ川より採取される黒曜石円礫の組成も十勝三股産原石の組成と相互に近似している。これら組成の近似した原石の原産地は区別できず、遺物石材の産地分析で原石産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股、音更川、十勝川、サンケオルベ川の複数の地点を考えなければならない。しかし、これら複数の産地をまとめて、十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。

清水町、新得町、鹿追町にかけて広がる美瑛台地から産出する黒曜石から2個の美瑛原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。

名寄市の智南地域、智恵文川および忠烈布貯水池から上名寄にかけて黒曜石の円礫が採集される。これらを組成で分類すると88%は名寄第一群に、また12%は名寄第二群にそれぞれなる。

旭川市の近文台、嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第一群、69%が近文台第二群、11%が近文台第三群にそれぞれ分類された。

滝川市江別乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、組成で分類すると約79%が滝川群にまとまり、21%が近文台第二、三群に組成が一致する。滝川群に一致する組成の原石は、北竜市恵袋別川培本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況や礫状は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第一群は滝川第一群に組成が一致し、第二群も滝川第二群に一致しさらに近文台第二群にも一致する。

赤井川産原石は、余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。小球果の列が何層にも重なり石器の原材として良質とはいえない原石で赤井川第1群を、また、球果の非常に少ない握り拳半分大の良質な原石などで赤井川第2群を作った。これら第1、2群の元素組成は非常に似ていて、遺物を分析したときしばしば、赤井川両群に同定される。

豊泉産原石は豊浦町から産出し、組成によって豊泉第1、2群の2群に区別される。豊泉第2群の原石は斑晶が少なく良質な黒曜石である。豊泉産原石の使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。

出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた。この出来島群と相互に似た組成の原石は、岩木山の西側を流れ鱈ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴ばみ地区より採取されている。

青森県西津軽郡深浦町の海岸とか同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群をまた、八森山産出の原石で八森山群をそれぞれ作った。

深浦の両群と相互に似た群は青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第二群である。戸門第一群、成田群、浪岡町県民の森地区より産出の大釈迦群（旧浪岡群）は赤井川産原石の第1、2群と弁別は可能であるが原石の組成は比較的似ている。戸門、大釈迦産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石鏃が作れる大きさがみられる程度である。

鷹森群は鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石で中には5cm大のものもみられる。また、考古学者の話題になる下湯川産黒曜石についても原石群を作った。

## 結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は風化しているが、黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水和層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合、また除かずに産地分析を行った場合同定される原産地に差はない。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはや、不確かさを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した米原3・宮戸3・米原4遺跡の黒曜石製石器の結果を表3に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを考えて、表3の試料番号73268番の遺物ではRb/Zrの値は0.900で、赤井川第1群の[平均値]±[標準偏差]は、 $0.969 \pm 0.060$ である。遺物と原石群の差を標準偏差( $\sigma$ )を基準にして考えると遺物は原石群から $1.1\sigma$ 離れている。ところで赤井川原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 1.1\sigma$ のずれより大きいものが27個ある。すなわち、この遺物が、赤井川第1群の原石から作られていたと仮定しても、 $1.1\sigma$ 以上離れる確率は27%であると言える。だから、赤井川第1群の平均値から $1.1\sigma$ しか離れていないときには、この遺物が赤井川第1群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を赤石山群に比較すると、赤石山群の平均値からの隔たりは、約 $7\sigma$ である。これを確率の言葉で表現すると、「赤石山群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から $7\sigma$ 以上離れている確率は、千万分の一である」と言える。このように、千万個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、赤石山群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことをまとめて言うと、「この遺物は赤井川第1群に27%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから赤井川第1群原石が使用されていると同定され、さらに赤石山群に十万分の一の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから赤石山原石でないと同定される」。

遺物が1ヶ所の産地(赤井川産地)と一致したからと言って、例え赤井川第1群と赤石山群の原石は成分が異なっている、分析している試料は原石でなく遺物で、さらに分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから、他の産地に一致しないとは言えない、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地(赤井川産地)に一致し必要条件を満たしたと言っても、一致した産地の原石とは限らない。このため、帰属確率による判断を表4の196個すべての原石群について行なって十分条件を求め、低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて赤井川産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯一ヶの変量だけでなく、前述した8ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。

このことを数的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT<sup>2</sup>乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する<sup>4, 5)</sup>。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製では196個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された

原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち、赤井川産原石と判定された遺物について、カムチャッカ産原石とカロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石および信州和田峠産の原石の可能性を考える必要がない結果で、高い確率で同定された産地だけの結果を表1に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには原石群の元素組成のパラッキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原産地(確率)の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離D2乗の値を記した。この遺物については、記入されたD2乗の値が原石群の中で最も小さなD2乗値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ていると言えるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えては、間違いなくと判断されたものである。

赤井川および十勝産原石を使用した遺物の判定は複雑である。これは青森市戸門、鷹森山地区、浪岡町大釈迦より産出する黒曜石で作られた戸門第一、鷹森山、大釈迦の各群の組成が赤井川第一、二群、十勝三股群に比較的似ているために、遺物の産地を同定したときに、戸門産地と赤井川または十勝産地、またこれら3ヶ所の原産地に同時に同定される場合がしばしば見られる。戸門産地の原石が使用されたか否かは、1遺跡で多数の遺物を分析し戸門第1群と第2群に同定される頻度を求め、これを戸門産地における第1群(50%)と第2群(50%)の産出頻度と比較し戸門産地の原石である可能性を推定する。今回分析した遺物のなかに全く戸門第2群に帰属される遺物が見られないことから戸門産地からの原石は使用されなかったと推測できる。また浪岡町大釈迦産原石は非常に小さく分析した遺物よりも小さい原石で本遺跡で使用された可能性は低いと推測された。鷹森山産地の原石、赤井川産原石と十勝産原石を使用した遺物の産地分析では、これら産地に同定された遺物の帰属確率の差が十分の一〜百分の一がほとんどで、遺物の中には、赤井川、十勝、鷹森山の各群の帰属確率の差がほとんどない遺物があり原産地の特定に苦慮する。この場合は、客観的な産地分析法により赤井川産、十勝産、鷹森山産と限定したうえで、肉眼観察により遺物と似た原石が赤井川産地、十勝産地、鷹森山産地のいずれに多いかを考慮して原産地を判定した遺物も一部ある。

白滝地域のあじさい滝、八号沢、白土沢、幌加沢の一部の原石は相互に元素比組成が似ていて、産地分析の結果で区別できない遺物がみられる。この場合、梨肌表面の遺物を八号沢、白土沢地区の原石、滑らかな表面の遺物をあじさい滝または幌加沢地区の原石と肉眼で判断し判定の欄に記する。

今回分析を行なった米原3遺跡出土の遺物11個には赤井川産が8個が使用されていた。分析番号73269番の遺物表面に残る自然面の観察から円礫状原石が推測されることから、特に考察を付け加える。赤井川産原石と元素比組成が比較的似て円礫原石としては、古代人が多く使用している十勝産が推測されるが、例えば、十勝産原石が風化の影響を受けて軽元素のK元素が大きく観測されても、赤井川産原石に同定されることがないので、この遺物が十勝産の可能性は否定できる。また、青森県の鷹森山群の原石も円礫状で、鷹森山の可能性も推測されるが、鷹森山群への帰属確率が信頼限界以下であり、遺物の自然面から推測される大きさの原石は、鷹森山産地からは産出してないことから、鷹森山産原石の可能性も否定できる。また、青森県、十勝地方以外で赤井川産原石と元素比組成が比較的似る円礫原石を含む礫層が発見されていないことから、この円礫遺物は赤井川産地の露頭から流れた土木沢、赤井川、余市川から採取された可能性が推測される。また、他の角礫状の遺物は赤井川産地の露頭および露頭近くで採取された原石が伝播したと推測した。赤井川産の他に十勝産原石が

2個使用されている。分析番号73275番の遺物は円礫状の自然面を残していることから、十勝三股露頭から流れ、円礫になって河川堆積層や十勝川、サンケオルベ川に通ずる河川から採取されたと推測できる。また赤石山産原石がRフレイクとして1個が出土している。

宮戸3遺跡出土の黒曜石製石器、石片6個では、十勝産と同定された4個の中で円礫と推測されたものは1個である。分析番号73284番は角礫状の痕跡がみられるが、非常に小さく確定できず、この角礫状原石が十勝三股原産地の露頭から伝播したと決定できなかった。また、赤井川産と同定された遺物2個は角礫であった。分析番号73279番の遺物は軽元素比Ca/K,Ti/Kを入れると帰属確率が非常に低く同定され、赤石山群にD2乗=51が最も高い。しかし、196個のどの群にも信頼限界の0.1%に達しない。本来、赤石山群に一致する遺物であるが、風化層の影響で同定確率が低くなっていると推測した。一般的に、遺物に被熱などの履歴があり風化層が非常に厚くなっている場合が多い。厚い風化の場合には、表3に示すようにKの元素が他の赤石山群に同定された遺物より大きく観測される。これは推測であるが、風化層内のK元素が黒曜石表面に移動し濃縮し、マトリクス効果の自己吸収によるK元素蛍光X線の減衰が減少するために、K元素のピークが大きく観測される。従ってK元素が分母のCa/K,Ti/Kの比値が小さくなる。将来的には風化層の厚さから補正が可能のように思える。現時点では軽元素比を抜いてマハラノビスの距離を求めて行なう、ホテリングのT2乗検定を表4の196群の全ての原石、遺物群について試みた。その結果を推定確率の欄に【 】内に区別して記した。

米原4遺跡出土の縄文時代の黒曜石製石器、石片17個では、赤井川産が10個で、7個は角礫であった。また4個が十勝産と同定され、2個が円礫と推測された。また赤石山産2個が使用されている。分析番号73288番の遺物の原石産地は不明であった。これは札幌市K39遺跡19次で使用されている産地不明の遺物群に、軽元素比を入れても、また軽元素を抜いても、共通に帰属されることから、K19遺物群と同定した。

今回の鶴川町の遺物の分析の中で、白滝地域との交流を示す赤石山産原石の使用が見られる。あじさい滝産、八号沢産などの使用が確認できなかったことから、赤石山産原石を多用する白滝地区の遺跡を原石供給遺跡から伝播した可能性を推測しても産地分析の結果と矛盾しない。また、米原3遺跡出土の分析番号73269番の円礫状の赤井川産原石の使用は角礫より少ない。このことから、今後、赤井川原産地から鶴川町までの遺跡で円礫状の赤井川群に同定される遺物を出土する遺跡を追跡すれば、円礫状の赤井川産原石の伝播ルートが推測できる可能性がある。

#### 非破壊分析による黒曜石製遺物の水和層測定

この分析は黒曜石の表面に顕微鏡を通して光を照射したときに、黒曜石の表面で反射する光と、水和層で反射する光りで生じる干渉波の波長から水和層の厚さを求める方法である。光の反射を利用するため、遺物の表面にできた使用痕および埋土中にできた摩耗傷などが水和層測定の障害になり測定できない場合が多々ある。また、水和層と新鮮面との境界面での反射光が非常に弱いため、境界面が明確に発達した部分を探して測定しなければならない。従って、傷のない場所を顕微鏡下で探して分析を行うため、試料によっては1個に3時間以上かかることもある。今回、分析1試料について1ヶ所10回以上測定し水和層厚さの平均値を求め、これを3ヶ所以上を分析し、分析値の最大、中間、最小値を選んで表2に記した。

水和層厚さを経過年代に換算するには、水和層を分析した黒曜石の経過年代を炭素-14法、フィッシュトラック法で求めた絶対年代から、水和速度を求めて行う。この水和速度は黒曜石の埋土中に受ける温度によって異なるため、黒曜石が環境から受けた温度を正確に求めなければ、正確な年代の



換算はできない。従って、遺物が旧石器時代を経過している場合、受けた温度を約75℃(平均効果温度)として水和速度<sup>⑨</sup>を推定したとき、赤井川産原石は1.7(μm<sup>2</sup>/1000年)を用いる。また、縄文時代の可能性のある遺物に対しては、約85℃を平均効果温度として水和速度<sup>⑨</sup>を1.9167(μm<sup>2</sup>/1000年)とし、下記の式により水和層厚さを経過年代に換算した。

$$\text{推定換算年代(千年)} = \frac{\text{測定水和層厚}(\mu\text{m}) \times \text{測定水和層厚}(\mu\text{m})}{\text{水和速度}(\mu\text{m}^2/1000\text{年})}$$

今回分析非破壊で水和層が測定できた遺物の経過年代の結果を表2に示した。水和層厚さを経過年代に換算するときの重要な係数である水和速度を決める重要な要因は、黒曜石の化学組成と温度である。自然科学者の実験室で水和実験によって水和速度を決定できるが、国内産黒曜石に関して研究はそこまで進んでいないのが現状である。現在は水和速度の決定については考古学者の協力なしでは決定できない。実験室での水和層生成が困難である限り、水和速度の決定の舞台は遺跡になる。今回の年代が炭素-14年代に比べて古すぎる場合は、温泉地とか温度の高い地下水などで埋土中の遺物温度が異常に高かったことが推測され、水和層は非常に厚くなり推定換算年代は古くなる。これは遺物の埋土位置の地温測定で推測できるが、過去の地温の測定はできない。

炭素-14年代などで年代の分かる層から出土する黒曜石の水和層から水和速度を決定するため、発掘が重要な鍵を握ることは言うまでもない。石器の組成(原産地)さえ分かれば、考古学者が炭素-14年代と水和層のデータを集積、整理するだけで、正確な水和層年代が得られるようになる。これら考古学的作業により求められた水和速度は、水和機構(理論)が証明されていないが、考古学試料として実用するには問題ないと推測できる。したがって、水和層年代は考古学者が企画するだけで実的な年代が得られるため、将来、水和層年代が石器における土器編年のように身近な存在になると推測できる。

#### 参考文献

- 1) 薬科哲男・東村武信 1975「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅱ)」『考古学与自然科学』8pp. 61-69 日本文化財化学会 同朋舎出版
- 2) 薬科哲男・東村武信・鎌木義昌 1977, 1978「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅲ)・(Ⅳ)」『考古学与自然科学』10pp. 53-81, 11pp. 33-473
- 3) 薬科哲男・東村武信 1983「石器原材の産地分析」『考古学与自然科学』16pp. 59-89
- 4) 東村武信 1976「産地推定における統計的手法」『考古学与自然科学』9pp. 77-90
- 5) 東村武信 1990『考古学と物理化学』学生社
- 6) 近堂祐弘 1986「北海道における黒曜石年代測定法について」『北海道考古学』22pp. 1-15

表1 米原3・宮戸3・米原4遺跡出土の縄文時代黒曜石製造物の原産地推定結果

分析番号	試料-遺物、遺跡、出土番号、名、位置、層位	時代時期	原産地	判定	遺物種類名	自然層	備考
72254	1-1 米原3上1-1 遺物	縄文時代前期	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ロケット	Ⅰ	米原川 遺跡 表土層, 11
72259	2-1 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72270	2-2 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72271	4-1 米原3上1-1 遺物	縄文時代前期	米原川(183), 米原川(183), 戸内川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72272	1-4 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 大塚(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72273	2-3 米原3上1-1 遺物	縄文時代前期	千歳(183), 戸内川(183)	千歳	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72274	2-4 米原3上1-1 遺物	縄文時代前期	米原川(183), 米原川(183), 千歳(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72275	2-5 米原3上1-1 遺物	縄文時代前期	千歳(183), 戸内川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72276	2-6 米原3上1-1 遺物	縄文時代前期	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72277	10-25 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72278	11-1 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72279	11-2 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72280	11-3 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72281	11-4 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72282	11-5 米原3上1-1 遺物	縄文時代	千歳(183), 戸内川(183)	千歳	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72283	11-6 米原3上1-1 遺物	縄文時代	千歳(183), 戸内川(183)	千歳	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72284	11-7 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72285	11-8 米原3上1-1 遺物	縄文時代	千歳(183), 戸内川(183)	千歳	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72286	11-9 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72287	11-10 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72288	11-11 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72289	11-12 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72290	11-13 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72291	11-14 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72292	11-15 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72293	11-16 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72294	11-17 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72295	11-18 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72296	11-19 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72297	11-20 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72298	11-21 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72299	11-22 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72300	11-23 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183), 米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72301	11-24 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡
72302	11-25 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川(183)	米原川	ブレイク	Ⅰ	米原川 遺跡

備考: 近年遺跡発掘を行う者が多くなりましたが、判別困難な曜石のみを報告される場合があります。本報告では日本における各地の曜石の産地を調査し、その産地を特定しています。研究発表の異なる発表方法(土曜石の産地も報告方法によって異なる)にも関わらず、似た産地名を多く含む報告がしばしば見られます。本報告では、本報告の調査結果と一致する報告に基いて報告されている産地を優先的に採用しています。本報告の調査結果と一致しない報告がある場合は、本報告の調査結果を優先的に採用しています。結果として、本報告の調査結果と一致しない報告がある場合は、本報告の調査結果を優先的に採用しています。結果として、本報告の調査結果と一致しない報告がある場合は、本報告の調査結果を優先的に採用しています。

表2 米原3・宮戸3・米原4遺跡出土の黒曜石製造物の水和層測定による経過年代の推定結果

分析番号	試料-遺物、遺跡、出土番号、名、位置、層位	時代時期	判定	水酸化の厚さ 3ヶ所測定 (a/n)	経過年代(±σ) (年)	水酸化率(平均厚さ/標準差)	遺物種類名	自然層	備考
72254	1-1 米原3上1-1 遺物	縄文時代前期	米原川	3.59 ± 1.10 1.08	4,347±294	1.317 (0.33)	ロケット	Ⅰ	
72259	2-1 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	3.11 ± 3.15 3.15	3,831±219	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72270	2-2 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	2.30 ± 1.11 1.28	3,800±138	1.467 (0.35)	ブレイク	Ⅰ	
72271	4-1 米原3上1-1 遺物	縄文時代前期	米原川	3.18 ± 3.40 3.43	3,959±219	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72272	1-4 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	3.02 ± 1.03	4,047±219	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72273	2-3 米原3上1-1 遺物	縄文時代前期	千歳	3.53 ± 3.88 1.21	4,387±384	1.15 (0.35)	ブレイク	Ⅰ	
72274	2-4 米原3上1-1 遺物	縄文時代前期	米原川	測定	測定	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72275	2-5 米原3上1-1 遺物	縄文時代前期	米原川	2.25 ± 3.10 3.30	3,515±259	1.15 (0.35)	ブレイク	Ⅰ	
72276	2-6 米原3上1-1 遺物	縄文時代前期	米原川	測定	測定	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72277	10-25 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	3.18 ± 3.39 3.34	3,959±219	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72278	11-1 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	測定	測定	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72279	11-2 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	測定	測定	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72280	11-3 米原3上1-1 遺物	縄文時代	千歳	2.30 ± 3.17 1.29	3,830±208	1.15 (0.35)	ブレイク	Ⅰ	
72281	11-4 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	4.11 ± 4.11 3.43	4,911±343	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72282	11-5 米原3上1-1 遺物	縄文時代	千歳	測定	測定	1.15 (0.35)	ブレイク	Ⅰ	
72283	11-6 米原3上1-1 遺物	縄文時代	千歳	測定	測定	1.15 (0.35)	ブレイク	Ⅰ	
72284	11-7 米原3上1-1 遺物	縄文時代	千歳	2.36 ± 4.01 3.84	3,875±164	1.15 (0.35)	ブレイク	Ⅰ	
72285	11-8 米原3上1-1 遺物	縄文時代	千歳	3.40 ± 3.80 3.45	4,181±219	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72286	11-9 米原3上1-1 遺物	縄文時代	千歳	3.05 ± 3.04 3.84	3,115±188	1.15 (0.35)	ブレイク	Ⅰ	
72287	10-11 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	3.51 ± 3.05 3.10	4,323±165	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72288	11-10 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	測定	測定	0.33	ブレイク	Ⅰ	
72289	11-11 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	3.38 ± 3.80 4.15	3,347±163	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72290	11-12 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	2.46 ± 3.39 3.41	4,263±201	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72291	11-13 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	2.61 ± 2.91 3.43	3,901±246	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72292	11-14 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	3.21 ± 3.20 2.97	4,209±246	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72293	11-15 米原3上1-1 遺物	縄文時代	千歳	3.25 ± 4.48 3.13	4,158±246	1.15 (0.35)	ブレイク	Ⅰ	
72294	11-16 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	3.17 ± 3.81 3.42	4,481±215	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72295	11-17 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	3.27 ± 3.29 3.28	4,338±246	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72296	11-18 米原3上1-1 遺物	縄文時代	千歳	4.17 ± 4.81 4.38	12,369±339	1.15 (0.35)	ブレイク	Ⅰ	
72297	11-19 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	3.08 ± 3.43 3.42	4,168±146	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72298	11-20 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	4.84 ± 2.73 3.11	7,371±210	1.317 (0.33)	ブレイク	Ⅰ	
72299	11-21 米原3上1-1 遺物	縄文時代	米原川	3.15 ± 4.11 4.39	14,774±317	1.467 (0.35)	ブレイク	Ⅰ	
72300	11-22 米原3上1-1 遺物	縄文時代	千歳	3.36 ± 3.18 3.11	3,163±211	1.15 (0.35)	ブレイク	Ⅰ	

注: 水酸化率の単位 (n°/1000) と年平均地温 (°C) の引用文献は 近藤孝弘(1980)、北越における縄文時代推定法について、北越考古学, 11:1~11

表3 米原3・宮戸3・米原4遺跡出土黒曜石製遺物の元素比分析結果

分析番号	元 素 比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Fe	Fe/Al	Rb/Sr	Sr/Al	Rb/Sr	Al/K	Si/K	K
73260	0.248	0.028	0.086	2.091	0.900	0.356	0.212	0.076	0.025	0.347
73260	0.270	0.072	0.077	2.015	0.842	0.379	0.231	0.065	0.023	0.348
73270	0.193	0.052	0.046	2.462	1.226	0.249	0.238	0.059	0.020	0.239
73271	0.284	0.078	0.091	2.132	1.047	0.451	0.269	0.063	0.021	0.233
73272	0.284	0.068	0.092	2.496	1.051	0.447	0.276	0.049	0.027	0.281
73273	0.256	0.074	0.095	2.399	1.112	0.450	0.282	0.054	0.027	0.238
73274	0.262	0.072	0.104	2.267	1.044	0.426	0.251	0.062	0.027	0.251
73275	0.284	0.078	0.087	2.246	1.077	0.454	0.244	0.035	0.028	0.271
73276	0.267	0.072	0.089	2.178	0.920	0.285	0.268	0.030	0.029	0.263
73277	0.266	0.075	0.074	1.948	0.884	0.284	0.245	0.048	0.021	0.218
73278	0.259	0.075	0.127	2.826	0.989	0.444	0.238	0.053	0.023	0.239
73279	0.130	0.042	0.077	2.733	1.308	0.377	0.248	0.044	0.018	0.237
73280	0.246	0.074	0.079	2.170	0.841	0.297	0.250	0.067	0.028	0.247
73281	0.229	0.067	0.088	2.287	1.088	0.406	0.303	0.060	0.026	0.263
73282	0.259	0.074	0.089	2.239	1.077	0.443	0.415	0.064	0.024	0.277
73283	0.262	0.075	0.080	2.132	1.137	0.449	0.219	0.068	0.024	0.268
73284	0.287	0.078	0.087	2.231	1.107	0.481	0.309	0.067	0.027	0.282
73285	0.281	0.073	0.087	2.153	0.984	0.410	0.254	0.052	0.027	0.251
73286	0.259	0.074	0.089	2.239	1.077	0.443	0.415	0.064	0.024	0.277
73287	0.262	0.075	0.080	2.132	1.137	0.449	0.219	0.068	0.024	0.268
73288	0.287	0.078	0.087	2.231	1.107	0.481	0.309	0.067	0.027	0.282
73289	0.281	0.073	0.087	2.153	0.984	0.410	0.254	0.052	0.027	0.251
73290	0.259	0.074	0.089	2.239	1.077	0.443	0.415	0.064	0.024	0.277
73291	0.262	0.075	0.080	2.132	1.137	0.449	0.219	0.068	0.024	0.268
73292	0.180	0.051	0.106	2.405	1.049	0.481	0.254	0.067	0.018	0.237
73293	0.281	0.073	0.091	2.197	0.971	0.443	0.218	0.035	0.024	0.258
73294	0.257	0.071	0.089	2.012	0.968	0.416	0.252	0.068	0.020	0.241
73295	0.252	0.072	0.077	2.066	0.957	0.429	0.269	0.041	0.023	0.248
73296	0.194	0.044	0.078	2.907	1.292	0.389	0.243	0.076	0.027	0.242
73297	0.246	0.072	0.059	2.248	1.045	0.440	0.260	0.122	0.028	0.281
73298	0.282	0.068	0.091	2.240	0.908	0.424	0.250	0.032	0.028	0.256
73299	0.259	0.074	0.089	2.180	0.933	0.420	0.239	0.035	0.023	0.249
73300	0.257	0.072	0.089	2.110	0.848	0.421	0.267	0.029	0.023	0.256
73301	0.270	0.081	0.044	2.141	0.973	0.418	0.284	0.037	0.028	0.249
73302	0.268	0.068	0.087	2.123	0.953	0.447	0.251	0.030	0.023	0.244
73303	0.253	0.068	0.087	2.156	0.923	0.414	0.248	0.067	0.028	0.245
73304	0.193	0.054	0.080	2.706	1.280	0.297	0.218	0.100	0.026	0.246
73305	0.221	0.054	0.055	2.184	0.969	0.454	0.243	0.054	0.027	0.218
JG-1	0.716	0.210	0.080	0.933	0.970	1.286	0.243	0.109	0.028	0.268

JG-1: 藤原純利-Izda, A. Kurusuwa, H. Ohno, T. & Takeda, K. 1974 compilation of data on the G12 geochemical reference sample JG-1 (granulite and JB-1 basalt). *Geochemical Journal*, Vol. 8, 175-182 (1974)

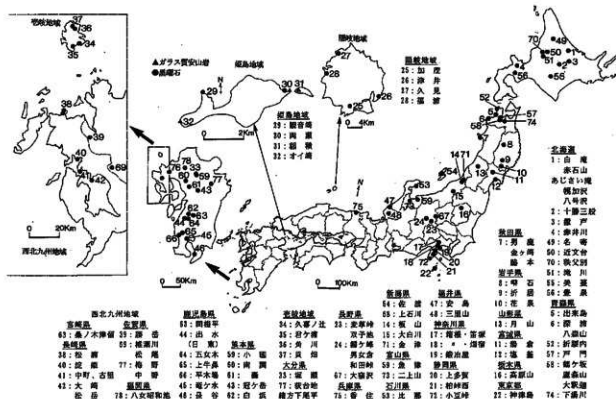


図1 黒曜石原産地







## 2 米原3・宮戸3・米原4遺跡のテフラについて

米原3、宮戸3、米原4の各遺跡で認められたテフラの調査結果を述べる。今回は完新世テフラの野外観察からの記載を主とし、予察的な報告とする。テフラの化学分析、正確な対比については次年度に報告する。

### 1. テフラの層序

図1に米原3遺跡のテフラ層序を示す。他の二遺跡でもこれとはほぼ同様である。米原3では少なくとも3層のテフラが識別される。グリッドH-3付近では、最上位に層厚2cm±の降下火山灰、その下位に極く薄い腐植土(層厚1cm)を挟んで砂~礫質降下軽石堆積物があり、これは4つのフォールユニットから成っている。さらに下位には、極く薄い腐植土(層厚0.5cm)を挟んで降下軽石・降下火山灰がある。このテフラ層は3つのフォールユニットから成っている。この最下位のテフラの下方には、黒色腐植土中に黒褐~赤褐色の腐植土が層厚3cm±で挟在する(発掘層位のIV層)。

グリッドG-4付近では、IV層の層準付近に黒褐~赤褐色土が二層認められ、下位のものには軽石が含まれている。

### 2. テフラの対比

明瞭なテフラ3層のうち、最下位のテフラの軽石は白色で斑晶をほとんど含まず、遊離結晶として長石を少量含んでいる。軽石の特徴と分布域から、このテフラは有珠山起源のUs-b(A.D.1663)と考えられる。軽石のユニットはUs-bpで、その直上の火山灰はUs-b1~Us-b6のいずれかであろう。

このUs-bの上位のテフラの軽石の斑晶と遊離結晶には長石、輝石類が多く含まれる。分布域と鉱物組成、Us-bとの間の土壌層の薄さから、樽前山起源のTa-b(A.D.1667)と考えられる。

最上位の降下火山灰は樽前山起源のTa-a(A.D.1739)の可能性が高い。

発掘層位のIV層とされたものは、鏡下ではバブルウォール型の火山ガラスに富みアルカリ長石を含む場合やこれに他の鉱物粒・岩片を含む場合があつて、同一の鉱物組成を示さないが、バブルウォール型を主体とする火山ガラスとアルカリ長石から成るテフラは白頭山(長白山)起源のB-Tmである。したがって、基本層位のIV層として一括された発掘層位の地層は、場所によってB-Tmである場合とそうでない場合がある。

グリッドG-4付近でのUs-b下方の黒色腐植土中の2層の黒褐~赤褐色土のうち、下位の軽石まじりの地層は土壌化した樽前山起源のTa-cの可能性がある。

### 参考文献

- 北海道火山灰命名委員会(1979):北海道の火山灰分布図。  
 石川俊夫・横山 泉・勝井義雄(1972):「樽前山-火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策」,北海道防災会議,124pp。  
 曾屋龍典・佐藤博之(1980):千歳地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,92pp。  
 横山 泉・勝井義雄・大場与志男・江原幸雄(1973):「有珠山-火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策」,北海道防災会議,254pp。

(花岡正光)

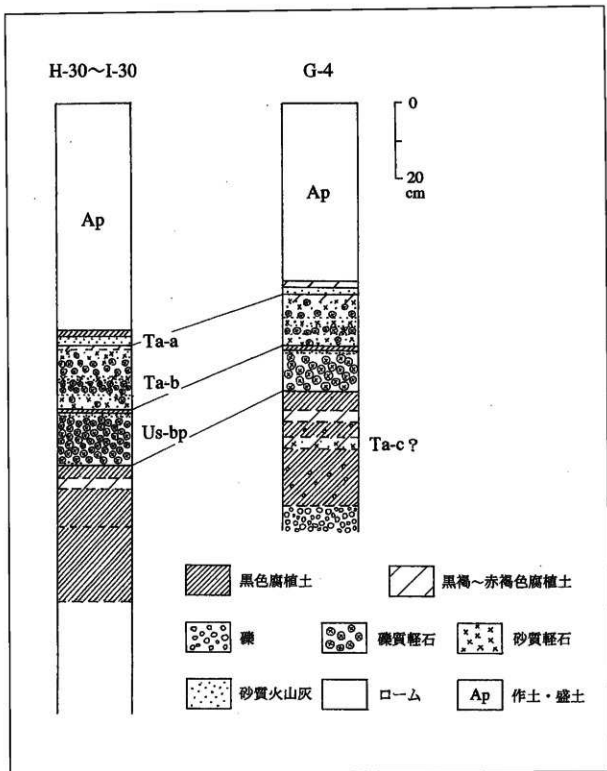
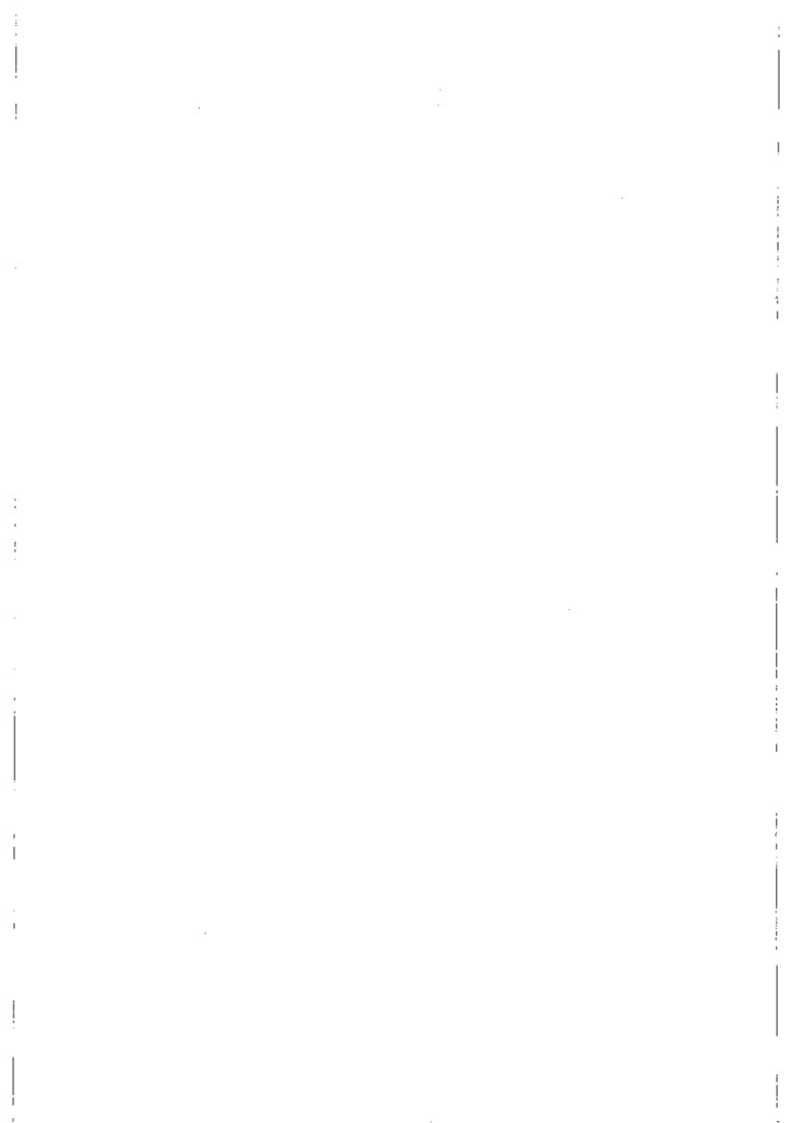


図1 テフラ層序(米原3遺跡)



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	むかわちよう よねはらさん みやとさん よねはらよんいせき						
書名	鶴川町米原3・宮戸3・米原4遺跡						
副書名	日高自動車厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第153集						
編著者名	鎌田 望・袖岡淳子・芝田直人・大森司 統・花岡正光・佐藤和雄						
編集機関	(財)北海道埋蔵文化財センター						
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 TEL.011-386-3231						
発行年月日	西暦2001年3月27日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
よねはらさんいせき 米原3遺跡	ほっかいどうゆうふつぐん 北海道勇払郡 むかわちようあびよねはら 鶴川町字米原448-1	01582	J-14-38	42° 33' 13"	141° 59' 34"	20000508~ 20000705	7,200 m <sup>2</sup>
みやとさんいせき 宮戸3遺跡	ほっかいどうゆうふつぐん 北海道勇払郡 むかわちようあびみやと 鶴川町字宮戸183	01582	J-14-39	42° 34' 12"	141° 59' 2"	20000619~ 20000825	3,600 m <sup>2</sup>
よねはらさんいせき 米原4遺跡	ほっかいどうゆうふつぐん 北海道勇払郡 むかわちようあびよねはら 鶴川町字米原394	01582	J-14-42	42° 33' 43"	141° 59' 3"	20000731~ 20001031	2,311 m <sup>2</sup>
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			
米原3遺跡	遺物包含地	縄文時代中期	住居跡2軒 土壌1基 焼土12ヶ所	縄文土器(東銅路Ⅲ式、コッタロ式、 中茶路式、静内中野式、植苗式、 円筒土器上層式、萩ヶ岡1式、北筒式、 煉瓦台式、タブコブ式) 続縄文土器(後北B式) 石器			
宮戸3遺跡	遺物包含地	縄文時代早期	Tピット32基 焼土2ヶ所	縄文土器(条痕文土器、東銅路Ⅲ式、 コッタロ式、東銅路Ⅳ式、網文土器、 静内中野式)石器			
米原4遺跡	遺物包含地	縄文時代中期	住居跡6軒 土壌4基 Tピット7基 焼土13ヶ所	縄文土器(東銅路Ⅱ式、東銅路Ⅲ式、 網文土器、静内中野式、春日町式、 植苗式、柏木川式、モコト式、北筒式) 石器			



## 引用・参考文献

- 江坂輝弥 1955 「青森県下北部ムシリ遺跡」『日本考古学年報』3
- 江坂輝弥 1957 「ムシリⅠ式土器について」『先史考古学』5
- 江坂輝弥 1957 「青森県下北部東通村、尻屋、物見台遺跡調査報告」『考古学雑誌』36-4
- 大場利夫・扇谷昌康・竹田輝男 1962 「白老町龍杖浜遺跡の発掘調査について」『北方文化研究報告』17
- 大場利夫・扇谷昌康 1964 「勇弘郡鷗川遺跡」『北方文化研究報告』19
- 大場利夫 1968 「鷗川町の古代史」『鷗川町史』
- 大場利夫 1978 「縄文中期文化 北海道」『新版 考古学講座』3 雄山閣
- 大場利夫 1955 「静狩遺跡」北海道山越郡長万部町
- 大沼忠春 1981 「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』17
- 大沼忠春 1986 「道南の縄文前期土器群の編年について(Ⅱ)」『北海道考古学』22
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』66-4
- 澤 四郎 1962 「東網路」東網路貝塚発掘調査報告書
- 鈴木克彦 1999 「北海道渡島・松山地域の中期末葉から後期初頭の編年」『北海道考古学』35
- 鈴木克彦 1999 「北海道渡島・松山地域の後期前～中葉の編年-北海道西南部の縄文後期の編年学的研究2-」『國學院大學考古学資料館紀要』15
- 鈴木克彦 2000 「北海道後志・胆振地域の中期末葉から後期前葉の編年-北海道西南部の縄文後期の編年学的研究4-」『北海道考古学』36
- 高橋正勝 1972 「北海道における縄文時代中期の終末(1)」『北海道青年人類科学研究会誌』9
- 高橋正勝 1972 「北海道における縄文時代中期の終末(2)」『北海道青年人類科学研究会誌』10
- 扇谷昌康 1977 「鷗川町遺跡分布調査報告書」鷗川町教育委員会
- 扇谷昌康 1979 「日高門別の先史遺跡」門別町教育委員会
- 久保 泰ほか 1983 「白坂」松前町教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄 1977 新版「標準土色帖」農林水産技術会議事務所監修
- 古原敏弘ほか 1982 「駒場7遺跡における考古学的調査」北海道静内町教育委員会
- 古原敏弘ほか 1985 「静内町清水丘における考古学的調査」北海道静内町教育委員会
- 高橋正勝 小笠原忠久 1980 「縄文時代前期・中期」『北海道考古学講座』みやま書房
- 宇田川洋 1988 「アイヌ文化成立史」北海道出版企画センター
- 佐原真 1977 「石斧論-横斧から縦斧へ-」『考古論集 慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集』
- 岡村道雄 1983 「ピエス・エスキュー、楔形石器」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣
- 加藤晋平 鶴丸俊明 1991 「図録 石器入門事典 先土器」柏書房
- 加藤邦雄 1994 「縄文尖底土器」『縄文文化の研究3 縄文土器Ⅰ』雄山閣
- 鈴木徳之助 1991 「石器入門事典-縄文」柏書房
- 戸刈賢二 土屋薫 2000 「北海道の石」北海道大学図書刊行会
- 羽賀憲二ほか 1977 「早期北海道平底土器様式」『縄文土器大観』1
- 宮夫増夫 2000 「苫東遺跡群における集落の様相」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』2
- 七飯町教育委員会 2000 「国立療養所裏遺跡」
- 苫小牧市教育委員会 1984 「タブコブ」
- 苫小牧市教育委員会 1985 「ニナルカ」
- 苫小牧市教育委員会 1986 「静川16遺跡発掘調査報告書」
- 苫小牧市教育委員会 1986 「苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅰ」

- 苦小牧市教育委員会 1987 『苦小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅱ』  
 苦小牧市教育委員会 1990 『苦小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅲ』  
 苦小牧市教育委員会 1992 『苦小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅳ』  
 苦小牧市教育委員会 1995 『苦小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅴ』  
 苦小牧市教育委員会 1993 『美沢 11 遺跡』  
 苦小牧市教育委員会 1997 『柏原 5 遺跡』  
 苦小牧市教育委員会 1998 『柏原 27・ニナルカ・静川 5・6 遺跡』  
 白老町教育委員会 1999 『虎杖浜 2・ボンアヨロ 4 遺跡』  
 登別市教育委員会 1982 『札内台地の縄文時代集落址』  
 門別町教育委員会 1987 『エサヌップ 4 遺跡』  
 門別町教育委員会 1989 『エサヌップ 2 遺跡 エサヌップ 3 遺跡』  
 門別町教育委員会 1996 『ケノマイ遺跡』  
 北海道第四紀研究会 1974 『西股』函館市紅葉山西股遺跡発掘調査報告書  
 北海道教育委員会 1987 『美沢川流域の遺跡群Ⅱ』  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1980 『社台 1 遺跡・虎杖浜 4 遺跡・千歳 4 遺跡・富岸遺跡』北埋調報 1  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1982 『千歳 5 遺跡』北埋調報 12  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1984 『登別市 千歳 5 遺跡』北埋調報 21  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1986~1999 『石川 1 遺跡』北埋調報 45  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1993 『豊浦町 高岡 1 遺跡』北埋調報 88  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1994 『豊浦町 高岡 1 遺跡(2)』北埋調報 91  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1995 『豊浦町 高岡 1 遺跡(3) 高岡 2 遺跡』北埋調報 106  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1990 『美沢川流域の遺跡群Ⅳ』北埋調報 69  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1991 『美沢川流域の遺跡群Ⅴ』北埋調報 77  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1994 『ベンケナイ川流域の遺跡群Ⅲ』北埋調報 95  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1997 『美々・美沢-新千歳空港の遺構と遺物-』  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1997 『千歳市キウス 5 遺跡(4) B地区・C地区』北埋調報 116  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1998 『千歳市ユカンボシ C15 遺跡(1)』北埋調報 128  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 1999 『千歳市ユカンボシ C15 遺跡(2)』北埋調報 133  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2000 『長万部町花岡 2 遺跡・花岡 3 遺跡』北埋調報 137  
 (財)北海道埋蔵文化財センター 2000 『長万部町豊野 6 遺跡』北埋調報 143

北海道文化財保護協会 1971 『柏木川-擦文時代・縄文時代の墳墓と縄文時代中期の住居址』

北海道文化財保護協会 1999 『長万部町オバルベツ 2 遺跡』

『北海道先史時代の「はじまり」と「おわり」に関する検討・討論』実行委員会 編

1994 『北海道におけるはじまりに関する土器の諸様相』シンポジウム資料集

日本考古学協会1999年度銅路大会実行委員会

1999 『海峡と北の考古学-文化の接点を探る-』資料集Ⅰ・テーマ1:旧石器から縄文へ  
 徳井由美業績集刊行会

1995 『徳井由美業績集』

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第153集

**鶴川町**

**米原3遺跡・宮戸3遺跡・米原4遺跡**

—日高自動車厚真門別道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

---

平成13年3月27日

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター

TEL : (011)369-3231 E-mail : mail@domaibun

FAX : (011)386-3238 HomePage : <http://192.168.1.10>

印刷 柏揚印刷株式会社

〒007-0802 札幌市東区東苗穂2条3丁目4番48号

TEL : (011)789-2377

FAX : (011)789-2376



